

平成29年度  
ハワイ大学等交流事業  
事業報告書

# 平成29年度 ハワイ大学等交流事業 事業報告書

しまくとぅば実践教育プログラム開発事業  
島嶼学学術交流事業

平成30年3月31日

沖縄県立芸術大学  
附属研究所

平成30年3月31日

沖縄県立芸術大学 附属研究所

## 発刊にあたって

沖縄県立芸術大学は平成28年、開学30周年を迎えました。節目の年である平成28年度から2年間にわたって「沖縄県立芸術大学ハワイ大学等交流事業」を展開してきました。

平成28年度は沖縄県立芸術大学の美術・音楽両学部が主体となって事業が行われました。その内容は、沖縄の芸術文化の展示・工芸ワークショップ・琉球芸能ワークショップ・琉球芸能公演・しまくとぅばプロジェクトに分かれ、それぞれハワイ大学（マノア校・ヒロ校）やハワイ東西センターとの交流事業を行いました。結果としてハワイ大学マノア校とMOUの締結する事が出来、本学とハワイの研究者・研究機関・学生との有意義な交流を継続的に図る礎となりました。

平成29年度は附属研究所が主体となり、平成28年度からスタートした「しまくとぅば実践教育プログラム開発事業」と「島嶼学学術交流事業」の2つを実施しました。これは、ハワイ語という少数言語の復興活動や、ハワイ大学における沖縄文化のレクチャーという企画・研修をとおして先進事例を学び、かつ沖縄と同じ「島嶼」という場所でのどのような文化が継承・伝承・あるいは衰退しているかなど、言語や文化を「島嶼」という大きな枠組みの中で考究することを目的とし、授業実践・しまくとぅば講演会・島嶼学シンポジウムなどを企画・実施しました。それぞれの実施内容とその結果は、各章をご覧ください。

本事業ではハワイの言語復興事例を学び、「しまくとぅば」教育へ活かすために試行するだけでなく、沖縄の文化をハワイの県系人らにレクチャーすべくリカレント講座を行いました。ハワイと沖縄相互の文化的交流が行われた有意義な事業となっただけでなく、今後も実現可能な限り、本学とハワイを含めた島嶼地域への研究のまなざしを持ち、文化・研究交流を行いたいと思います。

最後に、本報告書が「しまくとぅば」及び「島嶼学」研究発展の一助となれば幸いに存じます。

2018年3月

沖縄県立芸術大学附属研究所

所長 久万田 晋



## 平成29年度 ハワイ大学等交流事業 事業報告書 目次

発刊にあたって

1. しまくとぅば実践教育プログラム開発事業報告書	1
1-1はじめに	1
1-2実施概要	2
1-3実践教育プログラムについて	5
1-3-1 地謡実技	5
1-3-2 舞踊実技	7
1-3-3 組踊実技	9
1-3-4 学生による授業評価アンケート結果	11
1-3-5 「琉球語I」「琉球語II」の平成30年度シラバスの変更について	13
1-4ハワイ大学ヒロ校調査概要	16
1-4-1 調査研究日程	17
1-4-2 研究会メンバーによる調査報告書	18
1-4-3 聖田京子先生の講演録	32
1-5「誇らしゃ しまくとぅば」講演会概要	35
1-6「事業報告会」報告	48
1-6-1 概要	48
1-6-2 言語学の視点を含めた事業内容報告	48
1-7『琉球芸能用語事典』の構想	54
1-8 リカレント講座	55
1-8-1 実施概要	55
1-8-2 シラバス及び報告(実技ワークショップ部門)	57
1-8-3 シラバス・資料・報告(琉球文化講座部門)	61
1-8-4 チラシ・アンケート結果	96
1-9 資料(当事業の新聞掲載記事)	102
2. 島嶼学学術交流事業	104
2-1 事業の趣旨と概要	104
2-2 シンポジウム資料集	104
2-2-1 開催要領	104
2-2-2 配布資料	105
2-3 シンポジウムの記録	110
2-3-1 対談	110
2-3-2 総合討論	111
2-3-3 チラシ、アンケート結果、当事業の新聞掲載記事	116



# 1. しまくとぅば実践教育プログラム開発事業報告書

## 1-1 はじめに

沖縄県立芸術大学は平成28年度に開学30周年を迎えた。開学30周年を迎えるにあたり、記念企画として「ハワイ大学等交流事業」を行った。平成28年度の「ハワイ大学等交流事業」は沖縄県立芸術大学の小西潤子（音楽学部教授）がプロジェクトリーダーとして行われた。その内容は、①沖縄の芸術文化の展示（2016年9月25日～2017年1月8日。会場：ハワイ東西センターギャラリー）、②工芸ワークショップ（2016年10月29日・30日。会場：ハワイ東西センター）、③琉球芸能ワークショップ（2016年9月20日。会場：ハワイ東西センター）、④琉球芸能公演（2016年9月19日～28日。会場：オアフ等及びハワイ島など数カ所）、⑤しまくとぅばプロジェクト（2016年9月26日・2017年1月14日～19日。会場：ハワイ大学ヒロ校）に分かれ、それぞれハワイ大学（マノア校・ヒロ校）やハワイ東西センターとの交流事業を行った。

⑤の「しまくとぅばプロジェクト」では、当初目的として5年計画を企画した。それは、ハワイ語の普及教育システムを調査した上で、本学琉球芸能専攻における独自の「しまくとぅば実践教育」を行う、というものであった。

「しまくとぅば実践教育」を行うにあたって、「沖縄県立芸術大学しまくとぅば実践教育研究会（以下「研究会）」を平成28年度中に発足させた。会員は以下の通りである。

鈴木 耕太（附属研究所）

高良 則子（全学教育センター）

麻生 伸一（全学教育センター）

仲嶺 伸吾（音楽学部琉球芸能専攻）

比嘉 いずみ（音楽学部琉球芸能専攻）

阿嘉 修（音楽学部琉球芸能専攻）

波照間永吉（沖縄県立芸術大学名誉教授）

西岡 敏（沖縄国際大学教授、沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員）

仲原 穰（県立芸大非常勤講師、沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員）

そして、平成29年1月14日～19日の日程で、ハワイ大学ヒロ校、ナーワヒ小中高校（ハワイ語イマージョンスクール）、プーナナレオ保育幼稚園（ハワイ語イマージョンスクール）を小西潤子、鈴木耕太、波照間永吉で視察し、ハワイ語の授業について調査を行った。さらに、平成28年3月6日には上記の「研究会」会員によって平成29年度事業に向けて研究会を発足し、月2回の定期で研究会を実行する事を確認した。

平成29年度は毎月2回の研究会を開催し、事業名を「しまくとぅばプロジェクト」から「沖縄県立芸術大学しまくとぅば実践教育プログラム開発事業」に改めた。本プロジェクトは附属研究所の鈴木をプロジェクトリーダーとして行われることが確認された。そして、音楽学部琉球芸能専攻でのしまくとぅばによる授業実践を10月から行うために、外部専門家、全学教育センターとともにカリキュラムについて研究し、後学期より実践した。授業実践の内容および本事業の報告の詳細はそれぞれ別項をご参照いただきたい。

平成29年度の「沖縄県立芸術大学しまくとぅば実践教育プログラム開発事業」の事業計画は以下の通りであった。

### 1. ハワイ大学ヒロ校との研究交流（11月20日～24日）

→ ハワイ大学ヒロ校のハワイ語教育システムの視察と、イマージョンスクールの視察および、ハワイ大学名誉教授である聖田京子先生との意見交換会

### 2. 定例研究会（月2回）

→ 「研究会」において、教授法、対象学年、リカレント教育などの研究

3. しまくとぅばによる講演会(11月・2月開催)  
→ 琉球芸能の先生方に「しまくとぅば」で芸能や半生を語ってもらう
4. 琉球芸能専攻での教授法研究(特別講師との研究会)  
→ 前期中に特別講師を招聘し、講義担当教員(仲嶺伸吾教授・比嘉いずみ准教授・阿嘉修准教授)との講義を進めるにあたっての打ち合わせを行う
5. 琉球芸能専攻での教授実践  
→ 10月から琉球芸能専攻において「しまくとぅば」での事業実践を行う
6. ハワイでの琉球語・琉球古語のリカレント教育  
→ ハワイ大学・ハワイ沖縄県連合会等での県費留学修了生や沖縄県人会への琉球語・琉球古語のワークショップを行う(2018年3月23日～25日)
7. 事業報告会(2018年2月17日)  
本事業は教育現場に「しまくとぅば」を導入、実践し、琉球芸能を教授するときにおいて、「しまくとぅば」でしか表現出来ない独特の「わざ」や表現を学習することで、学生の表現力や作品理解力などを総合的に高めようというねらいから行われた事業である。本年度の事業成果については、各章に詳細を掲載した。次年度以降も「沖縄県立芸術大学しまくとぅば実践教育プログラム開発事業」は継続する。本年度の結果を踏まえ、よりよい教育プログラムを作成し、琉球芸能における「しまくとぅば」の用語を充実させていきたい。

## 1-2 実施概要

平成29年度、しまくとぅば実践教育プログラム研究会では毎月2回の定例研究会において以下のような内容などについて検討し、実施した。

まず、「地謡実技」「舞踊実技」「組踊実技」の3科目について、しまくとぅばで芸能を教わってきた先達を「特別講師」として招聘し、沖縄県立芸術大学琉球芸能専攻の教員が技術を指導する講義において、芸能を享受する際に用いられる用語や、衣裳・小道具・楽器などの名称など、芸能に関わる用語を講義の中で「特別講師」に語ってもらい、教員と学生が学ぶ、という教授方法を研究会で取り決めた。そして、授業を担当する教員にそれぞれの授業を担当する「特別講師」を選定してもらい、研究会の承認を経て、「特別講師」の先生方へ事業内容を説明し、10月からの授業実践を担当する講師が決まった。特別講師は「地謡実技」が仲嶺眞永先生、「舞踊実技」が宮城幸子先生、「組踊実技」が小波則夫先生となった。各特別講師の先生方のプロフィール等は、授業実践の報告の頁(1-3)に譲ることとする。

また、2017年11月10日と2018年2月9日に開催された「しまくとぅば講演会」の企画内容についても研究会で議論し、実施した。講演会はしまくとぅばのみで芸能を語る、という企画からスタートし、今年度は沖縄芝居の第一人者である瀬名波孝子先生と八木政男先生に講師を依頼した。

研究会では先述した授業実践科目について共通の「しまくとぅば」マニュアルを作成した。はじめに行ったのは、各科目で講義の始めと終わりに行われる挨拶を「しまくとぅば」で行う為のマニュアルを作成した。今後は、挨拶だけでなく、その他の用語などのマニュアルを作成していく予定である。

今年度は3月に「リカレント講座」としてハワイ在の県費留学修了生やハワイ沖縄県人会、また一般市民を対象とした琉球文化のリカレント教育講座を行った。期間は3月23日から3日間で、講座は琉球舞踊・琉球古典音楽・扮装法・琉球古典語詞章研究・琉球芸能史・組踊概説・琉球史などである。

そして、次年度のしまくとぅば実践教育科目と、一般教育科目である「琉球語I」「琉球語II」をカリキュラムとして連携させるために、次年度のシラバスを研究会のメンバーで話し合い、作成した。年間の実施事項は以下の通りである。時系列で示した。



## 実施過程

【平成29年】

- 3月6日 平成29年度しまくとぅばによる実践教育研究会発足
- 4月6日 第1回 県立芸大しまくとぅば実践教育研究会
- 4月25日 第2回 県立芸大しまくとぅば実践教育研究会
- 5月2日 第3回 県立芸大しまくとぅば実践教育研究会
- 5月16日 第4回 県立芸大しまくとぅば実践教育研究会
- 6月6日 第5回 県立芸大しまくとぅば実践教育研究会
- 6月26日 事務員を決定、採用した。
- 6月27日 第6回 県立芸大しまくとぅば実践教育研究会
- 7月6日 企画提案書による委託業者の募集開始
- 7月25日 第7回 県立芸大しまくとぅば実践教育研究会
- 7月26日 委託業者 企画提案 説明会開催
- 8月4日 委託業者 企画提案参加届 提出締切
- 8月7日 委託業者 企画提案書 提出締切
- 8月8日 第8回 県立芸大しまくとぅば実践教育研究会
- 8月17日 委託業者 企画提案審査
- 8月18日 委託業者に琉球新報社を採用した
- 8月25日 第9回 県立芸大しまくとぅば実践教育研究会
- 8月30日 リカレント講座部門 第1回 部門会議
- 9月7日 第10回 県立芸大しまくとぅば実践教育研究会  
リカレント講座部門 第2回 部門会議
- 9月15日 11月のハワイ研修のための航空券を琉球新報社が購入した。
- 9月19日 第11回 県立芸大しまくとぅば実践教育研究会  
リカレント講座部門 第3回 部門会議
- 9月25日 第1回 特別講師打ち合わせを行った。  
第1回 授業実践部会を実施
- 9月28日 第2回 授業実践部会を実施
- 10月2日 リカレント講座部門 第4回 部門会議  
第1回実践授業(地謡実技、舞踊実技)
- 10月3日 第12回 県立芸大しまくとぅば実践教育研究会  
事業報告会の会場として県立博物館・美術館へ施設利用仮予約希望書を送付
- 10月5日 第1回 実践授業(組踊実技)
- 10月10日 第1回 講演会講師、瀬名波孝子氏へ依頼文書交付
- 10月12日 第2回 実践授業(組踊実技)
- 10月16日 第2回 実践授業(地謡実技、舞踊実技)
- 10月20日 リカレント講座部門 第5回 部門会議
- 10月23日 第3回実践授業(地謡実技、舞踊実技)
- 10月24日 第13回 県立芸大しまくとぅば実践教育研究会
- 10月25日 第3回 実践授業(組踊実技)
- 10月30日 第4回 実践授業(地謡実技)
- 11月1日 琉球新報社へ、「しまくとぅば講演会」の寄稿を入稿した。
- 11月6日 第5回 実践授業(地謡実技)  
第4回 実践授業(舞踊実技)、沖縄タイムス社が舞踊実技の授業を取材  
リカレント講座部門ハワイ沖縄連合会へリカレント講座の協力依頼文書送付



- 11月7日 第14回 県立芸大しまくとぅば実践教育研究会  
11月8日 第4回実践授業（組踊実技）  
11月10日 第1回 しまくとぅば講演会（講師：瀬名波孝子氏）  
11月13日 第6回 実践授業（地謡実技）  
11月17日 第5回 実践授業（組踊実技）  
11月19日 第15回 県立芸大しまくとぅば実践教育研究会  
11月20日 第5回、第6回 実践授業（舞踊実技）  
11月20日 【ハワイ研修】第1班（鈴木、波照間、高良、西岡、仲原、幸地）がハワイへ向け出発。  
ハワイ到着後、ハワイ大学ヒロ校にて大原由美子先生とミーティングを行った。  
11月21日 【ハワイ研修】第2班（比嘉、麻生）がハワイへ出発。到着後、第1班と合流してハワイ大  
学ヒロ校の授業を見学した。  
11月22日 第6回 実践授業（組踊実技）  
〃 【ハワイ研修】ハワイ語イマージョンスクール（プーナナレオ、ナーワヒ）を訪問Nāmaka  
理事長と意見交換を行った。  
11月23日 【ハワイ研修】ハワイ大学マノア校名誉教授 聖田京子先生と意見交換会を行った。交  
換会終了後、県費留学生OBと3月のリカレント講座について打ち合わせを行った。  
11月24日 【ハワイ研修】コナ国際空港より出発、25日 那覇着  
11月27日 第7回 実践授業（地謡実技、舞踊実技）  
11月28日 島嶼学部門 第1回 部門会議  
12月4日 第8回 実践授業（地謡実技、舞踊実技）  
12月5日 第16回 しまくとぅば実践教育研究会  
島嶼学部門 第2回 部門会議  
リカレント講座部門 県費留学生OBより、講座の会場として曹洞宗寺院内の講堂を  
教室として予約したという連絡があった。  
12月11日 第9回 実践授業（地謡実技、舞踊実技）  
12月17日 島嶼学部門 第3回 部門会議  
12月13日 リカレント講座部門 県費留学生OBより、受講希望者の名簿を受領した。  
12月14日 事業報告会の会場として、県立博物館・美術館の県立博物館講座室の「施設利用許  
可申請書」を提出。  
島嶼学部門 シンポジウム登壇者へ依頼文書を送付した。  
12月17日 県立博物館・美術館より施設利用許可を得た。  
12月18日 第10回 実践授業（地謡実技、舞踊実技）  
12月21日 実技担当教員が次年度のシラバス素案を本事業事務へ提出  
島嶼学部門 シンポジウム登壇者の報告要旨提出締切  
12月26日 第17回 しまくとぅば実践教育研究会  
リカレント講座部門 第7回部門会議  
12月28日 ハワイ大学マノア校沖縄研究センターへ、リカレント講座の協力を依頼  
12月30日 第18回 しまくとぅば実践教育研究会（次年度シラバス作成会議）  
【平成30年】  
1月9日 第19回 しまくとぅば実践教育研究会  
1月11日 第7回 実践授業（組踊実技）  
1月15日 第11回 実践授業（舞踊実技）、マスコミ向け公開授業  
1月16日 島嶼学部門 第4回 部門会議  
1月18日 第8回 実践授業（組踊実技）  
島嶼学部門 仲程昌徳氏へ、シンポジウムにおける基調講演の依頼文書交付

- 1月22日 第12回 実践授業(舞踊実技)
- 1月30日 第20回 しまくとぅば実践教育研究会
- 1月30日 平成29年度ハワイ大学等交流事業 報告書作成開始
- 1月31日 島嶼学部門 第5回 部門会議
- 2月6日 島嶼学部門 シンポジウムチラシ 最終打ち合わせ
- 2月9日 第2回 しまくとぅば講演会
- 2月14日 琉球芸能用語事典(仮)作成部門 第1回 部門会議
- 2月15日 第21回 しまくとぅば実践教育研究会
- 2月17日 平成29年度 沖縄県立芸術大学しまくとぅば実践教育開発プログラム事業 報告会
- 2月20日 島嶼学部門 第6回 部門会議
- 2月22日 第22回 しまくとぅば実践教育研究会
- 3月5日 第23回 しまくとぅば実践教育研究会
- 3月9日 島嶼学部門 第7回 部門会議
- 3月17日 島嶼学部門 シンポジウム打ち合わせ
- 3月18日 島嶼学部門 沖縄県立芸術大学島嶼学シンポジウム 開催
- 3月20日 第24回 しまくとぅば実践教育研究会  
〃 リカレント講座部門 第8回部門会議
- 3月22日 平成30年度の「しまくとぅばによる実技授業」を担当する特別講師へ依頼文書を送付
- 3月23日 【リカレント講座】1日目  
ホノルル到着後、ハワイ沖縄センターにて、県費留学生OBを対象に琉球芸能講座と実技ワークショップを実施した。
- 3月24日 【リカレント講座】2日目  
曹洞宗寺院にて、県費留学生を対象にした講座とワークショップを行った。夜は一般市民を対象に、琉球芸能と琉球史の講座を行った。
- 3月25日 【リカレント講座】3日目  
曹洞宗寺院にて、県費留学生OBを対象に講座とワークショップを実施した。夜は一般向け講座を実施した。
- 3月26日 島嶼学シンポジウム登壇者へお礼状を送付

## 1-3 実践教育プログラムについて

### 1-3-1 地謡実技

実施期間：平成29年10月2日～平成29年12月18日

授業回数：10回

受講年次：学部1年生4名、学部2年生2名

#### 特別講師について

仲嶺 眞永(なかみね・しんえい 82歳)沖縄芝居役者「眞永座座長」

平安山 英太郎、宮城 能造(初代)、翁長 小次郎に師事。宮城美能留沖縄歌舞団において、日本縦断公演、南米公演に参加。真喜志康忠劇団「ときわ座」多数出演。

沖縄県指定無形文化財「琉球歌劇」保持者

しまくとぅばを取り入れた授業にしていく方法として、特別講師、芝居役者の仲嶺眞永にお願いした。初めは、学生が研究室に入るときの挨拶、授業開始、終わりの挨拶等、基本的な言葉を特に首里方言で実践してみた。また、上り口説の解説、口説囃子を唱えた授業も行なった。

授業記録シートについて

授業実践記録シートを作成して、毎時間ごとに授業内容を記録して提出した。記録を取ること  
で、学生達がしまくとうばを取り入れた授業に対してどう向きあうのかその状況と変化を確認でき  
た。実践記録シートには、「科目名」、「授業内容」、「担当教員、特別講師」、「受講者、見学者」、  
「授業内容」、「本授業での重要なしまくとうば」、「教員の感想」、「教員から見た学生の反応」、「担  
当教員からの反省点」など9項目を記録した。

しまくとうばのキーワードについて

ユシリヤビラ	意味：ごめんください。
ウニゲーサビラ	意味：よろしく願います。
ニフェーデービタン	意味：ありがとうございました。
チンダミ	意味：調弦
ウー、ワカヤビタン	意味：はい、わかりました。
トー、ウチンカイイレ	意味：はい、中に入りなさい
ウニゲーサビラ	意味：よろしく願います。
ワカヤビタン	意味：わかりました
マタ アチャーヤー	意味：(友達に)また明日ね
ジュンビー ナトーガヤー	意味：準備はできているか。
チュウガナビラ	意味：こんにちは
キイチキテイキヨウヤ	意味：気をつけていきなさいよ
ウトウヌ タキ	意味：音の高さ
ユクラチキミソーリ	意味：休ませて下さい。
ムチッテングアー	意味：餅を引っ張るような動き
ワレーカントオーシガ	意味：笑顔でいる
ムチッテングアー	意味：餅を引っ張るような動き
ウガドーイビーン	意味：承知いたしました。
グブリーサビラ	意味：失礼します。
チューヌジュギョーハ クリッシウワユン	意味：今日の授業はこれで終わる。
ヌーガナイクトウヌドゥアティ	意味：なにか良いことがあったの
チョウゲンヤ Bヌタキニアティテ	意味：調弦の高さはBだよ
キイチキテイ キヨウヤ	意味：気をつけていきなさいよ
マタウガナビラ	意味：またお会いしましょう
ヒサヒラグティ タチカンティー ソーイビーン	意味：足がしびれて立てなくなっています

学生の反応・コメント

初めての授業で少し緊張していたが、講師の話の聞いているうちに興味をもってしまくとうばを  
使うようになってきた。(1回目の授業にて) / どちらかと言えば、県外から来ている学生が強い  
興味を示した。(2回目の授業にて) / 興味は持っているが、日常の生活では使わないので、授  
業に取り入れることはいいと思う。(4回目の授業にて) / 授業の中でとしまくとうばを使うことで、  
レッスンしている歌についても深く興味を示すようになった。(6回目の授業にて) / 廊下で会った  
時にしまくとうばで挨拶してきた。(7回目の授業にて)

見学者の感想

学生達が入室時、しまくとうばでのあいさつが自然にできるようになっているのに驚いた。「マ  
ジマジミラヤー」との声掛けに、ある学生が「ウー」と答えたところ、先生から「ウー」ではなく「ウ

ニゲーサビラ」と答えるのだという指摘があった。日本語的な感覚では「はい」と返事をすれば十分かもしれないが、先生はその場のコンテキストで最も自然な受け答えになる表現を示してくださっている。その後、何回目かの練習の時「トーアンシェーハジミラヤー」とおっしゃったときには、学生たちは揃って「ウニゲーサビラ」と答えられるようになっていた。

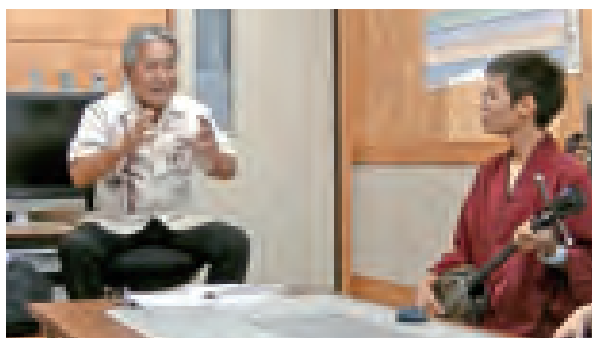
#### 今年度の良かった点・反省点

今回、しまくとぅばを取り入れた授業を10月～12月までの間、週1回で10回の授業を行なった。学生達はしまくとぅばに接する機会があまりなかったようで、授業に取り入れたことで興味が出てきたようである。アンケート結果からもしまくとぅばをもっと学びたい、使いたい、授業をまた受けたいとの回答がほとんどであった。今回は、授業を受ける時の基本的な挨拶を重点的にお願いした。後半では、授業以外で会った時にしまくとぅばで答えてきた時は嬉しかった。反省点としては、歌三線についてのしまくとぅばの表現方法をもう少し取り入れても良かった。

#### 次年度への展望

琉球古典音楽の中で、しまくとぅばで伝承された専門用語のイントネーションやその意味について行なってみたい。たとえば「ナーチルヅル ナータマシダマン」作田節の歌い方について、「イルチキテーナラン」安富祖正元の歌について、「ヤミネユヌ ターブクク」知念積高の歌について、「サーターヤー」その他、しまくとぅばで表現した独特の文言を理解させることで学習意欲の向上を期待したい。

「地謡実技」授業風景①



「地謡実技」授業風景②



### 1-3-2 舞踊実技

実施期間：平成29年10月2日～平成30年1月22日

授業回数：12回

受講年次：学部2年生2名、院1年生1名

#### 特別講師について

宮城 幸子 (みやぎ・ゆきこ 84歳)「真踊流佳幸の会 会主」

宮城幸子先生は、昭和26年に琉球舞踊真踊流家元の眞境名佳子師に入門され(芸歴66年)、昭和26年に沖縄タイムス芸術選奨大賞を受賞し、平成8年には沖縄県指定無形文化財沖縄伝統舞踊技能保持者に認定された。また平成15年に沖縄県文化功労賞を受賞し、平成21年には国指定重要無形文化財保持者に認定された実績を有している。眞境名佳子師匠からはしまくとぅばでの舞踊指導を受けており、当時の指導法を体得し伝授できる貴重な舞踊家の一人である。

#### 授業記録シートについて

毎回の授業内容を記録シートに記載した。項目は、1. 科目名・受講者名・見学者名、2. 授業内容(舞踊演目や重点を置いて指導した内容)、3. 授業で使用された重要なしまくとぅば、4.



教員の感想、5. 教員から見た学生の反応、6. 見学者の感想の6つである。全12回の授業(13回目の最終講義はまとめを行った)のシートから、学生達の変化や習熟度、しまくとうばの数の多さとその中でも繰り返し使用される重要な用語を確認することが出来た。

#### しまくとうばのキーワードについて

宮城先生は、琉球舞踊の中で「姿勢・歩みの基本が最も大切である」と繰り返し話され、それを体得するためのしまくとうばを授業の中でよく使用された。

マチジカラ チビヌミーマディ フィトウチ 意味：つむじからお尻の穴までひとつ＝身体の中心に  
1本線を通すように姿勢を保つ

シタハランカイ アギイリレー 意味：丹田を意識する

メンカイ ウッチャカレー 意味：前に体を傾ける

シナヌナーカンカイ アシイッティ シナトウバサングートウ メンカイ  
意味：砂の中に足を入れ、それを飛ばさないように  
足を前へ出す

メーホーヤー 意味：前に倒れすぎ

#### 学生の反応・コメント

重心の位置が分かったのですり足で歩きやすくなった。(2回目の授業にて) /動作のイメージがしやすく、共通語よりすんなり入ってきて、さらに深く理解できる。(4回目の授業にて) /日本語でよくわからなかった動きが徐々に形になってきた。(8回目の授業にて) /腰を入れてと教わったこともあるが、しまくとうばで「アギイッティ」と教わる方がしっくりくる。(11回目の授業にて) /言葉を理解できると自分の芸も変わると実感できた。(12回目の授業にて)

#### 見学者の感想

歩みの練習の際には、「歩いているだけで、すでに踊りになっていないといけない」というお言葉があり大変奥が深いと感じた。「チルフミヨ」「ヤファッテングワー」など動きや姿勢について、しまくとうばでの指導があった。立ち止まって説明する状況ではヤマトウグチが用いられる傾向があったが、比嘉先生が実際にご自身が踊りながら指導される際には、動きと共に自然に、しまくとうばが出てくるようだった。

#### 今年度の良かった点・反省点

今回「しまくとうば実践教育プログラム事業」を通して、日本語のみで指導説明するより、学生達の習熟度がかなり上がったことを確認できた。生活様式の変化により、現在の子どもたちは体の使い方も変わってきている中で、どのように伝えればよいのか悩んでいる中、特別講師の宮城先生の的確なしまくとうばの指導のおかげで、改めて芸能文化を継承する中で、言葉の果たす役割が大きいことを実感した。反省点としては、日常的にしまくとうばで会話が出来る様に努力したい。

#### 次年度への展望

来年度は前後期を通してしまくとうばでの授業が行われるが、学生達が言葉の理解をスムーズに行い、舞踊実技の習熟度を高めるためにも、「琉球語I」の講義科目と連携して取り組んでいきたいと思う。

また、授業だけでなく普段のあいさつや自己紹介などを、しまくとうばで行えるように日頃から使用する。

そして将来的には琉球芸能専攻(教員・学生)内での会話がしまくとうばで行えるようにし、歌や踊りの歌詞の内容が即座にイメージできる環境を目指していきたい。

「舞踊実技」授業風景①



「舞踊実技」授業風景②



### 1-3-3 組踊実技

授業期間：平成29年10月5日～平成30年1月25日

授業回数：9回

受講年次：学部1年生6名、学部4年生3名

#### 特別講師について

小波 則夫 (こなみ・のりお 87歳)

選定保存技術「結髪(沖縄伝統芸能)」(保持者)

伝統文化ポーラ賞優秀賞(平成14年)受賞

公益財団法人 国立劇場おきなわ運営財団 伝統芸能伝承者養成研修(組踊)の講師

#### 授業記録シートについて

「しまくとうば」のわからない学生の為に日常会話から指導をしていただき、それから組踊の指導中に分からない「しまくとうば」の単語を教えていただいた。小波先生の「しまくとうば」の指導していただいたことによって、組踊所作の細かい「しまくとうば」が習えた。例えば「フィサヌバチイレ(足を伸ばして座る)」「ウーティイチュン(追いかける)」等、他に「ザシキモーイ(座敷踊り)と「舞台モーイ(舞台での踊り)」違いや着付け、カラジの種類、ジュリの座り方、所作、ジュリの言葉使い方と首里の言葉使い方(芝居上での)の「しまくとうば」も学べた。本土から来た学生や留学生の多い1年次は、徐々に「しまくとうば」に慣れていった。4年次はある程度「しまくとうば」が聞き取れていたため、より詳しい「しまくとうば」を質問し「しまくとうば」を自ら学ぶ姿勢がみられた。

#### しまくとうばのキーワードについて

ドゥーフー	意味：芸の個性
ワンヌ ナラーチャル カイガアルドー	意味：私が教えた甲斐があるよ
スガイ	意味：着物の着方
ジーファー	意味：かんざし
ウシザシ カミザシ	意味：男性の簪の名称
ダキヌファ・ムッチ	意味：竹の葉を持って
ヒジャイカイミグティ	意味：左に回る
ヒサンチ、チランチ、ウフェーカンゲヤーニ、チランジュン	意味：足を見て、顔を見て、少し考えて、顔を見る
クイブリー	意味：恋狂う
イラナ	意味：鎌
フィーラ	意味：へら
フミ	意味：手紙

ダキヌファームッチ フリティアッチョーン	意味：竹の葉を持って狂って歩いている
カンタ ワーワー	意味：髪をぼさぼささせている状態
ミッチャイ ヤイビーン	意味：3人です
アシ ジェージェェー	意味：汗がだらだらしてる
ナバクルナ	意味：馬鹿にするな
カンプー	意味：大和の侍のちょんまげ
タクディ	意味：(文を)畳んで
アトゥ ウーレー	意味：追いかちなさい
タックワーシ ムックワーシ	意味：つけ合わせ、まぜる？
ウヤメークトウバ	意味：敬い言葉、敬語
チビウーレー	意味：あとをおう
ミーフラチ	意味：目を大きく開ける
トウジャーニ イイユン	意味：飛んで座る
チランーチ カラジノーチ チンノーチ	意味：顔をみて、髪の毛を直し、着物を直す
チューヤヌーカラガ	意味：今日は何から？
チールー オールー	意味：黄色、青色
エイル、エーズミ	意味：藍色、藍染め
ウィーンチ シチャンーチ	意味：上向いて 下向いて
チンシ マギレー	意味：ヒザ曲げろ
イイワーチチデームンナァ	意味：いい天気ですね
カラジ チミテーサヤァ	意味：髪を切ってきたんだね
ウドウイナラティ ワザヤサンド	意味：舞踊を習ってから技をする
スリーズリー アチマティ	意味：みなさんあつまって

#### 学生の反応・コメント

「フリティアッチョーン」や「カンタワーワー」など面白い表現を先生から習うことができ楽しかった。(3回目の授業にて)「カンプー」が食べ物の「かんぴょう」に由来していることに驚いた。(4回目の授業にて)／私がこれまで使っていた荒いウチナーグチだったが、小波先生の柔らかいウチナーグチが学べた。(5回目の授業にて)／うちなーぐちで教わるのは難しいけど、自分で言葉の意味を調べることで、言葉と意味が覚えられるので、とてもいいと思う。(7回目の授業にて)

#### 見学者の感想

今日の授業では、小波先生の役者としての様々なご経験を伺うことができました。阿嘉先生のリードで、戦前戦後の舞台の様子や当時の衣装や髪型など興味深いお話がありました。学生たちは芝居や先生がでられた舞台にも大いに関心を示していました。また、ある学生から「地方へ公演に行った際には芝居くとうばが通じたのか」との質問が出てきた際には、芝居の中ではその土地のしまくとうばを取り入れるなどの工夫をされた例をお話しされていました。そういう意味では、芝居くとうばは非常にユニークなものであるというのが先生のお考えのようでした。先生ご自身がしまくとうばを使う場合に、ゆったりと抑揚のある、芝居くとうばの特徴が出てくることがあるそうですが、それは「首里くとうばとも那覇くとうばとも違う」とおっしゃられた点が大変興味深かったです。

#### 今年度の良かった点・反省点

普段、標準語で教えている細かなところを、小波先生からしまくとうばで習って、学生に教えることができたので、自分自身も勉強になった。特に、小波先生にしまくとうばを指導していただい

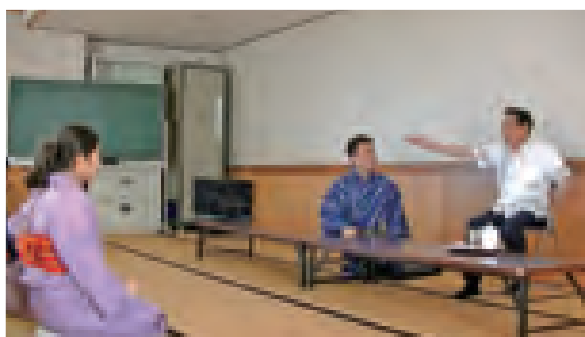


ことよって、組踊所作の細かいしまくとうばが習えた。例えば「フィサヌバチ、イレー（足を伸ばして座る）」「ウーティイチュン（追いかける）」等、他に「ザシキモーイ（座敷踊り）」と「舞台モーイ（舞台での踊り）」違いや着付け、カラジの種類、ジュリの座り方、所作、ジュリの言葉使い方と首里の言葉使い方（芝居上での）のしまくとうばも学べた。

### 次年度への展望

今回の「しまくとうば」の授業では、芝居や扮装などの「しまくとうば」を中心に指導をしてもらった。次年度は、金城清一先生による組踊の専門的な「しまくとうば」また、先達の先生方（金武良章、玉城盛義、親泊興照、眞境名由康、宮城能造）の演技の特徴や発生法、所作などの指導をしていただく。

「組踊実技」授業風景①



「組踊実技」授業風景②



### 1-3-4 学生による授業評価アンケート

#### H29年 県芸しまくとうば実践教育事業 授業評価アンケート

実施日時：平成30年1月

対象：琉球芸能専攻学生

#### I. 対象授業名と受講者数、アンケート回収枚数

「地謡実技Ⅱ」6名、3枚／「琉球舞踊実技Ⅱ」3名、3枚／

「組踊実技Ⅱ・琉球舞踊組踊Ⅳ（組）」9名、9枚

#### II. 質問と結果

1. この授業を受けるまで、

- ①しまくとうばに接する機会はどのくらいありましたか。
- ②しまくとうばをどれくらい理解できましたか。
- ③しまくとうばを意識していましたか。

選択肢	人数
ほぼ毎日	1
週に数回	4
月に数回	6
年に数回	2
ほとんどない	1
回答なし	1
計	15

選択肢	人数
ほぼ全て理解できた	2
8割程度理解できた	2
半分程度理解できた	5
3割程度理解できた	3
ほとんどわからなかった	3
回答なし	0
計	15

選択肢	人数
はい	10
いいえ	4
無回答	1
計	15

2. この授業を受けている間、

- ①授業内で使用されたしまくとうばをどれくらい理解できましたか。
- ②しまくとうばを以前より意識していましたか。
- ③授業外でしまくとうばを使用する機会ほどのくらいありましたか。

選択肢	人数
全て	2
8割	4
半分	5
3割	4
皆無	0
無回答	0
計	15

選択肢	人数
はい	13
いいえ	1
無回答	1
計	15

選択肢	人数
増えた	9
減った	0
変化なし	6
無回答	0
計	15

3. 今後について、

- ①しまくとうばに接する機会を増やしたいと思いますか。
- ②しまくとうばをもっと学びたい・使いたいと思いますか。
- ③しまくとうばでの実技の授業をまた受けたいと思いますか。

質問3-①

選択肢	人数
はい	13
いいえ	1
無回答	1
計	15

質問3-②

選択肢	人数
はい	15
いいえ	0
無回答	0
計	15

質問3-③

選択肢	人数
はい	14
いいえ	1
計	15

4. 「琉球語基礎」、「琉球語I・II」を受講しましたか。

選択肢	人数
はい	8
いいえ	7
計	15

5. 授業の感想・意見、印象に残っている言葉などがありましたらご記入ください。

- ・関西から来たので、今まで知る機会がなかったので、もっと知りたいです。
- ・これから「しまくとうば」を意識していきたいです。
- ・ゆしりやびたん、いっぺーにふえーでーびたん。
- ・小さいころからしまくとうばになれていたのでもういいはないです。
- ・しまくとうばを使う授業を履修することで琉球文化を継承できると思います。
- ・ちんしまぎれー (ひざまげて)
- ・ちゅーや いー わーちち やいびんやーたい (今日は良い天気ですね)
- ・沖縄のしまくとうばは、自分にとっては、未知の世界なので、もっともっと学びたいと思いました。今の目標は、しまくとうばを理解し、よくよくは、使っていきたいと思っています。
- ・普段、聞き知っている方言とは、又違った方言を聞くことが出来て、とっても良い経験になっています。以前よりも意識して聞くようになりました。ありがとうございました。
- ・島くとうばを使う機会が減ってきている中、授業として“しまくとうば”を取り入れてほしいです。

- ・実技は実技として、しまくとぅばは、また別で学ぶべきであると思います。「琉球語」などの授業でそういうのはしてほしいです。ですが楽しい授業にはなりました。
- ・普段、めったに聞くことのできない、小波先生のお話を直接聞くことができ、本当に貴重な経験になりました。これからもこの様な機会が増えることを期待します

### 1-3-5「琉球語Ⅰ」「琉球語Ⅱ」の平成30年度シラバスの変更について (仲原 穰)

#### 科目の概要

琉球語Ⅰ、琉球語Ⅱは平成29年度から新設された科目であり、平成28年度までは「音声学」の後期に「琉球語」の基礎を学ぶしかなかった。ここ数年、「音声学」を受講する琉球芸能専攻の学生(3～4年次)のほとんどが琉球語を話すことができない状況が続いていた。立方である琉球舞踊・組踊コースだけでなく、地謡の琉球古典音楽コースでも、普段の会話では日本語しか使用せず、琉球語の会話のほとんどを聞き取ることもできない学生もみられた。

このような状況のなか、平成29年度に開設された「琉球語Ⅰ」(前期)は、琉球語の基礎を習得するための科目であり、さらに琉球語Ⅱ(後期)では、「琉球語Ⅰ」で身につけた琉球語の基礎を確認し、さらに日常会話でもよく使用される敬体や常套句を学習するための講義である。

#### 1. 今年度(平成29年度)のシラバス(順に「琉球語Ⅰ」「琉球語Ⅱ」)

上にみたように、平成29年度は「琉球語Ⅰ」「琉球語Ⅱ」と実技科目との関連性をほとんど意識せず、琉球語が聞き取れないレベルの学生を対象に設定した講義であり、琉球語概説や沖縄語(首里方言)の音韻・文法・語彙について、基本から中級までを、段階を踏んで講じるという内容である。

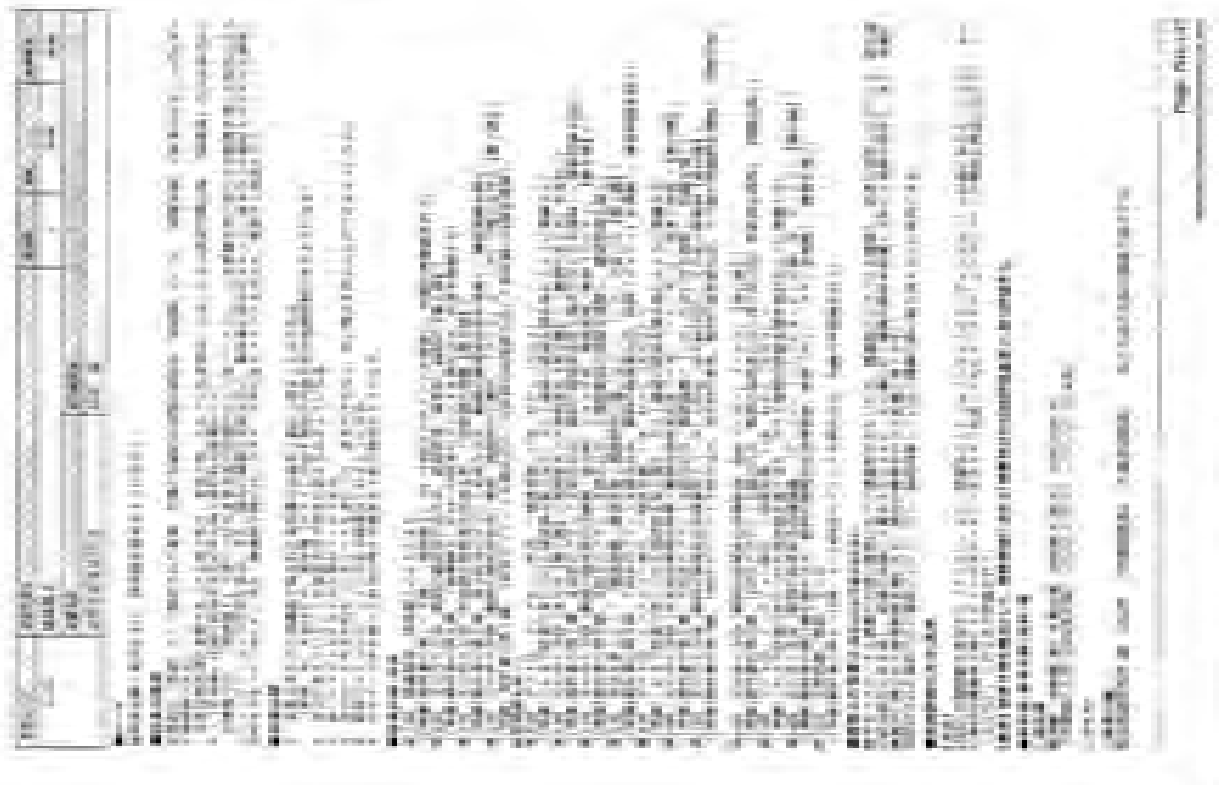
しかし、このままでは、実技の各講義との連携はみられず、語学と実技との相乗効果を計ることができないのではないか、という議論がしまくとぅば実践教育研究会の場でなされ、その結果、以下のようなカリキュラムへと変更することが決定した。

科目名	単位数	履修者数	備考
琉球語I	2	15	
琉球語II	2	15	
琉球語III	2	15	
琉球語IV	2	15	
琉球語V	2	15	
琉球語VI	2	15	
琉球語VII	2	15	
琉球語VIII	2	15	
琉球語IX	2	15	
琉球語X	2	15	
琉球語XI	2	15	
琉球語XII	2	15	
琉球語XIII	2	15	
琉球語XIV	2	15	
琉球語XV	2	15	
琉球語XVI	2	15	
琉球語XVII	2	15	
琉球語XVIII	2	15	
琉球語XIX	2	15	
琉球語XX	2	15	
琉球語XXI	2	15	
琉球語XXII	2	15	
琉球語XXIII	2	15	
琉球語XXIV	2	15	
琉球語XXV	2	15	
琉球語XXVI	2	15	
琉球語XXVII	2	15	
琉球語XXVIII	2	15	
琉球語XXIX	2	15	
琉球語XXX	2	15	

2. 平成30年度のシラバスの特徴

平成30年度のシラバスをあげ、その特徴を示す(順に「琉球語I」、「琉球語II」)。

科目名	単位数	履修者数	備考
琉球語I	2	15	
琉球語II	2	15	
琉球語III	2	15	
琉球語IV	2	15	
琉球語V	2	15	
琉球語VI	2	15	
琉球語VII	2	15	
琉球語VIII	2	15	
琉球語IX	2	15	
琉球語X	2	15	
琉球語XI	2	15	
琉球語XII	2	15	
琉球語XIII	2	15	
琉球語XIV	2	15	
琉球語XV	2	15	
琉球語XVI	2	15	
琉球語XVII	2	15	
琉球語XVIII	2	15	
琉球語XIX	2	15	
琉球語XX	2	15	
琉球語XXI	2	15	
琉球語XXII	2	15	
琉球語XXIII	2	15	
琉球語XXIV	2	15	
琉球語XXV	2	15	
琉球語XXVI	2	15	
琉球語XXVII	2	15	
琉球語XXVIII	2	15	
琉球語XXIX	2	15	
琉球語XXX	2	15	



(1) 琉球語話者による講話を導入—実技の実践と「連携」を図り、実践的な講義計画へとシフトする—  
今年度(29年度)の「地謡実技」「琉球舞踊実技」「組踊実技」の各科目では、講義を登録した、それぞれの実技科目の学生以外は特別講師の話す琉球語を聞くことができなかった。また、実技という講義の性質上、受講していた学生もおおのの特別講師の話す琉球語にじっくりと耳を傾けて、ことばにだけ着目して学ぶことができないという状況もみられた。

そこで、来年度(平成30年度)では、各実技の特別講師の先生方3人(平成30年度の特別講師は、仲嶺眞永先生、宮城幸子先生、金城清一先生の予定)を「琉球語I」、「琉球語II」のそれぞれの講義にゲスト講師として招き、琉球語を母語とする話者の話す伝統的なことばを直接、じっくりと聞く時間を設けることにした。

ただし、「琉球語I」の段階では、リスニング能力がそれほど高くないため、特別講師の話す琉球語を担当教員(仲原)が翻訳する、あるいは特別講師に時折、日本語も交えて話していただき、文・句・単語など、聞き取れる琉球語がどの程度あるのかをはかるペーパーを提出してもらう予定である。なお、「琉球語I」は来年度のカリキュラムより、2年次の必修科目となっており、琉球芸能専攻の学生すべてが特別講師の「しまくとぅば」による講話を聞くチャンスを得ることになる。よって、「琉球語I」では、なるべく実技の講義でお話になる内容に限定してお話してもらう予定である。

希望した学生のみが登録する「琉球語II」でも特別講師をゲストに招く時間を設け、「しまくとぅば」による講話を実施する。ただし、担当教員は特別講師の講話には加わらず、特別講師の琉球語による講話を中心とする。学生には講話の内容をレポートとして提出してもらい、理解度の確認を行う予定である。「琉球語II」では、特別講師に実技の講義内でゆっくりと話すことのできなかった話し、あるいは琉球芸能にまつわる話しであれば、何でも自由に話していただき、特殊な単語が出た場合のみ、担当教員が板書することで、講話内容を理解する手助けとする予定である。



(2) レベルに即応したカリキュラムの見直し一進度に合わせた講義計画一

今年度(平成29)年度のカリキュラムの「目標」では、琉球語を聞き取る能力を「6割」(琉球語I)、「8割」(琉球語II)のように高レベルに設定した。これを可能にするために、「琉球語I」では教科書(『沖縄語の入門』)の第1課～第6課まで、「琉球語II」では教科書の第6第12課を到達目標とした。しかし、必修となる「琉球語I」で第6課までを目標にすると、動詞の変化をより多く学ぶことになり、受講生の理解に応じて進度をゆるめるゆとりをとることができない。

そこで平成30年度の「到達目標」では、琉球語を聞き取る目標を「琉球語I」では「5割」、「琉球語II」では「7割以上」とレベルを引き下げ、進度をゆるめることとした。その結果、「琉球語I」では教科書の第1～5課まで、「琉球語II」では教科書の第6～11課までとした。

また、平成29年度の各時間に行っていた「前回の復習と補足」として講義に組み込んでいる復習の部分を解説や復習問題はそのまま「事前・事後学習」として活用してもらい、講義内では取り上げないことで講義計画にゆとりを設ける予定である(復習問題の回答は翌週の講義で行う予定)。講義の前後に予定している「オフィス・アワー」などを利用して受講生に主体的に質問してもらい、補足の説明をするという形式に組み替える。

それによって得られた時間を利用し、「実技」の各講義で使用された「琉球舞踊表現」のデータベースを活用し、平成29年度のデータベースの「単語」「句」「文」のなかから、授業の進捗に応じたものをピックアップし、紹介することにした(毎回5分～10分程度)。ただし、この琉球芸能表現については、実技の際に用いられる表現を理解するための補助としてあくまで「ミニコーナー」として取り上げる予定であるため、平成30年度のシラバスの「講義計画」には記載を省略してある。

(3) ゲストを招くための時間を確保

前節で述べたように、平成29年度の講義計画よりも平成30年度の講義計画の方にゆとりを設けることにした。14回の講義で行っていた15分～20分の「復習・補足」の部分を復習問題の確認のための時間(5分程度)に納めることで、(1)で述べた「特別講師」をゲストに招いた講話(3コマ)を確保することができた。

4. 結び

平成29年度の講義内容を「しまくとぅば実践教育研究会」で見直した結果、実技の科目との連携やゆとりをもった講義計画への改定などにつながり、新たなシラバスを作成することができた。また、琉球語の母語話者による自然講話によって、受講生の講義へのモチベーションの向上も期待できるものと確信している。さらに実技の各科目での受講生の理解度の向上にも貢献できであろう。

1-4 ハワイ大学ヒロ校調査概要

平成29年11月20日から25日の日程で、ハワイ語による教育システムの視察をするため、ハワイ大学ヒロ校およびハワイ語イマージョンスクールである「Pūnana Leo」(保育園・幼稚園相当施設)・「Nāwahī a me」(小中高相当施設)の視察を行った。

ハワイ大学ヒロ校では、ハワイ語学部の初級ハワイ語クラス、同じく初級ハワイ語クラス(語彙と辞書編集について)、イマージョン教育など受けてきた高校生を対象にハワイ語の正確な語法を教授するクラス、大学院のハワイ語のチャント応用、学部4年次のハワイ研究セミナークラスを見学した。それぞれのレベルに応じて教授方法が工夫されており、初級ではハワイ語の単文で応答するという内容、上級ではハワイ語を話せる高校生・大学生に、ハワイ語でスピーチをさせ、そのスピーチの中で話された発音が正しいか否か、表現方法が適切か否か、文法が適切か否か、といった細やかな指導があった。また、ハワイ語で実技指導を行うフラダンスのクラスも見学し、芸術の中で言葉をどのように用いて教授するか、など、本事業に取り入れられる要素が多く見られた。

イマージョンスクールでは生後9ヶ月から高校生までが2つの校舎に分かれて修学していた。校内ではすべてハワイ語で授業を行っており、教員や学生どうしもハワイ語で会話を行っていた。「大事なものは言語をただ学ぶのではなく、年中行事や、もともとのハワイの文化と合わせて教えている」と理事長からコメントがあり、実際にそれが実践されていたのが印象的であった。ことばと文化を同時に学ぶことで、言語に対するアイデンティティも芽生え、言葉の理解度が上がるだけでなく、ハワイそのものの文化に対しても愛着を感じ、それを守っていく人材作りになっているという印象であった。なお、研修に参加した研究会メンバーは以下の通りである。

鈴木 耕太(附属研究所)

高良 則子(全学教育センター)

麻生 伸一(全学教育センター)

比嘉 いずみ(音楽学部琉球芸能専攻)

波照間永吉(沖縄県立芸術大学名誉教授)

西岡 敏(沖縄国際大学教授、沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員)

仲原 穰(県立芸大非常勤講師、沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員)

幸地 夏希(本事業専門事務員)

ハワイ研修のスケジュールは以下の通りである。

#### 1-4-1 調査研究日程

##### 1日目(11月20日)

ハワイ大学ヒロ校にて大原由美子先生とのミーティング。

参加者：大原由美子(ハワイ大学准教授)、鈴木、波照間、高良、西岡、仲原、幸地

ミーティングの内容は以下の通り。

##### ① ハワイ大学ヒロ校で見学する授業についての説明

大原先生より、授業の見学スケジュールは次の通りという連絡があった。

21日 9:00- 9:50 HAW101 (イマージョンハワイ語レベル1) Kaliko先生

10:00-10:50 HAW101 (イマージョンハワイ語レベル1) Kaliko先生

12:30-13:45 KHWS472 (Hula 'Auana) Kekoa先生

16:00-18:45 HWST662 (ハワイアンチャント応用学) Kalena先生

22日 7:40-10:30 Nāwahī a me と Pūnana Leo見学

13:00-13:50 KHAW133 (ハワイ語話者のためのハワイ語1) Pila先生

15:00-16:15 KHWS496 (ハワイ語セミナー) Aolani先生

##### ② ハワイ語の出版物について

大原先生より、ハワイ語の教科書の内容・製作過程についての説明があった。

・ハワイ語の教科書や絵本はハワイ大学の教員・学生達によって制作されている。ヒロ校のキャンパス内に教材を制作している事務室がある。

・ハワイ語の辞書はオンライン化されており、誰でも閲覧可能な状態にされている。

##### 2日目(11月21日)

ハワイ大学ヒロ校の授業視察

参加者：鈴木、波照間、高良、西岡、仲原、幸地

午後からの参加者：麻生、比嘉

##### 3日目(11月22日)

午前 イマージョンスクールの視察

訪問場所：Pūnana Leo, Ke Kula o Nawahiokalaniopuu (ハワイ州ヒロ)



参加者：鈴木、波照間、高良、麻生、比嘉、西岡、仲原、幸地、柳アリソン、照屋リネット  
午後 ハワイ大学ヒロ校の授業視察

#### 4日目(11月23日)

聖田京子先生(ハワイ大学名誉教授)との意見交換会およびカレント講座調整会議  
場所：ハワイ・ヒロシーサイドホテル ミーティングルーム  
参加者：聖田京子(ハワイ大学マノア校名誉教授)、柳、照屋、鈴木、波照間、高良、麻生、比嘉、西岡、仲原、幸地  
※意見交換会の内容は「1-4-2聖田京子先生講演録」を参照。

ハワイ語学部のメインキャンパス



ハワイ語学部入口の看板。意は「言葉の家」



### 1-4-2 研究会メンバーによる調査報告書

#### プーナナレオとナーワヒ(イマージョンスクール)に関するリサーチメモ(幸地夏希)

Pūnana Leoとは、ハワイ語を介して教育を行うプレスクールを指し、主に3、4歳の子ども達が通っている。今回案内をしていただいたNāmaka先生のご説明によると、乳幼児プログラムと合わせると、ハワイ州全体に12のプーナナレオがあるとのことだった。一方で同じ敷地内にあるKe Kula o Nawahiokalaniopuuは、ハワイ語を介して教育を行うチャータースクールであり、プーナナレオ卒業後の5歳から大学入学前の18歳までの子ども達が通っており、通称Nawahi(ナーワヒ)と呼ばれている。

学校の公式ウェブサイトによると、設立までの歴史が次のように説明されている。1896年、アメリカ合衆国が先住民の言語を教育で使用することを禁じたため、公立・私立の学校におけるハワイ語での授業が禁止された。教師はハワイ語を使用すると解雇されると言われ、ハワイ語を使う生徒は厳しく罰せられた。1984年までにハワイ語の母語話者数は著しく減少し、当時ハワイ語を使用できる18歳以下の子どもは50人もいなかったとされる。

1982年、ハワイ語の教育者達は、この言語を永続させるためには、それが日常言語として使用される環境で子どもを育てることが不可欠であるという結論を出した。その鍵となる施設として、ハワイの王国時代に存在していた、ハワイ語を介して授業を行う学校を設立した。そこで、世界を自分達の言語と文化を通して見ることができ、英語にも熟達している、新しい時代のハワイ語話者を育てる努力を始めた。そうして、プーナナレオ保育園とハワイ語の教育哲学(Kumu Honua Mauli Ola)ができたのである。

プーナナレオは、「言語の巣」という意味で、子ども達は、餌を与えられるヒナのように、彼らの母語であるハワイ語とハワイの文化を教わるとのこと。そのような教育方針のもと最初のプーナナレオは1984年にカウアイ島のカケハに設立された。その翌年、ハワイ島ヒロとオアフ島ホノルル

にも設立された。現在では、幼児教育から大学博士課程までのハワイ語による教育課程が完成し、ハワイ州全体でハワイ語が教えられている。

プーナナレオとナーワヒの役割として次の2点があげられる。まず一つには、言語と文化の保存、継承である。プーナナレオは、土着言語復興運動の早期学習モデルであるとともに、ハワイ語の学習機関として保育園から博士課程まで一貫した教育を提供する役割を担っている。

もう一つは、ハワイ語話者の育成と社会への還元である。プーナナレオとナーワヒの卒業生達は、ハワイ語とハワイの文化の保持者として、世界各地の様々な分野で活躍している。ハワイ語専門テレビ局 oiwi TV を設立したり、州議会の議員としてハワイ語や文化を保護・継承するための取組に着手したりしている。卒業生の家族や子ども達もプーナナレオやナーワヒに通っており、新しい世代の育成が継続的に進められている。

参考：‘Aha Pūnana Leo <http://www.ahapunanaleo.org/>

### ハワイ大学及びイマージョンスクール調査報告 (高良則子)

ハワイ大学 (UH) ヒロ校は、マノア校およびウエストオアフ校とともにUHシステムに属する州立大学である。民族的な多様性の高いヒロ校は、学部から博士課程まで一貫したハワイ語のプログラムが開設されていることでも知られている。今回の「しまくとぅば実践教育プログラム開発事業」においては、平成29年1月に実施された第1回の現地調査の成果を踏まえ、さらに多角的な観点からヒロ校および同地域のイマージョンスクールにおけるハワイ語教育システムを視察することとなった。私は、全学教育センターにおいて外国語教育を担当している立場から、特にイマージョン教育のプログラムや大学における言語教育カリキュラムに関心を寄せ、今回の研修に臨んだ。

ヒロでのハワイ語教育の視察は、2014年に完成した Hale ‘Ōlelo 「言語の家」と呼ばれるUHヒロ校ハワイ語学部で始まった。教室に向かって歩いていくと、マルーンカラーの壁一面に白抜きで記されているのは、カメハメハ一族の血を引く「ルース女王」のエピソードであると聞いた。1881年の噴火の際に、ハワイ語とその文化をこよなく愛し守ろうとした女王が、火山の女神「ペレ」に祈りをささげると溶岩が止まり、ヒロを救った。この女王の情熱を継承するかのよう、彼女の名前の一部(ケエリコラニ)は、ハワイ語学部の名称Ka Haka ‘Ula O Ke ‘elikōlaniに刻まれている。

UHヒロ校で視察した授業は、大きく分けて3つのコースによって開設されている。科目番号の前にHAWと示されていると「ハワイ語コース」が提供する初心者向けの授業を示す。私たちが、初日の午前中に参加したクラスが初級ハワイ語の授業であった。HAW101では、*Na Kai ‘Ewalu* という教科書を使用して授業が進められており、その本のサブタイトルは *Beginning Hawaiian Lessons* と英語である。盛りだくさんのハワイ語の文法や例文をすべて英語で説明した2巻からなる教科書。この日は、ハワイ語で自己紹介の会話練習を行い、その後、短い英語のダイアログをハワイ語に訳するという演習であった。このカリコ先生の授業で学んだハワイ語での自己紹介は、その後の様々な出会いの際にアイスブレイクの挨拶となって大変役に立った。2時限目のHAW101は、大原先生のご支援のおかげで、(英語で表すと) The Committee of New Hawaiian Words という委員会でのハワイ語の新語を造る取り組みについて話を聞くことができた。カリコ先生ご自身も、8～9人で構成されるこの委員会のメンバーの一人である。既存の単語や単語よりもさらに小さいユニットの形態素までフルに活用して、また時には同じポリネシア語派であるトンガ語などからも単語を借用して、ハワイ語らしい単語を造るとのこと。英語を単にハワイ語読みにすることは極力避けたいという懸命な努力が感じられた。そして新語が追加されて構築されていく辞書は、今ではインターネットで誰でも使用可能である。

初日の午後にはさらに二つの授業に参加したが、こちらは「ハワイ学コース」から提供されている科目だった。KHWS472は、ハワイアンダンスの歴史や様々なフラ作品を通してハワイ語をさらに深く理解するという授業であった。授業はハワイ語で行われるが、ケコア先生が英語で補足

された次のコメントは強く印象に残っている。「言葉がなければフラは存在しない。でもだからこそ、フラの踊りの中で詩の内容を正しく理解することは、言語をより深く習得することにもなる。」実際にフラの実技指導もあったが、受講している学生のフラ経験歴は実にさまざまであった。科目コードに添えられている‘K’はKe‘elikōlaniのKだそう。つまり、フラも大切であるが、言葉なしに文化の継承は不可欠という考え方が明確に科目コードに示されているということだろうか。

もう一つのハワイ学関連科目はHWST662で大学院のハワイアンチャント応用学という授業。担当のカレナ先生には、ハワイ語復興運動やヒロ校ハワイ語学部創立から今日に至るまでの貴重なお話を伺うことができた。70年代、ハワイ語を母語とするご年配の方々を巻き込み、そして彼らの支援を受けながら高まっていったハワイ語復興の波は、高等教育を受けハワイ語を母語のように使用することができるカレナ先生のようなリーダーを着々と育てていた。カレナ先生は現在、高等教育の現場で、言葉と文化と伝統を深く理解し、誇りをもって継承できる次世代のリーダーを育てている。学生らも第1世代の期待に応えるように、自分たちがまだ2世代目であること、そして言語継承のために必要な5世代間にわたる言語の継続性を目指し、大いなる意欲と使命感で挑んでいるようであった。カレナ先生は話の中で二つの大きな‘resource’「リソース」について言及されていた。一つは、ハワイ語による新聞や出版物といった大変うらやましくなるような膨大な文字資料と500時間分以上のラジオ放送の記録資料である。もう一つはハワイ語を学び、先住民から引き継いだ言語と文化への愛情を育み、その知識を獲得した180余の人材の存在である。

このようにしてハワイ語を習得した人材は、英語コミュニティと比較すると規模は小さいかもしれないが、幼児教育から高等教育まで大変有機的に活躍の場が確立されていて、ハワイ語話者のコミュニティの輪が広がっているのがヒロのハワイ語教育ではないか。それを強く感じたのが、3日目にプーナナレオとナーワヒというイマージョンスクールの視察に行った時である。第一世代のもう一人のリーダーであるピラ先生らが、ハワイ語で子供たちを育てる教育の場を構想・設計し実現させた学校である。プーナナレオとナーワヒは、ハワイ語がどこにいても聞こえてくる空間であり、外国語の授業でもなければ、他の言語は聞こえてはいけないという緊張感さえある完全なハワイ語漬けの環境だった。そして言語・文化・知識を教える際にはそれぞれが切り離されることなく、子供たちが積極的に学びに参加している様子が見えた。この卒業生たちは、大学に進みさらに博士課程までハワイ語で教育研究を行う環境が整っている。また、すでにナーワヒの卒業生が、幼稚園、小・中・高校に教師や職員として戻ってくるケースもあるそうだ。

22日の午後は、ヒロ校に戻り2つのクラスに参加した。まずKHAW 133は、「Ke‘elikōlaniハワイ語コース」が開設しているハワイ語話者のためのハワイ語の授業。ハワイ語でこれまで教育を受けてきて、ハワイ語が第一言語あるいは母語である学生が対象である。通常のコミュニケーションには全く困らないハワイ語話者だと思われるが、ハワイ語の構造や語彙形成の理解、そして大学レベルのハワイ語へと強化するための講義なのだ。例えば、母音の長さは正確か、アクセントの位置は正しいか、声門閉鎖音がきちんと発音できているかといった発音面から、文法や語法まですべての要素の最終チェックをここで行う。

この時はイマージョンスクールの高校生が出席していたが、ひとりひとり前に出てきてプレゼンが終わると、ピラ先生からの厳しい指摘が待っていた。ピラ先生は、学生たちがポイントを理解することによって、次は自分で言葉を使う際に意識的に自己修正できるようになることを望んでおられるようだった。

最後の授業は「ハワイ学コース」開設のKHWS496ハワイ語セミナーである。伝統的あるいは現代的なハワイコミュニティについて資料を読み、フィールドワークやリサーチを行い発表する授業である。学んだ知識を社会の文脈、状況において解釈できるかどうか、学部生最後の難関だろう。このように、ヒロ校ハワイ語プログラムでは、ハワイ語で論文を執筆する一歩手前の高い言語能力が身につくことを目の当たりにした。

ハワイ語復興運動を経て今、皆が自信あふれる笑顔でハワイ語を使用している状況を見ている



と、しまくとぅば実践教育で突き当たる「多様な地域言語」の問題はどうなっているのだろうと、ハワイ滞在中はずっと気になって仕方がなかった。幸運にも、22日の夕方に開催された懇談会で、ヒロ校ハワイ語学部の学部長であるケイキ先生に質問をする機会が持てた。ハワイ語を復興・伝承する際に、方言が問題にならなかったのかと。ケイキ先生は、「我々は‘the language of the King’を用いた」と答えられて、私は驚いてしまった。しかしよく説明を聞くと、ハワイ語では島や地域で方言差があっても、その違いはさほど大きくなく、相互理解可能性は非常に高いとのことだった。しまくとぅばとは条件が違うことも考慮していく必要がある。また、当時はハワイ語の話者が減少していく中で、言語消滅の危機的な状況をどうにかせねばと必死であったことも熱く語られていた。そしてケイキ先生は、ここは私の記憶がはっきりとしないのだが、カウアイ島かニイハウ島出身のある学生がハワイ語を学んだことによって、自分自身の出身地の言葉に興味を持ち学び始めたという例を話してくださった。ハワイ語を学び文化に目を向けることによって培われた視点なのかもしれない。しまくとぅばの実践教育を広く展開する際には、その多様性をどのように尊重しつつ言語を継承していくのか、慎重な議論が必要となってくる問題であろう。

さて、ヒロ校そしてイマージョンスクールの視察は、大変充実したものであった。主専攻や副専攻を組み合わせると、実に幅広くまた奥の深いプログラムが構築されていることがわかる。ところで、今回の研修では、とても大きなヒントをオアフ島からご参加くださいました聖田京子先生からいただいた。聖田先生には、ハワイ大学で日本語専攻の学生対象に開発したしまくとぅば教育のプログラムの概要を私たちと共有していただいた。また、これまで日本語教育に携わってこられたご体験を踏まえて、「一般的な言語習得のためのプログラム」と「特定の目的のための言語習得プログラム」があることをご指摘され、本学では後者に注目してはどうかとのご提案があった。なるほどと思ったのである。英語教育に携わっていると、English for Academic Purpose, English for Engineeringなどのように、特定の分野で特にニーズの高い要素を集中的に学習するカリキュラム実践されている。「琉球芸能のためのしまくとぅば教育」となると、どのようなニーズを掛け合わせるとコアが見てくるのか。例えば、「琉球芸能」、「しまくとぅば」そして「歴史文化」という三つの組み合わせのコアに焦点を当てることも可能ではないか。そのコアに位置する「しまくとぅば」を明確にしていく必要がある。最終的な到達目標や段階ごとの評価の方法等と合わせて今後さらに検討していきたい。

#### ハワイ大学及びイマージョンスクール調査研究について (比嘉いずみ)

平成29年度「沖縄県立芸術大学しまくとぅば実践教育プログラム開発事業」の一環で、11月21日(火)～24日(金)ハワイ島ヒロを訪問した。研修内容は、ハワイ語を主言語として教育を行っている、①ハワイ大学ヒロ校と②イマージョンスクール視察、③ハワイ大学マノア校名誉教授の聖田京子(名護市羽地出身)先生から、大学で「琉球語」を開設するまでの経過や取り組みなどを、詳しくレクチャーして頂いた。

##### ① ハワイ大学ヒロ校

1日目、到着してすぐにモダンフラの授業を見学した。フラの型を美しく踊ることよりも、歌詞の深い理解と表現を目的とした授業のように感じられた。学生達が教室の横で素足になり、歌を歌いながらとてもいい表情で、月をテーマにした内容のフラを踊って見せてくれた。そのあと沖縄の踊りを見せてほしいとのリクエストがあり、同じく月をテーマにした「浜千鳥」を私が踊り、そのあと様々な質問や感想を聞くことができた。改めて学生達の文化に対する意識の高さや、積極的な学びの姿勢を強く感じた。

2日目は、2つの授業を見学した。1つ目は高校3年生を対象とした授業で、大学で高校生が授業を受けられることに驚き、早い時期から正しい言葉の発音や文章を学べるシステムは、高大連携がとても充実していると感じた。

2つ目はグレン・シルバ先生の授業で、大学4年生を対象としたハワイ語によるプレゼンテー

ションであった。教室に入る前に、授業に対する心構えができているかを確認するため、一人一人チャントで語り、許可を得て入室する様子はハワイアン文化スタイルを、そのまま教育の中に取り入れている事がとても感動的だった。

また、シルバ先生が私達に英語で話して下さった時、学生達が「初めて先生の英語を聞きました!」と驚いていた。日頃から徹底してハワイ語を使用している先生のポリシーが伺え、我々も将来はそうなれるよう努力したいと思った。

そして、シルバ先生は2016年に行われた「第6回世界のウチナーンチュ大会」のシンポジウムで、「祖母がハワイ語で話をしている表情は、とても嬉しそうに生き生きとしていた」という話をされていたが、私自身沖縄でも同じ光景を目にする機会が多々あり、母語の大切さを共感した。

## ② イマージョンスクール視察

早朝7時半、子供達の登校時間に合わせハワイ語ですべての教育をしているイマージョンスクールを訪ねた。

まず校舎に入る前にナーワヒ(小中高生)の子供達が、ハワイアンチャントで私達を家族として儀式的祈りと歌で歓迎し、レイを掛けてくれた。その子供達のキラキラした目の輝きと祈りの言葉に圧倒された私は、自然と涙が溢れ言霊の力を実感した。学校の敷地はそれほど大きくはなく、緑に囲まれた環境の中で、ハワイアンの伝統的生活や生き方などを伝えるため、豚を飼育し料理の仕方を伝える場所や、主食のタロイモの畑、魚の生け簀などがあり、体験型教育をしているのがとても印象的であった。校内では素足で授業を受けている子供達が多く見受けられ、大地と直に触れ、エネルギーを受け取っているとの事であった。五感を働かせながら常に神から与えられた自然の贈り物に感謝をしながら生きている様子は、文明が進化しすぎた私達に、改めて生きる上での大切なことを教えてくれているように感じられた。

同じ敷地内のプーナナレオ(保育園)では、保育園生たちが手作りの折り紙のレイと歌で歓迎してくれた。そこでは、ハワイ大学ヒロ校の大学院生達がアルバイトとして非常勤の先生をしていた。彼ら・彼女の多くがイマージョンスクールを卒業した学生で、改めて教育機関の連携と自分たちの役割や文化の継承に対する意識の高さを感じることができた。

## ③ ハワイ大学マノア校名誉教授の聖田京子先生と、県費留学OG柳アリソンさん・照屋リネットさんとの意見交換会

聖田先生からは、ハワイ大学マノア校在職中に開設した「沖縄語」と「沖縄文化」2科目の開設に至るまでの経緯や教育方法を教えてもらった。聖田先生の熱い思いと献身的な努力で、沖縄に関するこの2科目が異国の大学で開講され、そして多くの学生達はその科目に興味を示し、受講人数に制限をかけるほどの人気であることを伺い、改めて沖縄文化の広がりや関心度の高さを知ることができた。これから県立芸大において、「しまくとぅば」を活用した沖縄文化の講義・実技を確立していくうえで、聖田先生の実践教育を参考にしながら、地元沖縄ならではの教育方法を探求し、先人の大切な教えを受け継いでいきたいと思った。

そしてその後、2018年3月に行うリカレント教育の内容や情報交換を県費留学OGの柳アリソンさん・照屋リネットさんを交えて行った。場所や講義内容、時間割など様々な課題があり、今後連絡を取りながらより良い内容となるよう、計画を進めて行くことを確認した。

また、今回アリソン柳さん・リネット照屋さんと一緒にハワイ語の研修をする中で、彼女達の沖縄文化に対する思いは、地元の私達より熱いものがあり、それを後輩たちに継承するために、試行錯誤しながら日々努力していることを伺った。改めて県費留学制度の意義や、その後のサポートや連携など、今後の体制づくりの必要性を感じた。“感謝”

ハワイ大学ヒロ校視察研修の様子①



ハワイ大学ヒロ校視察研修の様子②



### ハワイ大学及びイマージョンスクール調査研究について (西岡 敏)

2017年11月21日(日本時間では22日)、Hale‘ōlelo(ハワイ語で「言葉の家」)で行われたハワイ語の授業を見学した。

午前、ハワイ語入門のクラスとハワイ語の語彙についての授業に参加した。入門クラスでは、ハワイ語の自己紹介を体験した。

A: Aloha! ‘O wai kou inoa? (お名前は?)

E: ‘O Nishioka ko‘u inoa. (私の名前は西岡です。)

語彙クラスでは、先生からハワイ語の語彙を増やしていく取り組みを紹介していただいた。現在、ハワイ語では現代の生活に必要な語彙を語彙委員会で検討して、新しいハワイ語の語彙を辞書にどんどん登録しているという。例えば、伝統的な生活にはなく、学校生活で必要となる「黒板消し」にあたる語彙は、3種類の言い方が既にハワイ語の辞書に登録されているとのこと。

午後は、フラダンスのクラスとハワイアンチャント(儀式や祈祷の歌)に参加した。フラダンスには、古典的なものと現代的なものがあるそうだが、授業では、19世紀後半に作られた現代的なフラダンスをヒロ校の学生達に踊ってもらい、のちほどフラダンスを踊る体験もさせていただいた。

ハワイアンチャントは大学院生のクラスで、部屋に入るときのチャント(儀式の歌)を見学したのち、お互いに情報交換を行った。ヒロ校の院生達からは、なぜハワイ語・ハワイ文化を学ぶようになったのか、沖縄のメンバーからは、なぜ今回、ヒロ校を訪れることになったのか、しまくとうばと自分がどう関わっているのかという紹介があった。

2017年11月22日、午前中は、ヒロ市の郊外にあるハワイ語のイマージョンスクールを見学した。ナーワヒと呼ばれる小中高校に相当する学校(1年生～12年生まで在籍)と、プーナナレオと呼ばれる保育園を訪れた。

ハワイの儀式に則って、生徒全員で我々一行を迎えてくれた。ナーワヒ(小中高校)の校舎に入るところで、生徒全員が並び立ち、外から来た客人は生徒達と向かい合う。生徒たちは厳かなハワイアンチャント(ハワイの儀式や祈祷の歌)を唱え、ナーワヒに関係する先生方がハワイ語でなぜ客人が来ているのかを説明した。今回、私たちは沖縄語と八重山語で来校の理由を述べ、先生方がそれをハワイ語に通訳した。生徒たちは、ウクレレの伴奏とともに、ハワイ語の歓迎の歌を歌い、上級生たちが植物のレイ(首飾り)を我々の首に掛けてくれて、互いにハグし合った。これで私たちはナーワヒの皆さんと仲間になった。

このハワイの儀式は、ホオキパ(ho‘okipa、ho‘oは「歓迎」、kipaは「訪問」の意)と呼ばれる歓迎の儀式である。この歓迎の儀式が、ハワイ語の保育園であるプーナナレオでもあり、子どもたち全員がハワイの歌を歌ってくれた。

ホオキパ(歓迎の儀式)の後、学校と保育園の中を少し見学させていただいた。ナーワヒ(小中高校)では、火山石で囲まれた伝統的な調理場、豚舎やセラピアのいる水槽、生徒たちが描いた神話をモチーフとした壁画などを見学した。

プーナナレオでは、ハワイ語の習得に生かせるようにアレンジされた、フラの踊り付きの歌を、



子どもたちと一緒に庭で踊った。その後、部屋の中に移り、実際にハワイ語を使って教えるシーンを見学した。

午後は、前日と同じく、ハワイ大学ヒロ校のハレ・オーレロ（言葉の家）で、ハワイ大学のハワイ語の授業を二つ見学した。

一つ目は、大学に入学する前の高校3年生対象で、ハワイ語の文法に則って話すことをトレーニングする授業である。ナーワヒなどでハワイ語を普段から喋っている生徒でも、ハワイ語の文法に則って話すには、ある程度のトレーニングが必要とのこと。例えば、ハワイ語には、日本語や沖縄語のように長短の違いがあるが、若い生徒は周囲の英語の影響によって、その違いがうまく表現できなくなっているようだ。生徒一人一人は、ある絵の場面をハワイ語で説明する課題に取り組んでいたが、先生は、学生の口頭による説明が終わった後で、その発音や文法で改善すべき点を指摘していた。

二つ目は、大学4年生対象の授業で、ハワイ語によるプレゼンテーションの授業だった。今回は、準備段階の時間だったので、学生の実際の発表は聞けなかったが、学生は相互に評価のルーブリックを行い、1人8～10ページのハワイ語の文章を準備するという。担当の先生によると、学術的（アカデミック）な文章としてのハワイ語を書くということが目的とのことだった。

## 平成29年度沖縄県立芸術大学ハワイ大学等交流事業視察・研修記録（波照間永吉）

### 1. 記録－備忘録

・2017年11月20日14:00 那覇発⇒成田。

成田空港内で食事。全員で回転寿司。その後、自由行動。両替その他。

・21:25 成田発⇒コナへ。

約6時間半のフライト。飛行機が空いていたので、隣の中央列へ移動。三席を独占して横になる。助かる。

・2017年11月20日8:45（現地時間。以下同）コナ着。10:00 コナ⇒ヒロへ。チャーターバスで。

運転手はサミー氏。メインランドからハワイにやってきて、そのまま定住したという人である。陽気な人でおしゃべりしながら約2時間少しの行程を走る。ハワイ島を北東海岸から南西海岸へ横切る形。途中、右手に米軍基地を見ながら走る。なるほど、人の住んでいないところに造つてある。野砲の演習（サミー氏の説明）だろうか、音はしないが、遠くに土煙が上がっているのが見える。讃岐平野の山のような可愛い山がいくつも散在しているその中でである。山の姿をみていると気持ちのいいものであるが、こんな中に基地があることが玉にきずだ。このような形の丘・山を熊本あたりでは米塚というのだそうだ（麻生さんたちが帰りのバスの中で話していたことから知った）。

ヒロに着く。宿は1月に泊まったヒロ・シーサイドホテル。荷物を預け、チャーターバスでヒロ校へ。ヒロ校に到着。偶然にもエントランスホールでケコア先生に出会う。覚えてくださっていて、先生の心遣いでハワイ語学科のオフィスで時間調整。そのとき、鈴木氏、ビデオカメラを忘れていたことに気づき、一瞬その対処のために皆、アタフタ。サミー氏のバスの中にあるのでは、と言うことになり、コナへ向かっている氏に急遽電話。ヒロ校まで戻って貰うことになる。大原先生がおいでになる。先生の部屋（ハワイ語教育用のテキスト編集室とのこと）でミーティングということに決め、移動しようとしているところにサミー氏のバス到着。車中をしばらく探す。無事見つかかり、歓声。

大原先生とのミーティング。日程の確認。ナーワヒ、プーナナレオ見学の際についての注意点（ビデオ映像の撮影は禁止されている。チャントの最中は腕を後ろに回さない。レイは外さず最後まで掛けておく、など）を教えて貰う。その後、少々大学内案内。3時過ぎ、遅い昼食。タイ料理の移動パーラーで“酢あんかけチキン唐揚げ”を買う。購買部で水を買う。この旅行中は1日2割



のノルマは果たせそうにない。

バスでヒロ市内へ帰るためにバス停を探す。分らない。その時、一人の学生が声を掛けてくる。こっちはまるで忘れていたが、なんと1月の沖縄県人の勉強会に出席していたケカイ君。鈴木君が覚えていた。鈴木君の記憶力、恐るべし。若さの力だけではないだろう。ケカイ君の案内で購買部の前のバス停まで案内して貰う。しかし、バスは来ない。次は4時40分だ、ということだったのでトイレに行く。なんと、その間にバスは来てさっさと出て行ったとのこと。バスに乗るチャンスを失し、皆さんにはなんとも気の毒なことをしてしまった。バスが定時に来ないいい加減さ(テゲー性・非合理性)と運転手の客を待たないアメリカ的合理性(?)の同居。これがハワイなのかな。でも、いいさ。時間はたっぷりある。ここでみんなの決めたこと。なんと、ホテルまで歩いて帰る!だ。旅の醍醐味は土地を自分の足であることと心得ている私にとっては嬉しいことだ。みんなウチナンチュということか、だれも私をとがめ立てしないし、歩くという。

約6キロほど(?)の道を列になって歩く。うん、これが楽しいんだ。でも車道の車は大きく、スピードも出ていて、威圧感がある。安全に気を付けて歩く。カメハメハ通り近くに“CHINEN”の名を冠した公会堂のような建物を右手に見る。野球場などのある施設の中である。沖縄出身の知念さんの善意によるものだろうか。ならば、嬉しいことだ。その近く、道路脇に一本の大きなバンヤン(ガジマル木)の根本が鎖で囲われている。鈴木君がヘイアウですよと言う。案内板によると確かにそのようだ。但し、別の場所にあったものをここに移したものらしい。ヘイアウを形作っていた石を置いただけのように見える。こんな所にヘイアウがるとは。ポリネシアのボートレースの練習だろうか。一艘のボートが道の脇の小さな入江の水路を出て海に漕ぎ出て行く。漕ぎ手は8名、9名?。湾内を漕いでいるのが見える。見ると遠くの浜からも漕ぎ出て行くのが見える。緑とか黄色の色がついたボートである。波は白波を立てて岸に押し寄せている。太平洋の波がそのまま浜に向かってくるのである。

ようやく日本庭園のある公園の端にあるSUISANの前まで来る。SUISANは“水産”で、日本人が起業した漁業と海産物の販売会社だと聞いた。ヒロ市の産業に日本人が深く関わった証である。日本庭園の岸から山の方をみるも雨雲で何も見えない。小雨さえばらつきそうな天気である。岸には波のしぶきが飛んでいる。今日は荒れ模様の天気ということだろうか。ホテルへ続く“ガジマル通り”に入った頃にはさすがに疲れを感じる。折しも満ち潮だ。PONDの水も少ししょっぱい。

チェックイン。今回は115号室。階段を少し下りるのだ。少し休んでレストラン“PONDS”に夕食へ。

2017年11月21日

7:00 朝食

8:30 タクシーでヒロ校へ。例のバス停で下ろされ、ハワイ語学科エントランスまで歩く(今回の研修中、この行程を何度も往復した)。エントランスに近づくとハワイ語の歌が聞こえてくる。エントランスで講義前のチャントがあるのである。それを知らずに階段を上がっていくが、厳粛な雰囲気気づき、階段の途中で声を潜めて待つ(後で、大原先生から、チャントは厳粛なものであり、それを冒さなかったことは良かった、ということを知らされた)。後で聞くところによると、ハワイ語とハワイ文化の学習がある段階に達した学生はこのチャントに参加することができるということである。教師側が右(オフィス側)、学生は左側に整列し、向かい合っの儀礼である。

大原先生が来る。9:00から始まるカリコ先生のハワイ語レベル1のクラスに案内される。約20名の学生に混じってハワイ語の初級の勉強である。西原津花名出身のハワイ大学生与儀幸太郎君も登録しているクラスである。我々一人一人に登録学生がついて、自分たちの学ぶハワイ語と一緒に勉強するというのである。

今日のこのクラスの内容は、一つは、二人の人物が会って互いに名前と出身地を紹介し、またね!、と別れていく場面をハワイ語で行うというもの。もう一つは、英語で書いた文をハワイ語に訳し、これを書くというものである。女子学生の英語での説明を理解するのにあたふたし、大

汗をかきながら、“オ エイキチ ハテルマ コウ イノア。オ ワイ ホイ コウ イノア”とやった。外国語の勉強なんて何十年ぶりのことだろう。

この内容は英語教育で言えば中学校1年生の1学期の授業というところだろうか。このような初級から始まって、ハワイの言語と文化の全体を学んでいくのである。当然カリキュラムに従ってのことであろう。カリキュラムの作成とこれに基づいた教育が琉球語教育にも求められていることがわかる。現在の琉球語教育の実態はどうであろうか。一人一人の教師の宰領にゆだねられていて、共通のカリキュラム、指導の指針・目標は設定されていないのではなかろうか。沖縄県立芸術大学における琉球語教育には芸大独自のカリキュラムが必要であろう。同じように、沖縄県の行う一般向けの琉球語教育にもそのカリキュラムが必要であるはずだ。このカリキュラムの作成こそが最も肝要であり、急務でもあると思う。

10:00からは再びカリコ先生のクラスを見学した。ハワイ語の語彙についての授業である。現代文明の進展につれて新しい物や概念が入ってくるが、これをハワイ語でどう表現するかということについて話をうかがった(例:黒板消し。英語のイレイザーを使いながらハワイ語の新語を造る。全くハワイ語だけで表現するなどの取り組み)。ハワイ語の教育・普及という立場で、基本的に伝統的なハワイ語を用いた新語を造っているという。日本のように外来語という形でこれをそのまま移入するのではないということに、その独自性とハワイ語復活運動の理念・方針の徹底性を感じた。そしてこの人造ハワイ語についてはその適否を判断する委員会を組織し、ここで新語としての利用が確定されるのだという。新語の氾濫を抑制し、ハワイ語を守るために慎重に取り組んでいることがよくわかる話である。

これについても琉球語はどの方向にいくべきだろうか。多分、ここで大きく議論が分かれていくものと予想される。琉球語の歴史、それも中世・近世からみても大和語の流入は相当なものであったことは、行政文書の中に確認できるし、これが琉球語の音韻変化の現実に対応して琉球語化していることもまた確認できる。このような外来語受容の歴史を持っていることからすると、これからの新しい外来語をどのように取り扱うかは、当然議論の対象とならなければならないだろう。

11:00 過ぎから昼食。学生食堂で。ロコモコ。

12:30 ケコア先生のフラの授業。学生達の挨拶とフラでの歓迎のセレモニー。これに応じて比嘉いずみ先生の琉球舞踊“浜千鳥”の披露。学生達、大いに反応する。ケコア先生も感激の様子。その後、我々も含めてのフラの実技講習ということで教室をlimi pahiahia講堂に移す。ケコア先生が前に立ってハワイアン音楽(CD)にあわせて一斉におどる。簡単に出来るものではない。はたから見たら僕のものとは一体どう見えただろう。世の中に簡単な事なんて一つもないのだ。今はもう年を取りすぎた。でも一から始めなければ何も習得できないのだ。

16:00～ カレナ先生の「ハワイアンチャント応用学」の講義に出る。大学院の授業である。教室の前に行くと、学生が数人たむろしている。先生が廊下からやってきてドアをあけ教室の中に入る。1月に会ったシルバさんである。学生達が縦一列に並び入口のドアの前に立つ。ドアは閉まっている。シルバさんは部屋の中でドアに向かって立って、よく聞こえる声を出して何事かを唱えている。シルバさんの唱えが終わるとドアのこちら側に立っていた先頭の学生が、これまた声を出して何事かを唱える。ハワイ語である。これが終わるとドアが内側から開き、先頭の学生のみが部屋に入る。部屋のドアは再び閉じられ、部屋の中では先の学生がシルバさんがやっていたようにドアの前に立ち、また、ハワイ語で何事かを声に出して唱える。すると、廊下に立っている学生の中の先頭の者が応答の唱えを行う。その後内側からドアが開いて廊下に立っていた先頭の学生は部屋に入る。そしてドアは三度閉じられ、今度部屋に入った学生が最初の先頭の学生がやったように内側から唱えをし、廊下に立っているうちの先頭の学生が応答の唱えを行って部屋の中に入る。これを全員が教室にはいるまで繰り返すのである。教えるために行われるチャントである。これが済んで我々も教室に招じ入れられた。

このチャントについて、N岡さんがしきりに感心し「これは日本でも行われるといい」と話していた。しかし、これについては、別の理由から私には疑問がある。確かに学ぶ者が謙虚な態度で、教える側に教えるを乞うという態度は必要である。しかし、これを毎回の講義の度に行うということは、どうであろうか。あるいは私塾でなら許されるだろう。近世末日本における私塾はそのような人間関係のもとに学習・教育が行われていただろう。しかし、現代の公教育でそれは可能であろうか。日本国憲法に基づく教育基本法などの法律に触れる可能性もある。もし将来、このようなことが認められ実施されると、ためにする者が絶対に出てくるだろうと思うのである。ただでさえ、“モリトモ学園”における教育勅語暗誦教育などのような動きが出てきており、この教師と学生の関係を上下関係を前提としたチャント式儀式が日本の公教育で唱えられたら、右派勢力はこれを奇貨として利用しようとする事間違いない。戦前の「教育勅語」の現代版が出現することを怖れるのである。もっとも、ハワイ大学でのこのチャントの実修がどのような観点から為されているかの確認は必要である。ハワイ文化の全体を把握・理解するという観点と、現代に於ける教育権の問題とのからみなど、複雑な問題があるように感じられる。

なお、後で聞いた話では、このチャント(メレ・コモ)は学生の経験により、少しずつイントネーション、節回しなどに変化が生じているという。文句(詞章)そのものは変わっていない。古い事例に近くなるように、音声資料を流して勉強させているという。(プロトコルのチャント?)

通訳はレファ(みどり)さんが担当して下さることになった。レファさんは沖縄生まれ。お母さんは小禄出身。お父さんはアメリカ人。沖縄で育った。基地内のアメリカンスクールで学んだ。ご主人はハワイ人。マウイ島で生活していたが、ハワイ島に移り住んでいる。去る1月にお会いしていたのである。現在はハワイの法廷通訳の他、ヒロ校でも非常勤講師をしているとのこと。世界で活躍するウチナンチュである。

シルバさんの講義はハワイ語学科の小図書室で行われた。我々を含めて全員で、何故自分がハワイ語・ハワイ文化を学ぶのか(我々の方は、何故この講義に出てきたのか)を自らのルーツの紹介から始めて話すことになった。まずシルバ先生から始まった。我々はシルバと呼んでいたが、実は先生はこのシルバという名前を学生の前で使ったことはなく、学生達は、鈴木君や僕が「シルバさん」というのを聞いて始めてこの欧米名を知ったという。先生の名前はカレナである。ここまで徹底してハワイ人になりきろうとしているのである。さて、以下は上記の課題に対するそれぞれの話である。

カレナ(教授)——女性のカナカ・オレ先生達がハワイ大学ヒロ校を開いた。1970年代末に教員陣の整備がされ、ピーター・ウイソンと奥様、そして私(カレナ)が赴任して(学位取得者しか教員になれない)、外国語学部の中にハワイ語科が出来た。1978年、ハワイ州政府がハワイ語を公用語として認めた。これによってハワイ語の需要が高まり、ハワイ語の教育プログラムが充実した。来年は創立40周年を迎える。残念なことに老人達は亡くなっていき、ネイティブのハワイ語も無くなってきている。ハワイ語を使っているときの私の祖母の態度には、英語を使っているときとは異なっているように思われることがあった。祖母にはハワイ語を習ったが、祖母は何故かイライラしているようであった。私はカメハメハ校で7年間ハワイ語を教わったりしたのでハワイ語を使えるようになったが、現在ハワイ語をちゃんと話せるハワイ人は、ニイハウ島の人々を含めて50人位しかいない。少なくなってきたが、1978年の法制化によってハワイ語の需要は増した。そのような支援を大切にしたい。ハワイ語資料は新聞・図書などに1億頁の文献資料としてある。ラリー・木村先生は、毎週日曜日毎にハワイ語によるインタビューを実施して、500時間分の音声資料がある。しかし、このオーディオ資料の99%の人々は亡くなってしまった。もっともっと資料化の作業が必要と思っている。もう一つの資源は若い学生である。学生の育成成長なくして我々の計画は前進しない。若い学生が今後ハワイの言語・文化のために身を削ってとりくんでもらわないといけぬ。英語は政治的にも文化的にも大きな力を持っている。その中でハワイ語の教育の必要性は少なくない。この第二世代の若い学生に期待する所以である。なお、私の母は中国人で、



父はポルトガルとアイルランドの合いの子。それで、人が「カレナ、お前はどこの人か」と問うと、「ハワイ人だ」と言っている。

カビヒ・ヘイ(学生・女) — 私にはサトーキビプランテーション労働者として入った中国人・フィリピン人・ポルトガル人の血が混じっている。私自身、ハワイ語・ハワイ文化に興味があった。ハワイを愛する一人として、ハワイ語を学び、そして家族にも教えていきたい。現在、ナーワヒ校でも教えている。2007年の卒業で(ハワイ大学?)。その後、ナーワヒで教師。結婚後2人の子供を授かり、その子の教育への責任において、ハワイの言語・文化を教えている。その責任感はや若い学生に伝わり、その若い学生の指導が次の新しい世代のハワイ文化への愛着を生むと思う。

カレハニー・ジョンソン(学生・男) — 私の祖母はハワイ人。ドイツの血も混じっている。大祖父はアイルランド人。父は半分日本人。カメハメハ校で学んだ。そして現在は教師として教えている(カメハメハ校でハワイ語・ハワイ文化を?)。私自身はプーナナレオの一期生で、8年生まで出て、その後カメハメハ校を出た。大祖母の勧めであった。大祖母はハワイ語を使わなかった。フラも習い、ヒロに来てハワイ語の学習に取り組んでいる。

イパ・アパカブ(学生・男) — 2011年、ヒロ校に入学した。最初、哲学の勉強をしていた。哲学を学ぶうちにハワイの哲学に興味を持ち、学士号を取り、現在、ハワイの独立した地域のために勉強している。ハワイ語の言語学の勉強をしているが、発音が難しい。母がその発音の訂正をしてくれるので、ハワイ人のように発音ができるのは母のお陰である。

アリカ・グレロ(学生・男子) — 私はカレナ先生と英語で話したことはなかった。カレナ先生の英語を初めて聞いた。わたしはオアフ島生まれ。ハワイ人の男女のベビーシッターがいた。それでハワイ語に興味を持ち、フラも習った。ハワイのプーナナレオには入試に失敗した。その後、カメハメハ校に入学してハワイ語の勉強を志した。2012年、ヒロ校入学。2016年、ヒロ校卒業。人類学を専攻した。ハワイの言語のリバイバル(復活)には5世代かかる。カレナ先生は2世代目、私は3世代目。その後の人々の世代にしかハワイ語の復活は果たせない。その復活のためにもハワイ語の勉強を続け、次の世代にはハワイ語が普通に話されるよう、頑張りたいと思う。

以上のような話がなされ、その後、私たちも自らのアイデンティティーと今回のヒロ校訪問についてのそれぞれのモチーフを紹介した。それと関わって、上記のカレナ先生の話をはじめ、学生諸氏の話で、常に自らのアイデンティティーの紹介から入ることに一つの特徴があることが指摘できる。これは、1月の講義に中でもなされていたことである。ハワイ語教育とアイデンティティーの関わりをどこに見いだしているかに興味がある。アイデンティティーの確認はハワイ文化の一つであるのだろうか。

講義の最後に、カレナ先生から次のような重要な指摘があった。すなわち、「私には「ハワイ語はハワイの文化を伝えるファイバー(繊維=手段)である」というモットーがある。ハワイ語を学ぶ話す人がハワイ人であるか否かは問題ではない」ということ。そして「言語の問題は政治の問題と大きく関わっている——言語の復活運動は政治的な問題と大きく関わっている。その意味で、沖縄の言語復活運動は政治的な問題で困難な場面にもと直面するだろう」ということである。前者については現在のハワイ語教育の展開、ハワイ文化の復権を支える大きな考え方であろう。琉球語の復権がそこまで辿り着けるかは、今後の琉球文化論およびウチナーンチュの思想の問題と大きく関わってこよう。広い視点のあることを知らされた。後者は、まさにそのとおりで、琉球語の教育については政治的な問題、制度的な点から問題が重層していることは明らかである(例えば入試制度)。学校教育において琉球語教育がなされるものか、琉球語を公用語とする、あるいは第二言語として学校教育で認めていくか、などは日本政府の側のみでなく、沖縄県民の側の問題でもある。これは琉球・沖縄文化を現代の沖縄県民がどう評価するかという問題と直結しているのである。ハワイのような判断が出てくるだろうか。正に沖縄人の思想の問題としてあることである。

11月22日

6:30 集合。早朝出発につき朝食はなし。

6:50 ナーワヒ校へタクシーで出発。タクシーはベトナム人の50代後半～60代の男性。愛想のいい人である。

7:00 到着。生徒達の登校風景をみる。親などが車で送ってくる。

7:40 大原先生、スコット先生が到着。その後、ナーマカ先生が私たちの所へ来られる。挨拶を交わす。1月の訪問の時と変わらない笑顔である。今回は鈴木君がリーダーを勤めてくれており、対応も彼が中心になってくれ気が楽である。ナーマカ先生は、我々の衣服にとっても興味を示し、それぞれの素材がどのようなものか聞いてくる。私のものは、手織りのミンサー柄の上着で藍染めである。仲原君のが南風原の琉球緋であるなど、全員が琉球の工芸品を身につけることにしていたのに対して先生が反応してくれたのである。ここなどにもハワイ文化を尊重し、その伝承に情熱を傾けてきた思想が現れているのである。

8:00 校舎の玄関で、私たちを迎えるチャントがあり、児童生徒によるハワイの歌の歌唱で迎えられた。私たちの訪問をナーマカ先生がハワイ語で紹介。その時に私たちの衣服についても紹介し、島の伝統的な衣服・工芸を大切にすることを訴えられた(大原先生の説明)。その後、鈴木君がウチナーグチで、私がヤイマムニで挨拶。スコット先生が通訳してくれた。生徒達の造ってくれたレイを全員が掛けて貰い校内に招き入れられた。その後、生徒代表の女子生徒2人で学校案内。今回は教室での授業参観ではなく、学内に造られたハワイ文化を体得するための、石蒸し焼き料理の場所、豚の飼育所、魚養殖の池、ハワイの神話を生徒達が描いた壁画などを案内してもらった。いずれも、ハワイ文化継承の教育的実習であることが了解された。ハワイ語およびハワイ文化の教育は、デスクワークだけでなく、まさに体験学習がまた必要であるという教育理念が実践されていることがわかる。その後、隣接のプーナナレオに移動し、保育園の子供達の歓迎のチャントを受け、かわいらしい手作りのレイをかけてもらい園内に入り、保育教育の現場をみせてもらう。最後は庭に出て、私たちも園児達とともにウクレレの伴奏つきのハワイ語の歌に合わせて遊戯。泣きじゃくっていた子も最後は笑顔になって遊戯していたのが心に残る一場面であった。

9:30頃、ナーワヒ校の玄関右のロビーに移動。ナーマカ先生から、ナーワヒ校の活動を紹介したビデオ(プロモーションビデオ)を視聴。高良・比嘉両氏はナーカイ先生と意見交換をしている模様。最後に、ナーカイ先生の依頼で、「来訪者記帳ノート」にヤイマムニで感謝の言葉と今回の訪問を琉球語の復興に是非役立てたいとの希望を書く。これは琉球語をとりまく現状を前にした、私の偽らざる気持ちである。

10:30頃、ナーワヒ校からハワイ大学ヒロ校へタクシーで移動。運転手は同じ。昼食時間も近いので自由時間。私は昼食を摂る。他の人は駐車券の発行願いなどの仕事をこなし、その後、食事。13:00からのピラ先生の教室の参観に備える。

13:00 ピラ先生の授業を参観に行く。ピラ先生の講義の様子は1月の訪問の時にも参観させていただいた。その時は奥様も一緒に指導に当たられていたが、今回はお一人であった。講義名は「ハワイ語話者のためのハワイ語I」。ハワイ語を習得した学生のハワイ語の発話についての授業である。文法と、文法のもたらす発音の違いなどについて、個々の学生の報告(絵を使ってハワイ語で物語を組み立てて発表)に基づきながら指摘していく。先生からの英語の説明がうまく聞き取れない。よって、この授業の細かな内容については他の人の報告に譲りたい。

15:00 アオラニ先生の授業の参観。学術論文を書くための4年生対象の授業で、リサーチと叙述の訓練ためのセミナーという。ヒロ校ハワイ語学科には卒論のシステムはない。しかし、論文執筆のための論理構成を習得するなどの必要性から、指導を行っている。大学院進学の場合は論文執筆能力が求められているという。16週の講義で、8～10枚程度の論文を書くことになっている、という。今回は講義に出ている19人中17人がトライするようである。大学院進学率は高

い。論文発表は、外部の専門家を呼んで大きなホールで行う。審査は英文の引用がちゃんとハワイ語に翻訳されているか、などを厳しくチェックする。また、例えばメレの研究だと、作曲、曲の構造などの研究までやるし、ペレの研究だと、神統譜とか、火山の地質研究までやる、というように深く幅広いリサーチが求められているという。

16:20頃、17:00からのヒロ校ハワイ語学科の先生方とのミーティングのためにヒロ・ベイ・カフェにタクシーで移動。

17:00過ぎ、ヒロ・ベイ・カフェは、例のSUISANの構内にあるレストランである。二階建ての建物の二階で、ヒロ湾が一望できる。奥の部屋にすでにテーブルが準備されていて、全員が揃ったところで懇談会が開催された。ヒロ校外国語学部の学部長のケイキ先生、大原先生、スコット先生とそのご子息、オアフ島からやってきた柳アリソンさん、照屋リネットさんなどで賑やかであった。ケイキ先生はハワイ語学科の設立・運営にも関わる有力者で、なんと、沖縄島具志川系の女性である。具志川の本家筋にある家系図を写真にとってあり(スマホ)、これを見るとその祖先は向家の系統につながるものらしい。そのことなどをお伝えしたら喜んで居られた。全員で自己紹介と今回の訪問および相互の調査研究などについて意見交換を行った。その後は、ビール、ワインなどで歓談した。

20:00過ぎ、懇談会を終え、ホテルに戻る。

11月23日

7:00 朝食。午前中、フリー。雨である。スコールだ。上がったかと思うとまた降る。時に弱くなるものの、次には強く降る。予定していたジョギングは中止。骨休めだ。持ってきた文庫本を読む。鈴木・西岡両君は空港に聖田先生をお迎えに。

12:00頃 聖田先生到着の後、皆で歩いて近くファミリーレストランに出向き、そこで昼食。今日は感謝祭ということで、レストランはターキーを食する人々で大賑わい。私は一昨夜すでにこのレストランでターキーのプレート(21ドル)を食していたので、本日は別の品を注文。聖田先生とは先に論文を拝読していたので、なんとなくうち解けて話が出る。ホテルロビーでもウチナーグチでご挨拶を申し上げたのであった。

14:00 ホテルの会議室で研修会。聖田先生からハワイ大学マノア校における沖縄関係講座の開設と言語教育についての研究のお話をうかがう。以下は、先生のお話のあらましである。話の順序など正確でないところもあるだろうが、メモに従って記していく。

私は那覇の籍であるが、両親が羽地村に移住したのでそこで生まれ育った。村芝居などでウチナーグチに深く親しんだ。高校を卒業後、銀行に勤めていたが、通信教育で大学の勉強をしていた。その後、東京で学ぶこととなり、さらにハワイで学ぶこととなった。

1970年から2010年までハワイ大学に在職した。その在職中の2000年は沖縄移民100年祭ということで、「オキナワ」が様々なメディアで取り上げられた。そんな中、ハワイ大学で、沖縄語についての問い合わせがあった。レオン・セラフィン氏と共同で沖縄語の教育プログラムの開発に取り組んだ。ニーズ、カリキュラム、予算編成などについて検討し、大学からの承認に1年かかった。それから、教材準備に2年を費やした。マネジメントは既に与えられた枠内で行うことになっていた。そのため、講座は日本語専攻の学生に向けて開講することになった。言語教育はサービスクースとして位置づけられており、予算的には語学(日本語教育)コースの内部でしか運営できなかったが、どうにか安定的に運営できるようにした。

ハワイのウチナーンチュコミュニティでは、ひらがなの表記さえ出来ない人が大多数になってきている。しかし、ウチナーグチを求める人々のニーズは芸能に携わる人々を中心に多いと言える。それで、月に2回のラジオ番組をもらい、15分間をウチナーグチのための枠として使っている。ニュースや音楽などを中心に番組を編成している。ケイズー放送にはウチナーンチュ向けに週2時間の枠がある。

このような経験から、沖縄語の教育では、学際的にいろいろなものを取り入れる——言語のみ



でなく、様々な領域の材料などを取り入れ、広めていくことをシェアすることを考えて貰いたい。

ハワイ大学での沖縄語教育は、導入として1学期を聖田が担当した（I）。2学期はセラフィンがリーディングを担当（II）、「丘の一本松」などの演劇を素材に辞書の利用法なども指導した。受講者は日本語中級の能力のある人が対象であるから、文字（漢字も含めて）はある程度分かっていた。文字の教育として、沖縄のシマクトゥバ普及協議会のインターネット情報を活用した。

言語教育には5つのC（COMMUNICATION・COMMUNITIES・CULTURES・COMPARISONS・CONNECTIONS）の相互関与が必要である。カリキュラム設定に際してはこの5Cが常に意識されなければならない。（この項については他の人の報告参照）。

言語の教育には①一般的な言語習得を目的とするひとのための教育と、②特別な領域の言語を習得を目的にする（Special Purpose）人のための教育の二つがある。後者は、例えば、医学用語・法律用語などのように、特定の領域の言語の教育を行うのである。沖縄県立芸術大学琉球芸能専攻のためのシマクトゥバ教育であるから、これはSpecial Purposeの言語教育ということになる筈である。これを図で示すと、目的・文化・日本語を三つの円で表して、その三つの重なる部分を教えていくということになる。

また、沖縄県立芸術大学におけるSpecial Purposeシマクトゥバ教育で留意されなければならないのは、まず、レベルの共有、すなわちレベル設定のスケールが共有されることである。スケール設定の考えとしては次のようなものがある。

N (Novice 初級) ————— 単語の知識

Nh (Novice highe) ————— 時々文が作れる

I (Intermediate 中級) ————— 文章化出来る

Ih (Intermediate highe) ——— 時々複文が作れる

A (Advance 上級) ——— 複文が作れる。敬語表現が出来る。

Ah (Advance highe)——— 時々はどんなものでも作れる

S (Superior 超級)——— 何でも作れる。どんな状況でも対応して話が出来。「テイラーできる」=対象になる人に応じて言葉を選択、裁断できる。

※N—IはV（単語）のレベル／I—IhはS（文）のレベル／Ih—AhはP（段落）のレベルと置き換えて考えることも出来る。

※スケールにはO（オーラル）—P（Proficiency）—I（Interview）という段階が設定される。

※教師としてはA（Advance）段階でよい。「私（聖田先生）自身、Ihレベル。Ihレベルでも情熱があればよい」と話しておられた。

※現在、沖縄県立芸術大学のシマクトゥバ教育実践は、言語獲得におけるTPR（動作をしながら言葉を発音して言葉を習得する方法）に似ている。芸能を学ぶ学生が、芸の言葉を永久装置（身体動作＝舞踊などの所作）に言語（芸の言葉）として残すこと。そしてすぐに引き出すことが出来るようにすることが大切である。

※授業の前に先の授業で学んだ言葉を復習する——語って聞かせる——学生に言わせてみる＝言葉を獲得させる、という方法の実践。

※リソースパーソン（言語教育してくれる特別講師）がどれだけ時間をさけるか——リーダーティーチャー（担当の先生）は特別講師が来る前に生徒に教えていくこと。芸大の先生（担当の先生）はこの言語実践を適宜行うことが求められている——担当の先生が目標設定を行って実践しても良い。

※あまり緊張しないでリラックスすると言葉をよく覚えられる。

※聞いて分かる＝話す、という実践の流れが必要である。

これらの中で、沖縄県立芸術大学のしまくとぅば実践教育に求められていることを言うとなれば、まずカリキュラムの設定である。ハワイ大学における沖縄語講座を開設するに当たって、聖田先生とレオン・セラフィン先生とで時間をかけてプログラム開発に取り組んだという話がそれで

ある。この問題を精密に検討しなければならない。教員個々の個性を言う前に、全体としての目標の設定と目標実現に至る過程（段階）の共有こそがなされなければならないはずである。そのための議論が求められているのである。そして次になされるべきはスケールの設定である。どこからどこまでの知識がNであり、Iであり、Aであり、Sであるのか。これを琉球芸能教育の中のしまくとうば教育として設定していくかである。当然これは前者（カリキュラム設定）と密接に関わる問題である。このような、教育する側の理念と実践に関わることを長期的に討議することが必要に思われるのである。迂遠な議論をしているようであるが、しまくとうば教育という、誰も未だやったことのないことに取り組む以上、それだけの準備は当然だと思うのである。

その後、来年予定されているオアフ島でのリカレント教育の実施計画について、アリスン、リネット氏ら、オアフ側の受け入れ態勢の確認および問題点の検討を行った。

16:30過ぎ、オアフ島に帰られる聖田先生をホテルのロビーでお見送り。空港まではアリスン、比嘉、鈴木氏らが車でお連れする。休憩を挟みながらの講義であったが、最も刺激的な時間であった。沖縄県立芸術大学のしまくとうば実践教育のみならず、県が行うしまくとうば普及運動なども参考にすべき話であった。

これで今回のハワイ大学ヒロ校のハワイ語教育を中心とする研修のすべての予定を終えた。感謝祭の日にも関わらずハワイ島までご足労下さった聖田先生、アリスン、リネットさんらに感謝申し上げる。

最後の夜は感謝祭の夜の大バーゲンセールに皆で出かけた。初めてのハワイ旅行の方々含めて楽しい買い物が展開された。そこで起こった様々なことは研修とは別なことなので割愛するが、お知りになりたい方は……。



#### 1-4-3 聖田京子先生の講演録（文責：事務局 幸地 夏希）

日時：平成29年11月23日（木）14:30～16:50

場所：ハワイ・ヒロシーサイドホテル ミーティングルーム

##### 1. 聖田京子先生のご紹介（これまでの活動など）

生い立ち：両親は那覇の生まれだが、私自身は羽地で生まれ育った。そのため、那覇の言葉と山原の言葉を聞いて理解することができた。また、羽地村仲尾次の村芝居を見るのが好きだったので、芝居言葉にもなじみがあった。中学から那覇へ。1968年渡布。

ハワイ大学マノア校の教員時代（1970年～2010年）：最初の30年間は日本語教育にのみ専念していた。2000年（ハワイでの沖縄移民100年の年）に、沖縄との繋がりが強くなり、ハワイ大学へも「沖縄語を教えているか」という問い合わせが多くなった。そこでレオン・セラフィン先生と共に、日本語教育の中に「沖縄の言語と文化」という2つのコース（科目）を設立すべく努力を始めた。

コース設立の上で一番苦労したのは、教授会と理事会の承認を受けることだった。お金もないのにどのように教え、どのように継続していくのか、という質問に併せて新講座がどうして必要な

のか等全て答えないといけなかった。学生のニーズや興味などからカリキュラムを作成し、大学からの質問への回答(リソースをまとめる方法など)を書き上げて、学科・学部、カレッジレベル、学長、理事会と承認を得るまで1年かかった。しかし、沖縄について知りたいという雰囲気が高く、非常にサポートティブだった。学部長が台湾出身の方で、台湾語と沖縄語を入れていこうじゃないかということになり、決まるのが早かった。同僚が賛同してくれると承認に至るまでが早かった。その後、教材の準備に2年かかった。セラフィン先生と沖縄に行って教材を集め、表記法など琉大の教授に教わった。

「沖縄の言語と文化」のコース(科目)は日本語専攻枠で開講されているため、同専攻の学生及び日本語2年習得と同等以上のハワイ大学の学生が受講できる。そうなった理由は、新しいコースを設立してもお金はかけられないため、日本語科の教員が担当し、教える必要があったからである。1学年に1回開講するという状態だったが、90年代は定員20名に対し60名の応募が常時あった。日本語専攻科目に入れずに「沖縄の言語と文化」を日本語習得のリクウィアなく開講したら更に多くの学生が集まったはずだが、教師を雇う資金もなくそういうわけにはいかなかった。このコースを永久的に継続させるには、専攻内で開講する必要があった。94年以後現在でも卒業単位として認められる日本語専攻のコースとして開講が維持されている。

現在(2010年以降)：地域のコミュニティでうちなーぐちを教えている。受講者の中にはひらがながわからない人もいるため、ローマ字で書かれた教材を使用している。日本語の分かる学生が対象だった大学の授業とは状況が異なるため難しいが、沖縄の芸能(三線や踊り)に興味があって受講している方が多いので、ラジオやテレビなどのメディアを教材として取り入れることで受講者も楽しみながら学習している。また、毎週日曜日に、沖縄アワーの一環として15分のラジオ番組を月に2回放送している。沖縄の言語や文化を伝えるため、インタビューをしたり、沖縄の音楽を流したりもしている。

学際的の勧め：新しい言語のコース(科目)を設立する上で、いろいろな専門分野の人たちからも学び、学際的に必要なものを取り入れることをお勧めしたい。

## 2. 聖田先生への質問

**Q. ITが役立っているというのは、沖縄文化の普及にインターネットが役立っているということですか？**

A. そうです。私自身は目が悪くなってしまったのでテレビやパソコンは制限しているが、卒業生の中に沖縄のテレビ番組のビデオを探すのが上手な人がいる。今はその卒業生に授業を任せている。授業の内容としては、ビデオ・クリップで使われているうちなーぐちの言葉をリストアップして、英語・日本語の訳を付けて印刷し、そのプリントを使用しながらビデオを見るというようなものである。

**Q. 聖田先生のラジオ番組を放送しているKZOOとはどういうものですか。**

A. KZOOはハワイの日本語放送局で、毎週日曜日午後4時から6時まで、2時間の沖縄アワーがあります。沖縄のニュースや音楽で30分、HUOA(Hawaii United Okinawan Association)アワーが30分でお知らせなど。ハワイ在唄三線や琴グループによる沖縄音楽の時間が30分、沖縄語studyの時間が15分の内容。Studyのうち一つは私が担当し、言語の紹介とか、文法的な解説を行っている。もう一つは、三線の村田グラント(サンダー)先生と、空手の照屋先生が2人でうちなーぐちの実践的な会話を担当している。

**Q. 聖田先生の設立した2科目は1学期に1回開講とのことですが、1年間に1回ということですか。**

A. 1年に1コースということ。コースが「1」と「2」に分かれている。一回というのは春と秋学期の一年間が私の授業で「沖縄語1」。その受講後、後期の一年間にセラフィン先生が「沖縄語2」を開講した。「1」は導入で、聞き、話し、読み、書き、及び文化の学習一般で、「2」ではリーディングを主に行っている。リーディングに使用するテキストには上演された琉球演劇のビデオ



が使われ、講読や分析など。

### 3. カリキュラム作成などについてのアドバイス

#### ①カリキュラム作成のための5C (“Standards for Foreign Language Learning”より)

アメリカでは外国語を教える際、5つのCから始まる枠に沿ってカリキュラムを作成する。Communication(対話、情報取得、発表方法)、Cultures(習慣、プロダクト、行動の背景にある意味)、Connections(他の学科領域とのコネクト)、Comparison(言語と文化の比較)、Community(その言語が話されているコミュニティから受けるインタラクション、交流)。

#### ②カリキュラムの目標や種類

言語(うちな—ぐち)の授業を開講する上で、カリキュラムの目標や種類によって一般的な言語教育と特殊な目的のための言語教育がある。

\* language for general purposes … 一般的な目的の言語教育

\* language for special purposes … 特定の科目を教えるための言語教育

芸大で行っている琉舞実践授業の場合は後者になる。分野によって、使用頻度の高い語彙や語句、文型を取り入れて教える。

・ニーズアセスメント…どういふ学生を対象に教えるのかを考える必要がある。Proficiency Test の概念を共有して、学生のレベルを知ること。

#### ③ OPI (Oral Proficiency Interview)の紹介 (Scale = 学習者のレベルについて)

Scaleの種類: Novice, Novice-High (※), Intermediate, Intermediate-High (※), Advanced, Advanced-High (※), Superior

※ Novice, Intermediateなどのレベルに部分的に到達できるが完全にはできてない場合は、N-H(Novice-High)、I-High(Intermediate-High)、A-High(Advanced-High)など、中間のレベルに入れる。

Scaleの内容:

Novice (初級) …単語は知っているが文を作れない。

Intermediate (中級) …単文を作れる。N (初級)とI (中級)までは敬語はできなくてよい。

Advanced (上級) …複文が作れる。敬語表現ができること。

Superior (超級) …相手に合わせて話せる (tailor できること。子どもにでも、敬語を使う相手でも、話し手に合わせて表現できる)。

※言語の先生としてのレベルはAdvanced (上級)であってほしい。(Superior (超級)は当然最適)。ただし、情熱と向上心があればIntermediate (中級)でも教えることは可能。

#### ④ カリキュラム作成に関する質問

**Q.**日本の日本語教育では初級から丁寧語を教えています。これは、敬語は後回しでよいという今のお話と異なっていますが、丁寧語と他の敬語(尊敬・謙讓)を分けて教えるということでしょうか。

**A.**丁寧語というのが、一です/—ます型と限定していうとそうなりますね。(教室日本語では自然に敬語が導入されるけれど、家庭内だけの習得の場合に普通型のみ習得する場合があります。それでもこのScaleでは Intermediateまでは到達可能ということです。)日本語学習者がHawaiiのコミュニティや日本で日本人と話すとき、コミュニケーション・距離があると考えられるので、丁寧態の方がよいのではないかということで最初は丁寧語一です/—ます型で教えていた。そのうち、グローバル社会になって、学習者が友人らとの会話では普通型なのにどうして丁寧語なのかとクレームがあり、両方同時に教える試みも行ったりした。生徒たちのニーズをよく調べて、学習者の役に立つように教師が考えて決めていくことが大切ではないかと考える。OPIの場合ですが、家庭だけで学んでもうまく敬語を身につけられないこともある。このOPIのScaleでは敬語の位置づけが(Advanced) level になっている。

#### 4. 芸大の実践授業について

本事業で行っているしまくとぅば実践授業（地謡、舞踊、組踊）のビデオを聖田先生に視聴して頂いた。また、担当教員の比嘉より、「特別講師の宮城幸子先生が教える時に使用するしまくとぅばによって、学生達が動きのイメージをよりよく掴めるようになってきている。沖縄の踊りだからこそ、しまくとぅばでしか伝えられない表現があるということを感じる。」という報告を行った。その後、「授業記録シート」を見て頂き、次のようなアドバイスを頂いた。

##### ○聖田先生からのアドバイス

特別講師が入る前に、授業で使用する言葉を学生に確認させる。例えば、担当教員が、学生達にしまくとぅばのキーワードを見せてその動きをさせる。そのキーワードの動きがわかっているかを確認し、学生同士でも言わせて動いてもらう（TPR=Total Physical Response Method）。その後特別講師を入れて、しまくとぅばキーワードを使って実際の授業を始める。それがうまくいけば、その学生達が将来その言葉で教えることができるようになる。

聖田先生の講師の様子①



聖田先生の講師の様子②



### 1-5 「誇らしゃ しまくとぅば」講演会概要

平成29年11月10日と平成30年2月9日に「誇らしゃ しまくとぅば」というテーマで沖縄芝居の重鎮の先生方に、しまくとぅばで芸談をお話しいただいた。これは、沖縄芝居の名優によるしまくとぅばのみでの講話を通して、芝居の喜怒哀楽や舞台の裏話、芸能における訓話など、「しまくとぅば」でしか伝える事の出来ない心の機微を、しまくとぅば独特の語り口とともに感じてもらおうと企画したものである。

各講演において第1部では沖縄県立芸術大学の学生達による時代明朗劇「貞女小」（第1回講演会）や、芝居の中で生まれた名作舞踊（第2回）を上演した後、第2部でそれぞれの講師に「芝居に息づく しまくとぅば」という演題でお話をいただいた。

瀬名波孝子先生はご自身の芸能人生を戦前から振り返りながら、比嘉正義先生との関わりや、大正劇場で公演をしていた「真楽座」の出来事など、戦前における芝居小屋の貴重なお話しをして下さり、終戦直後の民政府公認劇団である「松劇団」（島袋光裕座長）、「梅劇団」（伊良波尹吉座長）における芸能活動や化粧がなかった時代に、ナベの煤で黒の黛の代用や、赤瓦を削って粉にしたもので頬紅の代用をしたお話しをして頂いた。どの話も現在の琉球芸能を語る上で芸能史には登場しない当事者ならではの話であり貴重であった。

また、瀬名波先生は「しまくとぅば」について、沖縄の歌劇を題材にしながら、「しまくとぅば」の感情の込め方や表現の素晴らしさを語って頂き、会場から多くの感動の声をいただいた。

第2回目八木政男先生は、戦前に入団した「戎座大宜味朝良舞踊団」の話や、終戦直後の公営劇団「竹劇団」（平良良勝座長）での芸能活動



瀬名波孝子先生



八木政男先生



についてお話しして頂いた。また、「大伸座」(大宜見小太郎座長)の代表作「丘の一本松」についての裏話や、若手の継承について熱く語って頂いた。

それから、長年RBCラジオのパーソナリティーを務めている「民謡で今日拝なびら」や「一言葉・二言葉しまくとうば」の中からいくつかのエピソードをお話いただくとともに、「アオカナヘビ」「オキナワキノポリトカゲ」「肩車」など地域差のある単語を紹介した。また、「イッスイカッスイ」「アマハイクマハイ」などのしまくとうばの「置語」を多く紹介し、「しまくとうば」のもつ面白さ、これから残していくことの重要性について語っていただいた。

いずれの講演会も琉球芸能だけでなく、「しまくとうば」の魅力を存分に伝える事の出来た講演会となった。各講演会の詳細情報は以下に記す。

第1回 芸能から受け継ぐ「誇らしや しまくとうば」

実施日：平成29年11月10日(金) 18時30分開場・19時開演

会場：沖縄県立芸術大学 奏楽堂

講師：瀬名波 孝子(せなは・たかこ)

演題：「芝居に息づく しまくとうば」

講師略歴：1932年、那覇市出身。沖縄県指定無形文化財「琉球歌劇」保持者。幼少期に玉城盛義と高安高俊が主催する、大正劇場「真楽座」の組踊「銘苺子」で初舞台を踏む。戦後は民政府公認劇団「松劇団」「梅劇団」を経て、玉城盛義と平安山英太郎主宰の「南月舞踊団」、真境名由康主宰の「沖縄座」、真喜志康忠主宰の「ときわ座」を経て、1954年に夫の松茂良興栄とともに「みつわ座」を結成する。その後は「沖映演劇」に参加し、沖縄芝居を牽引。

第1部：時代明朗劇「貞女小」

出演者：里之子役 野原紗稀・里之子の妻 渡嘉敷彩香・サンダー 金盛里穂・アヤー 仲宗根杏樹

地謡：(三線)仲嶺良盛・(太鼓)徳田泰樹

第1回 講演会チラシ



〈表面〉



〈裏面〉

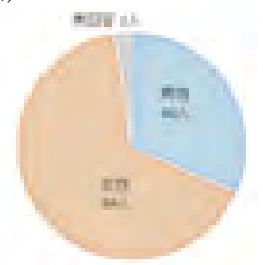
平成29年度 沖縄県立芸術大学 しまくとぅば実践教育開発プログラム事業  
第1回 講演会アンケート 集計

会場：沖縄県立芸術大学奏楽堂  
日時：平成29年11月10日  
対象：一般県民

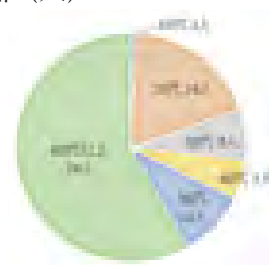
講演会タイトル「芸能から受け継ぐ『誇(ふく) らしゃ しまくとぅば』」  
来場者数：163名 / アンケート回収枚数：127枚 / アンケート回収率：78%

1. 来場者情報

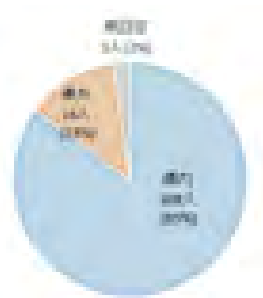
●性別 (人)



●年齢 (人)



●お住まい

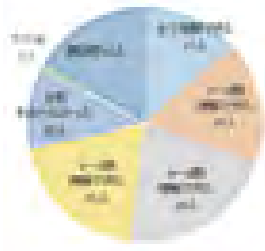


●会場までの主な交通手段



## 2. 講演会について

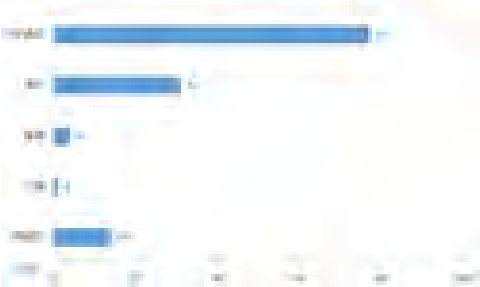
●本日話されたしまくとぅばの理解度



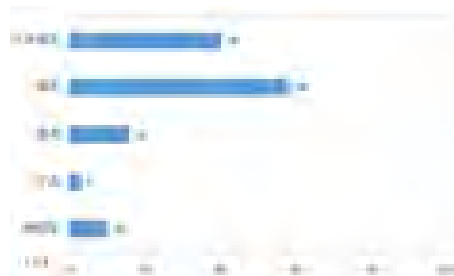
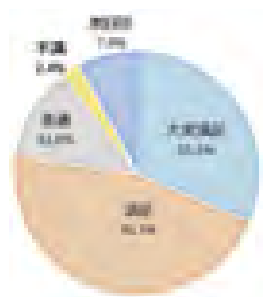
●このイベントを知ったきっかけ (複数選択可)



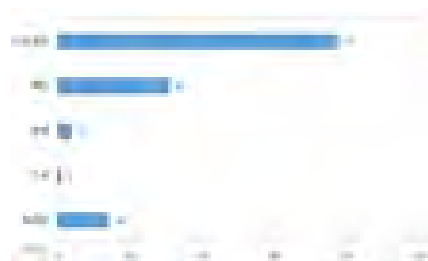
●興味のある内容 (複数選択可)



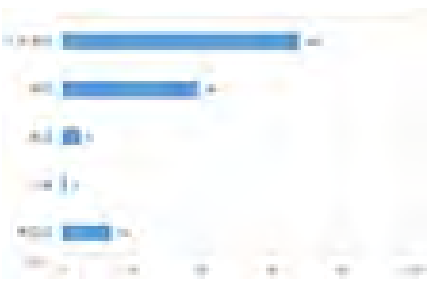
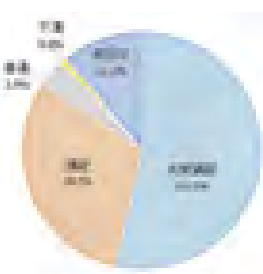
●「貞女小」について



●講演会について



●総合的な満足度



### 3.その他、ご意見、ご感想などお聞かせください。

- ・しまことばの学習は芸大でやっているのでしょうか？ 70代より下の十八の人は全く話しません。どこかで学習プログラムを探しています。シマコトバの世界唯一の琉球オペラを作ってほしいです。
- ・ウチナー口 全然わからなかった… くやしいです…
- ・楽しかったです。次回もぜひ期待しています。大変ありがとうございました。
- ・ハイニセタ、デンサー節、ハリクヤマクの前の曲はなんですか。良くケイコしたと思います。おじいちゃん、おばあちゃんと話すことができたらいいですね。
- ・はじめて聞きました。ウチナーグチのよさを知りました。あらいと言われている言葉ですが、とても情感のある言葉でした。すばらしかった。
- ・方言のヒヤリングには苦戦しました。歌げきのヒヤリングは難しいです。学生さんはこの芝居のためだけに、方言のセリフを覚えたとのこと、素晴らしいです。ウチナー方言の復活に役立つといいですね。
- ・お芝居はわかりませんでした。孝子先生のお話は所々何となく…ですが、楽しかったです。せめて半分理解できるようになりたいです。お元気でおきれいですね。
- ・ウチナー口を使うときつく言われて育ったトラウマがあります。今とても後悔して、機会を見つけては単語を少しずつ増やしています。
- ・標準語の解説が聞きたい。凄いがきているのに、話している内容がわからないのは、もったいなく感じた。方言がききとれない人のために、訳がほしい。
- ・ヤマトグチで訳してほしい！単語はほんの少しわかった。感情は伝わったが、意味がわからないのが、残念でした。
- ・歌劇の訳がプログラムノートに欲しかった。(もしくは大まかなあらすじ)
- ・貞女の中の三良役をした金盛さんは、とても上手だった。明日からでも芝居に出れると思う。三年生というので大変な才能だと思う。
- ・沖縄芝居を観る機会が少なく、久々に楽しみました。ありがとうございます。
- ・瀬名波孝子さんの講演は大変刺激になりました！しまくとぅばにもこれまで以上に学びたい気持ちがわきます。
- ・ありがとうございました。初めて「しまくとぅば」を実際にお聞きする機会を得ることができました。瀬名波さんの力強いトークに圧倒されました。とてもステキな文化なので、ぜひこのような機会がもっと増えることを期待しています！ありがとうございました。
- ・ウチナーグチは学校の授業で取り入れて、減ばないようにしなければなりません。
- ・沖縄の海を残すように、沖縄の言葉も子や孫に残したいという言葉が響きました。沖縄のことば、残したいです!!
- ・しまくとぅばは分からなかったけどニュアンスでおもしろかったです。
- ・50近い私ですが正直全ての意味はわかりませんでした。改めて「うちなあ口」は美しいと感じました。
- ・沖縄島言葉の衰退が顕著である。芸術、文化のすい退に直面している。この様な催事は必要である。肝心は大切に助け合う事は永遠に継承する必要があると感じた。芸大生もすばらしかった。使われている歌劇の島くとばもしっかり内容を把握して下さい。最初の奥山のハツクが良かった。瀬名波氏にはあらゆる所で島くとばの普及をお願いし、健康長寿で100才までも!
- ・大変良かったです。
- ・応援致します。
- ・歌劇のウチナー口は聞き取れにくかった。日常会話とは違うので三線を聞きながら学生達の表現を楽しむながらみていました。私達の文化の「ウチナー口」最初の試みとはいえ、大変りっぱだと思いました。
- ・大変ありがたいです。ぜひ続けてほしい。瀬名波先生とてもよかったです。
- ・ことばはほとんど分からないはず…でしたが、雰囲気という空気感がすごく伝わりました！沖縄の人のゆかいなところや明るさがすごく込められていたと思います!
- ・貴重な機会、ありがとうございました。

- ・講演は、ヒアリングが苦手な人のために事前に話の内容をアナウンスするのもアリかと思います。(ほとんどききとれませんでした >> (涙)
- ・学生さんの芝居は一生けん命さが伝わってとても良かった。日常的にウチナーグチを聞いたり使ったりしていないので音楽にのせてしまくとぅばを話せるようになると良い。自信のなさが声の小ささになったのか聞こえづらかった。次回も期待しています。
- ・1～2曲位は踊りもあつた方が良いと思います。三線も(古典)あつた方が良いと思います。
- ・芸大に期待しています。
- ・このような形の講演を今後も希望いたします。
- ・もう、最高!の一言につきます。
- ・島くとばは小さいころから触れることが大切だと思います。沖縄の幼稚園、小学校、中学校、高校と大学と島くとばに触れる機会(ウチナー芝居)鑑賞などあるといいと思います。小中学校の頃よく村で芝居を呼んでいたので見ることができ、今でもウチナー芝居は大好きです。
- ・全編しまくとぅば、サイコーです。芸大の学生が、歌劇を演っている事に嬉しく思うとともに誇りに思いました。今後も、教育の現場で広めて下さい。
- ・うちなーぐちの真心が心にきて涙がでました。うちなーぐちはまったくわかりませんが今日この場にこれて良かったです。感謝
- ・とても有意義な時間でした。ありがとうございました。
- ・もっと勉強しなければいけないと思いました。瀬名波先生の講演はとても心にしみるような話でした。ウチナーンチュとして言葉を大切にしなければいけないと感じました。
- ・とても上手で正直びっくりしました。イントネーションバッチリ 最高です。今後ご活躍期待し第2回願望します。瀬名波先生の講演楽しくすごし、勉強になりました。
- ・瀬名波孝子さん素晴らしいですね。感動しました。美しい、流れるような言葉です。これから公演を見てみたいと思います。やはりいいですね、うちな〜芝居。
- ・話せないが方言がとても好きです。いつでも気軽に聞けたらと思います。
- ・宮古島の方言と、まったく違うんですね。子供の頃、NHK TVの「沖縄の歌とおどり」を意味わからぬままに夢中で見ていたのを思い出した。島ことばでの講演は初めてですが、耳に心地よかったです。美しい言葉ですね。ありがとうございました。
- ・とてもよかったです。また企画して下さい。
- ・残念ながらほぼ意味がわかりませんでした(笑)、音やメロディーそれから講演会が大変たのしかったです。次鑑賞する時はしまくとぅばを少し勉強してから再度チャレンジしたいと思います。ありがとうございました!
- ・うちなーぐち・しまくとぅばはあまりわからなかったけれど、ところどころわかることばもあって、「こんな話してるのかな?」と予想しながら聞いていました。ことばをあまり知らなくても、おもしろいこと言っているなあとか、なんとなく伝わるので、おもしろかったです。はじめて沖縄の歌劇を見たのですが、もっと理解できるようになれたらいいなと思いました。ありがとうございました!
- ・県外の出身なのでしまくとぅばはわかりませんでした。その土地に住み続けた人が真心を伝えられることばというようなあたたかさを感じました。祖母が九州出身でその方言を話している姿を懐かしく思い出しました。次の2回目の講演までにひとつでもしまくとぅばを覚えられたら楽しそうだなと思っています。声を使って覚えてみたいです。
- ・小さい時はしまくとぅばを使っていましたが、「ほうげんフラ」があり、しまくとぅばを使わなくて、聞く事はできるが話することはできなく、今からでも、しまくとぅばを話したい。講師の瀬名波孝子さんが良かったです。昔からの大ファンです。
- ・今日の催しについて知らない人が多く残念がっていた。宣伝が足りないのでは?
- ・セナさんは素晴らしい女性です。口跡はつきりかくしゃくとして!しまくとぅばの良さをしみじみ感じました。



- ・85歳とは思えない若さ、パワーを感じました。ありがとうございます。セリフもしっかり覚え声量もあり、さすが名女優さんだと感心しました。これからも学生にしまくとうばをなちーちくみそーり。ぜひ実演してひろうしてほしいものです。
- ・すばらしい話でした。芸大学生達もよく修学したと思います。
- ・歌劇はセリフがはっきりしない部分があった。背景の絵が素晴らしい。85歳とは思えぬ力強い音声すごい。満足です。
- ・ウチナーグチを多く使いこなしてよかったです。あいさつも、ふたことぐらひはウチナーグチで話してほしいです。
- ・学生の唄演技が幼さが目立った。瀬名波孝子さんの講演楽しく聞かせてもらった。70代です。85才までキビキビ過ごそうと思った。
- ・貞女小について くとばがへえーさがあたら ちからんとくまが あいびーたしが しでえーになりてい じょうとうやいびーたん。ちばていくみいそーりい。
- ・とても良かったです。瀬名波さんの歌ずっと聞いていたかったです。
- ・しまくとうばはふだん長い時間きいた事がないのでわからない事が多かったので一緒に笑えるように(きけるように)なれたらいいと思いました。楽しかったです。
- ・「貞女小」は皆頑張っていたと思う。(お付きの下男?)の方は声もよく通りとても良かった。ウチナー芝居に合っていると思う。瀬名波孝子さんのお話はとてもわかりやすいウチナー口でした。とてもステキな年の取り方だと思いました。楽しかった。いつまでもお元気で芝居して下さい。
- ・歌の意味が不明なところがあった。もう少し声が大きく鮮明なことばが出れば良かったのではないかと思います。下男の役の方は声がとてもおつていききやすかったですと思います。皆様方、ごくろうさまでした。
- ・ことばはほとんど分からないはず…でしたが、雰囲気というか空気感がすごく伝わりました!沖縄の人のゆかいなところや明るさがすごく込められていたと思います!わかりませんでした、たのしい講演でした。ありがとうございます。
- ・瀬名波先生の肝心がすばらしかった。Welcomeんちゅ!?!の言葉にもその気持ちを入れて伝えていきたい。
- ・瀬名波先生の講演はとても感動しました。ことばだけでこれほど情景が想像できるような表現が出来るのですね。「しまくとうばを勉強する為に芝居をする」というスタンスが素敵だと思います。これからも芸大でこのような試みが行われることを期待します。
- ・東京出身で言葉の意味はわかりませんが心で理解致しました。沖縄芝居の舞台上、いつもすばらしい御姿を拝見している瀬名波さんのお話をうかがう貴重な機会をありがとうございます。
- ・演者の皆さんは「シマクトバ」と言っていますが、私達は「ウチナーグチ」と言っています。どちらが正しいですか?
- ・クーラーが強すぎて寒いです。せつかくの講演も芝居もさむすぎて身に入らなくて残念です。会場外のテレビも見えづらくてガッカリです。(せめて、テレビで見ようと思ったのに)後半、クーラーもさむくなくて、素晴らしい講演でしたのでとても良かったです。※若い人が芝居に取り組んで頑張っている事に興味しました。今後もうちなーぐちに親しんでほしいです。
- ・学生が初めてしまくとうばで演じたとのことですが、すごく上手かったと思います。大学でも是非、芝居も取り組んでいただき、沖縄芝居を盛り上げられれば、しまくとうばも自然と生活の一部になっていくのではと思いました。

第2回 芸能から受け継ぐ「誇らしやしまくとぅば」

実施日：平成30年2月9日（金） 18時30分開場・19時開演

会場：沖縄県立芸術大学 奏楽堂

講師：八木 政男（はちき・まさお）

演題：「芝居に息づくしまくとぅば」

講師略歴：1930年、那覇市泊出身。沖縄県指定無形文化財「琉球歌劇」保持者。1943年大阪市福島草開町にて「戎座大宜味朝良舞踊団」に入団。その後帰郷し、民政府公認劇団「竹劇団」に所属。1949年より大宜見小太郎が座長となり旗揚げした「大伸座」に創立とともに入団。沖縄芝居を牽引する一方で、琉球民謡太鼓奏者、琉球古典音楽野村流師範として沖縄の音楽にも精通し、長年にわたり舞台・ラジオ・テレビに活躍。現在は舞台出演をする傍ら、後進の指導に尽力している。

第1部：「芝居の中で生まれた名作舞踊」

出演者：「川平節」(男)野原紗稀 (女)金盛里穂・「金細工」(モーサー)仲宗根杏樹 (加那兄)仲村里央 (アンマー)伊波留依・「加那よ一天川」(男)山里静香 (女)渡嘉敷彩香

地謡：(三線)徳田泰樹 新垣勝裕 波平宇宙・(胡弓)佐久本純・(箏)米須緩南・(笛)仲間美幸・(太鼓)棚原健太

第2回 講演会チラシ

第2回 講演会

継承された誇らしやしまくとぅば

講師：八木 政男

演題：芝居に息づくしまくとぅば

座席料：無料

日時：平成30年2月9日（金）18時30分開場・19時開演

会場：沖縄県立芸術大学 奏楽堂

主催：沖縄県立芸術大学 芸術文化センター

お問い合わせ：098-862-5415

※当日は入場料、座席料は別料金です。

〈表面〉



〈裏面〉

平成29年度 沖縄県立芸術大学 しまくとぅば実践教育開発プログラム事業

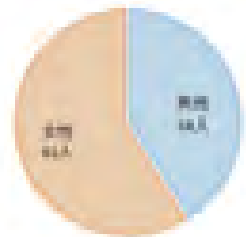
第2回 講演会アンケート 集計

会場：沖縄県立芸術大学奏楽堂  
 日時：平成30年2月9日  
 対象：一般県民

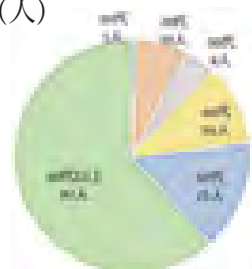
講演会タイトル「芸能から受け継ぐ『誇(ふく)らしゃ しまくとぅば』  
 来場者数：180名 / アンケート回収枚数：141枚 / アンケート回収率：78%

1. 来場者情報

●性別 (人)



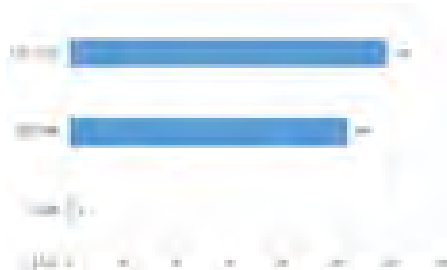
●年齢 (人)



●お住まい

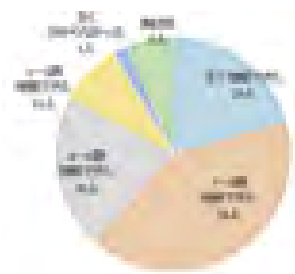


●興味のある内容 (複数選択可)



## 2. 講演会について

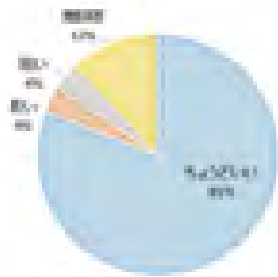
●本日話されたしまくとぅばの理解度



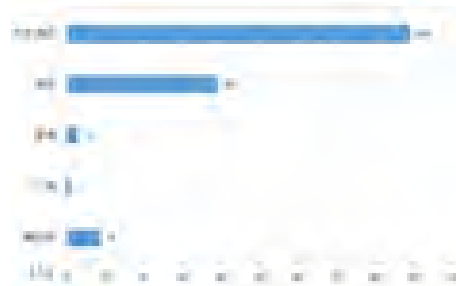
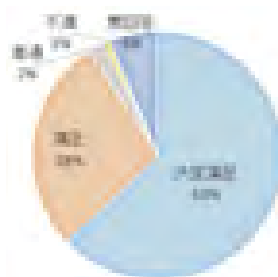
●このイベントを知ったきっかけ (複数選択可)



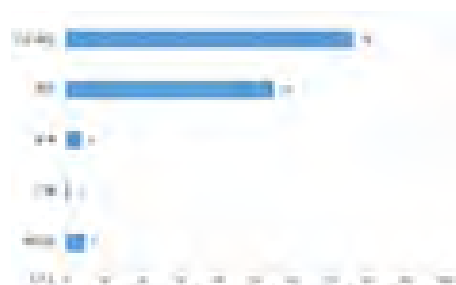
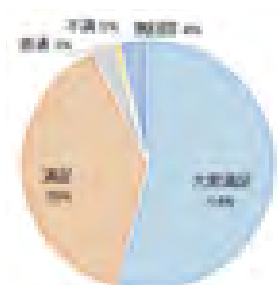
●イベントの長さについて



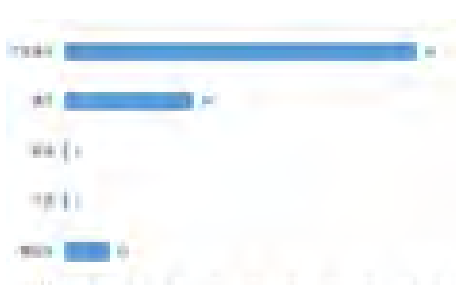
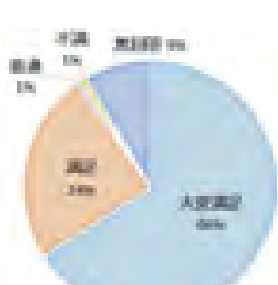
●講演会について



●意見交換会の内容について



●総合的な満足度





### 3. その他ご意見、ご感想などありましたらお聞かせください。

- ・開演時間が昼間にできるとありがたいです。
- ・川平節←最高でした。話せるようになりたいです。学びます。
- ・モーサーの着物が上等!!!これからもぜひ琉球語を芸大で続けて下さい。もっとこういう公演を見たいです。これからもたくさん計画して下さい。うちなーの芸能をどんどんみんなに教えて下さい。
- ・しまくとぅばのすばらしさに感動!
- ・幼少時代を思い出し、涙が出ました。こういううちな言葉を死語にしない様勤め頑張りたいと思いました。大変ありがとうございました。
- ・内容はあまり理解できませんでしたが、すごく深い文化があると感じました。
- ・「しまくとぅば実践教育プログラム開発事業」、方言世代が少なくなるなか、しまくとぅばを復興させるすばらしい取り組みと思います。継続することで、この取組みがしまくとぅばがどこからも聞ける時が来るといいですね。
- ・ありがとうございました。とても良かったです。
- ・八木さんしまくとぅば、とても良かったです。
- ・敬いことばがきいてとても心地よかったです。話せるようになりたいです…。
- ・内容がほとんどわからず残念でした。
- ・定例化して欲しいです。沖縄語を大切に!次世代へ正しくつなごう。
- ・この様な企画を小・中学生にもやってほしい。
- ・小学校で読み語りをしています。紙芝居などで、しまくとぅばでやったりしていますが、自己流でやっているのでも少しでも勉強したい思いで八木政男先生の講演会に来ました。とても勉強になりました。肩車も私の出身地の言葉が出てきて、そうそう、と思いました。ありがとうございました。
- ・八木政男さんのしまくとぅば たいへんたのしく拝聴しました。芸大生の踊り大変よかったです。将来が楽しみです。
- ・おどりの時の歌詞はあまりわからない。しまくとぅばを残すには、小中高校の教育現場での取り組みがないと、まず無理だと思います。そんななかで芸大で、しまくとぅばを教育に取り入れた実践的な取組は、とてもすばらしく期待します。これが、小中高校でも実践出来たらなと思います。
- ・20代でなかなか理解も難しかったのですが、とても興味深く聞き入りました。私たち世代が「しまくとぅば」を大切に継承していけるように、このような機会はとても貴重に感じています。ありがとうございました。いっぺーにふえーでーびたん!
- ・全部話が理解できれば、もっと楽しかったのかなあと感じました。勉強頑張ります。大変微笑のあるうちなーぐちで初めて耳にする事ばかりで楽しく味のある講演であったのでこの種の公演を次回もお願いしたいと思います。ありがとうございました。
- ・シマクトゥバはつかわなくなって10数年、話す相手がまづいません。頭で考えるときシマクトゥバを思い出すようにしています。そうかといってヤマトウクトゥバも上手ではありません。
- ・舞踊について、男性の踊り手も出てほしかった。
- ・しまくとぅばを話せない・聞けないうちなーんちゅが多くなっていると思う。正しいしまくとぅばを大切に伝える事ができれば良いと思う。
- ・特別な言葉以外はほぼ理解している。芸大生の踊り、初々しく、又、地方の方々も若々しい声のハリが有ってとても楽しく見・聞く事が出来ました。重ね言葉がたくさんあって、勉強になりました。
- ・八木政男さんの「しまくとぅば」に変化があつて欲しい。例えば、「中城情話」「伊江島ハンドー小」の名場面からの島くとぅば。
- ・95歳です。劇場内は男性は脱帽する様アナウンスが必要。
- ・本格的な沖縄芝居がみたい。
- ・素晴らしい講演でした。もっと終戦直後の話が聴きたかったです。工夫した生活の様子がよくわかりました。ありがとうございました。感謝です。

- ・八木さんのお話が楽しいです。両親の話を思い出します。ありがとうございました。
- ・組踊に関しては昔、姉が舞踊を習っていたものを鑑賞する程度でした。演目の間や資料に触れ解説があればより楽しめるかと思えます。方言を絶えぬ様、今後は県全体へ広まっていきますようお願いしております。
- ・すばらしい。若い人につたえたい。みなさまおつかれさまでした。またみたい。
- ・また八木先生を呼んでください。
- ・琉球舞踊3つとも素晴らしかった。感動しました。ニフェーデービル。踊り手の表情も最高でした。八木先生の講演は小さいころを思い出し久しぶりに懐かしい場面を思い出しました。イPPERニフェーデービル。八木先生カジマヤー、百20才までお元気で私達に芝居やしまくとうばを教えてください。
- ・今後けいぞくしてほしい。家でもしまくとうばを実践したい。
- ・おもしろい。八木さんが元気なうちに何度でもやってほしい。
- ・これからも島言葉を大切に琉球の歴史、情心、愛情を校正に残してください。たいへん楽しい時をすごしありがとうございました。
- ・しまくとうばに関する関係者の活動が盛んだが、日常の暮らしの中で使うことが1番である。方言で話しかけても標準語でかえってくる暮らしになりきってしまっている。
- ・生れ島の言葉忘しりーねえー親兄弟んうしないうちなーぬ文化守ゆうさねー うちなぬ島ん守ゆうさん 島くとうばやうちなーぬ宝 身にしみてわかりました。
- ・島ことばを聞くことができとてもよかったです。感謝します。
- ・以前NHKラジオ番組で八木政男氏のしまくとうばで日本文学名作の朗読がありましたがCD商品化なされていると買い求め、しまくとうばに慣れ親しみやすいのではないか。大笑いして楽しい時間でした。ありがとうございました。
- ・生まれ育ったしま言葉は大変むずかしく、幼少の頃は方言ふだを渡され標準語使いを指導され、現在は聞けるのはOKですが方言雄むずかしいく、なつかしいです。「めんそーり＝いらっしやい」と「めんそーれ＝おかえりなさい」、言葉の違い、意味を知りたいです。
- ・八木先生のうちなーぐちを聞いて昔使われていた言葉が全て思い出されて大変懐かしかった。
- ・しまくとうば勉強したいと思いました。
- ・次回を楽しみにしています。
- ・八木先生のお話は大変聞きやすくわかりやすかったです。
- ・しまくとうば残していきたいです。有難うございます。また参加したいです。
- ・次回があれば又出席したいです。「しまくとうば」すばらしいですね。八木先生の講演わかりやすく良かったです。
- ・かんじえーくーはモーサーがめだった。かなーひーあんまーの影がうすかった。
- ・島くとうばの奥深さをあらためて痛感しました。日常にもどんどんしまくとうばを活用してみたいと思いました。この様な機会をもっと企画していただきたいと思えます。ありがとうございました。
- ・表現がむつかしいですが、ひさしぶりに琉球舞踊が美しいな～と思いました。ありがとうございました。八木先生の講話、方言がわからなかったですがとても楽しかったです。少しずつ勉強していきます。
- ・オールしまくとうばの講演聞けて、聞き取れて、おもしろかったです。今日はありがとうございました。
- ・愛知県岡崎市より移住してきて7年ですが、しまくとうばは難しく、勉強したいと思いつながら、なかなかやる気がおきません。どうしたらいいのかわからないです。
- ・沖縄方言と琉球の歴史は中・高校で必修科目にするべし。県芸の生徒の舞踊は今後楽しみです。八木さんは今後も沖縄のために頑張ってください！
- ・とてもすばらしい講演でした。
- ・「芝居の中で生まれた名作舞踊」楽しく拝見。若い学生には無理な注文ですが、もっと“芝居っ気”を発揮して欲しかった。昔見た芝居役者たちの心浮き立つ踊りをもっと学んでほしい。(金細工のカナー兄、アンマー、加那よー天川の女踊が印象に残りました。)期待してます。解説にひと言、芝居の中で

生まれたことをもう少し説明が欲しかった。(高平良万歳が組踊、万歳敵討から生まれたというような)「芝居に息づくしまくとぅば」独特の語り口で面白いエピソードが聞けた。重ね言葉の面白さ。地域差により言葉の違いも面白かった。こうした講演はもっと聞いて欲しい…。豊かな芝居体験から生まれた話は含蓄に富んでいる。

- ・たくさんお催しください。
- ・芝居している人だけではなく、演奏している人も顔出ししても良いと思います。
- ・上原直彦氏の出演も希望します。
- ・さすが芸大生と思える踊りでした。講演会はユーモアを交えて楽しくアツという時間でした。
- ・ROKの八木さんと女子アナの島くとぼの番組を楽しく興味深く聞いています。先人は本当に立派なことばを残してくれたと感動し、今日の講演は願ってもしない良い機会でした。ガマクが入ってない琉舞の感が玉三郎の影響がないのか気になります。沖縄の独特な琉舞を失わないで欲しい。伝統を大切に。琉球芸能専攻学生なので。化粧も沖縄芸能を学んでほしい。
- ・八木先生の「かさねことば」「沖縄あまくまかたぐるま」文字化希望! HP公開希望!です。一部の若手のみなさまの舞踊よかったです!!
- ・面白いところがわからないのが悲しい。でも続けてください。言葉はとても大切なものだと思います。
- ・お笑い米軍基地を観に行った時にパンフをもらいました。しまくとぅばを勉強したいと思っています。どう勉強すればよいですか?
- ・今後も回数を多くして続けてほしい!!
- ・三大歌劇が伏線となって講話展開されると思っていた。島くとぅばのリズム、ひびきがセリフの中でも聞けると期待していた。裏話もよかったです!!
- ・芸大の学生のみならず、今、少しは話せるかと思う中高年も取り込んで、共に学んではどうでしょうか? 私は(70才)聞けますが十分は話せない。私達こそ教育して、使うという考えはいかがですか。孫もいる私達こそがそれを広げる役をおうせつかりたいと願っています。日常の中でしまくとぅばを使いたいと切に思います。加那ヨー天川、ドラマチックで魅せられてしまいました。おふたりともとても息が合い、顔も踊りも生き生きして楽しく見させて頂きました。
- ・駐車場案内(外の駐車場)車内版必要、入場入り口がわかりませんでした。初めて来館しました。琉球語復活を学術の中心たる大学が普及努力せん事を期待します。よかったですよ。忘れかけた島言葉の良さを知る機会となりました。ハワイ語、ヘブル語、復活にならって琉球語復活!
- ・20代のお客さんがもっと増えるといいなと思いました。
- ・しまくとぅばの音を表す「字」、「文字」があるといいのでは。踊りの型名を統一して、しまくとぅばとして残すことも大切かと思います。「チリケーシ」「シニクユン」「月見手」「忍び手」など。動作言葉、話しぶりがとても面白かった。八木先生のように発音、実践(事例として紹介)の指導ができる人材を育てるべきです。舞台を通して、今日に至る八木先生、現代の学生にも(実技を兼ねてこそ)将来そういう教育者を目指してほしいですね。
- ・八木先生のお話、とても面白かったです。ありがとうございました。
- ・八木先生の話とても勉強になり面白かったです。芝居の中の踊りは曲や踊り等あらためて庶民性と楽しいものがあると知りました。
- ・地謡が幕の中で弾いて残念でした。しまくとぅばは身近で聞く言葉と全然きいた事ない言葉があり、聞いてて楽しかったです。
- ・八木政男さんのしまくとぅば、とても楽しく学ばせて頂きました。沖縄の各市町村、離島の地方名を島くとぅばで初めて聞きました。涙を流して笑いました。昔の体験話、ほんとうに素晴らしく、よかったです。次回の公演、希望したいと思います。
- ・八木政男さんのお話を直に伺うことができ、大変感激致しました!ありがとうございました!
- ・「学びのパスポート」の対象にしてほしい。
- ・95%理解できた。芸大生の地謡、踊り、両方とも清新で華やかだった。重ね言葉がたくさん!初め



て聞く表現も多かった。

- ・イントロの芸大生の舞踊はういういしく、じょうとうでした。八木先生のお話もユーモアにあふれ、たいへん楽しく聞かせて頂きました。どうもありがとうございました。
- ・芸大生の演目、新鮮味があつてよかった。選曲も大変よかった。八木先生→ラジオとは一味ちがう(すばらしい)
- ・芸大生の演目は表情までとてもよかった。
- ・拝聴出来てよかったです。
- ・同様の催しを継続して下さい。強く要望します。

## 1-6 「事業報告会」 報告

### 1-6-1 概要

平成30年2月17日、沖縄県立博物館・美術館の博物館講座室にて開催した。事業報告会は多くの一般市民に来て頂きたいと思い、「しまくとぅばで学ぶ“踊り・うた・三線”」というテーマで開催した。前半は平成29年度の「沖縄県立芸術大学しまくとぅば実践教育プログラム開発事業」で行った事業を研究会員が報告し、後半は実践授業を行った琉球芸能専攻の仲嶺伸吾、比嘉いずみ、阿嘉修の3名の教員と、琉球語を専門にしている西岡・仲原を交え、鈴木が進行を務める形での意見交換会を行った。以下に報告会の概要を発表者順に簡単に述べる。

事業概要報告は鈴木が行い、平成29年度の「しまくとぅば実践教育プログラム開発事業」につながる、平成28年度の事業「沖縄県立芸術大学ハワイ大学等交流事業」から紹介し、平成29年度事業の事業内容用を項目別に俯瞰した説明を行った。すなわち、本事業報告書の「1-2実施概要」に相当する内容である。

次に、西岡敏が「言語学の視点を含めた事業内容報告」を行った。主に、11月に行ったハワイでのハワイ語教育現場の視察から得た、言語習得および教育現場における多言語の活用、そしてその評価方法など、「しまくとぅば」を教育現場に導入する際に、どのような点が利用でき、またどのような点はハワイ語の学習の特徴なのかを簡潔に紹介した。また、実践授業において蒐集したしまくとぅばの「キーワード」をまとめたデータベースも紹介した。

続いて行われた実践授業報告は、仲嶺伸吾・比嘉いずみ・阿嘉修が行った。各教員ともに、特別講師の紹介、特別講師の人選理由およびその経歴を簡潔に述べ、授業風景を5分ほど映像で紹介し、実践授業を行って良かった点や導入前との比較、学生の反応、反省点、次年度への展望などを発表した。

後半は意見交換会を行った。鈴木が進行し、仲原・西岡より実践教育を行った3名の教員に、言語を修得しやすい教授法の紹介や、実践授業を見学して疑問に思った事などを質問し、実践教育の教員が答えた。最後は会場からも意見をいただき、次年度以降の取り組みへの関心もうかがえた報告会となった。

### 1-6-2 言語学の視点を含めた事業内容報告 (文責：西岡 敏)

本報告では、平成29年度「沖縄県立芸術大学しまくとぅば実践教育開発プログラム事業」の活動内容を言語学の視点を含めて紹介する。

#### 1. しまくとぅばを使用した授業実践

##### 1-1. 挨拶言葉と指導言語をしまくとぅばで

沖縄県立芸術大学で琉球語関係の科目を担当している仲原穰が、授業開始時、授業終了時、授業退出時における挨拶言葉の事例を作成した。

◎挨拶言葉 (仲原穰作成)

開始時：(教員)なまから うちなーぐちぬ講義、「琉球語I」 はじみら(な)。

(学生)うにげーさびら。



終了時：(教員)くりっし 講義 うわらやー。

(学生)にふえーでーびたん。

退出時：(教員)また、来週やー。(来週、いちゃらやー。)

(学生)(また)ううがなびら。

これら挨拶言葉の表現においては待遇表現に留意することが求められた。すなわち、(教員)から(学生)に対する文体は、「普通体」を用いて「丁寧体」は用いない。これに対して、(学生)から(教員)に対する文体は、「丁寧体」を用いて「普通体」は用いない。

また、指導言語の文例案を、実技担当の3名の教員(仲嶺伸吾・比嘉いずみ・阿嘉修)が提示し、仲原穰・西岡敏がそれらを沖縄語に翻訳し、相互に検討した。例えば、組踊実技の場合には、次のような文例を沖縄語で作成した。

◎指導言語(例：組踊実技)

組踊の唱えをはじめます。くみうどういぬ とうねー はじみらな。

よく聞いてルビをふって下さい。ゆー ちち、ルビ(ゆみがな) ふてい とうらし。

2グループに分かれて唱えてみましょう。

たーちぬ グループんかい わかりてい とうねーてい んだな。

一人で唱えてください。ちゅいっし とうねーてい とうらし。

役を決めて所作をしましょう 役 きみていから 所作っし んだな。

こうした翻訳における方針として、外来語や漢語は無理に翻訳しないこととした。上記の例で言うと、「ルビ」「グループ」「役」「所作」といった語彙である。

1-2. 特別講師の実技授業への招聘とキーワードの記録と整理

以下の実技授業において、琉球芸能の世界において経験豊富な諸先生方を特別講師として招聘し、沖縄語を用いた芸能の指導をしていただいた。

地謡実技(仲嶺 伸吾先生担当)

特別講師：仲嶺 眞永先生

琉球舞踊実技(比嘉 いずみ先生担当)

特別講師：宮城 幸子先生

組踊実技(阿嘉 修先生担当)

特別講師：小波 則夫先生

別紙に見られる通り、「授業実践記録シート」を作成し、特別講師が出席した各時間において沖縄語使用の記録を行った。また、その「授業実践記録シート」をもとに、芸能における指導言語として重要な沖縄語をリスト化する「キーワードリスト」(同じく別紙参照)も作成した。これらは、特別講師の先生方が実技授業の中で用いられる、しまくとうばの「キーワード」を記録し、データベース化する作業の一環である。このデータベースをもとに琉球芸能に関わる語句を整理・分析し、「琉球芸能用語事典」(仮称)を作成する、という目標を掲げた。

2. 「しまくとうば講演会」の開催

今年度、琉球芸能の世界で活躍している二人の先生をお招きし、「芸能から受け継ぐ『誇らしやしまくとうば』」と題して、ご講演をほとんど「しまくとうば」(沖縄語)で行っていただいた。

第1回 講師：瀬名波 孝子先生 時代明朗劇「貞女小」(県芸大生実演)

第2回 講師：八木 政男先生 琉球舞踊「芝居の中で生まれた名作舞踊」(同上)

しまくとうばによって語れる人が少なくなっている現在、しまくとうばによる語りのモデルケースとして、今後のしまくとうば実践教育に生かしていくことができる。言語学的な配慮をしつつ、講演記録を「文字起こし」し、「しまくとうばテキスト」を充実させることも目標として掲げられている。

3. ハワイでの事例に学ぶ

3-1. ハワイ大学ヒロ校「ハレ・オーレロ」の授業実践に学ぶ

平成29年11月20～22日、ハワイ大学ヒロ校(ハワイ島)ハレ・オーレロ(言葉の家)、ナーワヒ(ハワイ語で教える小中高等学校)、プーナナレオ(ハワイ語環境の保育園)を訪問し、ハワイ語実践教育の現状を視察した。

ハワイ語教育では、言語・音楽・舞踊・儀式などがすべて有機的に関連づけられ、それに基づいて授業のカリキュラムが組まれている。ヒロ校での授業体験では、ハワイ語による自己紹介の文例、ハワイ語による新しい語彙を作成する委員会の存在、ハワイ語の教科書や辞書、ハワイ語の歌にのせて踊るフラダンス、授業開始時のチャント(儀式の歌)の唱え、ハワイ語教育の「高大連携」、ハワイ語によるレポート・論文執筆などを知ることとなった。また、ハレ・オーレロ(言葉の家)の壁には、ハワイ語の表記で神話や事績が掲げられ、部屋の名前もハワイ語によっていた。

### 3-2. 聖田京子先生(ハワイ大学マノア校名誉教授)とのワークショップ

平成29年11月23日、うちなーぐち教育を実践して来られた聖田京子先生に、オアフ島からハワイ島に来ていただき、しまくとぅば実践教育についてアドバイスをいただいた。

聖田先生は、まず、語学教育(外国語教育)のカリキュラム作成における5Cの重要性を説かれた。5Cとは、Communication(対話)、Cultures(文化)、Connections([他領域との]つながり)、Comparisons(比較)、Communities([多文化の]コミュニティ[で生きる])という、頭文字Cをとった語学教育(外国語教育)における5つの重要なポイントである。

また、purposesごと(目的別)の言語教育について、あるいは、Novice(初級)からSuperior(超級)に至る(習得段階別)の言語教育について述べられた。前者については、沖縄県立芸術大学における言語教育は、language for special purpose(特定の目的のための言語)の方であると認識することが重要であり、後者については習得レベルを明示的に示すことが大切であると解説された。

(目的別) language for general purpose(一般的な目的のための言語)

language for special purpose(特定の目的のための言語)

(習得段階別) Novice(初級、単語[50語程度]は知っているが文は作れない)

Intermediate(中級、単文を作れる)

Advanced(上級、複文を作れる。敬語表現を言える)

Superior(超級、相手に合わせて話せる)

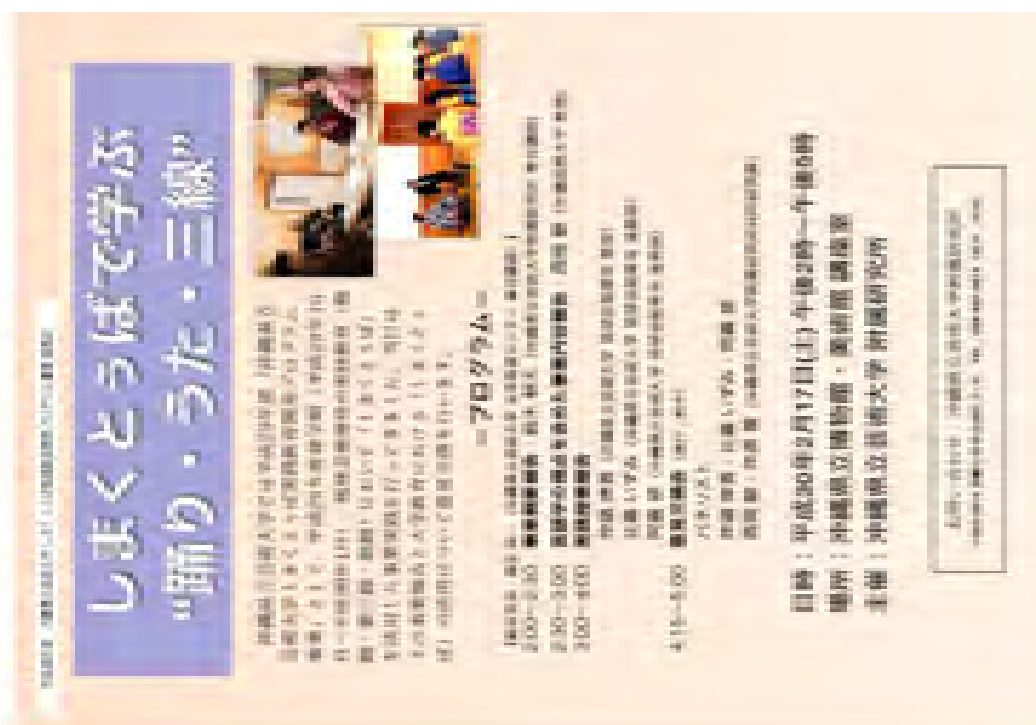
習得段階別は、各の「級」の間に、習得基準を明示的に設定した上で、N-h(Novice-high)、I-h(Intermediate-high)、A-h(Advanced-high)と言った中間的なレベルも入る。こうした「級」の基準は、しまくとぅばの検定や段階別授業・講座に大きな示唆を与える。

## 4. 来年度以降の活動展望(言語学の視点による)

今年度の活動をふまえた上で、来年度以降の活動として、次の5つの箇条書きようなことが必要と考えられる。

- ①授業実践における指導言語の拡充
  - ②琉球芸能における「キーワード」のデータベース化の推進
  - ③講演実施および記録の「文字起こし」による「しまくとぅばテキスト」の充実化
  - ④しまくとぅばの習得基準(初級～超級)の設定
  - ⑤世界的な言語再活性化(言語復興)運動との連携
- 以上

平成29年度 沖縄県立芸術大学 しまくとぅば実践教育開発プログラム事業  
 〈事業報告会チラシ〉



平成29年度 沖縄県立芸術大学 しまくとぅば実践教育開発プログラム事業  
 報告会アンケート 集計

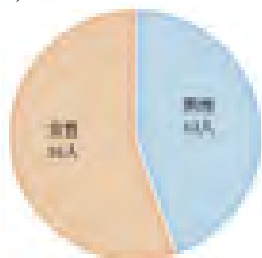
会場：沖縄県立博物館・美術館  
 日時：平成30年2月17日  
 対象：一般県民

報告会タイトル「しまくとぅばで学ぶ『踊り・うた・三線』」

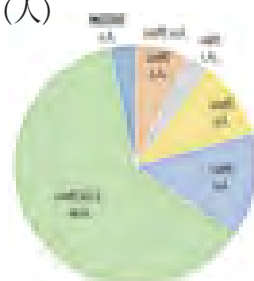
来場者数：56名/ アンケート回収枚数：29枚/ アンケート回収率：52%

1. 来場者情報

●性別 (人)



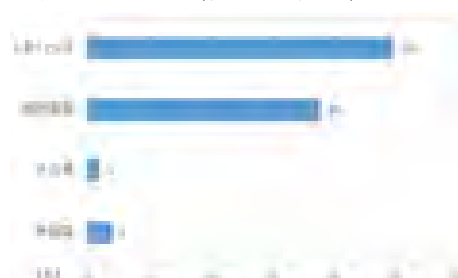
●年齢 (人)



●お住まい

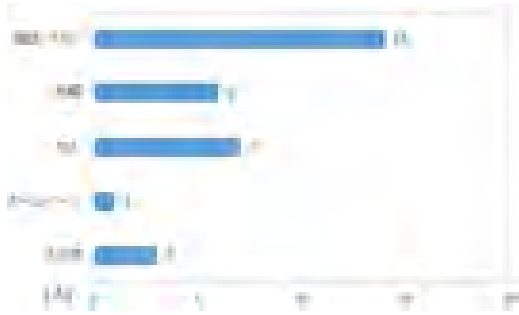


●興味のある内容 (複数選択可)

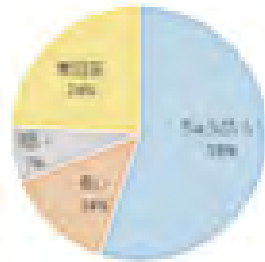


## 2. 講演会について

●このイベントを知ったきっかけ (複数選択可)



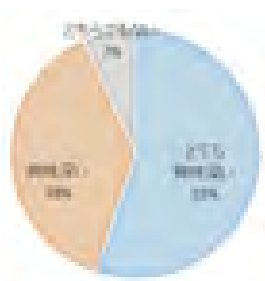
●イベントの長さについて



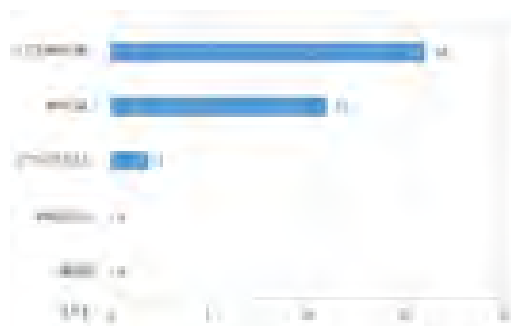
●本事業のイベントについて



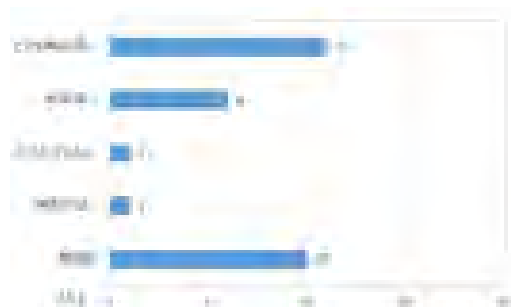
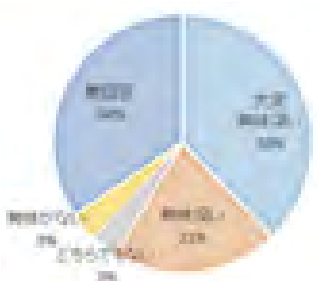
●報告会の内容について



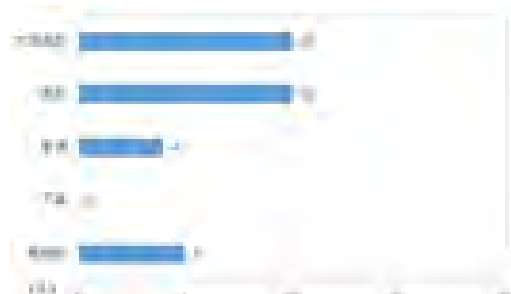
●本事業のイベントについて (複数選択可)



●意見交換会の内容について



●総合的な満足度





### 3. その他ご意見、ご感想などありましたらお聞かせください。(●は判読不明箇所)

- ・「出来る所から入る」が初期の成功方法。その点では、琉球芸能から入るのはいい方向。次はどうするか?何所へ進めるのか? (特定の目的のための言語) = 芸大のしまくとうば事業。では、(一般的な目的のための言語) = 何か?
- ・指導を受けた学生からの成果、感想も知りたかったです。
- ・演者がしまくとうばを通してより深く表現できると思います。これからの芸能のますます格調高くなることを期待できます。小波先生の体験からのお話をもっと聞いてみたいです。
- ・しまくとうばバイリンガルがプロジェクト事業で増えていくことを期待します。
- ・実践授業報告は大変良かった。いい企画だと思います。
- ・とても興味ある報告会であったと思いました。うわー、くわー、しえー、ゐ、ゑ、をう(うう)等の表記の仕方、助詞の使い方、発音アクセント、発声についても御指導しっかりお願いしたいと思います。「しまくとうば」と言わずに「首里くとうば」と言うてはいけなんでしょうか?特に今回の会は…。
- ・島くとうば普及に近道、くんちり道はない。もちろん簡便法もない。島くとうばそのものを楽しく、根気よく、感性に訴えるような言葉使いを大事にして広めていきたい。
- ・芸大の実践がみえて、とてもよかったです。
- ・このプログラムがあって、とても良いと思います。科目としてだけでなく、教える言語としてしまくとうばを使うことは大変良いです。いっぺーにふえーでーびる。くりからんちばていくみそーりよーたい。
- ・社会人、高齢者が学べるような講座開設もせつにお願いします。
- ・今後もぜひ続けてほしいです。まずは先生方も普段からうちなーぐちを使って学生に接してほしいです。実際に学生がうちなーぐちを発する機会をふやしてほしい。聞くだけでは話せるようにはなりません。普段の生活に(掲示物等) どんどん取り入れてほしいです。しまくとうばに接する量をふやしてほしい。量をかせいでほしい。
- ・講座すべて県博で実施してほしいです(公開)。学生も市民も早く学び合う必要があります。しまくとうばを学ぶのに市民はもう時間がないのです。あらゆる機会をどんどん与えてほしいし生かしてつなげて未来へ伝えたい。
- ・特別講師の存在も大事だけれども、芸大の教員が日頃から学生に教えることができることが重要だと感じた。→芸大の存在する意義
- ・琉舞の指導で使われていた言葉を聞くと、島くとうばの表現の豊かさをと知りたかったです。芸大の学生は幸せだと思います。芸大だけでなく、沖縄全体に広げる方法も考えてほしい。
- ・都合があつて前半しか参加できませんでしたが、県内での動きを(大学の)知ることが出来てよかったです。各地の庶民のことうばを継承する方法はありませんか。
- ・今日の午前中に同場所において県立高校の第5回教頭会がありました。その最後に那覇国際高校の田名教頭より、比嘉いずみ准教授からのお願いが紹介され、県立芸大の現状を知ることができました。今後も、このような活動頑張ってください。県立高校も応援していきたいです。
- ・大ベテランのゲストを招いての授業に興味を持った。それこそ“課外授業ようこそ先輩”や“世界一受けたい授業”のように、ゲストの体験にうらうちされた言葉に感銘を受けた。ただ、報告時間が短すぎた。(気になったこと。記録映像の“音”の取り方が安易で言葉が明瞭に聞こえなかったのが残念。言葉のプロジェクトの記録の取り方としてはどうかと思った。) 沖縄芸能の技を教えるのにウチナーグチの持っているニュアンスに苦労されると思うが、“感じ方”、“気持ちの持ち方”を的確なウチナーグチで指導しても、今の生徒達にどこまで通じるのか。しかし悲観的にならずに繰り返し独特のウチナーグチで指導してほしい。マニュアルはぜひ作ってほしい。活動を継続されることに期待します。※大学だからやむをえないが、言語学的分析がすぎて学会の発表会にはしてほしくない!
- ・鈴木先生と西岡先生のお話内容が重なっていたので調整して頂ければ時間短縮できたと思う。「しまくとうばで学ぶ…」が今回のテーマなので、ハワイの事例紹介は必要な内容に絞り込んだ方が良かったと思う。実践授業報告が最も興味深い内容だと思うので、次回は30分ずつにしてもよいのでは?映像

ももっと多様なシーンを見せてもよかったと思う。

- ・独特の文字をもたない言語を残していく事は大変だと思う。残存しているのは芸術の中が一番多いの  
だろうが例えば#3の使用されている日本語はほぼ室町期における日本語であるが「翁」における日本  
語は●●期以前の日本語であり今や全く意味不明であるウチナーグチがそうならないように今後も研  
究を継続されんことを。音があれば韻があるはずでさらに研究が深まることを期待する。
- ・琉舞を通して沖縄の文化言語を学んでいます。県外から移住して6年目になりますが、歴史風土に根  
差した“しまくとぅば”を話す人の少なさに行き過ぎた日本化を感じています。生きた言葉話す方を  
引っ張り出し現時点でやれることを続けて行ってほしいと思いました。言葉に命が宿るためには話者が  
増えるしかないと思います。宮城幸子先生のしまくとぅばによる指導は大変わかりやすく今後の稽古に  
生かそうと思いました。
- ・実際の授業風景などを見る事ができ大変よかったです。美術系介護系までうちなーぐち教育をまきこ  
めるとよいなあと思います。

## 1-7 『琉球芸能用語事典』の構想 (西岡 敏)

平成29年度しまくとぅば実践教育プログラム事業では、沖縄県立芸術大学・琉球芸能専攻の実技  
授業のうち、地謡実技、舞踊実技、組踊実技で、しまくとぅばを用いた授業実践を行った。ここでは、  
授業での挨拶は、原則、しまくとぅばを使用すること、また、特別講師をお招きして、できるだけ多く、  
しまくとぅばで指導していただき、その実技指導の際に現れる独特のしまくとぅばの表現について、記  
録する作業を行ってきた。これらの実践教育活動は、来年度以降も継続していくことになっている。

本研究会では、こうした活動の中で記録されたしまくとぅばについて、ただ単に記録として残してお  
くだけではなく、分析・整理を行って、琉球芸能に関心のあるすべての人々に研究成果として提供す  
ることを考えている。その一つが『琉球芸能用語事典(仮)』(以下、『芸能事典』)を作成する構想である。

『芸能事典』作成の手続きは以下の通りである。まず、授業実践で出てきたしまくとぅばを授業回ご  
とに「授業実践記録シート」に記録する。次に、この「授業実践記録シート」に出てきたしまくとぅばを  
収集・蓄積して「キーワードリスト」を作成する。さらに、その「キーワードリスト」をもとに、言語学的  
な分析を加えつつ、「芸能用語事典データベース」(以下、「データベース」)を作成する。そして、「データベ  
ース」をもとに、芸能研究の視点から加筆を行って『芸能事典』を編集する。

「データベース」に含まれる分析の要素については、現在、本研究会で検討中である。現段階では、  
「①文」「②文節」「③単語」「④音韻表記」「⑤共通語訳」「⑥共通語かな」「⑦品詞」「⑧活用形」「⑨辞  
書形」「⑩見出し語形」「⑪意味」「⑫分野」「⑬話者・出典」「⑭出所日時」「⑮入力者」といった要素を含  
めてサンプルを作成中である。

- |          |                                   |
|----------|-----------------------------------|
| ① 文      | 指導言語(挨拶言葉等を含む)全体を示す。カタカナ表記。       |
| ② 文節     | 「文」を「文節」に分けて示す。                   |
| ③ 単語     | 「文節」を「単語」に分けて示す。この部分が「行」の最小単位となる。 |
| ④ 音韻表記   | 「単語」を「音韻表記」で示す。表記法は『沖縄語辞典』にならう。   |
| ⑤ 共通語訳   | 「単語」の「共通語訳」を示す。                   |
| ⑥ 共通語訳かな | 「共通語訳」を「かな」で示す。逆引き(索引)作成のためである。   |
| ⑦ 品詞     | 「単語」の「品詞」を示す。                     |
| ⑧ 活用形    | 「単語」のうち、動詞・形容詞等の活用語は「活用形」を示す。     |
| ⑨ 辞書形    | 「単語」のうち、必要あるものは形を整えて、「辞書形」を示す。    |
| ⑩ 見出し語形  | 語形『事典』の見出しとなる「語形」を示す。             |
| ⑪ 意味     | 「見出し語形」の「意味」を示す。                  |
| ⑫ 分野     | どの分野で現れた用語かを示す。授業であれば「舞踊実技」等。     |
| ⑬ 話者・出典  | 授業等で話された用語であれば「話者」、文献等であれば「出典」。   |
| ⑭ 出所日時   | 授業等であればその期日、文献等であればその出版年月日。       |

⑮ 入力者 用語を最初に入力した人を示す。

H29年度 沖縄県立芸術大学しまくとぅば実践教育事業 報告会  
芸能用語事典(仮) データベース

文	文節	単語	音韻表記	共通語訳	共通語訳かな	品詞	活用形	辞書形	見出し語形	意味	分野	話者・出典	出所
メーンカイ ウッチャカレー	メーンカイ	メー	mee	前	まえ	名詞		メー	メーンカイ ウッチャカユン	少し前傾に寄りかかる。	舞踊	宮城幸子	2017/10/2
メーンカイ ウッチャカレー	メーンカイ	ンカイ	Nkai	に	に	助詞		ンカイ	メーンカイ ウッチャカユン	少し前傾に寄りかかる。	舞踊	宮城幸子	2017/10/2
メーンカイ ウッチャカレー	ウッチャカレー	ウッチャカレー	?uQcakaree	寄りかかれ	よりかかれ	動詞	命令形	ウッチャカユン	メーンカイ ウッチャカユン	少し前傾に寄りかかる。	舞踊	宮城幸子	2017/10/2
メーホーヤー	メーホーヤー	メーホーヤー	meehoojaa	前に靠れ過ぎ	まえにもたれすぎ	名詞		メーホーヤー	メーホーヤー	前に靠れすぎ。	舞踊	宮城幸子	2017/10/2
ウヌマーマー	ウヌマーマー	ウヌマーマー	?unumaamaa	そのまま	そのまま	副詞		ウヌマーマー	ウヌマーマー	そのまま。	舞踊	宮城幸子	2017/10/2
マチジ カラ チビヌミ マディ ティーチ	マチジ カラ	マチジ	macizi	頭頂	とうちよう	名詞		マチジ	マチジ カラ チビヌミ マディ ティーチ	頭頂から尻の穴まで一本の線。	舞踊	宮城幸子	2017/10/2
マチジ カラ チビヌミ マディ ティーチ	マチジ カラ	カラ	kara	から	から	助詞		カラ	マチジ カラ チビヌミ マディ ティーチ	頭頂から尻の穴まで一本の線。	舞踊	宮城幸子	2017/10/2
マチジ カラ チビヌミ マディ ティーチ	チビヌ	チビ	cibi	尻	しり	名詞		チビ	マチジ カラ チビヌミ マディ ティーチ	頭頂から尻の穴まで一本の線。	舞踊	宮城幸子	2017/10/2
マチジ カラ チビヌミ マディ ティーチ	チビヌ	ヌ	nu	の	の	助詞		ヌ	マチジ カラ チビヌミ マディ ティーチ	頭頂から尻の穴まで一本の線。	舞踊	宮城幸子	2017/10/2
マチジ カラ チビヌミ マディ ティーチ	ミー マディ	ミー	mii	穴	あな	名詞		ミー	マチジ カラ チビヌミ マディ ティーチ	頭頂から尻の穴まで一本の線。	舞踊	宮城幸子	2017/10/2
マチジ カラ チビヌミ マディ ティーチ	ミー マディ	マディ	madi	まで	まで	助詞		マディ	マチジ カラ チビヌミ マディ ティーチ	頭頂から尻の穴まで一本の線。	舞踊	宮城幸子	2017/10/2
マチジ カラ チビヌミ マディ ティーチ	ティーチ	ティーチ	tiici	一つ	ひとつ	名詞		ティーチ	マチジ カラ チビヌミ マディ ティーチ	頭頂から尻の穴まで一本の線。	舞踊	宮城幸子	2017/10/2

## 1-8 リカレント講座

### 1-8-1 実施概要 (鈴木 耕太)

期間：2018年3月23日～25日 (ハワイ時間)

会場：2018年3月23日ハワイ沖縄県人連合会館・24、25日：曹洞宗両大本山ハワイ別院正法寺

#### 概要

日本時間3月23日13時05分沖縄那覇空港から韓国仁川空港へ。仁川へ15時30分到着。ホノルルに向けて仁川より19時50分搭乗。ハワイ時間3月23日9時30分ホノルル空港着。(以下ハワイ時間での記入)

#### 3月23日

入国審査を経て10時30分、空港出口で村田サンダー先生、柳アリソン、照屋リネットと合流。ハワイ島から参加した通訳のレファさんと合流し、10時50分、ホノルル空港からハワイ沖縄県人連合会へ。到着後、昼食およびミーティング。

12時45分、ハワイ沖縄県人連合会館の会場の準備を行う。大まかなセッティングは柳アリソン・照屋リネットが行っており、沖縄側は録画機材、音響、パワーポイントの準備などを行った。

13時から開講式がスタート。鈴木が司会をして各講師の紹介、および各講師からコメントをもらった。通訳はレファさんが担当した。

13時15分に開講式終了。休憩をとり、13時30分から鈴木の「琉球芸能史概説」講座スタート。15時終了。10分休憩。

15時10分より歌三線講座を開始。通訳は村田サンダー先生。「なからた節」「瓦屋節」「しやう

んがない節」の3節と、組踊「執心鐘入」の唱え、三板、笛のレクチャーを行った。16時30分終了。15分休憩。

16時45分、舞踊講座開始。通訳は柳アリソン。最初の30分は「歩み」や、丹田の使い方など、琉球舞踊の身体の使い方についてレクチャー。その後、古典女踊「瓦屋」をレクチャー。一度、比嘉と和田が舞台を使って「瓦屋」を見せ、今日は出羽の「なからた節」の部分をレクチャーした。歌三線は生演奏で、仲嶺先生、村田サンダー先生、村田サンダー先生のお弟子さんのショーンさん、笛を大城が行った。踊り終わったあと、18時からカチャーシーのレクチャーを行った。「おがみ手」「こねり手」「おす手」を基本にして、横に動かすとカチャーシーになることなどを教えた。18時05分終了。記念撮影。

### 3月24日

8時20分ホテル出発。曹洞宗寺院へ。寺院に8時40分着。すでにセッティングは柳アリソン、照屋リネット、村田サンダー先生のスタッフで終えており、我々は撮影機材の準備のみで終えることができた。

9時から波照間先生の講座「詞章研究I」を行った。1コマ目は琉歌概説。10時30分終了。15分休憩。

10時45分から波照間先生の「瓦屋節」の歌詞の解釈(前半)を行った。12時終了。12時から13時30分までランチタイム。

午後は会場を前後に分け、舞台側に三線の講義、正面入口側に琉球舞踊の着付けの講座を行った。

#### 午後1時間目(13時30分～14時30分)

舞踊:着付けについて。ウシンチー、紅型(女性)を着付けして、会場からの質問を答えた。

三線:舞踊「瓦屋」の地謡について。

#### 午後2時間目(14時30分～15時30分)

舞踊:結髪(マーユイ)について、髪の長い人の結髪と髪の短い人の結髪方法を指導。カタカシラの結い方、垂髪の結い方および飾りのつけ方など指導。

三線:組踊の地謡について。「執心鐘入」の地謡を行い、唱えについて三線で音を取りながら教えた。また、金武節、干瀬節の奏法などを指導した。

#### 午後3時間目(15時30分～16時30分)

舞踊:化粧の指導。女踊と二才の化粧を受講者の代表に行った。女性の化粧は和田が担当し、二才は比嘉が担当した。

三線:舞踊「瓦屋」の地謡と、「執心鐘入」の唱えと金武節・干瀬節の演奏を指導した。

三線は16時30分に終了したが、舞踊は時間がかかり、17時に終了した。

舞踊のワークショップでは、着付け・化粧が完成するたびに受講者から大きな拍手がおこった。

17時から18時まで休憩。

18時から鈴木先生の講座「組踊の鑑賞法I」を開始。70分の講座を行い、10分の休憩を挟んで19時20分より麻生の「琉球史概説 14世紀—15世紀の琉球」を始める。時間を少し短縮し、20時まで行った。

その後、会場を片付けし20時30分、曹洞宗寺院を出発。20時50分、ホテル着。

### 3月25日

8時5分、ホテルを出発。曹洞宗寺院へは8時20分に到着した。柳アリソン・照屋リネットが会場を整えてくれており、すぐに講座が始められるような状況であった。会場設営だけでなく、水やコーヒー、お菓子まで、細やかな気遣いに感謝した。

9時より波照間先生の「詞章研究3」を始める。女踊「瓦屋」の歌詞解釈。瓦屋節、しやうんが



ない節の解釈に加え、前日を通して受講者からの質問などに答えた。

10時45分から麻生の「琉球史概説 16世紀—17世紀の琉球」を始める。12時10分終了。13時30分まで昼食休憩。

午後は会場を前後に分け、舞台側に三線の講義、正面入口側に琉球舞踊の着付けの講座を行った。

午後1時間目(13時30分～14時30分)

舞踊:「歩み」について。基本動作となる「歩み」についてレクチャーし、後半は「かぎやで風」について細かくレクチャーした。

三線:舞踊「瓦屋」の地謡について。

午後2時間目(14時30分～15時30分)

舞踊:古典女踊「瓦屋」について、中踊り「瓦屋節」と入羽「しやうがない節」のしよさをレクチャーした。

三線:組踊の地謡について。「執心鐘入」の地謡を行い、唱えについて三線で音を取りながら教えた。また、金武節、干瀬節の奏法などを指導した。

午後3時間目(15時30分～16時30分)

舞踊と三線の合同成果発表会。舞踊は「かぎやで風」「瓦屋」。三線は「瓦屋」と語り組踊「執心鐘入」を行った。

16時30分18時まで休憩。

18時から鈴木の講座「組踊の鑑賞法II」を開始。70分の講座を行い、10分の休憩を挟んで19時20分より麻生の「琉球史概説 18世紀—19世紀の琉球」を始める。20時30分、講座終了。5分ほど鈴木が司会をして閉校式を行い、3日間の講座全日程を終了した。

### 3月26日

8時20分ホテル出発。11時15分ホノルル発。韓国仁川を経由して日本時間3月28日11時50分沖縄那覇空港着。

## 1-8-2 シラバス及び報告 (実技ワークショップ部門)

### 「歌三線(安富祖流)ワークショップ」シラバス

沖縄県立芸術大学 琉球芸能専攻  
仲嶺 伸吾(講師)・大城 貴幸(助手)

#### 1. 授業概要

沖縄の伝統楽器である三線(サンシン)の演奏法を習得する。琉球舞踊「瓦屋」に使用されている3曲(なからた節、瓦屋節、しよがない節)の実技習得を目標に指導する。

レベルに応じて2グループに分ける場合もある。最終目標として、踊手を立てて地謡できるよう指導する。また、組踊「執心鐘入」の音曲や唱えも体験させ、語り組踊を発表させる。

#### 授業計画(案)

渡航期間			2018年3月23日(金)～3月26日(月)
*日目	月日	時間	内容
1日目	3月23日(金)	90分×1コマ	舞踊曲 瓦屋の習得(なからた節、瓦屋節、しよがない節) 仲嶺・大城(定員15名、2グループに分ける場合もある) 状況を見て組踊「執心鐘入」の内容に入る場合もある。

2日目	3月24日(土)	90分×2コマ	舞踊曲 瓦屋の習得(なからた節、瓦屋節、しょんがない節) 実技指導 組踊「執心鐘入」演奏曲、唱えの習得
			舞踊曲 瓦屋の習得(なからた節、瓦屋節、しょんがない節) 実技指導 組踊「執心鐘入」演奏曲、唱えの習得
3日目	3月25日(日)	90分×2コマ	1. 地謡音楽を学ぶ～組踊「執心鐘入」の唱えを習得する。干瀬節の演奏を習得。唱えと歌三線で、語り組踊を習得させる。
			舞踊受講者のための歌三線
			最後に、授業の成果発表として合同発表会を行なう。

受講生への連絡事項

※受講定員 15人。 全日程(3日間)参加が望ましい。

※楽器(三線・爪)は、各自で持参してください。楽譜は、講師において準備します。

#### リカレント講座 in ハワイ 報告書 仲嶺 伸吾(琉球芸能専攻 教授)

初日の講座はハワイ沖繩センター内の勢理客茶屋で行った。「歌三線I舞踊曲 瓦屋の習得(なからた節、瓦屋節、しょんがない節)」を計画していたが、瓦屋節を習得している受講生が2名程度いたので、内容を変更して行った。初めは三線の歴史、先人達から引き継がれている思いや、安富祖流に伝承されている歌唱の技法(吟)について説明した。次に組踊地謡「執心鐘入」のあらすじを通訳を通して説明し、唱えの特徴、唱えの練習を行った。ハワイでは組踊を体験する機会が少ないので、あえて組踊を選んだ。受講生は初めは難しそうにしていたが、三線の音で唱えの音高を取って教えたらできるようになっていた。

その他、三線以外の楽器である笛、三板の特徴や技法を体験させた。

2日目の講座は曹洞宗寺院でリカレント講座を行った。初めは「舞踊曲 瓦屋の習得」を行った。舞踊「瓦屋」は3曲構成の舞踊であり、各曲の特徴、間の取り方など確認し習得を目指し稽古を行った。次に『執心鐘入』で使われている「金武節」「干瀬節」の演奏方法や歌持ち無しで歌い出す技法、「二カナ掛け」の技法の習得を目指して稽古を行った。また1日目に引き続き若松の唱え、宿の女の唱えの習得を目指し、2日目の終わる頃には受講者のみで唱えを行うことができるようになっていた。受講生も緊張が取れたようで、積極的に話しかけるようになっていた。

3日目の講座は二日目と同じく曹洞宗寺院でリカレント講座を行った。前半はこれまでに学んだ舞踊「瓦屋」と組踊「執心鐘入」(金武節から干瀬節まで)を復習した。後半では琉球舞踊受講者と歌三線受講者の合同成果披露会を行った。初めは「かぎやで風」を次に組踊「執心鐘入～金武節から干瀬節まで」を地謡チーム(三線・笛・拍子木)若松の唱えチーム、宿の女の唱えチームと分け披露した。唱えでは役柄の特徴を活かした表現や唱えの音高を三線音を意識し披露することができた。また組踊地謡では前奏(歌持ち)が無い状態から歌い出すことが難しいが金武節・干瀬節共に音高が狂うことなく表現した演奏を行うことができた。最後に「瓦屋」では各曲に合わせた表現を心掛け演奏することができた。

また、終わったと同時に感動の拍手は嬉しかった。

今回、ハワイでの歌三線の講座では村田サンダー氏の弟子が多く参加して頂き、講座を盛り上げ、かつ高い成果披露を行うことができた。私も安富祖流の先輩として、30年以上前に、照喜名朝一先生とハワイに行って、村田サンダー氏を激励したことがある。沖繩では何度か再会しているが、ハワイでは2回目で懐かしさを感じた。今回のリカレント講座の成功は現地の人たちの温かい協力のお陰でスムーズに内容を進行することができた。改めて感謝したい。

## 「琉球舞踊ワークショップ」シラバス

沖縄県立芸術大学 琉球芸能専攻  
比嘉 いずみ(講師)・山里 静香(助手)

### 1. 授業概要

琉球舞踊の実技に対する基本的な知識と技法について、しまくとぅばを通して学ぶ。また、琉球舞踊の舞台活動で必要不可欠である扮装方法について学ぶ。具体的には、①身体技法および舞踊技法の基礎的理論、②琉球舞踊に伝承されたわざ言語、またはしまくとぅばを使用して実技演習、③琉球舞踊の化粧・結髪・着付け方法の3点を中心に授業を行う。

### 授業計画(案)

渡航期間			2018年3月23日(金)～3月26日(月)
*日目	月日	時間	内容
1日目	3月23日(金)	90分×1コマ	1. 実際に踊り始める前に、基本的な舞踊技法(丹田の意識)についてウォーミングアップをしながら意識方法を習得する。 ・琉球舞踊「瓦屋」の舞踊解説を行い、所作の意味と動きの整合性を図る。 ・琉球舞踊の要ともなる姿勢と歩みのトレーニングを行った後、実技演習を行う。
2日目	3月24日(土)	60分×3コマ	1. 着付け(大帯・紅型・ウシンチー等)
			2. 結髪(カタカシラ・女カラジ・カムロ)
			3. 化粧(男・女)
3日目	3月25日(日)	90分×2コマ	1. 1日目に行った実技演習の復習 ・琉球舞踊の中で最も多く踊られる「かぎやで風」について再確認を行う。舞踊解説を行い、所作の意味と動きの整合性を図る。 ・「かぎやで風」で使用する扇子の各名称・基本的な持ち方など確認する。
			2.(成果発表会)3日間で行った授業の成果発表として、三線と琉球舞踊の合同舞台発表を行う。扮装も行い、実際に舞台上で「かぎやで風」と「瓦屋」を披露する。

### 受講生への連絡事項

※定員10～20名。原則として全日程(3日間)の参加が好ましい。

### リカレント講座inハワイ報告書 比嘉 いずみ(琉球芸能専攻 准教授)

平成29年度「沖縄県立芸術大学附属研究所しまくとぅば実践教育事業」の一環で、「リカレント講座」を行うことを目的に、平成30年3月23日(金)～28日(水)ハワイ・オアフ島を訪問した。

これまでにハワイでは、私個人が県費留学OBからの依頼で平成27年3月に1度行い、同年7月には「ハワイ&沖縄姉妹都市締結30周年記念事業」の際に、琉球芸能に関する「結髪」「着付け」「化粧」のワークショップを学生と共にやってきた経緯がある。

今回は、沖縄県立芸術大学主催の講座として、「琉球芸能史概説」「舞踊琉歌詞章解説I・II・III」「琉球史概説I・II・III」「組踊の鑑賞法I・II」「歌三線I・II・III・IV・V」「琉球舞踊I・II・III・IV・V」と、3日間で20コマの講座を行った。琉球舞踊の講座では、舞踊I「実技(瓦屋の前半)」、舞踊II「着付け」、舞踊III「結髪」、舞踊IV「化粧」、舞踊V「実技(かぎやで風)」、舞踊VI「実技(瓦屋の後半)」計6回の講座を、筆者と助手の山里静香(博士2年)で担当した。

◎1日目(3月23日金曜日 場所:ハワイ沖繩センター)

①舞踊I「瓦屋」実技(16:30～18:00)参加者:約20名

初めに舞踊の基本である、姿勢・丹田・歩みについて説明した。それをできるだけイメージしやすい言葉として「しまくとうば実践教育」の授業で、宮城幸子先生より教わった「マチジカラ チビヌミーマディ フィトチ」「チブイ」「シナヌナーカンカイ アシイッティ シナトウバサングートウ アシンジャスン」を訳して参加者に伝え、基本練習を行った。筆者の感触としては、参加した初心者・経験者共に動作のイメージがつかめたようで、短時間ではあったが練習の成果が伺え、適切な言葉の指導の必要性を実感した。その後にデモンストレーションで「瓦屋」を披露し、参加者に入羽「なからた節」の部分覚えてもらい、地謡の音楽に合わせて全員で5回ほど踊った。

◎2日目(3月24日土曜日 場所:曹洞宗寺院)

①舞踊II「着付け」(13:30～14:30)参加者:約20名

事前に県費OBから希望のあった着付け法を中心に講座を行った。初めに「大帯」の正式な締め方をデモンストレーションし、略式の帯との違いや、帯を締めるときのポイントを説明した。続いて同じ要領で、参加者の中からモデルを立て「ウシンチー」「紅型」「二才衣装のあずまからげ(2通りの方法)」を紹介した。

②舞踊III「結髪」(14:30～15:30)参加者:約20名

こちらでも参加者の中からモデルを立て、「女性結髪:入り髪を使用した、からじ結」と「男性結髪:かたかしら」「古典女踊り:カムロ結」を紹介した。そしてジーファー(かんざし)や前髪飾りの挿し方などもあわせて説明を行った。

③舞踊IV「化粧」(15:30～16:30)参加者:約20名

「結髪」でモデルを務めてくれた2名には、引き続き化粧のモデルとなってもらった。「からじ」を結った方には、女性の舞台用化粧(ライトがある場合)、「かたかしら」を結った方には、男性の自然体化粧(野外等で踊る場合)の2通りを行った。ハワイでは野外で踊る機会が多く、通常の舞台化粧で踊った場合かなり違和感がある。そこで今回は、私自身の経験から場所や環境に合わせた化粧法を紹介したところ、参加者はとても興味を持ち、メモを取りながら熱心に受講していた。

◎3日目(3月25日日曜日 場所:曹洞宗寺院)

①舞踊V「かぎやで風」(13:30～14:30)参加者:約15名

1日目に参加した方と、若干入れ替わりがあったため、前半では基本の姿勢・丹田・歩みを確認し反復練習を行った。そのあと体の使い方のイメージを説明し、所作と歌詞の表現を確認した。後半では扇子を持ち、曲に合わせて5回ほど踊り、最後に所作についての質疑応答を行った。

②舞踊VI「瓦屋」(14:30～15:30)参加者:約10名

計画では、歌三線受講生のための舞踊を行う予定であったが希望者がいなかったため参加者に確認を行い、急遽、合同発表に向けての指導に変更した。1日目の古典女踊り「瓦屋」の中踊「瓦屋節」と入羽「しょんがない節」の指導を行った。前半では手順を覚え、後半は座学の「琉歌詞章解説」で学んだ歌詞のイメージと所作を照らし合わせながら、音楽に合わせて全体を通して踊った。

③舞踊・歌三線の成果合同発表(15:30～16:20)

今回の講座で学んだ実技「かぎやで風」「語り組踊」「瓦屋」3演目の成果発表を行った。短期間の受講ではあったが、それぞれの成果が見える発表となった。



(感想)

以前、県費留学OBからリカレント講座の要望があり、今回3日間の短期間ではあったが、座学と実技を合わせて20コマの講義ができたことは、とても嬉しく有意義であった。しかし1日当たりの時間が長かったため、参加者の負担も少し感じられた。今後もこのような講座を継続して行うことで、双方にとって沖縄の文化の普及・継承・発展につながる機会になると改めて感じた。



歌三線ワークショップの様子



歌三線ワークショップの様子



舞踊ワークショップ(化粧)の様子



舞踊ワークショップの様子



歌三線・舞踊合同演奏の様子



歌三線・舞踊合同演奏の様子

### 1-8-3 シラバス及び資料(琉球文化講座部門)

「琉球芸能史講座」「組踊の鑑賞法1、2」シラバス

沖縄県立芸術大学 附属研究所  
鈴木 耕太

#### 1. 授業概要

琉球芸能実技ワークショップのために、関連する琉球芸能について授業を行う。1日目はハワ

イ県費留学生OBを対象として「琉球芸能史概説」、2日目・3日目は、県費留学生OBおよび、一般を対象とした「組踊の鑑賞法」について講義する

授業計画(案)

渡航期間			2018年3月23日(金)～3月26日(月)
*日目	月日	時間	内容
1日目	3月23日(金)	90分×1コマ	1. 琉球芸能史の概説を行う。 ・琉球古典芸能の源流となる「御冠船芸能」の事例 ・組踊の創始と発展 ・近世末期の琉球舞踊 ・明治における琉球芸能の事例
2日目	3月24日(土)	90分×1コマ	1. 組踊の鑑賞法について① ・組踊の歴史について ・組踊の約束事について(役柄・衣裳など)
3日目	3月25日(日)	90分×2コマ	1. 組踊の鑑賞法について② ・組踊の音曲について ・組踊作品の解説(朝薫五番)

受講生への連絡事項

※1日目 定員50名(県費留学生OB対象)、2日目・3日目 定員100名

※2日目・3日目の講座は夜に行います。

「琉球芸能史概説」(3月23日開講：鈴木 耕太)

はじめに

沖縄は1879年に琉球処分が断行され、それ以降、日本の一県として呼称されている。それまでは尚巴志が1429年に琉球を統一し、約450年にわたって「琉球王国」として中国や日本と交易を行いながら、独自の文化を確立していった。芸能もまた、琉球の神々を祀る場、或は人々の喜びを表現したり、心象を表現する歌などによって生まれ、中国や日本との関わり合いの中で発展し、現在伝承されている「琉球芸能」となってきたのである。

本講座では、琉球芸能史を概観し、主に古典芸能と琉球処分以降、発展した雑踊について解説を行う。時間が限られているため、大まかな説明になることを先にお断りしておきたい。

1. 古琉球期(～1609年)

古琉球期とは、薩摩侵攻が起こるまでの琉球の時代区分である。この時代は文献資料が少なく、ことに芸能関係は資料が乏しい。古い記録では『中山世鑑』に「洪武二十五年(1392年)壬申、大明皇帝、賜閩人三十六姓、為紀綱之役。今ノ久米村人ハ、其後胤也。我朝、大明ノ礼楽ヲ用ル事モ、是始。是以、大明大祖皇帝、守礼之邦トハ、称シ給。」とあり、明の礼楽を琉球で始めた歴史記録が見える。しかしながらこの記録は『中山世鑑』が編集された時(1650年)のものとも考えられるので同時代資料ではないことを断っておく。しかし、同じような明の礼楽がもたらされた記録は『中山世譜』(1701年)にも「洪熙紀年之初」、1433年の項目に出ていることから、どうやら中国系の音楽を王府で上演していたであろう、という事がうかがえる。このことから、中国文化を受け入れた王府の「儀礼」にともなう「音楽」が古琉球期に行われていたことがわかる。

冊封は三山時代の1396年の北山王・攀安知の時、もしくは1404年の武寧の時に行われたとされ、琉球王国が統一された第一尚氏、それに続く第二尚氏と、最後の琉球国王となった尚泰まで続いた。近世の資料からは冊封で琉球芸能が供されている事が確認できるため、冊封の始まった頃から、儀礼や宴に芸能が供されていたことが推測できる。『中山世鑑』『中山世

譜』に表れる、明から伝わった「礼楽」は冊封の席で供されたことも可能性が考えられる。

また、芸能の記録と断言することは出来ないが『おもろさうし』にも「舞の手注」の付いているものがある。巻九に散見し、「二ておす」「二てこねる」「おうのきり」など所作を表す間書きがあり、オモロに合わせて所作をしていたことがわかる。琉球舞踊の「こねり」「なより」に通じる可能性がある「こねる」という言葉が、オモロに合わせて舞われていたのであれば、現在の琉球舞踊のように音楽に合わせて踊りを行うことが古琉球（もしくはそれ以前）から行われていたことになる。琉球舞踊の礎となるものが、『おもろさうし』の「舞の手注」のからうかがえる。なお、巻9には35首のおもろが収められており、その中の29首に「舞の手注」が付されている。

次に、現在「御冠船芸能」と呼んでいる冊封の芸能について見ていこう。

古琉球期にはすでに冊封が行われていることは述べたが、古琉球期の冊封使録は尚清王の冊封正使として1534（嘉靖13）年に来琉した陳侃の『使琉球録』が現存する最古の冊封使録である。には「使事紀略」の7月22日の項に「四夷童をして夷曲を歌ひ、夷舞を為さしめ、以て其の觴を侑けしむ。傴僂曲折、亦以て觀るに足る」とあり、4人の童子の踊りが供せられている。また、8月29日の項に「席を水亭中に陳ねて龍舟の戲を觀る」とあり、その内容は「亦、奪標して以て樂と爲すを知る」とある。「奪標」とは「優勝する」という意味もあるので、おそらく龍潭での爬龍船競漕と思われるが、「奪標」という言葉以外「競漕」を意味し得る詳しい表記はみられない。また、それ以外の踊りなどの芸能に相当する記事は見当たらない。

1606（万曆34）年に尚寧王冊封正使として来琉した夏子陽はその記録として『使琉球録』を著している。そこには重陽宴が記されている。この時は夏子陽が事前に断っていたため、陳侃録にみられるような爬龍船での「龍舟の戲」を行なわなかったが、「俱官家子弟各簪花被彩播旗跳躍一唱衆和」とあって、正午には「正午亭中具一飯令夷人爲夷舞復爲夷戲云日本曲調也」とある。このことから、はじめに歌と踊りが行われ、その後も踊りと劇が行なわれたことがわかる。さらに、午後の芸能は日本の曲調であったことがうかがえる。

## 2. 近世琉球期（1609～1879年）

薩摩侵攻によって琉球は薩摩と中国との二重朝貢国家となった。外交として中国・薩摩（日本）両国との関係を保ちながら「琉球処分」が断行される270年間を過ごすことになるのである。

近世琉球においても芸能の資料は乏しい。従って冊封の資料を中心に、当時の芸能がどうあったのかを概観したい。

1663（康熙2）年に行なわれた尚質王冊封の正使、張学礼の『中山紀略』には「舊、例として七宴あり、迎風宴・事竣宴・中秋宴・重陽宴・冬至宴・餞別宴・登舟宴」と七宴の名前が出ている。この年は1700年代以降にみられる論祭宴・冊封宴・拜辞宴・望舟宴の名が見られない。論祭宴・冊封宴という冊封に重要な宴とは別に七宴が設けられたのであろうか。また、「冬至宴」という名から旧曆11月の末頃に当たる冬至にも宴を行なったことも推測できる。「登舟宴」は望舟宴に相当する宴であろう。

その記事に続いて「八月中秋節に、王宴を設く」「鼓樂を設け、走馬・弄刀・刺鎗・舞劍・踰毬・走索の諸戲あり」として芸能らしきものが供された事がうかがえる。この芸能の記事を原田禹雄は「走馬・刀のジャグル・鎗術・劍の舞・蹴鞠・綱渡りの余興があった」と訳している。「走馬」というのは漢語に「馬を走らせる、走ってゆく馬、善く走る馬」という意味があり、「走馬引」という琴曲もある。琴曲の事であろうか。だがここで他の芸能が「弄刀・刺鎗・舞劍」と、記述からは武の舞を想像させられるため、馬術のような芸能であると解釈したほうがよさそうである。「踰毬」は「踰」で「踏む、蹴鞠」を表すので毬を使った芸能、原田のいうように蹴鞠が妥当であろう。琉球では毬を使う芸能として「まりをどり」などが戌の冠船に見られるが、獅子を伴う芸能であり、漢文表記は「獅毬舞」とされる。最後の「走索」は「綱渡り」でよかろう。この年の中秋宴は武術や軽業のような芸能を上演していたことがわかる。



重陽宴には「龍舟を見る」とあり、「中國の午日の競渡は、琉球は重陽に在りて、城西の龍潭にて於てす」と記述されている。内容は舟を五艘浮かべ、「往来飛轉し、金鼓天に震ふ」とある。この記述からも爬龍船の競漕であったとは明言できず、爬龍船での船遊びを観たとも取れよう。それが終わると午後から「幼童百餘人」と「壽星」（寿老人）が出てきて銅鑼・太鼓を鳴らして「衆童子環繞歌舞す」。その衣裳は「内は錦衣を穿ち、外は白綾。半臂に菊花を繡し、以て佳節に應ず」としている。これは爬龍船競漕の後に童子が輪になって踊ることから入子踊が上演された事を物語っている。「壽星」については矢野輝雄の論考（「冠船の寿星」『組踊を聴く』瑞木書房2003年）に詳しく述べられているのでここでは触れない。この年には中秋宴と重陽宴に芸能がみられた事がわかる。張学礼録には「諸戲」と記されているが、その記述されている内容は踊りが主であり、演劇のような芸能は上演されなかったと推測される。

1683（康熙22）年の尚貞王冊封に来琉した汪楫の『使琉球雜録』には中秋宴の記事は見られず、重陽宴が9月13日に行なわれる。「龍潭に於て競渡を觀る」とあって張学礼録同様、「競渡」という文字がみられるが、その内容は、龍潭に3艘の舟を浮かべ、その漕ぎ手と太鼓の打ち手は着飾った王府役人の子供たちである。そして舟を漕ぎながら国王・中国皇帝を褒め称える歌を歌う。「競渡」という言葉は「競漕」と同意だが、この内容からは「船遊び」の意が強い。おそらく陳侃や張学礼もこのような船遊びを観たのであろう。それが終わって「亭午、請ひて劇を円覺寺の右殿に觀る」とあって童子70人余りが踊る。その様子は、年長者10人余りが仮面をかぶって「笛を吹き鼓を撃ち鉦を鳴して前導」し、これに続いて8～15歳の童子が「周圍」して踊る。ここでも入子踊が上演されているのである。「劇」とあるが、ここでも演劇ではなく、入子踊をさしているようだ。

1719（康熙58）年の冊封は冊封副使である徐葆光の著した『中山伝信録』よって、供された一部の芸能をうかがい知ることができる。それによると、芸能の記事がみえるのはそれ以前の冊封と同じく中秋宴からである。中秋宴では「神歌祝頌」から始まり、「笠舞」「花索舞」「籃舞」「拍舞」「武舞」「毬舞」「桿舞」「竿舞」そして「庭中設烟火數十架又令數人頭戴火笠騎假馬頭尾烟爆齊發奔走庭中以爲戲樂」とあり、花火と奏樂で宴が終わっている。ここで演じられた花火を原田禹雄は「數人が頭に火笠をいただき、木馬にのり、頭と尻尾から爆竹が一せいに爆発して、庭中を走りまわる。『戲樂』である」として「戲樂」を演目名としているが、ここでの「以爲戲樂」の「戲樂」には「戯れたのしむ」という意があるので「戲樂を為す」として訳したほうがよく、したがって演目名ではない。そしてこの中秋宴には組踊はない事がわかる。

重陽宴は龍潭での「龍舟の戲」があり、それを見終ってから、場所を首里城北殿に移して踊りなどが行なわれる。ここで徐葆光は「演劇六折アリ。略記スルコト後ノ如シ」として演目を挙げている。第一（折）に「老人祝聖ノ事ノ為」として、現在の長者の大主のような演目から始まり、その中で「一ハ團扇ノ曲、〈六童舞フ〉一ハ掌節ノ曲、〈三童舞フ〉一ハ笠舞ノ曲、〈四童舞フ〉一ハ籃花ノ曲〈三童舞フ〉」という舞踊を上演する。第二（折）に「鶴亀二兒、父ノ仇ヲ復スルノ古事」、第三（折）に「鐘魔ノ事」、第四（折）に「天孫太平ノ歌」として50人余りが輪をなして交互に踊るといふ。張学礼録が「幼童百餘人」、汪楫録が「七十餘人」と時代が下るごとに人数が減少しているが、ここでも入子躍が行われたことがうかがえる。第二と第三には「二童敵討」と「執心鐘入」の上演があったことがわかる。徐葆光の記述では以上の内容が「四折」までとして記されているが、「四折」で演じられた内容を正確に分けると、第一（折）で踊りが五、第二（折）と第三（折）で組踊が二、第四（折）で入子躍の合計八演目である。「折」は国語でいうと時期や機会、又は一つの切れ目を表すが、漢語ではその様な意味ではなく「折」で元雜劇的一幕、一くぎりを意味し、『漢語大辞典』にも「戏曲名词。元明杂剧结构的一个段落称折。〈中略〉明清传奇剧一般分“出（齣）”，也有写作“折”的。其中可单独演出的叫折子戏。后亦指歌舞剧的一幕」（訳：戏曲名词。元明の雜劇の構造的な一段落を折と称す。〈中略〉明清の伝奇劇は一般的に分けると「出（齣）」、または「折」と書かれる。其の中、単独で演出できるものは「折子戲」



と呼び、後または「歌舞劇」的一幕を指す。)とある。「折」は演劇を示す語である。組踊は踊りと曲、台詞が組み合わさったものであるから「折」と表記し、ここでの組踊以外の演目にはいくつかの踊りや音楽が合わさったものが演じられている事から、それも「折」と数えたのである。そのうちの4つのみ「略記」し、残りの2つは略したのである。残りの二折が組踊だったか、それ以外の踊りであったかは記されていないので分からないが、この重陽宴で組踊が初演され、それ以外には舞踊が宴に供された事がうかがえる。

餞別宴では「儀禮前ノ如シ。又国中ノ故事、一二齣ヲ増シテ楽ミヲ爲ス」とあるので「国中ノ故事」を「一二齣」演じたということから、予定していた演目に加えてさらに組踊が1、2番多く演じられていることがうかがえる。この記述から中秋宴・重陽宴同様に舞踊や組踊が供されたことが推測できる。

拝辞宴は「儀禮戲樂ヲ増スコト前ノ如シ」とだけある。組踊や舞踊が行なわれたのであろう。望舟宴は「国王天使館ニ至ツテ宴ヲ設ク」とあり、那覇にある天使館で行なわれた。そこでは「禮前儀ノ如シ」とある。天使館で舞踊や組踊を上演したということがうかがえる。餞別宴・拝辞宴・望舟宴ではそれぞれ中秋宴・重陽宴と同じような内容の踊りや組踊が上覧されたことがうかがえるが、その演目まではわからない。だが、史料からは拝辞宴で組踊が演じられていたことまでは明らかである。

その次の冊封の1756(乾隆21)年には、尚穆王の冊封として正使全魁・副使周煌が来琉している。この時の周煌の著した『琉球国志略』には、徐葆光録と同じく各宴の内容が記されている。中秋宴の舞踊の内容は老人と童子数名が「神歌」を歌い、その後に「笠舞」「花索舞」「花籃舞」「竹拍舞」「武舞」「獅毬舞」「桿舞」を演ずる。舞踊の内容は徐葆光録とほぼ同じであるが「竿舞」がない。そして、「張録に走馬・弄刀・刺鎗・擊劍・踰毬・走索の諸戲有り。今悉く之無し。」(原漢文)とあることから、ここでは以前の冊封(張学礼録)での芸能とは全く違ったものが供されたことを示唆している。また踊りの後に「後に雜劇を演ず。悉く其の国中の故事」(原漢文)とある。「雜劇」とは宋代の演劇で内容は滑稽なものを主としたが、形式的には詠誦・せりふに重点を置き、歌舞も含まれ、物語を上演した。中国演劇は元の時代になって開花時代をむかえる。文学においては唐の詩・宋の詞・元の曲といい、元の曲というのは詩・詞を受け継ぎ発展したもので、曲は上演するために作られた。つまり演劇である。元曲は元の雜劇であり、中国古典劇の代表となった。周煌は中秋宴で観た組踊を、その形式と琉球国の故事を用いた国劇という意味から、自国を代表する戯曲である「雜劇」と表現したのである。

また、重陽宴では龍潭で「龍舟の戲」を観、その後で「龍舟の戲終り、仍ち王府に於て開宴す。座次演劇、中秋宴と同じ。烟火は設ず」(原漢文)とある。爬龍船競漕の記事汪楫録と同様とある。しかし後半の芸能については詳細な記事はない。ここでも「演劇」があったことが記されているので、組踊や舞踊が行なわれた事をうかがわせる。

餞別宴は「座次演劇前の如し」とだけあり、拝辞宴でも「前儀の如し」である。望舟宴は「国王天使館に至りて宴礼を設ける。前儀の如し」と記され、三宴ともに芸能の詳しい記述はみられない。

いったん、1500年代から1700年代の冊封での芸能をまとめると、1500年代の冊封諸宴では、おそらく若衆と思われる舞踊が中秋宴より前の宴に演じられ、重陽宴では龍潭での「龍舟の戲」がみられる。重陽宴での「龍舟の戲」はその後の時代の重陽宴でも通例となったようだ。陳侃録にみられるような中秋宴以前の宴での舞踊は、1600年代の冊封諸宴ではみられない。1600年代の冊封諸宴では張学礼録に中秋宴がみられ、その他は共通して重陽宴に「競渡」と記される「龍舟の戲」とその他の芸能として「諸戲」や「劇」がみられる。これらの芸能は、その内容から入子踊りとみられ、1600年代には龍潭での「龍舟の戲」と入子踊りという重陽宴での上演形式が確立されていたことがうかがえる。そして冊封諸宴では中国演劇等の戯曲は上演されなかったと推測できる。

1700年代の冊封使録でうかがえる諸宴は、1600年代を踏襲して、琉球側で芸能を準備し上演したのは中秋宴のそれからというのが通例となった。中秋宴を比べると、徐葆光録は未だ舞踊のみで構成されているのに対して、周煌録では組踊が上演されたことがうかがえる。また、重陽宴以降は徐葆光録から組踊が毎回の宴でも演じられたことがうかがえる。1700年代の使録では組踊の表記が「演劇」「雑劇」とされ、その数え方も「演劇六折」「國中ノ故事、一二齣」と表されている。犬飼公之は「演劇」について冊封使が「組踊を含む催しの全体は等しく『演劇』ととらえられたといえよう」と述べている。組踊のみの場合に「雑劇」と記されているのは揺るがないが、犬飼のいうように舞踊と組踊を含めて「演劇」なのではなく、舞踊の場合は「笠舞」のように舞踊名を記している。徐葆光録の中秋宴、周煌録の重陽宴にみられるように、いくつかの歌や踊り(そのほかに入子踊などにみられる神歌なども含める)が組み合わせられた芸能を「演劇」とし、同様に踊りと曲、台詞が組み合わせられて構成される組踊も「演劇」としているとも考えられないか。冊封使録の「雑劇」という表記から、冊封使は組踊を中国の正式な戯曲と同等として訳している事がうかがえるのである。

1800(嘉慶5)年(以下、申年とする)、1808(嘉慶13)年、(以下、辰年とする)1838(道光18)年(以下、戌年とする)、1866(同治5)年(以下、寅年とする)の4回行なわれた冊封の諸演に、どの組踊作品が上演されたかというのは、各冊封使録には記載が無い。だが、戌年の『冠船躍方日記』(以下『躍方日記』とする。)に申年・辰年・戌年の演目が記されている。寅年については、『躍方日記』のような史料は現存していないが、その他の御冠船史料でうかがい知る事ができる。

申年は乾隆帝崩御のために琉球側では芸能を準備していたが、中秋宴・重陽宴などの芸能上覧を副使である李鼎元の記録を見ると断っていることがうかがえる。よって『躍方日記』の申年の演目は上覧に供されず、上演予定演目であった事がわかる。『躍方日記』を見ると申年の冊封に倣って辰年・戌年の演目を決めているので、戌年の資料ではあるが、そこに記された前二回の記録は信頼性が高いと思われる。ただ、演目が冊封諸宴のどこで演じられたかという詳細な記載は戌年以外見当たらない。だが、冊封諸宴と御膳進上では演目が分けて記載されている。また、『躍方日記』には戌年の冊封諸演以外に弁ヶ嶽遊覧や御膳進上の演目まで記されており、戌年の冊封における諸宴以外での組踊の上演の場を知る事ができ、貴重である。以下『躍方日記』に見られる申年・辰年・戌年の組踊の演目を表でみてみよう。

表にまとめると、共通して冊封諸宴には13演目、御膳進上には7演目上演していることがわかる。『躍方日記』にみられる申年の演目は、「嘉慶四年〈中略〉の踊方の一節として、次の記録がある」として當間一郎も紹介している。それには「新古組踊番数御用ニ付書調先達而評定江差置候処今日左之通拾参番仕組方被仰付候事／一 銘苺子 玉城親方、一 執心鐘入 玉城親方、一 巡見官 平敷親雲上、一 義臣物語 田里親雲上 一 忠孝婦人 久手堅親雲上、一 北山崩 田里親雲上、一 萬歳敵討 田里親雲上、一 女物狂 玉城親方 一 護佐丸敵討 玉城親方、一 孝行之巻 玉城親方、一 大城崩 田里親雲上、一 東辺名夜討 徳嶺親雲上、一 忠臣身替之巻 辺土名親雲上」とある。この資料の番組数と演目が同じである事からも、『躍方日記』にみる申年の演目は間違い無い。冊封の際に演じられる13演目・御膳進上の7演目というのは申年から通例となり、後の辰年・戌年と踏襲されているのである。

組踊については以上見てきたように、冊封の芸能として供されていることがわかる。舞踊については戌年の『躍方日記』に「入子躍」「扇子おどり」「女笠おどり」「麾おどり」「経掛おどり」「手拍子おどり」「貫花おどり」「扇子踊 二才」「しゅどん躍」「若衆笠おどり」「団羽躍」「鞆鼓おどり」「四ッ竹躍」「柳躍」「老人老女躍」「菊見おどり」「天川おどり」が見え、その他に「唐棒」「まりおどり」「獅子舞」がある。「手拍子おどり」は1922年発刊の『沖繩民謡集』上巻には「大兼久節」で踊られる踊りとあるが、『琉球戯曲集』には見られない踊りであるので判然としない。『琉球戯曲集』

には「女笠おどり(伊野波節)」「天川おどり」「団扇おどり」がみえる。琉球舞踊(羽踊)の記録は少ないので『躍方日記』の記載が貴重なものとなる。『躍方日記』に見られる踊りのうち「入子躍」「菊見おどり」「鞆鼓おどり」「手拍子おどり」以外は現在も琉球古典舞踊で見られるような踊りと少なからず関係があるものとして考えて良いだろう。特に「古典女七踊り」と称される「かせかけ」「諸屯」「天川」「貫花」「伊野波節」「作田」などは戌の御冠船から上演が確認されている。

以上が冊封に供されたおおよその芸能であるが、もう一方に「江戸立」の際に供された芸能がある。「江戸立」の際には「楽童子」と呼ばれる、元服前の若者が芸能を見せる習わしがあった。1682年の慶賀使は江戸城の白書院で演奏した内容の記録が残っている。そこには「太平楽」「万歳楽」「難無楽」「唐歌」「三線歌」とあって、「太平楽」「万歳楽」「難無楽」は現在の「御座楽」のような中国式の音楽、「唐歌」は唐の歌、「三線楽」は琉球古典音楽である事が想像できる。その後も家譜によれば、薩摩や江戸で「琉歌三線」を演奏している士族の記録が散見される。1764年には湧川朝喬らが江戸での御膳進上の際に「音楽」「唐戯」「球戯」を上演した記録が家譜に見えるも、詳細な内容は詳らかに出来ない。このとき、同行した魏猷芝・金有華・葛世切の家譜には「奏音楽唐舞球踊」「奏楽併琉躍三番」と出てきている。1832年には江戸芝白金の島津邸で行われた奏楽の様子が、肥後熊本細川藩の御用絵師杉谷幸直によって記されている。この中には現在の琉球古典舞踊を彷彿とさせる演目も見られる。近世、大和において上演された芸能は、中国音楽と琉球古典音楽、そして琉球舞踊を確認できる。しかし組踊を上演した記録は見られない。

### 3. 「琉球処分」以降(1879年～)

1879年に琉球処分が断行され、首里王府は瓦解した。これまで芸能を担ってきたのは士族の男性で、公務として芸能を行ってきたのはこれまで見てきたかぎりである。王府の瓦解とともに職を失った士族の中から、那覇に下りて芸能を見せる者が出てくるようになる。もともとは空き地に柵をめぐらせ、かます(カマジー)を掛けて目隠しにした仮小屋で演目を見せていたといわれる。これを「カマジー芝居」と呼んでいた。1892年(明治25年)には那覇の仲毛に本建築の芝居小屋「仲毛演芸場」が開場し、本格的な芝居小屋を中心に、琉球芸能が上演されていくようになる。この時期について殆ど資料が残っていないのが現状である。名優達の芸談などを紐解いていくと、「カマジー芝居」と「仲毛演芸場」などの初期には古典舞踊や組踊を演じていたが、だんだんと観客に飽きられ、芝居調の演劇「うやんまあ」などが登場し始めたという。「うやんまあ」は抑揚のある唱えと民謡が用いられている芝居で、組踊から方言せりふ劇、沖縄歌劇へと移行する過渡期に生まれた作品と言われている。その名告りから「ワンドタリー調」とも称される演劇である。

いっぽう、組踊の仇討物がよく上演され、芝居小屋で生まれた作品や、新聞に台本が掲載されることで、それを上演する芝居小屋も出てきた。その仇討物の組踊から、「琉球史劇」という作品が生まれてくるのも、明治の20年代から30年代にかけてである。新聞が現存している明治30年にはすでに芝居小屋での常打ち公演を「中座」「沖縄座」「球陽座」などが行っており、演目も雑踊を前舞踊として、芝居や史劇を上演している。例えば、1898年(明治31年)10月21日の「琉球新報」には、仲毛芝居の劇評が掲載されている。それによると組踊「八重瀬(忠臣身替之巻)」と舞踊が上演されている。舞踊については「若衆踊」「女踊」「二才踊」「女雑踊」「越来踊」「猿踊」などと記され、すでに「雑踊」の文字が見えていることを鑑みると、「古典」という言葉の明記はないけれども、明治時代の感覚として、すでに「王府時代の踊り」と「新時代の踊り」とを分けている事がうかがえる。因みに、先に挙げた演目の劇評を順番通りに示すと、以下のようになる。「同躍は十二歳位若/手連中が勤めるから、何となく子供らしき所無邪/気の所可愛。」「同躍は顔を余り上げ過ぎた/り、流し目に見物人を見たりするところは女らしき性/質に似合わず、何となく奥ゆかしき所優しき所が欠/けたるの観あるのみかは一に芸に精を入れざ



／るの証拠と成て、観客の感情を傷ふの虞あれは注／意すべし。」「同躍は可なりの出来なれど／もちと男らしく活発に勤めたきもの成り。」「麦藁の笠を眉深に冠り紺飛白の大と縞の着／物を着け手に紅色の華美の手拭を持って躍る所貴／顕令壤【嬢カ】の装束の如く田舎めきたる所にはちと欠／たるに似たり。」「同躍の女の役を勤めし若男／はちと下手の様に見受けたり。」とあって、本文中に「麦藁の笠を眉深に冠り」とあることから、「女雑踊」はむんじゅると思われる。しかし着物が現在のもとの異なるように感じられる。すでに明治30年代にはある程度の数の雑踊が創作されていたことは、劇評からうかがい知ることが出来る。明治期～戦前期は、初めこそ琉球芸能が中心となった上演であったが、時代が下るにつれて琉球芸能だけでなく、大和の壮士芝居やオペレッタの上演、蓄音機や幻灯機、無声映画の上演などが相次ぎ、沖縄芝居や琉球古典芸能は次第に上演する回数が減っていく。そして日本は太平洋戦争へと道をたどり、それに伴うようにして上演される作品も戦争にちなんだものに限られて行くようになり、ついには沖縄戦が始まり、多くの人名と文化が灰燼に帰す、という流れである。

琉球芸能は冊封の宴席に上演するために発展し、大和との関係の中では中国音楽を中心とした奏楽が行われ、琉球舞踊も上演された。明治期に入ると古典芸能も上演されるが、雑踊・沖縄芝居・琉球歌劇・史劇が登場し、他の娯楽と競争しながら、琉球芸能は現在へと伝承されていくのである。

#### 一般向け講座「組踊の観賞法①」(3月24日開講：鈴木 耕太)

##### 1. 組踊とは

初めに、組踊を見たことがない、どのような芸能なのか分からない、という方のために、本講座では1回目に組踊の歴史について簡単に触れ、その後、映像で組踊作品をご覧ください。そして、翌日行われる2回目で組踊を鑑賞するために必要な、組踊の約束事などを紹介します。

組踊とは1719年に行われた尚敬王の冊封の時に初演されました。(冊封とは中国皇帝から「琉球国の王である」ことを承認してもらう儀礼。この儀礼を行うために、皇帝の名代となる冊封正使・副使が任命され、おもに福建省から多いときで600人あまりの役人などがやってきました。)

創作した人物は向受祐(しょうじゅゆう)、玉城朝薫という人物です。玉城朝薫は琉球の士族で、薩摩や江戸へ7回赴き、そこで芸能を見せるなど、琉球芸能や大和芸能に造詣の深い人物だったことが彼の家譜から読み取れます。

その際に、冊封の「躍奉行」に任命され、朝薫は琉球古典語・琉球古典音楽・琉球舞踊の所作を取り入れ、「組踊」を創作しました。この形式というのはオペラなどの「総合芸術」と同じです。

それまで琉球には独自の演劇がなかったことから、この組踊の創作(誕生)は琉球の正史『球陽』に「首里の向受祐(玉城親雲上朝薫)は、博く技芸に通ず。命じて戯師と為し、始めて本国の故事を以て戯を作り、人に教へ、次年演戯して、冊封天使の宴席に供せしむ。其の戯、此れよりして始まる」と記されています。新たな芸能を創作した、という記事はこの朝薫の記事以外には見られないことから、朝薫が組踊を創作したことは、琉球王国にとっても重要な出来事であったことがわかります。

朝薫は1719年に「護佐丸敵討」「執心鐘入」「銘苺子」「女物狂」「孝行之巻」の5作品を創作し、これを後に「朝薫の五番」と称して、他の組踊と区別しています。

組踊は1719年に初演された後、冊封の宴席では欠かすことの出来ない芸能として演じられていきます。1756年の尚穆王冊封、1800年の尚温王冊封、1808年の尚灝王冊封、1838年の尚育王冊封、1866年の尚泰王冊封と、合計で6度の冊封の舞台に供されました。組踊は、冊封が行われる度に新たな演目が創作され、また、朝薫が作った「五番」も必ずその上演には



取り入れられていきました。

1879年に「琉球処分」が断行され、琉球王国が終わりを告げると、芸能にも新しい時代の流れがやってきます。これまで琉球芸能は、士族の男性が、公務において披露することがあるため、各士族の家で学ばれ、公私の大切な場で披露されてきました。しかし、琉球の封建社会が倒れたため、王府からの禄を失った士族達の中から、芸能に秀でた者達が市井に下り、簡単な無天蓋の小屋で芸能を見せるようになります。商業演劇の始まりです。芝居小屋で初めは古典音楽・古典舞踊・組踊を演じていましたが、時代を経るごとに新たな「沖縄芝居」や他の芸能に押され、組踊は旧正月の公演や、特別な人物が来県した際など、定期的な上演から不定期な上演へと変わっていきます。そして、沖縄だけで上演されていた組踊は、1936年に初めて東京で上演されることとなるのです。東京でのこの公演は多くの文化人の目に触れることとなり、成功裏に終えますが、この公演の後に組踊が東京において戦前(1945年以前)に上演されることはありませんでした。また、沖縄においても組踊が芝居小屋で常打ちされることもありませんでした。

戦後の沖縄は米軍政府の統治下におかれます。公営の劇団が組織され、「文化部に於ては沖縄の歌と舞踊を中心とする演芸会を各地に巡回開催し幕合を利用して宣伝事項を発表し以て人心の安定、生活の更新、趣味の向上を図らんとす。各地区の御支援を給わり度。(當山正堅)」沖縄各地で組踊や舞踊、芝居を上演しました。そして、1967年には「朝薫五番」が琉球政府の重要無形文化財に指定され、日本復帰と共に日本の重要無形文化財に指定されます。その後は2004年に「国立劇場おきなわ」が沖縄県浦添市に開場します。日本の国立劇場はこれを合わせて6件あり、沖縄の国立劇場は組踊を含めた琉球芸能を上演するための施設として建設されました。組踊の定期公演と琉球芸能を上演する劇場として運営されています。

2005年からは組踊に関する芸能家が人間国宝に認定されます。2005年に組踊音楽歌三線に城間徳太郎氏、2006年に組踊立方で宮城能鳳、2011年に組踊音楽歌三線に西江喜春氏、2017年組踊音楽太鼓に比嘉聰氏が認定されます。そして組踊は2010年に「ユネスコ無形文化遺産」に登録されます。日本だけでなく、世界の大切な文化として認知されたのです。組踊の立方、地謡(演奏者)は日本の伝統芸能の中でも認められるようになりました。

組踊という芸能は、近世の封建社会の中で誕生しました。戯曲の内容はすべてフィクションであり、史実や事実を描いた作品はありません。現在は70作品ほど近世に創作されたと思われる作品が現存しており、その中でも作品の多くは敵討物が占めています。敵討物は勧善懲悪の内容になっていて、多くの作品は按司(琉球の地域をかつて治めていた大名のような存在)が自身の悪臣に弑され、生き残った按司の子がその家臣と共に力を合わせて仇を討つ、という作品です。組踊の中では「護佐丸敵討」(二童敵討)、「萬歳敵討」「久志之若按司」「忠臣身替の巻」「大川敵討」「姉妹敵討」などが挙げられます。また、この作品群には大和芸能の影響が多く見られる作品もあります。この敵討物の次に作品の多いものは「孝行物」と呼ばれる作品です。孝行者の子どもの孝心や思いで天変地異が回避されたり、いじめる気持ちが変わり、幸せな状況を呼び込んだり刷る作品です。代表的な作品に「孝行之巻」「孝女布晒」「雪払」などがあります。その他の作品には「世話物」があげられます。このジャンルには恋愛や家族愛などの情愛を題材にしたものがあり、人気の高い作品が多く含まれます。「手水の縁」「花売の縁」「銘苅子」「女物狂」などが代表的な作品です。それから、組踊の敵討物の中に、仇を討たない作品があります。研究者によっては「敵討後日譚」と言ったりしていますが、わたしはこのジャンルを「和睦物」としています。作品の内容は共通していて、争い合う者が和解したり、仇相手を許したりする作品です。代表作には「義臣物語」「大城崩」「二山和睦」などが挙げられます。

組踊の作品の多くは「儒教道徳」を描いています。「忠孝節義」の物語を演じているのです。仇討物が多く組踊に表現されているのは、作品の内容がわかりやすく、儒教道徳が描きやすいからです。孝行物が多いのも同じ理由からです。近世琉球は封建社会で、儒教道徳を重ん

じる環境でした。また、組踊は中国からの使者に対して、「琉球はこのように儒教道徳に関心が高く、またそれを実践した者の物語が演劇として上演されているのだ」とアピールするものであったと考えられます。特に仇討物に関して言えば、琉球の歴史には仇討ちの史実は遺されていません。仇討ちそのものが史実として行われていない琉球で多くの仇討物の芸能が遺されることこそ、当時の守るべき徳目としての「仇討ち」言い換えれば男子の「孝行」としての「仇討ち」を表象するための演劇として組踊が演じられていた、とも考えられます。

実際に組踊「執心鐘入」を見てみましょう。時間の都合上、前半部分のみとなりますが、役によって台詞の唱えが異なること、音楽の用い方が通常の琉球古典音楽と異なること、採物などに注意してご覧下さい。

いかがでしたでしょうか。日本の能や歌舞伎に近い、と感じた方も多いと思いますが、実際、組踊はそれらの近世における日本芸能の影響は受けながらも、独自の芸能として発展しています。明日行われる2回目の講義では、組踊の約束事やその魅力についてお話ししたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

## 一般向け講座「組踊の鑑賞法②」(3月25日開講：鈴木 耕太)

### 2. 組踊を見てみよう

本日は昨日行われた講座の続きです。本講座からお聞きになる方には、ややわかりづらい面もあるかと思いますが、後半には組踊の映像も用意していますので、どうぞ楽しみながらお聞きいただければ嬉しく思います。

組踊の上演されていた近世の舞台は、現在の琉球舞踊などの琉球芸能を演じていた舞台とは異なります。大きさも決められていて、「三間四方」である事が資料によりわかっています。現在の国立劇場おきなわは四間四方ですが、正方形の舞台の他に、特徴的な要素を持っています。まず、舞台の背景は「紅型幕」という幕が引かれており、地謡はその幕内で演奏します。いわゆる上演中は観客から見えないところで演奏をする、ということになるのです。そして、舞台に向かって左側には長い廊下がついており、「橋掛り」と呼んでいて、主役や身分の高い役の者が登退場を使用します。組踊は役者の登退場は3箇所で行っていました。橋掛かりと上手幕、下手幕です。現在ではそれを忠実に守った演出で上演する事は希です。現在の多くの組踊上演は上手と下手に別れ、登退場を行っています。

次に、組踊に登場する役柄について説明します。組踊や琉球舞踊は、琉球王国時代、すべて男性によって演じられていました。男性の芸能です。組踊では男性役・女性役・子ども・猿・鬼などさまざまな役が登場しますが、すべて男性が演じていました。現在は女性による組踊公演・琉球舞踊公演も行われ、演じ手(立方)の性別には縛りがあるわけではありません。しかし、琉球舞踊の立方の日本の無形文化財保持者は女性でも指定されるのに対し、組踊の立方の無形文化財保持者は男性のみに限られているところに違いがあります。

組踊の役の男性役について紹介します。男性役はその作品中の身分によって名前が変わります。「按司」と呼ばれる大名役、その下の位の「大主」と呼ばれる家臣のリーダー的存在の役、「比屋」と呼ばれる中間管理職的な役、「子」と呼ばれる下級役人、「下庫理」「村頭」などの地方役人の役、あとは農夫の役や掃除人の役などさまざまな役が受け持つ「間の者」という役があります。そして、按司の息子である「若按司」という役もあります。以上は敵討物に多く出てくる役です。その他に男性の役として「座主」(僧侶)と「小僧」も登場します。男性役は写真で見ると、役の位によって衣裳や唱えが異なります。衣裳と唱えについては後述します。

女性の役についてはとてもシンプルです。「母」と呼ばれる役と「娘」です。年増の女性か年若い女性かの2種類です。女性役でもこの2者で唱えが変わってきます。

子役については「おめなり」という女の子の役、「おめけり」という男の子の役があり、このような名前のついている役は作品において重要な役になります。それ以外の子役は性別の指示のな

い「童」の役があります。「おめなり」「おめけり」と「童」の違いは衣裳です。唱えは大きく変わる事はありませんが、「おめなり」「おめけり」は紅型衣裳や「こしらへ」という髪飾りなどを着用します。「童」は無地の一重衣裳で、必ず複数で登場します。

ここに「若按司」も立項していますが、「若按司」は作品によって子どもであったり成人していたりと、身分を表す役名ですので子どもの若按司が登場する作品も多くあります。

つぎに、人以外の役についてお話ししましょう。組踊の中でよく知られている役に「猿」が挙げられます。これは「花売の縁」という作品に登場します。張り子で出来た面を被り、芸づくしを披露します。そして「執心鐘入」に登場する「鬼」も有名です。こちらも木製の般若面を被ります。「孝行之巻」には「龍」が登場します。「大城崩」には「犬」が登場します。以上の役は人が役になりきり、面を被るか、人が入らずモノでくられているという決まりがあります。人間以外の役は人の顔を見せない、もしくはモノで作る、という事です。しかし、別の決まり事もあります。「幽霊」です。幽霊はもちろん人間が役を演じますが、面は付けません。衣裳に特徴があり、白襦袢で登場します。しかし、唱えはありません。

次に、衣裳を見ていきましょう。組踊は役によって衣裳に特徴があります。まずは男性から。「按司」「大主」といった身分の高い人物は羽織、太刀、入道頭巾を被ります。そして「按司」は「大団扇」という軍配団扇の形をした大きな団扇を持っています。「按司」の衣裳は豪華で、金襴・緞子という厚みがあり、輝くような素材が用いられています。「大主」は按司におとりますが、羽織を着て太刀を差しています。

「比屋」や「子」の位の役は、無地の単衣の衣裳に薄い羽織を着る、もしくは一重の色衣裳のまま登場します。役によっては刀を一本だけ差しています。「按司」「大主」「比屋」「子」はいずれも金の「向立」を着けています。身分によってデザインが事なり、位が高くなるにつれて複雑で派手なデザインに、身分が低くなればシンプルで小さな物になります。

「若按司」の多くは半向頭巾を着け、紅型の振袖衣裳を着ています。そして引羽織を着ています。

女性の衣裳は紅型の打ち掛けを着た衣裳です。現在の組踊では、母親役はその紅型衣裳の上から、無地の打ち掛けを着ることが多いです。年齢を重ねた女性と、若い女性で見た目にわかるように工夫されています。しかし、近世の台本を見るとそのような年齢差を示すような衣裳の着付けを指定したものはありません。現代になって工夫された演出と考えられます。

身分の低い男性の衣裳は共通しています。「供」や「下庫理」「村頭」などは黒の一重衣裳に黒の入道頭巾を被って登場します。同じ舞台上に「供」や「下庫理」が出ると、一見、見分けがつかずません。

次に大道具です。大きい舞台装置は「松」の木、「鐘」「祭壇」「芦屋」などがあります。小道具には「きやうちやく」と呼ばれる黒漆が塗られた椅子、笠と杖、花、人形、酒具などがあります。組踊は以外と多くの小道具が使用される演劇ともいえます。

以上見てきたように、組踊は見た目に役の位がわかるようになっています。ただ、問題なのは、敵討物の場合、2つの勢力が対立しますが、善き方の按司も、悪役の按司も同じ着付けをします。「大主」や「比屋」なども同じです。したがって、どちらが主役の方(言い換えれば応援しなければいけない方)なのかを判断するためにはその台詞をよく聞いていなければならない、という事になります。

次に組踊の唱えについて見ていきましょう。見た目でも役がわかる組踊ですが、その唱えにも特徴があります。基本的に音数が「8/8/8/6」の30音を基調とした「琉歌形式」なのが特徴です。長い台詞は「8/8/8/8/8/8.../6」とするのが基本です。唱えは「吟使い」(じんじけー)と言います。男性の唱え方には大きく2つあり、力強く、ゆったりした口調で1句1句を重々しく唱える「強吟」(ちゅうじん)があります。この「吟使い」は猛々しい按司、とくに「二童敵討」の「あまおへ」の唱え等で聞くことができます。また、通常の按司の唱えを、「地吟」(じじん)や「和吟」(わじん)と言います。また、他に「底吟」(すくじん)という腹の底から出すような



唱えもあります。その他に、間の者の唱えがあります。組踊の唱えはすべて抑揚がありますが、間の者の唱えは口語的で音数律にとられないのが特徴です。

そして、女性の唱えを「女吟」(うんなじん)といいます。人によってはこれを「和吟」と言ったりする人もいます。柔らかな唱え方で、流れるように抑揚をつけます。この「女吟」は役柄の年齢が高くなるにつれてゆっくりと唱えるという決まりがあります。

若衆の唱えは「若衆吟」(わかしゅうじん)といいます。「女吟」と唱えの抑揚は同じですが、唱えるスピードは速く、一語一語をしっかりと発音するように唱えます。

次に、音楽についてみてみましょう。組踊には「手事」(ていぐとう)というインストゥルメンタルの曲があります。琉球古典音楽は「歌三線」というように、かならず音楽に歌詞(歌)がついていて、歌を伴って演奏します。しかし、組踊には歌の入らない、役者の登退場の時に奏でる曲があります。これを「手事」というのです。按司役の登退場の際に奏でられるのが「按司手事」高音で優雅な旋律の曲です。若按司の登退場には「若按司手事」が奏されます。華々しく、テンポの早い曲です。大主演の登退場には「大主手事」が奏されます。どっしりとした、威厳のある旋律の曲です。各手事は役柄の身分に合わせた曲想であると考えられます。

また、組踊は場面によって奏される節がある程度決まっています。たとえば、「道行」という、ある場所からある場所へ移動する場面に奏でられる曲は、感情によって左右されるようになっています。たとえば特に際立った感情がなく、平常心で移動する際には「金武節」がよく上演されます。しかし、道行が悲しいものであったときは(追われている、など)、仲間節や子持節という楽曲になることがあります。また、「口説」という曲も敵討物では良く用いられます。再会の際には「東江節」という曲が用いられます。この曲は上句と下句の間に「あーきー」(あきさみよー)という感嘆詞になっていて、「あーきー、生きち居ため」(ああ、生きていたのか)とか、「あーきー、今の引き合わせや 夢がやよら」(ああ、このような再会は夢であろうか)というような歌詞で歌われます。この「東江節」は玉城朝薫の作品である「五番」に取り入れられており、組踊の常套手段の演出として他の作品にも取り入れられていったと考えられます。幕入りには二揚調子の立雲節などが奏されます。台詞には「踊て戻ら」(うどうていむどうら)(踊って戻ろう)という内容が唱えられ、華やかな曲とともに幕入りになります。組踊はすべてハッピーエンドで終わる演劇なのです。

その他に、所作としての決まり事があります。舞台を廻ると、遠くまで来た、という表現になります。例えば、一周することで首里から名護、もう一周で名護から国頭、というふうにして少しの所作で物語の表現の幅を広げているのです。小道具の笠と杖はそれを用いることで「道行」、つまり旅支度を表しています。そして、笠を被っている人物は、その顔が一切相手には見えない、という決まり事があります。そして、お互いが片方の手を相手に差し出し、ゆっくりと座る、という所作は、抱き合うという意味合いがあります。そして、仇討物で行われる合戦の場面にも組踊特有の表現があります。斬り合いの最後は必ず幕内で行われ、舞台の上には死体は転がりません。そして、能と違うところは回想シーンを演じない、過去を演じない、という事です。

その他、組踊にはここで説明できない約束事や決まり事があります。組踊は他の日本の芸能とは異なる組踊の「型」があり、それを知ることによって、より組踊を鑑賞する楽しみが増えます。組踊は所作や表情を「作りすぎない」芸能です。舞台背景も場面で変わりません。見る私たちが約束事を理解し、頭の中で想像しながら楽しむ芸能です。これは、琉球舞踊や琉球古典音楽にも共通する鑑賞方法です。

この講座が、みなさんの琉球芸能を楽しむきっかけになると嬉しいです。ご清聴ありがとうございました。

リカレント講座を終えて 鈴木 耕太(沖縄県立芸術大学附属研究所)

今回のリカレント教育講座において、筆者は県費留学修了生対象の講座「琉球芸能史概説」と



一般市民向け講座「組踊の鑑賞法Ⅰ」「組踊の鑑賞法Ⅱ」の3つの講座を担当した。

「琉球芸能史概説」では、はじめに文献資料に表れる芸能の事例を挙げ、解説した。それは明から「礼楽」が伝わったとされる『中山世鑑』の記事と、『おもろさうし』巻九にみられる「舞の手注」である。「礼楽」および「舞の手注」は具体的な芸能がどのようなものであるかは明確に出来ないが、芸能そのものが文献に記載されている古い例である。受講者には凡そ500年前の琉球芸能を空想してもらえるように配慮したつもりである。特に「舞の手注」については、会場にいらっしやった比嘉いずみ先生の所作を見ていただき、現在の琉球舞踊に同じような表現がある事を実演していただいた。その後は、「琉球古典芸能」の祖となった「御冠船芸能」について、冊封使の記録を紹介し、どのように変遷していったのかを概説した。反省点はスライドに写真を多く掲載したかったが、漢文が多く、またその英訳を掲載できていなかった事である。通訳の村田グラント・サンダー先生の実演家にわかりやすい英訳のおかげで成功したと言える。誠に感謝である。

市民向け講座の「組踊の鑑賞法Ⅰ」では、組踊の歴史に触れ、組踊という芸能の現存作品数および、そのジャンルなどについて概説した。内容の紹介ではなく、「組踊」という芸能がどのように生まれ、現在の日本、沖縄、世界でどのように評価されている芸能なのかを知ってもらうことに努めたつもりである。後半は「執心鐘入」の2場面を見ていただいた。参加していたみなさんの中には組踊を観劇したことのある方もいたので、その点に助けられた。

最終日に行った「組踊の鑑賞法Ⅱ」では、「古典劇」である組踊の約束事について解説した。実際に組踊を鑑賞したとしても、多くの方は組踊における「型」を知らないことが殆どである。本講座では、組踊の役の違い、役柄による唱えの違い、定型のせりふと不定型のせりふの違い、小道具の役割、大道具の役割、音楽の役割、所作の役割について解説を行った。特に、役柄の違いは写真を提示し、見てわかる違いについて解説した。また、せりふの違いは実際の唱えを聞かせ、唱えで役柄が異なることを解説した。

組踊の解説については、時間内に多くの内容を話しすぎた感が否めなかった。また、役名や小道具などの読み方をローマ字表記したが、その意味についても英語で表記できなかったのは反省すべき点である。複数回に分けて、初心者向けの充実した講座が開講できるよう、今後は改善していきたい。

最後に、私の拙い解説を翻訳してくれた村田グラント・サンダー先生に感謝申し上げる。芸能を長く実践してきたサンダー先生だからこそ、私の難解な芸能の用語を、ハワイの人、またハワイの実演家にわかりやすく、捉えやすく翻訳されており、会場の人々の理解度が高かったのはひとえにサンダー先生の通訳の賜であると実感している。今後ともハワイだけでなく世界のウチナーンチュに琉球文化を届けるような仕事をしていきたい。

#### 「舞踊琉歌詞章解説講座」シラバス

沖縄県立芸術大学 附属研究所客員教授  
波照間 永吉

#### 1. 授業概要

ハワイ県費留学生OBを対象とした「琉球舞踊リカレント授業」の実技ワークショップに連動して、これらの演目で謡われる詞章（琉歌歌詞）について詳しく解説する。地方・立方ともに、歌われる詞章の意味を十分に理解することは、技芸の伸張に深く関わることである。県費留学生を含めて琉球芸能に関わる人々にとっては、そのような部分についての補強のニーズがあるものと思う。この講座を通じて、琉球古典語についての基礎知識を涵養して貰うと同時に、当該歌謡についても深く理解して貰えるよう努めたい。

授業計画(案)

渡航期間			2018年3月23日(金)～3月26日(月)
*日目	月日	時間	内容
1日目	3月23日(金)	90分×1コマ	琉球古典語概説。琉球語のなかの琉球古典語、オモロ語・琉歌・組踊語について。琉歌・組踊語の発音について。(前半45分)
			「かぎやで風」歌詞の詞章研究。各語の語義と文法について。通釈、鑑賞。(後半45分)
2日目	3月24日(土)	90分×1コマ	「瓦屋節」の詞章研究。 出羽「できややうおしつれて眺めやり遊ば けふや名に立ちゆる十五夜でだいもの」の各語の語義と文法について。通釈。 中踊「おすかぜもけふや心あてさらめ 雲はれて照らす月のきよらさ」の各語の語義と文法について。通釈。 入羽「月も眺めたいできやよ立ち戻ら 里やわが宿に待ちゆらだいもの」の各語の語義と文法について。通釈。 ※『琉歌全集』では「急ぎ」。
3日目	3月25日(日)	90分×1コマ	「諸鈍」の詞章研究。 出羽「思事のあてもよそに語られめ 面影とつれて忍で拝ま」の各語の語義と文法について。通釈。 中踊「枕ならべたる夢のつれなさや 月やいりさがて冬の夜半」の各語の語義と文法について。通釈。 入羽「別て面影の立たばぬきめしやうれ なれし句袖にうつちあもの」の各語の語義と文法について。通釈。

受講生への連絡事項

※定員50名(県費留学生OB 対象)

「瓦屋節」・「かぎやで風節」の歌詞の解釈について(3月23日～25日開講:波照間 永吉)

1、琉歌について

琉歌は世界の文学でいう「叙情詩」である。日本では古代の「万葉集」(759年の歌が最後)の歌はすでに抒情歌であった。琉球文学でこれが明確に示されるのは、奄美・沖縄の北琉球では「琉歌」・「島唄」であり、宮古では「トーガニ」、八重山では「節歌」、「トゥバラーマ」である。抒情文学というのは個人の心中に起こる喜怒哀楽、すなわち感情を詩的に表現したものである。つまり、作者の心の中に生起する様々な感情・感動や思念を言語表現した作品と言うことになる。ただ、琉球文学における抒情文学の始まりは、民衆の生活の中で誕生した。すなわち、民謡という形での出現である。したがって特定の作者はわからない。社会そのものが作者である。それが、沖縄・奄美諸島の北琉球では8・8・8・6音の4句30音で構成される琉歌の短歌形式の歌として、宮古・八重山の南琉球では、特定の音数律を持たない短詞形の歌として、それぞれの地域で歌い伝えられてきたのである。

皆さんご存知の「ティンサグヌ花」の歌詞「ティンサグヌ ハナヤ/ツイミサチニ スミティ/ウヤヌ ユシグトウヤ/チムニ スミリ」は8・8・8・6音である。「カジヤディフウ」は「キユヌ フクラシャヤ/ナヲウニジャナ タティル/ツイブディヲル ハナヌ/ツイユ チャタ グトウ」でこれも8・8・8・6音である。このように皆さんが何気なく歌ってこれらたわらべ歌や古典の歌詞は、誰が作ったかは分からないながらも、この一つの形式にのっとってつくられている。これこそが琉球の文学の伝統であった。宮古のトーガニや八重山のトゥバラーマはまだ音数律が定まっていないが、これらの歌謡の音数律は和歌の5・7・5・7・7とは明らかに異なる。和歌とは全然別な伝統から生まれてきたものであることは、その音数律からも明らかである。

さて、その北琉球の8・8・8・6音形式の歌を「琉歌」と称しているのが、これは最

初からそう呼ばれていたわけではない。「琉歌」という呼称が使われるようになるのは、おそらく、大和の歌、すなわち和歌や、唐の歌、すなわち漢詩・唐歌などとの区別が必要になったからであろう。これについては、伊波普猷はじめ多くの先学が既に指摘するところである。私自身が確認できる「琉歌」という呼称の使われた最も古い事例は、1683年で、『和姓家譜』の「七世景典 安勢理親雲上」の項目に「本年(康熙二二年=1683年)十一月八日奉 詔命於御書院翌日到於天使館即時正使史氏汪楫大老爺出座／俾書詩十首(中略)琉歌三首於屏風之裏也」とある記事である。ちなみに屏風の裏に書かれた琉歌は「常磐なる松乃かはる事なひさめ いつむ春来れは色とまざる」「緑なる竹のよゝのかすゝに こもる万代や君としよら」「九重のうちにつほて露待よす うれしこときくの花とやよる」である(波照間永吉編『鎌倉芳太郎資料集 ノート篇 第三巻』pp589)。最初の歌は「特牛節」の歌詞として『琉歌全集』76番に、次の歌とその次の歌は「かぎやで風節」の歌詞として29番・19番に挙げられるものである。19番歌は『琉歌全集』では北谷王子朝騎の作とされる。また、76番歌には「北谷王子」とのみあるが、池宮正治はこの歌を北谷王子朝騎の作とする(『沖縄大百科事典』「北谷朝騎」の項)。しかし、北谷王子朝騎は1703年～1739年の人だから、これはあわない。ともあれ、いずれも有名な三首である。

この時期にはこのような歌が人口に膾炙するほどに「琉歌」は広まっていたのである。その始まりについては確たる証拠はないが、三線の伝来との関係を説く説があり、それに従うと、1392年の閩人三十六姓の来琉が大きな鍵であろうか。すなわち十四世紀末から十五世紀の時代には、琉歌形式の誕生があった可能性がある。なお、この時代はまたオモロの時代でもあり、オモロから琉歌への橋渡しがなされた時代であると仮定すると、琉球文学の流れとして、長詞形から短詞形への転換がこの時期に起こったことになる。

・今日の誇らしやや 何にぎやな譬る 蒼で居る花の 露行き会た如(キユヌフクラシャヤ・ナヲユニジャナタテイル・ツイブディヲウルハナヌ・ツイユチャグトウ)(今日の喜ばしさは一体何に譬えることが出来ようか。それは、蒼の花が露に行き会い花開いていくようなものである)

カタカナで示した読みが8886音になっている。この琉歌は琉球古典音楽・舞踊の「かぎやで風(カジヤディフー)節」の一首として祝宴の幕開けの歌舞曲となっているが、「詠み人知らず」の歌である。琉歌のほとんどはこのように島々・村々の中で自然に生まれ、歌謡の形で存在してきた。これが後になると、一人の人物が文学的意図を持って詠むようになってくる。首里王府の役人階層の男性達である。いわゆる「詠み歌」のジャンルが出来てきたのである。琉球国時代には題詠なども行われていた。なお、女性が作者としてあげられるのは極めて少ない。伝説的作者として、恩納ナベ(ウンナナビー)、吉屋ツル(ユシヤチルー)、北谷真牛(チャタンモーシー)女などがいるだけである。女性は詠み歌琉歌とは関わりをもてなかつたらしい。琉球社会の一つの側面である。

この他、8音を4句以上連ねて最後を6音で結ぶ長歌形式のものもある。組踊の詞章もこの8音と6音よりなっている。近代以降に作られた「つらね」と呼ばれる長編の作品もその形式である。一方、短歌形式の方では、和歌の韻律である7音・5音を取り入れ、上句を7・5音二句、下句を琉歌の8・6音二句で詠む和琉折衷の「仲風」と呼ばれる形式も誕生した。おそらく18世紀前後の成立と見られるが、大和(日本)の文学の素養のある知識人達が創り出したものであろう。これも例を示そう。

・語てくれ 乞い渡ら 浮世鳥鳴かぬ 島のあらば(カタティクイリ・クイワタラ・ウチユドイナカヌ・シマヌアラバ)(教えてはくれないか、渡って行ってみたいものだよ。暁を告げる鶏のいない島があるというのならば)

・月や昔の月やすが 変わっていくものや 人の心(ツイチヤンカシヌ・ツイチヤスイ ガ・カワティイクムヌヤ・フィットウヌククル)(月は昔の月と変わらないが、変わっていくのは人の心だけであるよ)



前者は5・5・8・6音、後者は7・5・8・6音になっている。この仲風形式は如何にも人工的で、作者が限定されることもあって作品数は少ない。しかし、18世紀の琉球の文学的状況を示すものとして貴重なものである。

南琉球の抒情歌謡を紹介しよう。トーガニは宮古諸島の短詞形の抒情歌謡である。その歌詞の句構成はAA'・BB'βの5句で、その音数は理念的には5・5・5・5・4であるが、当然、定型には至っていない。

・大世照らす 真太陽丈よ／島の島々 国の国々 照り上がりよ (ウプユティラシュジイ・マティダダキヨー／シマヌシマジマ・クニヌクニグニ・ティリヤガリヨー) (この世を照らす貴い太陽のように、島の島々、国の国々全ての上に照り渡ってください)

トゥバラマは八重山の短詞形の抒情歌謡である。句数も一定せず、音数律もないが、強いて言うと、一句10音前後の4句体に整いつつあるようである。

・ナカドー道から 七けーら通うけー 仲筋かぬしゃーや 相談ぬ成らぬ (ナカドーミチカラ ナナケーラカヨーケー ナカシジイカヌシャーヤ ソーダンヌナラヌ) (仲道道から何度も何度も通っても、仲筋家の愛しい人は話してさえもくれないよ) 宮古のトーガニー、八重山のトゥバラマともに、一つの旋律にのせて謡われるものである。これまでに幾百もの詩が歌われてきた。そして今も創り出されているのである。これについては外間守善総編集『南島歌謡大成 III 宮古篇』『南島歌謡大成 IV 八重山篇』などでご覧いただきたい。

## 2、「瓦屋節」の歌詞と語釈

出羽 仲良田節 (ナカラター・ブシ)

できやよ押しつれて 眺めやり遊ば 今日や名に立ちゆる 十五夜だいのもの

【読み】ディチャヨ ウシツイリティ ナガミヤイ アスイバ キユヤ ナニ タチュル  
ジュグヤ デムヌ

【直訳】さあ、皆で連れ立って月を眺めて遊びましょう。今日はその名も高い十五夜なのですから。

【語釈】できやよーさあ。「できや」は勧誘・誘いかけの意を表す感動詞。元の形は「でか」。方言では今もディカと言ひ、「でか」の形を残している。英語のLet'sと同じ意味。「よ」は、誘いかけの意を表す助詞。本来はヨーと長く発音されるが、音数の関係でヨと短く発音される。

押しつれて——連れだつて。一緒になって。動詞「おしつれる」(押し連れる)の接続形。「押し」は本来は動詞「おす」(押す)の連用形。「おす」(押す)は、人や物に対して力を加えることを言う語。これから意味が転じて、動作が勢いよく行われることを表す接頭語としても用いられる。ここでは接頭語として用いられている。

眺めやり——眺めて。「眺めやり」の元の形は「ながめあり」(眺め有り)。すなわち、眺めている状態が有ることをいう。この「あり」は、琉球古典語では動詞の連用形について「～やり」の形となってその動作が継続していることを表す。「ながめる」(眺める)は、①遠くを見る。見渡す。②愛(め)でて見る。鑑賞する。その対象となるのは自然物で、主に月や花であるが、その他、紅葉・緑葉・松・竹・雪・蛍などもある。また、花は女に譬えられて、女性に注目することを暗示する場合がある。③目のある方向に向けて物思いにふける、の意を表す。ここの用例は②である。

遊ば——今日は。遊ぼう。動詞「あすぶ」(遊ぶ)の未然形の形で、話し手の意志を表す。琉球語一般に見られる特別な語法である。「遊ぶ」は琉球語では『おもろさうし』以来「あすぶ」と書かれ、「あそぶ」の形はない。なお『おもろさうし』や神歌で「あすぶ」は神が立ち現れて神として振る舞い遊ぶ(神遊び)ことをいう。ここでは人間が月見をして遊ぶことを言っている。

今日や——今日は。「今日」は琉球古典語では「けふ・けお・けよ・けゆ・今日・今宵」な



どと書かれる。首里語ではチューだが、八重山語・宮古語(伊良部)ではキュー。琉歌での発音のキユは「きよ・きゆ」などの表記と重なる。日本語では「けふ」と書くのが普通。「や」は上にある言葉を強調する係り助詞。日本語の「は」に相当する。

名に立ちゆる——名に立つ。その名が立っている。その名が知れ渡っている。有名である。「立ちゆる」は動詞タチュン(立つ)の連体形。

十五夜——八月十五夜。一年のうちで最も月が美しいとされる夜。本来は、陰暦の毎月十五日の夜のこと、この日に月が満月となる。これが、中国人の美意識で、「仲秋」、すなわち旧暦八月の十五夜の月が最も美しいとされ、それが日本に伝わり、琉球にも伝わったものである。八重山の童歌「月ぬかいしゃー」でば月ぬ かいしゃー とうかみーか／みやらび かいしゃー とうーななつゝい(月の美しいのは十三日の月、乙女の美しいのは十七歳頃)と謡っている。また、日本でも「月の美しさは望月のみかは(月の美しいのは望月=十五夜の月のみではない)と言っている。

だいもの——であるから。理由の強調を表す助詞。～だから。～なので。名詞または名詞相当語、動詞などの未然形につく。元の形は、係り助詞「ど」に断定の助動詞「あり」、接続助詞「もの」がついた「どありもの」。これが融合変化した語。なお、終助詞として文末に用いられるときは、詠嘆の強調表現となる。例：「与那の高ひらや 汗走てど登る 無蔵つれてやれば 一足だいもの」(『琉歌全集』791)。「これど世の中の地獄だいもの」(「執心鐘入」)。「でむぬ・でもの・てももの」などの表記もある。

【解説】娘達の十五夜の月を愛でる心情をうたった歌。

沖縄の月見は旧暦八月十五夜に行われる。月の見える縁側に卓を置き、その中央前部にフチャギと呼ばれる餅を盛った皿、香炉、その右に青い清浄なススキを活けた花瓶を置いて、お月様を拝む。フチャギは八重山あたりではフカンギという。語源は不明である。餅粉をこねて小判形にしてこれを蒸し、そのあとに、これも蒸し上げた小豆をその全体にまぶした餅である。天ぶらや蒲鉾などのご馳走の皿も一緒に供えるがこれは付け足しである。月を拝んだ後は一家で、お供えの餅やご馳走をいただく。

この歌では、娘達は野原に出て月見をして遊んでいる。そこは民俗行事とは一致しないが、「花鳥風月」を愛でる歌の世界のことだからだろう。下句では一転して、「我が家には自分に逢うために愛しい人が来て待っているはずだろうからさあ、戻りましょう」と屈託なく歌って、年頃の娘達の世界が表現されている。名月の夜の娘達の伸びやかな遊びの世界を表現した歌である。

中踊り 瓦屋節(カラヤー・ブシ)

押す風も今日や 心あてさらめ 雲晴れて照らす 月の清らさ

【読み】ウスカジン キユヤ ククル アティサラミ クム ハリティ ティラス ツィチヌ  
チュラサ

【直訳】吹いて来る風も今日は、心があつてのことでしょう(月にかかっていた雲を流し去ってくれて、今は)、雲も晴れてさやかに照らす月の光のなんとも美しいことです。

【語釈】押す風も——吹く風。吹きすぎる風。「押す」は動詞「おす」(押す)の連体形。方言ではウシュン(ウスン)。やわらかく風が吹くことにも言う。「も」は並列(特定の事物をあげて、その他にもそれと同類のものがあることを暗示する)の意味を表す係り助詞。

心あて——心があつて。「心」に動詞「ある」(有る)が付いたのが「心ある」で、①志し・思慮・分別がある。②情けがある。思いやりがある、の意を表す。ここでは②の意味で使われている。「心あて」はその接続形。自然のものである風に人間と同じように心がある、と擬人的に表現している。

さらめ——～であるだろう。～にちがいない。終助詞で、～であるよ、～であることだ、

～なのだ、という意味を表すの。元の形は、強調の係り助詞「す」(「～こそ」にあたる。動詞・助動詞の已然形で結ぶ)に動詞「ある」(有る)の未然形「あら」、そして推量の助動詞「む」の已然形がついた「すあらめ」。これが融合変化してサラミとなったもの。

晴れて—雲が晴れて。動詞「はれる」(晴れる)の接続形。

照らす—照らす。太陽や月が照って明るくする。光が照ってものを明るくする。

清らさ—美しいことだ。形容詞「きよらさん」(清らさん)のサ語幹の形で名詞となる。美しいこと。清らかで美しいこと。華やかで美しいこと、などを表す。口語ではチュラサン。「きよらさん」の元の形は「清らさ・有り」。日本語で「清ら」は「汚れなく美しいさま。華美。きよらか」と説明される。

#### ※琉球語の形容詞

琉球語の形容詞の語尾は～サン、～シヤンの二つがある。この二つの違いについて、外間守善博士は、～サンは日本語形容詞のク活用の語(甘く・高く・強くなどと活用する語)、～シクは日本語形容詞のシク活用の語(嬉しく・苦しく・懐かしくなどと活用する語)と重なると、分かりやすく説明している。なお、宮古語は形容詞語尾が～カリという、日本語形容詞カリ活用に由来する形となっており、特徴的である。

#### ※「きよらさ」と「しほらさ」

琉球古典語で「きよらさ」は、①美しい。華やかに美しいさま。立派なさま。みごとなさま。『混効験集』に「きよらさ 美麗なり 清の字を書 和詞にも通ふ 徒然草に万にきよらを尽くしても又は手足などのきよらに肥あふらつきたらんと有も此心なり」とある。伊波普猷『琉球戯曲辞典』には、もと清らかなさまの義が転じて美の概念を表す語となったのではあるまいか、とある。首里語ではチュラサンというが、美しい、清潔な、の両様の意味がある。「きよらさ」について外間守善氏は次のように言っている。

沖縄では「美しい」ということをチュラサン(清らさあり)という。それも古くは、華やかに美しい、キラキラ輝くように美しい、という意味で使われており、先に掲げた日の出の美しさを讃えるオモロ(『おもろさうし』7-379—波照間注)の「きよらや」や、花や月の美しさをいう琉歌の「きよらさ」などにそれをうかがうことができる。つまり、それらの「きよら」は、王朝時代の文芸に見出される明らかな美意識なのである。『おもろさうし』の中の「きよら」の成熟は、「清ら美」の発声を、尚真王時代の王朝文化に求めさせてくれるものと思う。

『竹取物語』(平安期)のかぐや姫昇天の場で使われている「清ら」は、光り輝くように美しい、という意味であり、オモロ語のそれと通ずるものがある。少なくとも「清し」のような清浄美を意味するものとは違う「清ら」が、王朝文化の中の美意識としてともに育っていたことがわかる。

沖縄ではそれが、オモロや琉歌を伝わり、きよら→きよらさ→チュラサンと、語の形は変化しながら今日まで生き続けて使われている。しかもそれは、古くも今も「美しい」という美観のすべてを包む語で、チュラサン以外に美しいということを表現する言葉が沖縄にはない。(『沖縄の歴史と文化』pp186・187)

「きよらさん」について、その語の意味するところを的確に表現しているということのできる指摘である。しかし、幾つかの修正が必要である。すなわち、「美しい」を意味する語がチュラサンしかないというが、琉歌では「しほらしや」(シユラシヤ)があること。宮古・八重山ではチュラサンの語はなく、カギサ・カイシヤンという、別語源の語があることである。「しほらしや」については、花の色香の美しさから女性の美までを表現する語で、「きよらさ」と並び立つ表現である。

外間氏は別の所で次のように「きよらさ」と「しほらしや」について述べている。

「きよらさ」が美一般をいわば外面的に表す語であるのに対し、「しほらしや」は愛らし

く、ゆかしく、上品優美で、いつくしむべき対象に対する美感を、嗅覚、聴覚を通して内面的に表現する語と言える。

男性から女性の恋人をさして「しほら」が使われていることも「しほら」の一つの特性であろう。愛らしく、ゆかしく、いつくしむべき存在として女性があり、それを「しほら」という語で包んだのであろうか。

視覚によってとらえた感性的な美感が、人間の精神をくぐり、より深まっていくところに「きよらさ」の美感から「しほらしや」という精神的な美感への深まり、広がりがみられるのではないだろうか。

日かず降る雨につめて染めまさる 春の若草の色のしほらしや  
梅の花しほらしや忘らぬごとに 肝しほらしや持たば人のあきゆめ  
〔『南島の抒情』 pp188・189〕

なお、宮古・八重山のカギサ・カイシャの語源は、光を意味する「かげ」である。すなわち「かげさ・あり」がカイシャーンという形容詞となるのである。カイシャーンは人・ものの外的美しさのみならず内的美しさ、人間関係の美しさなど幅広く使われる。

入羽 しょんがない節 (シオンガネー・ブシ)

月も眺めたり できやよ立ち戻ら 里や我が宿に 待ちよらだいもの

【読み】ツイチン ナガミタイ デイチャヨ タチムドウラ サトウヤ ワガ ヤドウニ  
マチュラデムヌ

【直訳】月も眺めましたし、さあ、皆で帰ることにしましょう。愛しいあの方が私の家で待っていることでしょうか。

【語釈】眺めたり——眺めたし。動詞「ながめる」(眺める)の連用形に完了の助動詞「たり」の付いた形。「眺めたり」の形で「眺めたし」と接続助詞(①対等の事物を並べる。例：舌先も立つまいし、足下も定まるまい。②順接の意味を表す。「～から」に近い。例：心中はせまいし、(脇差しを)其のまま置いて行かんせ。③比定の推量を表す語の下へ付いて「～ものを」「～のに」などの意を表す。例：子供じゃあるまいし～。④代表として一つのことをあげて他を暗示する。例：水も不便だし、家を建てるには不向きだ)的に訳する。

『琉歌全集』324番では「月も眺めたい」となっていて、『たい』は希望にあらず、『たり』が『たい』になったもの。しかしここでは事件を並べるときの接尾語「し」の働きをするようになっていて、「月も眺め時経った。さあ急いで帰ろう。」と訳している。751番・1304番では「月も眺めたから～」と、「～から」と訳している。

立ち戻ら——戻ろう。帰ろう。「立ち」は接頭語で、「戻ら」を強調する。「戻ら」は動詞「戻る」(ムドウラ。戻る。帰る)の未然形。ここでは話し手の意志を表す。

里や——彼は。「里」(サトウ)は女性から自分の恋人(男性)をいう語。韻文でも使われる。上に接頭美称辞「思い」がついて「思里」(ウミサトウ)、接尾敬称辞がついて「里前」などの形でも使われる。使われる場面によって二人称(あなた)にもなり(「思ゆらば里前 島とまいていもうれ 島や中城 花の伊舎堂」琉全852番歌。ここでは女が恋人である男に呼びかけている場面であるから、「愛しいあなた」の意となる)、三人称(彼)にもなる(「里やうけんじゆの 溜まり水心 かねれはもよその よこち行きゆき」琉全1377番歌。ここでは恋しい男は面前にいない、第三者として話題の人物になっている)。ここでは第三者としての意である。なお、男性から女性の恋人に対しては「無蔵」(ンゾ)といい、接頭美称辞「思い」がついて「思無蔵」(ウミンゾ)となる。接尾辞の「前」は付かない。「無蔵」も使われる場面によって二人称(あなた。御前)にもなり(「無蔵が御情に 波平川の 手水 胸に呑み染めて」[手水の縁])、三人称(彼女)にもなる(円覚寺御門の 鬼仏がなし 我無蔵よこしゆすや おどちたばうれ」琉全758番歌)。ンゾ



に「無蔵」の字をあてるのは当て字であり、語源は「無慚」(むざん)が考えられている。形容詞ンゾーサンがあり、那覇方言ではナゾーサ スン(かわいいがる)、八重山民謡トゥバラーマで「ンゾーシーヌ カヌシャーモヨ」(愛しい恋人よ)などと使っている。宿に―家に。「宿」は、住み処、住居、家の意。また、旅の宿り、旅宿、宿屋の意もある。ここでは自分の家を指している。

待ちよら―待っているだろう。動詞「待つ」の継続態(「～している」の形)マッチョーン(待っている)の未然形だけの形で、推量の意味を表している。もとは、日本語の推量の助動詞「む」のついた「待ちよらむ」であったと考えられている。

だいもの―であるから。理由の強調を表す助詞。～だから。～なので。名詞または名詞相当語、動詞などの未然形につく。前出「出羽」の「～十五夜だいもの」参照。

※入羽の歌「月も眺めたい できやよ立ち戻ら～」は、出羽の「できやよ押しつれて 眺めやり遊ば 今日や名に立ちゆる 十五夜だいもの」と見事に対照をなしている。出羽が舞台への登場であり、物語の発端・場面の提示であるのに対し、入羽は物語の終わり、舞踊の終了を告げる。中踊りはテーマの実現である。「瓦屋」はこれを出羽の「できやよ押しつれて 眺めやり遊ば」で娘達の月見の丘への移動と登場を示し、中踊りの「押し風も今日や 心あてさらめ～」で、煌々と照り渡る月の光のさやけさを讃える歌で、月見を楽しむ風情を表現する。そして、入羽の歌は「月も眺めたい できやよ立ち戻ら～」で「月見」という主題が実現したことを言い、「できやよ立ち戻ら～」と呼びかける。この句が出羽の「できやよ押しつれて」と対応していることは言うまでもない。「押しつれて」野原に出るベクトルと、「立ち戻ら」のベクトルはまったく逆である。家から丘への移動、丘から家への移動という動きである。「出(羽)」であり「入(羽)」なのである。そして、出羽二句目の「眺めやり遊ば」に対しては、入羽の歌は一句目で「月も眺めたい」と言って、目的(月見を楽しむ)が実現したことを挙げて、二句目の「立ち戻ら」につなげている。そして、出羽の下句「今日や名に立ちゆる 十五夜だいもの」が上句の歌う行動の理由を提示していたのに対し、入羽の下句は「里や我が宿に 待ちゆらだいもの」と、「だいもの」を重ねて使用して、愛しい人が自分を待っているから、という理由の提示を行っている。すなわち出羽では「名に立つ十五夜だから」という野外の遊びの理由を示し、入羽では「愛しい人が待っている筈だから」と屋内での遊びを理由と示して、出羽と入羽の対立・対照(集団・野外・月光という自然に対して、個人・室内・恋愛という人事)を明確に示しているのである。これほど、出羽・中踊り・入羽という舞踊の三場面を内容的に明確に示す例はそんなない。とても構成的に分かりやすい舞踊と言って良いだろう。

#### リカレント講座を終えて 波照間 永吉(沖縄県立芸術大学名誉教授)

90分の三回の講義でどこまで話が出来たろうか、しかも通訳の時間を差し引くと1回45分の時間しかない。細かな説明はまずは出来ないだろう。エッセンスだけを伝えられれば良かろうと思って臨んだ。現場では、持ち時間は予想したよりも短く、あつという間に過ぎ去っていた。

ほとんどの人が3世・4世という中で、日本語もウチナーグチも外国語なのだから、沖縄での講義のような口調ではまずだめである。ウチナーグチとはどのような言葉か、琉球芸能の言葉がどのようなものか、から話していかなければならないのではないかと、ということに思いが至らなかったのは、まったく不覚であった。初日の講座を側からみていてこのことに気がついた。レジュメのプリントを準備して、視覚から琉歌の歌詞がどのようなものかを感じて貰えるようにした。そして、まず、琉歌の説明とウチナーグチの母音対応や口蓋化などの子音の特徴などを冒頭に説明して、レジュメの入ることにした。このあたりは、事前の情報収集を怠ったための結果であり、反省すべきところである。

講義そのものに対する反応としては、まずまずであったと思っている。話があつちに飛び、こつ



ちに飛んで、レジュメ通りには展開しない私の話を、通訳のリネット・照屋さんがどうにかつないでくれたおかげである。リネットさんには大変なご苦勞をお掛けした。この場を借りてリネットさんにお詫びと御礼を申し上げたい。

琉球芸能における詞章の解説が必要となっていることは、ハワイも沖縄も同じである。沖縄の著名な琉球舞踊の先生からお聴きしたことであるが、出羽の仲良田節の「ディチャヨ ウシチイリティ」について、「先生、何故、牛を連れて行くのですか」と聞かれたことがあるという。笑い話のようであるが、このようなことがこれからいろいろ起こってくるのではなかろうか。もし、そうであれば、美しい琉球舞踊の世界も歌詞の心情を理解しない、“人形の踊り”の世界へ変化していくことになってしまう。そうしないためにも、実演家にとって琉球芸能の詞章の理解は重要であり、琉球語に対する知識と理解は琉球芸能の基礎中の基礎であるはずだ。その点からも、詞章解説の授業は不可欠であり、沖縄県立芸術大学琉球芸能専攻における琉球語教育は重要な課題だと思う。そしてこれは、琉芸専攻だけで実現すればこれで良いということでもないはずである。世界に広がる琉球芸能、特に世界の日系人社会における、アイデンティティー実現の手段としての琉球芸能への強い憧れと実践を後押しするためにも、琉球芸能における琉球語教育は必須のものとする。

僅かな時間での今回のリカレント講座であったが、実技・琉球芸能史・琉球史講座と並んでの詞章解説講座を通じて、このことをあらためて認識した。実技と座学の組み合わせによる今回のプログラムは、万全ではなかったかも知れないが、少なくとも琉球芸能に心を寄せるハワイの人々に一定程度の貢献はなし得たのではないかと思っている。小さな取り組みではあったが、成果が実感できるリカレント講座であった。沖縄県立芸術大学への県費留学生OBのみならず、多くの県人会員が参加してくれた。このような事業が沖縄県立芸術大学や沖縄県の事業として取り組まれていくようになることを期待したい。そして末筆であるが、この講座の開催に力を尽くしてくれた県費留学生OBと県人会の皆様にご心より御礼申し上げたい。

「琉球史概説—文字・言葉・文化・信仰から考える」シラバス

沖縄県立芸術大学 全学教育センター  
麻生 伸一

1. 授業概要

リカレント講座座学は、「琉球史概説—御後絵—」と題して、古琉球から近世琉球までのおおまかな歴史の流れを説明しつつ、政治・外交からみた琉球・沖縄の歴史的背景について、御後絵(国王肖像画)をテーマに概説する。

一般向け講座は、「古琉球の外交と社会」「近世琉球の政治と文化」と題して、琉球の大きな流れの説明しながら、琉球と近接する国や地域からの文化の移入と移入後の状況について概説する。

2. 授業計画(案)

渡航期間			2018年3月23日(金)～3月26日(月)
*日目	月日	時間	内容
1日目	3月24日(土)	90分×1コマ	一般向け講座：古琉球の外交と社会 ・古琉球の特徴 ・外交と交易

2日目	3月25日(日)	90分×1コマ	琉球史概説—御後絵— ・御後絵とはなにか? ・御後絵の変化① ・御後絵の変化② ・御後絵の変化③
			一般向け講座：近世琉球の政治と文化 ・近世琉球の外交と特徴 ・近世琉球の外交政策

受講生への連絡事項

※定員 100名 (県費留学生OB及び一般市民 対象)

一般向け講座「古琉球の外交と社会」(3月24日開講：麻生 伸一)

はじめに

ご存じの通り、琉球諸島は、日本列島の南部に位置しています。研究者によって範囲は異なりますが、一般に琉球諸島とは、現在の鹿児島県の一部であるトカラ列島から沖縄県の八重山諸島までの範囲をいいます。琉球諸島では、沖縄島や石垣島などで2万年前の人骨や石器が見つかっており、ながいあいだ、人間の生活がみられました。

琉球・沖縄史を概観してみますと、いくつかの節目でとらえることができます。まずは、1372年です。1372年からは中国、当時は明という王朝ですが、中国との関係を正式なものにします。つまり、中国皇帝との君臣関係を結び、公的な貿易を行うようになりました。その後、1429年に統一政権が誕生するとされています。1609年には、日本の現在の鹿児島に拠点を置いていた薩摩藩が武力侵攻をしかけてきました。そして、薩摩藩による統治がはじまります。およそ10世紀から1609年以前を「古琉球」、1609年以降を「近世琉球」と呼んでいます。近世琉球になると、薩摩藩に支配されるようになりますが、薩摩藩の上部権力に江戸幕府が存在していましたので、琉球は日本の影響を強くうけるようになりました。1879年には、「琉球処分」という事件があり、日本政府によって琉球国が滅ぼされ沖縄県が置かれました。琉球・沖縄史では、1879年からは「近代沖縄」と呼んでいます。第二次世界大戦、太平洋戦争末期の1945年には沖縄戦があり、日本の敗戦後、米軍による統治がはじまります。ここで「近代沖縄」は終わるとされています。1972年の日本復帰を経て、現在までを歴史研究者は「戦後沖縄」と呼んでいます。このように沖縄の歴史は中国や日本、アメリカなど外からの影響が強くあり、時代区分にまで影響を与えていることがわかります。

古琉球の特徴

まずスライドの絵図からみてみましょう(「琉球国図」沖縄県立博物館・美術館蔵)。この絵図は17世紀ごろに作成されましたが、内容自体は15世紀から16世紀のころ、つまり古琉球期を描いているとされているものです。「琉球国図」というタイトルで、現在、沖縄県立博物館・美術館に所蔵されています。スライド左側の図が全体像です。左側の図をみると、上部に日本の九州の最南端があり、そこから沖縄島までの島々が描かれ、さらに線が引かれています。この線は航路を示しており、当時の九州南部から沖縄までの航路を確認することができます。

左側の図の赤く囲んだ部分を拡大したものが右側の図です。これは、沖縄島を描いた部分を拡大したものです。現在の沖縄島とはかなり形が異なりますが、これは当時の測量技術の問題です。

赤く囲んだ部分に注目してください。沖縄島の真ん中にゴーヤーの輪切りのようなのがみえます。これは、首里城を示しています。首里城を拡大してみましょう。首里城のなかには「門」と書

かされているだけで、どのような王宮があったかは分かりません。しかし、北部・東部・南部には城壁があり、西側には木の柵が描かれているように見えます。

今度は、那覇をみてみましょう。図では赤い四角で囲んだ地域が那覇です。那覇の部分拡大しました。那覇は現在では沖縄島とほぼくっついているように思われますが、もともと那覇は別名「うきしま」と呼ばれる島でした。まんなかの8の字に描かれた地域が那覇です。那覇の部分には、文字が書かれています。文字をよむためにさらに拡大してみましょう。

文字を見やすくするために図を拡大して回転しました。①から⑤までの文字をみてみますと、①には、「那覇港。日本人・本島人の家はどこにある。」と書かれています。本島人とは沖縄人のことを指します。②には、「この地、王の倉庫である。多くの人住む。」とあります。中国などとの貿易で入手したお宝が那覇の倉庫に入れられていたことが分かります。③には「波上熊野権現」と書かれています。これについては、のちほどお話しします。④は「久米里。江南人の家はどこにある。」とあります。那覇の久米地域に江南人、つまり中国系の人びとが住んでいると書かれています。⑤は海に引かれた航路に書かれていますが、ここには「那覇港口。江南・南蛮・日本の船この浦より入る。」とあります。

那覇の全体図に戻ると、丸い島にも文字が書かれていることが分かります。ここには「江南・南蛮の宝物、ここに在り。見物具足(御物グスク)広さ」と書かれています。文章が途中で途切れていますが、中国や東南アジアのお宝がここに蓄えられていることと、この島を「御物グスク」とよぶことが書かれています。御物グスクは、現在の地図では、左側の地図では赤丸で示したところにあたります。現在、ここは米軍那覇港湾施設の通信所が設置されており、立ち入りが制限されています。現在もグスクの出入口として使用されていたアーチ門や周辺を囲んでいた高さ3m近くの石積みが比較的良好に残っています。さきほども申したように御物グスクは、お宝の貯蔵庫として使われていた場所です。そのため、この付近から多くの発掘品が見つかります。次のスライドを見てみましょう。スライド左側の図は、御物グスク周辺から発掘された陶磁器の写真です。中国から輸入したであろう陶磁器が大量に発掘されています。ほかにも右側のように東南アジアや日本の陶片もみついています。このように那覇は、東アジア、東南アジア各地と結びついた港湾都市でした。港湾都市の那覇は、ヒト・モノ・情報が集まる王国として重要な都市だったのです。このように、各地の人びとが訪れる那覇は、特徴的な都市となっていきます。

次のスライドを見てみましょう(上里隆史「古琉球・那覇の『倭人』居留地と環シナ海世界」7ページ、表1)。この表は、上里隆史さんが作成した表で、古琉球期の神社をまとめたものです。波之上権現、これはさきほどの地図にもありました。この波之上権現を筆頭に、9つの神社がありましたが、そのうち、6つが那覇にあることがわかります。那覇には日本系の人びとが多く渡来することから、日本系の信仰である神社が多く存在したのです。次の表も、上里隆史さんが作成したものです(同上)。この表には古琉球期に那覇にあった寺院をまとめたものです。那覇全体に、12の寺院があったことがわかります。これも他の地域と比べて多いといえます。

そのほかに、中国南部で生まれた媽祖を祀る媽祖廟もありました。古琉球期には媽祖を信仰する場所は那覇にしかありませんでした。媽祖廟は、現在、天妃小学校の一部にかつての門を残しています。このように、日本系の神社、中国由来の媽祖信仰などをはじめとして、仏教や道教など東アジアの宗教が那覇に集中して渡来し、そこに住む人びとによって信仰されてきたのです。

さらに興味深いのは、各宗教が沖縄で習合したことです。那覇と沖縄島を結ぶ橋と堤防からなる道があります。長虹堤と呼ばれていますが、この道路は、中国からの使者が琉球を訪れた際に、那覇から首里城まで海を渡るのは不便だろうということで、1451年に作られました。この道路が作ったのは「懐機」という中国系の政治家でした。さらに、懐機は道路の安全を祈願して神社を建てました。この神社に祀られたのが、「天照大神」という有名な日本の神様です。懐機は、中国系の人間でありながら、中国からの使者を迎えるため、日本神道の神に祈りを捧げていたのです。そのほかにも、先に紹介しました天妃宮や道教の神様を祭る天尊廟には、国王によって本来



仏教寺院にあるべき梵鐘が寄進されました。この梵鐘に刻まれた文章を読むと天孫廟には、仏教の僧侶が存在していたことが書かれています。このように、那覇では日本神道、仏教、道教が融合していたのです。

また、琉球には御嶽信仰に代表される独自の信仰がありました。この信仰に外来の宗教観念が結びつくことになります。たとえば、スライドに示しましたように「鎌倉芳太郎ノート」には、聞得大君御殿の神壇に、弁財天とされる女神像の掛け軸が祭られていたと書かれています『鎌倉芳太郎資料集』第二巻、44ページ)。仏教の弁財天は、琉球にとって重要な仏のひとつであった。このように、琉球独自の宗教がずっと続いていたのではなく、外来宗教の影響を受けながら琉球の宗教を展開していったといえます。ただし、外来の宗教をなんでもかんでも受け入れていたわけではありませんでした。外来の宗教のなかでも、琉球在来の考え方に近いもの、例えば女性の神様や別世界から神様が訪れるという来訪神信仰というような考え方に近い外来信仰を受け入れていたのです。そのため、一神教であるキリスト教やイスラム教は、おそらく琉球に到来していても、根付くことがなかったと考えられています。

## 外交と交易

それでは、次に琉球国の外交と交易について考えてみたいと思います。

最初に申しましたように、1372年に中国との正式な外交関係を結ぶと、中国は琉球を「属国」とみなし、琉球側もそれに従いました。中国との交流をみてみましょう。スライドの写真は、中国皇帝から琉球国王宛てに送られた書状です（「明孝宗勅諭」沖縄県立博物館・美術館蔵）。ご覧の通り、すべて漢字で書かれています。これとは逆に、琉球から中国に送られていた文書も、漢字だけで書かれていました。つまり、琉球は、中国の公文書の書き方に従って書状を書いていた訳です。さらに後半部分を見てみますと、朱印の部分には、年号が書かれていますが、これは中国年号です。年号の使用も中国のルールに従っていました。また印鑑が上の方に押されていることも確認しておきたいと思います。

東南アジアとは、中国への献上品確保を名目とした関係がみられました。東南アジア各国と貿易をした記録はありますが、そのなかでも現在のタイであるシャムや現在のマレーシアにあったマラッカが主な取引先でした。これらの国とは、東南アジアにあった中国系の人びとのネットワークを活用したつながりが作られていました。

次のスライドに移ります。写真は、琉球国王尚徳からマラッカ国王のマンスール・シャーあてに送られた書状の写しです（『歴代宝案』第一集、台湾大学蔵）。琉球国王が使者をマラッカに派遣して、マラッカ国王にプレゼントを送ったことが書かれています。注目すべきは文字です。書状の一部を拡大しました。一見して分かるように、漢字のみで書かれています。これは中国に宛てた書状と同じです。さらに、年号も中国年号を使っています。まさに、中国へ送る書状と同じ様式で東南アジアの国々とおつきあいをしていたのです。

次は、日本との関係です。日本とは現在の福岡県にある博多や、現在の大阪府の堺などの交流が活発であったとされています。この書状は、15世紀の琉球国王から鹿児島島の島津家に出された書状の一部です（「金丸世主書状」島津家文書、東京大学蔵）。この書状をみるとわかりますように、あきらかにこれまで見てきた中国や東南アジアとの書状とは異なる事がわかります。文字は漢字と仮名まじりの書状です。漢字・仮名まじりの文書や年号を付さない形式は、中世日本で使用された書状と同じものでした。また、年号は書かれていません。年号を書かないのも日本の書状を書くルールでした。印鑑については、日本でも朱色の印は確認されますが、中国からの書状にあったように、上部に押すことはほとんどなく、この写真にあるように、日本では印鑑を書状の下部に押すのが主流です。印鑑の押し方も日本のルールに従っている書状ということがわかります。このように、この書状は、日本のルールにあわせて書かれているといえます。これまでみてきたように、中国や東南アジアとは、中国のルール、日本とは日本のルールというように、相手にあ



わせた外交方法が採られていたのです。

## 古琉球の政治と外来文化

それでは最後に琉球国内の政治状況を見てみましょう。

相手にあわせて外交文書を作成していた琉球ですが、国内文書は写真のようなものを使用していました。スライドには1523年の辞令書を写しています「田名家文書」沖縄県立博物館・美術館蔵。この文書はどのような特徴を持つのでしょうか。この文書で使われている文字は平仮名です。ご存じの通り、平仮名は、漢字をもとにして日本で作られた文字です。琉球では日本で考案された文字をオフィシャルな文字として採用していたのです。平仮名を使うということで、この史料はこれまで、日本と琉球の親和性を示す証拠とされてきました。つまり、琉球の文化背景に、日本の影響が強かったとされてきたのです。しかしながら、この文書形式は中世日本には存在しない形式です。さきほどの史料と明らかに異なるのは、この文書がほぼ平仮名だけで書かれていることです。日本で平仮名は女性が用いる文字とされてきました。そのため、平仮名を使うのは、日本的とは言えないのです。

また、年号をみると、中国年号が書かれています。さきほどの日本に送った書状にもあったように、日本の書状にはほぼ年号は書きません。これも日本的ではなく、むしろ中国に近いルールです。印鑑の押し方も、日本では書状の下の方に押すのが一般的なため、日本的なルールではありません。つまり、日本が開発した文字を使い、中国の書状ルールを採用していたことが分かります。外来文化である日本・中国のいろいろな要素をミックスして琉球独自のものを作り上げていたことが琉球の特徴といえるでしょう。

## おわりに

最後に、古琉球とはどのような社会だったかをまとめてみたいと思います。

周辺地域の文化を取り入れながら、自分たちの文化を作り上げていったという特徴を持つといえます。もともと琉球にあった文化のなかに中国や日本といった周りの地域の文化のなかで、自分たちの文化に合ったもの、必要なものを選んで取り入れていったのが、琉球であったといえるでしょう。その背景には、さまざまな人びとが訪れ、さまざまな地域と交流を持っていたことがありました。いろいろな文化に出会いながら、柔軟に吸収していく。これが琉球に住む人びとの優れた点であったといえるでしょう。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

## 参考文献

入間田宣夫・豊見山和行『日本の中世5 北の平泉、南の琉球』中央公論新社、2002年。

上里 隆史「古琉球・那覇の『倭人』居留地と環シナ海世界」『史学雑誌』114巻、史学会、2005年。

上里 隆史「琉球の大交易時代」荒野泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係4 倭寇と「日本国王」』吉川弘文館、2010年。

上里 隆史『海の王国・琉球』洋泉社、2012年。

## 一般向け講座「近世琉球の政治と文化」(3月25日開講：麻生 伸一)

### はじめに

「古琉球の外交と社会」と同文のため省略

### 近世琉球の外交の特徴

近世琉球の外交の特徴は、それまでと比べて日本への従属度が格段に増したということです。

さきほど申しましたように、14世紀末以降、中国との関係が正式なものになりました。これにより、二年に一度、中国の北京に使者を派遣して、皇帝に献上品を捧げて挨拶をしていました。中国の皇帝と琉球国王は君臣関係にあり、琉球の王を任命するのも中国の皇帝でした。そのようななか、1609年に日本のうち、今の鹿児島県に所在した薩摩藩が琉球を攻撃してきます。これ以降、琉球は日本に従うようになり、中国との貿易に日本側が介入し、さらに日本へ税を払うことが義務付けられました。

つまり、1609年以降、琉球は中国の「属国」でありながら、日本にも支配されるという状況になります。つまり上位権力者がふたつ存在するようになり、琉球は中国と日本の両方に従属することになりました。さらにいえば、この当時、日本と中国は正式な外交関係を持っていませんでした。1592年からはじまった日本の朝鮮半島への侵略を受けて、中国側が日本との外交関係を遮断したことが背景です。長崎などでは中国商人が訪れ貿易活動を行っていましたが、日本と中国の政治家同士が書状を送るなどの政治的な関係はまったくなく、お互いに存在は知りながら無視し合う状況となっていました。

そのため琉球の政治家はたいへん難しい国家運営をしなければなりませんでした。

琉球史のなかでとくに有名な政治家に蔡温という人物がいます。蔡温は中国・日本両方の国とどのように付き合っていくべきかを考え、さらに中国・日本両方の国とうまく付き合うには、どのような自己変革が必要か、という課題に挑戦しました。

画面に出しているのは、蔡温の著作である『独物語』という史料の一節です。蔡温は琉球の自己認識として「琉球は、偏小の国力で中国や日本に向けて仕えているので、力が及ばず不相応である…」と捉えていました。琉球は小さい国であるため、中国や日本とお付き合いするのはできないという評価です。

さらに「不相応であるため、様々な対策で琉球を治めなければ国中が衰微し、財政も思うようにならず、中国や日本への礼儀もよくなり、むしろ無礼となる恐れがある。」とも述べています。蔡温の危機感は、中国や日本という大国と付き合うためには、莫大な予算が必要だが、それを準備しようとする国が衰微してしまい、これが原因となって予算不足となり、今後は中国や日本との付き合いができなくなるというものでした。このように経済面からみて、琉球はとくに危機的な状況だったといえます。この点を少し掘り下げてみましょう。

経済的にみても、しだいに琉球は中国・日本双方との関係がなくなっていく状況になってきました。画面に示した図は、日本市場と中国市場と琉球がどのように結びついてきたかを概念的にまとめた図です。歴史研究者の上里隆史さんが作成したものを引用しました（上里隆史『目からウロコの琉球・沖縄史』25ページ掲載図）。図を見てみましょう。まず①をご覧ください。琉球は日本市場から銀のほか、昆布やフカヒレ、カツオといった海産物を入手します。銀は、日本市場で琉球側が入手した銀のほか、薩摩藩の出資銀もあります。このように、日本市場で入手した商品を持って中国に向かうのです。

次に②をみてください。日本市場で入手した銀や海産物はほとんどそのまま中国市場でほかの商品と交換します。それが③になります。③をみると日本市場で入手した銀や海産物を使って、漢方薬の原料や、生糸、絹織物を購入したことが分かります。それを琉球に持ち帰り、さらに日本市場に持って行きます。それが④です。中国商品を日本市場に売払い、それを元手に次の中国貿易のための銀や海産物を手に入れるのです。さらに日本市場には琉球産の物品も売ります。それが⑤です。黒砂糖は薩摩藩への税でもありましたが、日本に売却する商品にもなりました。ほかに布の染料となるウコンも商品価値の高い商品でした。このように琉球は日本市場と中国市場を結びつけていたのですが、この貿易の利潤がそのまま、琉球国の財源となったり、役人の給料となっていました。そのため、この貿易が成り立たなくなると、琉球国はすぐに国家予算がなくなり、さらに役人の生活に困る状況になっていたのです。経済的にみても、琉球は日本・中国双方と貿易関係を維持しなければ、国家的な危機に陥る可能性が高かったのです。

このように近世琉球は外交的には、日本と中国それぞれと整合性を取りながら、王国としての体制を維持することが政治課題だったといえます。経済的にも、日本との関係が悪くなると、中国との貿易ができなくなり、その反対に、中国と貿易ができなくなると、日本との取り引きができなくなります。政治的にも経済的にも、日本と中国に従属・依存していたのです。

### 近世琉球の外交政策

このような琉球では、17世紀の中頃に政治方針が作り上げられました。それが琉日関係の隠蔽と「中国文化」の積極的移入です。このふたつの政策は、とくに18世紀以降、琉球にとって国是となる方針でした。

次にこのふたつの政策を見ていきたいと思います。

まずは、琉日関係の隠蔽です。この政策の方針は、琉球と日本との外交関係を中国に対して隠すというものでした。中国と琉球との外交関係が成立したあとに日本は琉球を侵略したため、とうぜん日本側は琉球と中国との関係は理解していました。一方、中国は、日本が琉球を攻めたことを知ってはいましたが、影響下にある琉球が日本に攻められたことを認めてしまえば、中国の体面がつぶれてしまう恐れがあったため、日本が琉球を支配しているという事実を知りながら、あえて知らないふりをするという政治的判断をしました。琉球や日本は、中国との貿易が必要だったため、中国に対して琉球と日本との関係を隠すという方針を採ったのです。

このように、琉球にしても、中国にしても、日本にしても、琉球の置かれた立場をめぐって日本と中国が争うような状況を作り出す必要性はなかったため、琉球や日本は、琉球と日本との外交関係を中国にひた隠しにし、中国は見てみないふりをしていました。これが当時の東アジアの「平和」のあり方だったのです。

具体例を示すと次の通りです。まず、日本の人と琉球の人が一緒にいる場面を中国の人には見せませんでした。例えば、中国の人は数十年に一度、琉球国王を任命するために300から500人で沖縄を訪れました。一方、那覇には鹿児島の人20人ほど常駐しました。これでは、日本の人と中国の人が、沖縄で出会ってしまいます。そこで、那覇に住んでいた日本の人は、中国の人が那覇に滞在中、那覇の北に位置する浦添に引っ越します。また、那覇に来航していた日本の船も沖縄北部の港に行くようにしていました。また、琉球にあった日本的な文物を中国の人びとに隠しました。中国の人びとが沖縄を訪れた時には、日本の文字が書かれた本をはじめとして、日本神道のお札なども一時的に中国の人の目に付かないところに置かれました。ほかにも那覇には日本の人の墓もありましたが、これらの墓は全て埋められました。そして、中国の人びとが帰国すると、また日本的な文物をもとの場所に戻しました。

スライドの図を見てください。この図は「清国漂流図」といって早稲田大学図書館に所蔵されている絵図の一部で、1810年に那覇から鹿児島に向かった鹿児島人の交易船が嵐に遭遇した場面を描いたものです。船に乗っている人を見ると、みな頭髪を切っているのが分かります。当時、嵐に遭うと、髪を切り海に捨てて命が助かることを祈願していたからです。

さて、この船には一人の琉球の人が搭乗していました。この船には日本の人と琉球の人が同乗していたのです。やがてこの船は遭難し、中国に漂着することになります。そこで、この船の日本人が琉球の人に対して「外国へ漂流した時は身なりを変えることが先例である」と述べ、琉球人は髪髭を剃り大和衣服を着せて日本人の格好をしたとあります。つまり日本の船に琉球の人が乗っているのが都合が悪かったため、琉球人を日本人とするため、髪型を変え、髭をそって、服装も日本的にしました。さらに、この琉球人の名前は「大城」でしたが、琉球的な名前だったため「大助」という日本人風の名前に変えたのです。

このように、琉球と日本は結託し、中国に対して琉球・日本の外交関係の実態を隠しました。隠すことで、中国との外交摩擦を避けようとしていたと考えられています。

一方、中国側も、琉球と日本の企みを見て見ぬふりをしました。実際、大城の事例でも中国側



は大城が琉球人であることを見抜いた上で、あえて追究せず、大城だけを他の日本人から引き離して別ルートで琉球に帰国させています。

このように琉球と日本は、琉球・日本の外交関係を中国に隠し、それを中国側は黙認していました。中国と日本とのあいだに外交ルートが無いなか、ひねり出された政策で、今の私たちからみると不安定な関係に見えますが、すくなくとも隠蔽政策が機能し始めた18世紀はじめから19世紀の中頃までのおよそ150年間は、この方法で琉球をめぐる日本・中国の衝突は回避されていたのです。

つぎに、近世琉球の基本政策のふたつめである「中国文化」の積極的移入について見てきたいと思います。みなさんは、琉球、あるいは沖縄と聞いて連想するものはなんでしょうか。青い海でしょうか。赤い瓦でしょうか。穏やかな人びとでしょうか。今回、わたしがお話ししている琉球国のイメージはいかがですか。首里城、船、お墓など、ハワイや日本と異なる文化を琉球は持っています。

例えば、この図をみてください。この図は、近世琉球の那覇港を描いた屏風絵の一部です（「首里那覇港図屏風」沖縄県立博物館・美術館所蔵）。みなさんがイメージする琉球の船は右側と左側のどちらでしょうか。右側の船は、川船とって、船の底が平べったくなっていて、荷物を船の上に載せます。河川や浅い海の航海に向けた船です。右側の船は那覇港に来航した鹿児島商人の船が描かれています左側の船はジャンク船という船です。荷物を船底に積むタイプです。荒波でも沈没しにくい船とされています。琉球の船は左側の船です。

この図は、主に鹿児島に向かった琉球船を描いたものです（「馬艦船ノ図」東京国立博物館蔵）。船体中央には竜骨があり、内部には多数の梁に仕切られていました。船長はおよそ35m、船幅はおよそ10m、メインマストの高さは約30mで、中国に向かう船には一艘におよそ100人が搭乗していました。マストにはガマ・アシなどの抽水植物で編まれた蛇腹式の帆が掛けられていた。

次にこの船の各部をみてみましょう。まずは船の目です。これは鳥の目をイメージしたものとされています。遠くを見通すことを祈るための装飾です。前方に掲げられた旗は、五行思想を反映した五色旗があります。五行思想も中国の道教思想のひとつです。後方にある旗は、良い天気を祈った太陽。北極星を見つける指標となる北斗七星。嵐を起こす龍の嫌うムカデをデザインした旗があります。また、八仙と呼ばれる道教の仙人も描かれています。このように琉球で使われた船は、その形状や装飾まで中国の影響を強く受けたものとなっていました。まさに琉球の中国っぽさを示す代表格といえるでしょう。

次にお墓です。スライドに示した写真は護佐丸という英雄の墓で、彼の死後、200年後に子孫によって建てられました。墓の屋根が亀の甲羅の形をしていることから、亀甲墓とよばれています。中国南部や台湾の墓と形状が酷似しており、中国から伝わった墓とされています。ちなみに護佐丸の墓は現存する亀甲墓のなかでは最古のものとされています。亀甲墓も琉球ならではのお墓で、中国からの影響を強く受けたもののひとつといえるでしょう。

このように、琉球をイメージするものの中には、中国的なものも多くあります。船や墓以外にも、ひんぶん、シーサー、石敢当という中国道教の影響を受けたもので、今では琉球イメージと結びついたものがあります。

これまで見てきたような中国の影響を受けたであろう船や墓は、近世琉球以前からまったく無かったとは言えませんが、古琉球から大量に存在したのではなく琉球で使用が格段に増えるのは18世紀以降のことでした。船にしても、琉球が建造する船は、日本系の川船で、この船に乗って日本と往来していました。それが日本行きの船をはじめ、琉球域内を運航する船もジャンク船になるのは18世紀に入ってからです。琉球の国用船が、政治家の指導でジャンク船に切り替えられると、安価で頑丈な作りであったため、すぐに琉球中に広がり、民間の船もジャンク船になったとされています。

墓も同じです。さきほどみた護佐丸の墓は17世紀後半に作られたとされています。亀甲墓は一部の中国系の人びとに使われていた可能性はありますが、琉球の人びとにとって一般的な墓となる



のは17世紀後半から18世紀にかけてのことでした。この背景には、同時代の政治家により積極的に中国から風水思想が導入されたからだと思われます。ひんぶん、シーサー、石敢当も同じ理由で、琉球中に広がりました。

ということは私たちが知っている中国の影響を受けた文物のある琉球というイメージは17世紀末から18世紀に作られたといえます。なぜ、この時期に中国的な文物が琉球に多く導入されたのでしょうか。

じつは、日本・中国双方と上手におつきあいをしなければならなくなったことと深い関係があります。日本から支配され、中国から、従順さを疑われることを琉球の政治家たちは常に気にしていました。なにしろ中国との関係が断絶してしまうと、貿易ができず国家はつぶれてしまいます。中国貿易という利用価値のなくなった琉球に対して、日本がどのような無理難題を申しつけてくるかも分かりません。琉球は、国を維持するために中国に対して、優等生をアピールする必要があったのです。そのため、中国的な文化である風水を積極的に導入し、中国との関係を安定しようとしたと考えられます。同じように、中国の政治思想でもっとも重要な儒教も積極的に学ぼうとしていました。

対して、日本との関係でも「中国化」が有効に働いたとされています。1609年以降、日本からは政治的にも、経済的にも大きな制約を受けていました。中国の場合、基本的に内政不干渉でしたが、日本側はキリシタン禁令や貿易制限令など多くの規制を求めてきていたので、日本の影響は大きかったといえます。琉球の人の中には、日本人の真似をし日本人のような格好をしていたため、薩摩藩から禁令が出されるほどでした。そのなかにあって当然、琉球の政治家は琉球の日本化を危惧しました。日本に飲み込まれないようにするため、日本との違いを強調しなければなりません。そこで琉球は「中国化」を志向したとされています。

まさに、日本と中国という大国のなかで、自国を存続させるための政治戦略が「中国化」志向だったのです。

ただし、完全な中国を目指した訳ではありません。中国からのゲストを迎える時の演劇として「組踊」が作られましたが、この演劇は主題の一部は中国の儒教的な要素もあるとされる一方、参考とされたのは日本の芸能でした。中国に向けて作り上げた芸能が、中国の模倣ではなく、日本的な要素を加えた琉球独自のものであったところに琉球の特徴があるのではないのでしょうか。このように、琉球は中国と日本とのあいだで、困難な政治課題を持ちながら国を運営していました。経済的な負担も大きく、外交的な危機も多かったため、政治家にとってはかなり難しい判断をもとめられる機会が多くあったと思われます。そのようななかで琉球の国を動かした琉球の政治家たちはかなり有能だったといえるでしょう。

しかし、忘れてならないのは、一般民衆のことです。経済的な負担は直接、民衆の税負担となりました。琉球の置かれた国際的な政治状況は、そのまま民衆に降りかかっていたことも指摘して、わたしの話しを終えたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

#### 参考文献

安里 進『考古学からみた琉球史』(上)ひるぎ社、1990年。

高良 倉吉『琉球王国』岩波新書、1993年。

豊見山和行『琉球王国の外交と王権』吉川弘文館、2004年。

安里 進ほか『県史47 沖縄県の歴史』山川出版社、2004年。

柳澤 明「『清国漂流図』と清朝の档案史料—大城親雲上に関する記載をめぐって」『年次研究報告書』6号、日本大学文理学部情報科学研究所、2006年。

上里 隆史『目からウロコの琉球・沖縄史』ボーダーインク、2007年。

渡辺 美季『近世琉球と中日関係』吉川弘文館、2012年。

一般向け講座「琉球史概説-御後絵-」(3月25日開講：麻生 伸一)

はじめに

「古琉球の外交と社会」と同文のため省略

御後絵とはなにか？

今日のテーマは、「御後絵からみる琉球史」です。古琉球から近世琉球までの琉球について、おもに中国との関係を中心に考えてみたいと思います。今回の話は、主に豊見山和行先生と平川信幸さんの研究を参考としています。参考とした文献は、最後に紹介します。

御後絵とは、国王の肖像画のことで、古琉球期の15世紀なかばの尚円王から近世琉球である19世紀のなかばの尚育王(まで10人の国王の御後絵の写真が現存しています。御後絵の写真は20世紀初頭に沖縄で調査をした鎌倉芳太郎さんが撮影したものです。彼は、沖縄島から宮古島、八重山までの絵画や建築、民俗、歴史文献などはびろい調査を行った人です。彼が撮影したお陰で御後絵がどのようなものであったか、現在にまで伝わることになりました。じつは、実物の御後絵はかつての戦争で焼失してしまったとされているからです。沖縄戦によって、多くの人が亡くなりましたが、同時に、沖縄のひとびとにとってかけがえのない文化財も多く失ってしまいました。御後絵もそのひとつです。

現在、御後絵の写真は、沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館に所蔵されています。御後絵は画面に示した、10人の国王のものが現存しています。すべての国王の御後絵がそろっているわけではないのですが、それでも非常に資料的価値の高い写真と言えます。それでは、御後絵の写真のみをみましょう。これは、現存する御後絵の写真のなかで、2番目に古い国王を描いたもので、尚真王を描いたものとされています。まんなかに大きく描かれているのが尚真王です。堂々とした姿で描かれていて、尚円王の周りにはいろいろな儀式の道具を持った役人が並んでいます。大きさは絵によって違いますが、この尚真王の御後絵は縦182.5cm、横はおよそ191cmあります。

ところで、みなさんは、御後絵はどのような目的で描かれたと思いますか。じつは、御後絵は現在の遺影に近い役割があったとされており、また国王の死後に作られたとされています。生前に絵師に書かせていたのではなく、亡くなった国王を偲ぶために描かれていたのです。また、御後絵が飾られていたのは、首里城に隣接する円覚寺という寺院のなかの歴代国王の位牌が安置されている御照堂でした。そこに、常に飾られていたのではなく、国王が位牌を参拝する際に飾られていたようです。つまり、国王が先代の国王を参拝する際に登場するのが御後絵だったのですね。今でも沖縄では仏壇のある部屋に遺影を飾っていたりします。これと似たような役割が御後絵にはあったのでしょうか。

話を画面の御後絵に戻します。この御後絵に描かれた尚真は、1527年に亡くなったとされています。いまからおよそ500年前の国王です。

次に尚育王の御後絵をみましょう。現存する御後絵の写真のなかではもっとも新しい国王のもので、まんなかに国王が座って周りに役人を従えているという構図は、尚真と同じですね。たいへん威厳のある姿で描かれています。大きさは、縦は約153cm、横はおよそ152cmです。御後絵自体は尚真のものに比べて少し小さくなっています。尚育は、1813年に亡くなりました。尚真の死後、285年後に亡くなっています。したがって御後絵は約300年間描かれたことが分かります。300年という長い期間描かれ続けられたので、その間、描くものや描き方が変わってきました。

みなさんは、さきほどの尚真王の御後絵とこの尚育王の御後絵で変化した場所があることに気づかれましたでしょうか。実は、最初の御後絵と最後の御後絵は大きく変化しています。この変化は、琉球国の長い歴史のなかで造られてきました。外的・内的な要因のもとで御後絵の描き方を変えてきたのです。それは単に表現方法が変わったとみるべきではありません。御後絵の変

化の背景には、琉球の国王たちの自意識と、自己演出の変化があるのです。さて、御後絵は、どこがどのように変化したのでしょうか。また、変化の背景にはなにがあるのでしょうか。御後絵から琉球史を概観していきたいと思います。

それでは、まずふたつの御後絵を比較してみましょう。

左側が尚真王の御後絵、右側が尚育王の御後絵です。国王の大きさはいかがでしょうか。左側の尚真は小さく、右側の尚育の方が大きいですね。さらに、周りの役人に注目してみましょう。興味深いことに、役人は左の尚真の方が大きいですね。つまり、尚育の御後絵は、国王自体も大きい一方、役人を小さく描くことで、国王をさらに大きくみせるような演出をしています。大きさからみると、尚育の方が威厳のあるように見えます。

そのほかに、違いはあるでしょうか。目立つ違いは服装でしょうか、まずは国王の周りに置かれた道具に注目してみたいと思います。

#### 御後絵の変化①

御後絵の変遷について、はじめに国王の周りに置かれた道具などに注目してみましょう。尚真の御後絵と尚育の御後絵を見比べてみて、国王の道具や背景にどのような違いがあるのでしょうか。

一点目は赤枠で囲まれたところですが、尚真の御後絵にあって、尚育にはありません。これはなにを示しているのでしょうか。拡大するとこのように見えます。白い丸と黒い丸が描かれていますが、これは、太陽と月を示しているとされています。全体像をみると、国王の真後ろに太陽と月があり、国王を象徴しているかのように見えます。はじめのころの御後絵には、尚真と同じように太陽と月が描かれていました。残された御後絵のうち、太陽と月が描かれているのは、⑤の尚豊までです。

①の尚円から、⑤の尚豊までは、中国には明朝という王朝がありました。このころの御後絵には太陽と月が描かれています。中国では、尚豊の死後ごろから政治が不安定となり17世紀の中頃に王朝が交替します。⑥の尚貞からは、明朝の次の王朝である清朝が中国を支配していました。この清朝の時代には、太陽と月は描かれていません。

一方で、尚育の御後絵にあって、尚真の御後絵にない道具もあります。それが赤枠で囲んだものです。拡大するとこのように見えます。これは香炉という香を焚く道具です。国王の前に置かれていて、こちらも国王と関係の深そうな配置となっています。

香炉が登場するのは、太陽と月とは逆で、⑥の尚貞からです。⑤の尚豊までにはみられません。つまり、明朝の琉球国王の御後絵には、太陽と月が描かれ、清朝の国王御後絵になると香炉が登場するのです。そこには、どのような意図があったのでしょうか。

太陽と月は、琉球王権にとって重要な存在でした。琉球の国王は太陽と結びついて理解され、太陽信仰は古くから琉球に根付いていました。もちろん国王が琉球を支配するうえで、この太陽信仰が使われたという側面があります。一方で、香炉が示すのは儒教思想です。ご存じの通り、儒教は中国で生まれた孔子の思想に基づく教で、東アジア各国で統治の基礎として重宝された考え方です。儒教の祭祀では孔子や彼の後継者に対して香を焚くという儀式があります。香炉を置くことによって、琉球国王が儒教に基づいた政治を行っていたということを演出しようとしていたと思われる。

このように御後絵からみると、琉球国王は古来から行ってきた太陽信仰から、中国発祥で東アジア共通の統治思想である儒教思想へと転換したことが分かります。じつは、このような古からの信仰からあたらしいものへと変化してきたことは、御後絵以外の資料からも分かります。

写真を見てください。これは1417年の石碑の一部です（「万歳嶺記拓本」沖縄県立図書館蔵）。石碑の上部には文様が掘られています。ここには太陽と雲が描かれています。当時は、中国は明朝の時代でした。この石碑は、尚真がこの地を遊覧した際に、王の治世や国の繁栄を祝ってわき上がった民衆の万歳の声を記念してつくられました。その石碑に太陽が掘られているということは、太陽が国王の権力を象徴したものであったといえます。

一方、清朝のころに作られた石碑を見ても、龍が掘られているものがあります（「琉球国



新建国学碑文拓本」沖縄県立図書館)。この石碑には、真ん中に宝珠があり、その周りに2匹の龍が描かれています。このように、清朝の時代になると太陽から龍へと文様が変化してきました。くり返しますが、太陽は琉球古来の信仰で、あとから述べますように龍は中国皇帝を象徴する架空の動物です。石碑の文様をみると、太陽から龍へと新たな王国思想へと転換していたと言えます。

その意味で、中国の王朝が明朝から清朝に交替したところから、琉球王権は自らの統治方針を、琉球古来の統治思想から儒教や龍などに代表されるように中国的な統治思想に変換したと言えます。このように周りの道具をみると、「脱琉球化」を果たし、中国的な思想に傾倒したようにもみえます。御後絵の他の場所でもはたして同じことがいえるのでしょうか。

## 御後絵の変化②

それでは、次に国王が着用している衣裳に注目してみましょう。

比較のために国王の部分のみ拡大しました。左側の尚真は単色、右側の尚育は服に文様が描かれていますのがわかります。この国王の衣裳は、中国皇帝から下賜されたものでした。ですので、衣裳の違いも中国の王朝に要因がありそうです。もう一度、御後絵の一覧を見てみましょう。尚真のころは、中国には明朝という王朝がありました。現存する御後絵でいえば左側の五人の国王が明朝のころに在位していたものです。このころの御後絵には単色の衣裳を着用した国王が描かれています。一方、右側の尚育のころは、中国は清朝という王朝がありました。このころの国王は文様の描かれた衣裳を着用しています。国王の拡大写真に戻ります。

さて、この衣裳は皮弁服と呼ばれるものです。さきほども申しましたように、中国の皇帝からもらったものです。この尚真は中国の明朝皇帝からもらいました。服の形をみますと、袖の長い服になっていますのが分かるでしょうか。中国の文官が着用する衣裳でした。

さて、この皮弁冠の色は何色でしょう。くり返しますが、御後絵は、モノクロ写真しかのこっていません。何色だと思いますか。御後絵やこの時期の琉球国王の皮弁服は現存していませんが、似たものが日本に残されています。それが豊臣秀吉という人が明朝の皇帝からもらった衣裳です。豊臣秀吉は、日本では有名な人で16世紀末に日本を武力統一した人です。彼は日本を統一した後、朝鮮半島に侵略戦争をしかけました。朝鮮半島では朝鮮の人びととともに明朝からも援軍が訪れ、秀吉に抵抗しました。結局、秀吉の軍隊は撤退するのですが、その講和会議で中国皇帝は秀吉に衣裳を贈ったのです。秀吉がもらった服がこちらです(「常服」妙法寺蔵)。いかがでしょうか。みなさんの想像通りでしたか。赤色の服ですね。明朝は周辺諸国の国王へ、それぞれのランクに応じた衣裳を贈っていました。そのランクはかなり厳格なもので、周辺諸国の国王が勝手にランクに合わない衣裳などを着用することは禁止されていました。明朝の皇帝が日本国王に贈り物を贈るときは、もともと琉球国王よりワンランク上の待遇をしていたのですが、秀吉は朝鮮半島に戦争をしかけたので、琉球国王と同じランクに下げられてしまいました。たまたま、秀吉の衣裳が残されていたので、琉球国王の皮弁服がどのようなものであったかが分かったのです。秀吉の衣裳は常服と呼ばれるもので、厳密には皮弁服とは異なるものですが、色はほぼ同じと考えて問題ありません。

現存する秀吉の衣裳から赤い皮弁服を着た尚真ということが分かりました。次に注目したいのは、ベルトです。この絵では胸のところにあるものです。これは現物が残されていますので、それを見てみましょう。写真は、現在、日本の国宝に認定されている琉球国王家由来の品のなかのベルトです(「石帯」那覇市立歴史博物館蔵)。おそらく御後絵に登場するベルトに近いものと思います。ベルトは、石帯と呼んでいました。石帯も中国の皇帝からもらったものです。写真の石帯は、布製の帯に20個の玉がはめられています。玉には龍や尾長鶏、牡丹などが描かれています。写真は龍です。前向きに飛んでいます。龍は、中国皇帝の権威と結びついた空想上の動物です。中国の皇帝をからもらったベルトですから龍が描かれているのです。龍のまわりには雲や波という縁起の良いデザインと右上と左上にも縁起の良い文字が書かれています。



皮弁冠や石帯のほかにも、御後絵に描かれている靴やズボンなども皇帝からもらっていました。御後絵は中国皇帝からもらった衣裳を着用して描かせていたのです。このことは、琉球の国王にとって中国皇帝の存在が大きかったことを指します。

みなさんもお存じの通り、琉球国王は勝手に国王を名乗ることはできませんでした。前の国王が亡くなると、琉球は中国に対して次の国王候補を推薦します。推薦を受けた中国は琉球の新しい国王を任命するために使者を琉球まで派遣するのです。この使者が冊封使と呼ばれる人びとです。冊封使は首里城で「汝を琉球国王に叙任する」という内容の皇帝の勅書を読み上げ、そして新しい琉球国王が誕生するのです。その際、勅書とともに国王に与えたのが、皮弁服や石帯などの国王衣裳でした。御後絵は、この琉球国王に叙任された時に中国皇帝からもらった衣裳を着用して描かせていたのです。琉球国王は中国皇帝の権威に寄り添っていたことが分かります。

そのようななか、17世紀の中頃には、中国で大きな争いがあり明朝から清朝に王朝が交替します。清朝は、明朝と方針を変え琉球国王へ与える衣裳を変更しました。そのため御後絵の衣裳も代わったのです。それでは次に清朝のころの御後絵をもう一度みてみましょう。

明朝のころと比べて衣裳に文様があるのが分かります。どのような色でどのような文様が描かれているのでしょうか。じつは、この衣裳も現存しています。さきほどの石帯と同じで日本の国宝に認定されているものです。これは那覇市歴史博物館に所蔵されている王家由来の衣裳です（「赤地龍瑞雲嶮山文様縹珍唐衣装」）。おそらく御後絵に描かれた衣裳はこの写真の近いものと思います。

拡大した写真です。2匹の龍と雲、波というデザインです。中国皇帝の権威を代表する龍が描かれています。実は、清朝になると明朝のころのように琉球国王へ衣裳が贈られることはなくなりました。その代わりに清朝からは衣裳の材料となる布をもらうようになりました。琉球ではもらった布を使って衣裳を仕立てていたのです。そのため、清朝のころの国王御後絵は、明朝のころとは異なる衣裳を着用しているようにみえたのです。しかし、衣裳の形は明朝のころとほとんど変わっていません。自分たちで作るようになったため、衣裳には琉球ならではの裁量の余地が生まれたはずなのですが、じつは琉球的な衣裳ではなく、それまで通り、中国的な衣裳を作っていたのです。これまでの話をまとめてみます。

まず、国王の周りに配置された道具のなかで太陽が消える一方、儒教を象徴する香炉が登場してきたことを確認しました。衣裳からみても中国皇帝に忠実な琉球国王というイメージで見えます。衣裳をもらうか、材料となる布をもらうかという違いはありましたが、明朝から清朝まで衣裳の形は似たものでした。このことは、琉球的な要素を薄くしつつ、中国の権威に近づいた王権へ生まれ変わろうとしていたのではないのでしょうか。

それでは、中国的な要素を強める背景にはなにがあったのでしょうか。

まず考えられるのは儒教の有効活用です。当時の東アジア社会では、支配者にとって儒教はたいへん効果的な考え方と捉えられていました。とくに17世紀以降、清朝が成立する前後ごろから、日本や朝鮮王朝は、積極的に儒教論理を取り入れることで政治の安定を目指しました。この流れのなかに琉球もあったとみることができます。琉球はそれまでの琉球独自の支配方針ではなく、東アジアで主流となった統治思想である儒教を導入したのです。18世紀前後に琉球では先代の国王位牌の安置方法を儒教的なものにしたり、民衆に儒教の基本的な行為である祖先祭祀を徹底するように指示しています。国を挙げた儒教化がすすんでいたとも見なすことができるかもしれません。

もう一点、中国的な要素を積極的に入れた背景には、明朝の末期に日本からの武力侵略を被り、琉球がしだいに日本的になっていったことがあったという見解があります。つまり、日本の支配下になってから、日本の影響が強まるなか、日本とは異なる琉球の姿を、とくに日本側に演出する必要がありました。琉球は、日本とは異なる大国の権威を得て、日本を牽制しようとしていたと考えられています。もちろん中国の権威を確保して、国内の求心力を得ようとしていたとも思います。

以上のような背景があったため、琉球は中国的になっていったとされています。しかし、琉球は一心不乱に中国に傾倒していた訳ではありません。そのことは御後絵の冠に注目して考えていきたいと思います。

### 御後絵の変化③

冠を見てみましょう。一見するとおなじように見えますが、詳しく見ると違います。このふたつの御後絵の冠はどこが異なるでしょうか。ふたつの御後絵を比較しますと、冠についている飾りが違うことが分かります。冠も衣裳と同じで明朝のころには、中国皇帝からもらっていたのが、清代には琉球で作られていくようになるものです。尚真の冠を見ますと、冠にラインが入っているのが分かります。このラインの数を数えると真ん中には7本あるのがみえるかと思います。尚育の方はと言いますと、見えづらいですが12本あります。尚育の子どもで、琉球最後の国王となった尚泰の冠が残されていますので、それを見てみましょう。こちらも那覇市歴史博物館に所蔵されている国宝です(「王冠」)。これには12本ラインがあるのが分かります。このラインの増加は何を意味するのでしょうか。

明朝では周辺諸国の国王に衣裳を与える際、ランク付けて、相手によって差をもうけていたことはさきほど申しました。同じように冠もランクが設定されていました。明朝のころの琉球国王はラインで言えば7本クラスで、その上には、例えば朝鮮王朝の国王は9本、皇帝自身は12本の冠を着用していました。それが清朝の時代になり、冠が与えられなくなり琉球で作るようになると、中国の皇帝と同じランクの冠を作り出したのです。

さらにいえば、このラインには赤色や黒色や金色の玉がついており、この玉の数にもランクが付けられていましたが、琉球国王の冠についた玉の数は皇帝のものを超えているとされています。琉球国王は、中国的な要素を取り入れつつ、王権を強化しようとしていましたが、冠など一部の物品に関しては、中国のルールに従いながら、勝手に皇帝以上の権威を付与したものを作り出していたのです。

たしかに琉球は、政治的に見ると中国や日本という大国のなかにあり、困難な国家運営を行ってきました。しかし、大国のなかにあつたからこそ、中国・日本に飲み込まれないためのいろいろなアイデアが生まれたと思います。組踊といった芸能も同じと言えるでしょう。中国的ながら完全に中国ではなく、もちろん日本とも違うという琉球ならではの価値観を作り上げたところに、琉球の人びとの強さがあつたのではないのでしょうか。

以上で、わたしの話しを終わります。ご清聴ありがとうございました。

### 参考文献

- 安里 進『考古学からみた琉球史』(下)、ひるぎ社、1991年。
- 高良 倉吉「向象賢の論理」『新琉球史近世編』上、琉球新報社、1989年。
- 加地 伸行『儒教とはなにか』中公新書、1990年。
- 豊見山和行「御後絵からみた琉球王権」『新しい琉球史像』榕樹社、1996年。
- 高良 倉吉「琉球王国の展開」『岩波講座世界歴史13』岩波書店、1998年。
- 平川 信幸「琉球国王の肖像画「御後絵」の考察」『デアルテ』九州藝術学会、2015年。
- 小島 毅『儒教の歴史』山川出版社、2017年。

### リカレント講座を終えて 麻生 伸一(沖縄県芸術大学全学教育センター)

今回の出張では、三つの講座を担当した。リカレント講座の「古琉球の外交と社会」と「近世琉球の外交」および、一般向け「琉球史概説－御後絵－」である。

「古琉球の外交と社会」では、古琉球期を描いたとされる絵図資料「琉球国図」(沖縄県立博物館・美術館所蔵)を素材としながら、那覇に居住していた人びとの生活について説明した。とくに、

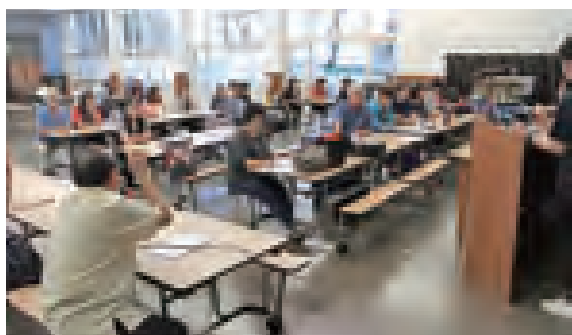
仏教・道教・日本神道といった外来の宗教が習合していたことを絵図資料などから解説し、那覇の港湾都市としての機能を紹介した。また、古琉球期に首里王府が使用していた文字に注目して、外交・内政両側面からみた当該期の琉球の特徴を説明した。

「近世琉球の外交」では、近世以降の日本との関係を踏まえた琉球史について概説した。まず、近世琉球の外交戦略が、①琉日関係の隠蔽、②「中国化」志向、のふたつであったことを示し、それぞれの特徴について、絵図資料をもとにしながら解説した。まとめとして、近世琉球は、明清中国や近世日本という自国より大きな国との外交を余儀なくされるという問題があったが、そのなかで生き残るための術を構築していったこと、この生き残り戦術は高度な外交戦術にもとづいていたことと結論づけた。

「琉球史概説－御後絵」では、古琉球から近世琉球までのおよそ500年間にわたる歴史について、国王肖像画である「御後絵」を素材として概説した。ここで重点を置いた説明したのは、明清中国との関係である。琉球国王は明清中国の皇帝から王位を叙任してもらうことから、琉球王権にとって中国との関係はもっとも重視しなければならないものでもあった。しかし、500年のあいだで中国は明朝から清朝へと王朝が交替したため、琉球と中国との関係も微妙に変化する。この講座では、琉球と中国との関係を、脱琉球化と儒教化、「中国化」志向と、琉球王権の独自化というキーワードで説明した。琉球は明清中国との外交を構築してから、単に「中国」に傾倒していたのではなく、琉球独自の文化・思想と中国的な考え方とのあいだを行き来しながら、王権を強化しようとしていたこと、近世以降には琉球への影響力を強めた近世日本との距離感も、王権にとって不可分の要素となっていたことなどを御後絵から読み解いた。

いずれの講座も通訳を担当していただいたレファさんのご尽力により言語の壁はほとんどなかったと思われる。しかしながら、一回目の講座では、わたしの日本語の説明が早口となったり、資料の説明にあてる時間が少なかったりと、時間配分に問題があった。三回目の講座では、ほとんど時間通りに終えることができたが、事前の予行演習不足が課題としてあげられるだろう。もちろんこれはすべてわたしの責任である。

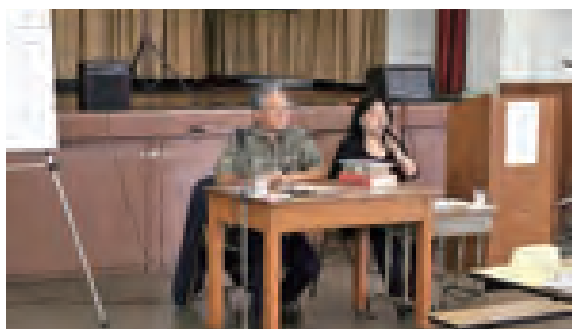
末筆ながら、本講座の通訳を担当されたレファさんに感謝申し上げたい。専門的な用語の多い琉球史講演の翻訳は困難も多かったと思う。とくに近年定説に異論の出てきた時代区分および時代表記の問題は、翻訳に際してご苦労があったと推察する。重ねてお礼申し上げます。



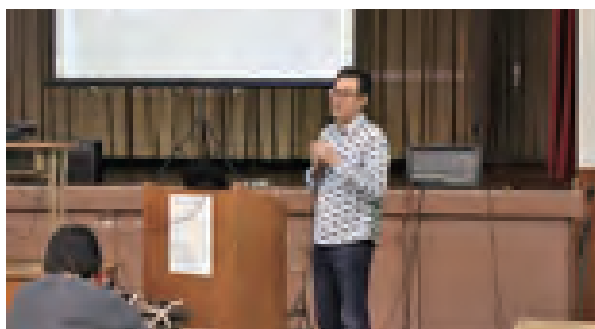
会場の様子



琉球芸能史の講座の様子



琉歌詞章解説の講座の様子



琉球史の講座の様子



ハワイ沖縄センターにて



両大本山ハワイ別院 正法寺にて



H29年度 リカレント講座のチラシ

#### 1-8-4 アンケート結果

平成29年度 沖縄県立芸術大学 ハワイにおけるリカレント教育講座

受講者アンケート 集計

会場：ハワイ沖縄センター及びホノルル曹洞宗寺院

日時：平成30年3月23日～24日

対象：県費留学生OB及び一般市民



## 来場者数

3月23日 琉球芸能史概説 20名、ワークショップ：歌三線8名、舞踊15名

3月24日 舞踊琉歌詞章解説講座 26名、ワークショップ：歌三線8名、舞踊22名

一般講座：組踊の鑑賞法I・琉球史概説I 23名

3月25日 舞踊琉歌詞章解説講座、琉球史概説 20名 ワークショップ：歌三線10名、舞踊18名

一般講座：組踊の鑑賞法II・琉球史概説I 23名

※アンケート用紙は各日程の最後に回収した。

## 質問内容

①年代、②この講座を知ったきっかけ、③講座の評価、④その評価の理由、⑤次回の参加意欲もしくは友人へ勧めたいか、⑥その理由

## 集計結果

3月23日 (回収枚数14枚)

①年代	人数
10代	1
20代	1
30代	2
40代	0
50代	2
60代以上	8
計	14

②きっかけ	人数
友人・家族・教師	13
県人会のニューズレター	3
その他	2
無回答	1
計	19

③評価	人数	割合
5	14	74%
4	4	21%
3	1	5%
計	19	100%

### ④その評価の理由

- ・ It was very helpful to learn about the history of the odori and how it started. The use of the instruments were very helpful. (踊りの歴史やどのように始まったのかを学べてとてもよかった。楽器の使用もとても有意義だった)
- ・ GOOD AUDIENCE PARTICIPATION/INTERACTION (受講者とのやりとりがとてもよかった)
- ・ Presentation was clear and very informative. Very thoroughly researched but also engaging for the audience. (とても明確で有益なプレゼンだった。非常によく研究されているだけでなく受講者とも関わっていた)
- ・ Teachers were experts in their area and it was fun to have hands on experience in music & dance. (先生方はとても造詣が深く、ワークショップに飛び入り参加ができてとても楽しかった)
- ・ It was really nice to participate, just a little sad we didn't get to finish the song. (参加できてとてもよかったが、曲を終えられなかったのが残念だった)
- ・ Sensei was very knowledgeable and helpful on what/how we can improve our dances. Learned about the 3 points of foundation in Okinawan dance, and how to use your 'Koshi' which is an important part of Okinawan dancing. (先生は私たちが踊りを向上させるにはどうすればいいか適切に教えてくれた。琉球舞踊の3つの基礎と、「腰」の使い方の重要性を学んだ)
- ・ Needed more time (もっと時間がほしかった)

⑤「次回の参加意欲もしくは友人へ勧めたいか」については、14名全員「YES」と回答。

### ⑥その理由

- The senseis from Okinawa were very well. Prepared and the way they explained their lessons could be understood and the interpreters help a lot. :) (沖縄からの先生方はとても上手でした。よく準備されていて説明がわかりやすかった。通訳者も上手だった)
- GOOD OVERVIEW FOR PEOPLE WHO WANT TO LEARN MORE ABOUT OKINAWAN CULTURE (沖縄文化をさらに学びたい人にとって、良い概要である)
- want to support okinawan culture & learn more (沖縄文化をサポートし、もっと学びたい)
- WOULD LIKE TO LEARN MORE ABOUT KUMI UDUI (組踊についてもっと知りたい)
- It's really friendly and has a fun atmosphere. (とてもフレンドリーで楽しい雰囲気)
- Found this class very informative as a basic for dancing first. Hands on, very relaxed atmosphere and fun in learning an appreciation of Okinawa dance. (舞踊の基礎が最初があり、この授業はとても有益だった。とてもリラックスした雰囲気で楽しく琉球舞踊が学べた。)

3月24日 (回収枚数 19枚)

①年代	人数
10代	2
20代	0
30代	1
40代	1
50代	7
60代以上	8
計	19

②きっかけ	人数
友人・家族・教師	10
県人会のニュースレター	2
その他	1
無回答	1
計	14

③評価	人数	割合
5	10	86%
4	2	14%
計	1	100%

#### ④その評価の理由

- I enjoyed learning new songs and the explanations of the songs. Learned new things about Kumi Odori. (新しい曲とその意味を学べてよかった。組踊に関する新しいことを学んだ)
- Would have appreciated written summary of presentations in English. The Japanese presentation was just right except the handouts were too difficult to read and understand. I remember some lessons I learned at Ryudai in 1982 as Kenpi student. (プレゼンテーションの英語要約があるとよい。日本語の資料が読みづらく理解しにくかった。県費留学生として1982年に琉大で学んでいたことを思い出す)
- Instructors are very knowledgeable and patient. Translator was great. Question and answer was very effective for getting information. 3 day workshop is a great idea, lots of material covered. (講師たちはとても知識が豊富で思いやりがあった。通訳者は素晴らしかった。詳細を得るための質問の時間があってよかった。3日間のワークショップはとても良いアイデアで、多くの内容をカバーしていた)
- This was a really fun experience and the demonstrations help a lot to see what was needed for dressing, hair and makeup. (とても楽しい経験で、着付けや化粧、結髪に必要なことをデモンストレーションからたくさん学べた)
- It was very informative to learn history of Ryuuka. I didn't know about it. (琉歌の歴史に関してとても有益な情報を得られた。)
- Such valuable info. Written material is all in Japanese. I know being able to read the handouts would make a huge difference. (なんて価値のある情報。全て日本語で書かれているので、配布資料を読むことができれば大きな違いがあるだろう)
- Class/lecture very interesting as gain background and the ryuuka are different forms, but so much information that think translator could not translate everything that was

said in Japanese. If it could have been translated in English would have been better, as able to read Japanese as would have loved to have had the written in English as a good reference for future. (琉歌の背景知識や異なる形式を知るクラスはとても興味深かった。しかし、情報がありすぎてすべて通訳しきれていなかった。資料を英訳してもらえれば将来的にもっとよくなるだろう)

- I am sure the topic would have been more interesting IF we had English translation of poems. Also, if the poems were at least in Romaji then we could have "counted" a long with him. (英訳された詩があつたらもっと興味深くなつただろうと感じる。もしくはローマ字表記があればよかつた) .
- I was interested in Ryukyu music, History, and explanation of the kumi udui. It was nice to get explanations about the music and words (poems). (琉球の音楽や歴史、組踊の説明に興味を持った。音楽や歌詞の意味を知ることができてよかつた)
- The lecture was interesting but a little hard to follow. I couldn't make it the 1st day, so I don't know if I missed notes on the lecture. Maybe if the lectures were aimed more to non-academic types, it might have been easier to learn more. (講義は非常に興味深かつたが少しついていくのが難かつた。初日に出席できなかつたので、何か聞き逃していた部分があつたのかもしれない。もう少し学術的ではない内容であればさらにわかりやすくなると思う)
- Ryuuka- Good interepreter but materials/handouts should've also been in English as well. Little too much linguistic details for general audience. Dress Hair Makeup-Excellent! But not enough time. (琉歌の授業について、通訳はよかつたが英語の資料があるのもっとよかつた。一般の受講者には少し言語学的過ぎると感じた。舞踊の結髪は素晴らしかつた!もつと時間があればよかつた)

⑤「次回の参加意欲もしくは友人へ勧めたいか」については、19名全員「YES」と回答。

⑥その理由

- It is informative or it's a different perspective to what we learn here. (有益であり、ハワイで学ぶこととは異なつた視点だから)
- The younger generation, like my college-age children need to learn about ancient, Ryukyuan heritage. We are involved with Okinawan dance and I appreciate the opportunity for us to hear and learn about Okinawa uta, Ryuka, history. (大学生のような若い世代は琉球の遺産を学ぶ必要がある。琉球舞踊を習っているが、このように歌と琉歌と歴史を学べる機会があつてとても感謝している)
- It's fun to learn new techniques with people who are just as passionate about performing arts. (芸能に情熱のある人々と一緒に新しい技術学べるのは楽しい)
- Even though they might not like it, it was a unique experience. It was so fun to see myself go through a complete transformation with the makeup. It would definitely enjoyable to see this culture. (とてもユニークな体験だつた。化粧を通して完全な変化を目にするのが楽しかつた)
- I think it will help to do better in dance to understand meaning of songs. (歌の意味を理解することで踊りをさらにうまくすることができると思う)
- Experts and resources in Okianwan poetry and literature is extremely limited. Also, Okinawan Americans are very under-represented in America. I feel this is a huge step in sharing our culture worldwide. (琉球の詩と文学に関する専門家と資料は非常に限られている。それに加え、アメリカにおいて沖縄系アメリカ人たちはとても過小評価されている。沖縄の文化を世

界で共有する上でこれはとても大きな一歩だと感じる)

- There are many dancers here in hawaii and to open oneself to the history and the music creation would help understand our culture. Learning about some history helped to understand our culture's evolution. (ハワイには多くの舞踊家がおり、彼らが歴史や音楽に通じていることは自らの文化を理解する手助けになるだろう)
- Any chance to learn about music, dance, history is very educational + helpful. Ryukyu kimono, hair makeup as well as music- sansin+fuye were also studied :) thank you!! (音楽や踊り、歴史を学ぶ機会は全てとても勉強になる。)

3月25日 (回収枚数 24枚)

①年代	人数
10代	3
20代	0
30代	0
40代	0
50代	4
60代以上	17
計	24

②きっかけ	人数
友人・家族・教師	8
県人会のニュースレター	7
その他	9
無回答	24
計	19

③評価	人数	割合
5	18	75%
4	3	13%
3	2	8%
無回答	1	4%
計	24	100%

#### ④その評価の理由

- Teachers of Sansin were both wonderful. (三線の先生はどちらも素晴らしかった)
- I learned details about each motion of Kajyadefu and I was able to know another dance as well. (かぎやで風のそれぞれの動きの詳細が学べた)
- went through all the words → meaning of the lyrics Karaya, which was wonderful and easy to understand (瓦屋の歌詞の意味が素晴らしく理解しやすかった)
- It was a really interesting lesson and experience to further my knowledge about the art and history of the people of the Ryukyu islands. I liked the teachers because they kept everyone involved in the conversation. (沖縄の芸術や歴史に関する私の知識を広げる、とても興味深い授業と体験だった。先生方は受講者と授業を作り上げていたのでとてもよかった)
- Mixing photographs within the lecture, keeps audience engaged on a topic which is thought to be normally boring (history) better than just talking. Usage of comparison of articles and relating them to different era's is a novel method to present facts/info. (写真を取り入れた歴史の講座は、受講者を飽きさせないのでとてもよかった)
- With the very limited knowledge of Japanese language, I could still figure out that Sensei mentioned 3-4 locations in Japan. Interested said, "across Japan", so much lost in translation. Sensei made a joke wasn't passed on to audience. (琉歌の授業に関して、私の日本語の知識は少ないが、先生の挙げた日本の地名が少しわかった。話された内容のうち、冗談のところが通訳されてなかったのがもったいなかった)
- small group so it was easier to get 1:1 instruction and fine tune the songs we learned. I enjoyed learning how to sing and play for the kumiodori. It was good to have the words in kanji, katakana and Romaji. (三線のワークショップは、小さなグループだったので1対1の指導が受けられた。組踊の曲を学べてとても楽しかった。漢字と片仮名とローマ字の表記があったのがよかった)
- Long and lots of details at end of day. (日の最後に長くて詳細が多かった)
- Interesting when explained about kumi udui, learning the songs and lyrics of the plays.



Learned about intonation speed, songs demonstrating different characters and situations.  
(組踊の説明が興味深かった)

- Explanation of the Ryuka was very interesting. Helped with interpretation of dance in very informative and well-researched. (琉歌の説明は非常に興味深かった。踊りを理解する上でとても有益だった)
- very interesting topic and innovative presentation that I have not heard previously. (初めて聞くことばかりでとても興味深い話題だった)
- 組うどういについていろいろな約束事のあることを学びました。この知識を元に将来組踊を見たいものとかわくわくした気持ちになりました。感受性豊かな人に成長できそうです。ありがとうございます!

⑤「次回の参加意欲もしくは友人へ勧めたいか」については、24名全員「YES」と回答。

⑥その理由

- Good teachers + explaining of movements (良い教師陣と踊りの動きの説明)
- They would think it's fun to be involved in the Ryukyu culture (especially since they like to try new things!) (友人たちも琉球の文化を楽しむだろう)
- This is very good opportunity to learn about Okinawa culture not only performing arts but also its history and language. (芸能だけではなく、歴史や言語に関する沖縄の文化を学ぶとても良い機会であるから)
- It was really cool to learn about where my ancestors came from and to now have some background knowledge on their culture and music. I know my friends have a similar background to me, so I think they should know this as well. (自分の先祖の地について学ぶことや、その文化や音楽に関する背景知識を学べることはとても魅力的だった。友人たちも私と似たような背景を持っているので彼らもこれを知るべきだと思う)
- Recommend this to any college student in Asian Studies or Okinawan studies. Attend for extra credit? (ハワイ大学のアジア学や沖縄学を取っている学生に勧めたい)
- I would love to come to learn new song again! (また新しい曲をぜひ習いたい!)
- Handout in English would be more helpful. If not a full translation, could just be an outline and people can write their notes on outline. (ハンドアウトの英訳があればさらによい。全訳ができなければ、受講者がメモを取れるように英語の要約でも構わない)
- Good, but so much information in one day (3 days) and to stay focused on dance, music, kimono, history and kumi udui in oneday... good for overview but the fine points are so detailed-complex... better to separate it to another session. Good to see so much interest in sharing information. (全体的によいが、1日の授業内容が多すぎる。組踊概説もよかったが観点がとても複雑で細かい…。もうひとつのコマに分けた方がよかったのでは)
- even if we went to Okinawa would not be able to acquire this detailed information translated for us! (このような詳細な情報を通訳して聞く機会は沖縄でも体験できないだろう)
- Presentations were rare opportunity for people to learn in-depth history (歴史に関する詳しいプレゼンテーションは貴重な機会だった)
- I would like to know more about the history and also maybe more about the dance meanings. I think more people will come if there was a little more advertisement. It would be nice if they could always come back. (もっと歴史について、また踊りの意味について学びたい。もう少し広報に力を入れるともっとたくさん集客できるだろう。毎年開催してほしい)
- good for possibly extra credit for UH Asian Studies/Japan or Okinawa Studies. (ハワイ大学のアジア学・日本(沖縄)学の講義によいと思う)

・今回は事情があつて他のクラスに出席できず、とても残念です。次回にはもっと多くのクラスに参加したく思っています。専門家による講演は詳細で深みがあり、学ぶものを向上させてくれます。

## 1-9資料

(当事業の新聞掲載)

- 2017年 ①11月4日 第1回講演会 寄稿 (琉球新報10面)  
 ②11月8日 舞踊実技の見学授業 (沖縄タイムス1面)  
 ③11月12日 第1回講演会について (琉球新報23面)  
 ④11月14日 第1回講演会について (沖縄タイムス23面)
- 2018年 ⑤1月16日 舞踊授業の公開授業 (琉球新報27面)  
 ⑥1月16日 舞踊授業の公開授業 (沖縄タイムス23面)  
 ⑦2月6日 第2回講演会 寄稿 (琉球新報)  
 ⑧2月11日 第2回講演会について (沖縄タイムス) ②  
 ⑨2月18日 事業報告会について (沖縄タイムス)  
 ⑩2月23日 事業報告会について (琉球新報)

①



③



④



⑤



**しまくとぅばで英語指導**  
 英語科の先生が、しまくとぅばを指導する様子。

英語科の先生が、しまくとぅばを指導する様子。授業の中で、しまくとぅばの表現を英語で説明し、学生が理解を深めている。先生は、しまくとぅばの文化や背景についても詳しく説明している。

⑥



**英語科の先生が、しまくとぅばを指導する様子。**

英語科の先生が、しまくとぅばを指導する様子。授業の中で、しまくとぅばの表現を英語で説明し、学生が理解を深めている。先生は、しまくとぅばの文化や背景についても詳しく説明している。


⑦



**英語科の先生が、しまくとぅばを指導する様子。**

英語科の先生が、しまくとぅばを指導する様子。授業の中で、しまくとぅばの表現を英語で説明し、学生が理解を深めている。先生は、しまくとぅばの文化や背景についても詳しく説明している。

⑧



**英語科の先生が、しまくとぅばを指導する様子。**

英語科の先生が、しまくとぅばを指導する様子。授業の中で、しまくとぅばの表現を英語で説明し、学生が理解を深めている。先生は、しまくとぅばの文化や背景についても詳しく説明している。

⑨

**英語科の先生が、しまくとぅばを指導する様子。**

英語科の先生が、しまくとぅばを指導する様子。授業の中で、しまくとぅばの表現を英語で説明し、学生が理解を深めている。先生は、しまくとぅばの文化や背景についても詳しく説明している。

⑩

**英語科の先生が、しまくとぅばを指導する様子。**

英語科の先生が、しまくとぅばを指導する様子。授業の中で、しまくとぅばの表現を英語で説明し、学生が理解を深めている。先生は、しまくとぅばの文化や背景についても詳しく説明している。

## 2. 島嶼学学術交流事業

### 2-1 事業の趣旨と概要

沖縄は島嶼地域であり、日本や中国、東南アジアといった周辺地域と密接に結びつきながら独自の歴史や文化を形成してきた。また、近代以降の沖縄は、ハワイや旧南洋群島をはじめとして世界各地へ多数の移民を送り出してきた移民県でもある。移民は、琉球・沖縄の文化をひろく伝播し、また移民先では地域の文化と影響しあいながら独特の琉球・沖縄文化が継承されてきた。沖縄を考える際、島嶼性と人の移動、文化は、重要なテーマとなる。

本部門では沖縄を含めた島嶼地域の文化のありようを、人の移動をキーワードとして検討することで、島嶼地域の自主性や独自性を浮き彫りにすることを目的とする。具体的には、島嶼文化に関する研究などについて、専門家を招聘して学術交流を行い、そこで得られた知見を広く周知し課題を共有するためシンポジウムを行った。シンポジウムの企画・実施は、学内の教員のなかから次のメンバーが中心となり遂行した。

久万田 晋 (沖縄県立芸術大学附属研究所)

小西 潤子 (沖縄県立芸術大学音楽学部)

藤田 喜久 (沖縄県立芸術大学全学教育センター)

麻生 伸一 (沖縄県立芸術大学全学教育センター)

シンポジウムに向けて、はじめに実施計画を検討すべく「第1回 島嶼学部門会議」を2017年11月28日に開催し、シンポジウムの日程とテーマ、登壇候補者について話し合った。以降、定期的に会議を開催し、分担して登壇候補者と調整しつつ、シンポジウムの内容を検討した。また、この趣旨に賛同を得た日本島嶼学会からの後援を受けることとなった。詳細は後掲の資料を参照されたい。

シンポジウムは「沖縄の人の移動と未来への展望－島嶼・環境・文化－」と題して2018年3月18日に開催した。シンポジウムの前日(3月17日)には、登壇者と実施メンバーとともに意見交換を行い、論点の確認と翌日のシンポジウム運営に関する調整を行った。

### 2-2 シンポジウム資料集

#### 2-2-1 開催要領

##### 1. シンポジウムタイトル

沖縄の人の移動と未来への展望－島嶼・環境・文化－

##### 2. 主催団体など

主催：沖縄県立芸術大学附属研究所

後援：日本島嶼学会

##### 3. 趣旨

海によって周辺地域と隔絶する沖縄は、さまざまな自然環境の影響を受けながら、シマごとに特徴的な地域性を創造してきた。一方で、世界各地に多くの移民を送り出してきた移民県でもある。沖縄にとって海は、その隔絶性から独自の文化をはぐくむ要素となったが、海を利用した生活が常態化していた沖縄の人びとにとって、外界との関係を完全に断絶するものではなく、世界につながる「道」でもあったのである。

沖縄の人びとは、移民先でも独自のコミュニティを形成してきた。その背景には、沖縄特有の文化や、「中央」日本の辺境に置かれるという経験などがあったが、移動先の社会や自然といった環境との相互作用のなかで、新たな文化を創造していったとも捉えることができる。

以上を踏まえながら、本シンポジウムでは主に次の項目について考えていきたい。



第一に、島嶼社会である沖縄の文化的特徴の解明である。「外」と結びつきながら、どのように自己の文化を形成してきたかを、自然環境や「中央」からの影響を踏まえながら考えたい。

第二に、沖縄の人びとが移動先で継承・創造してきた文化自体や移動先の文化へ与えた影響の解明である。特有の文化を創り上げてきた沖縄の人びとは、移動先でどのような文化を受け継ぎ、また新たな文化を創りあげてきたのか、そこに沖縄ならではの特徴は見いだせるかについて考察したい。

第三に、これまでの沖縄の人びとの移動から得た経験が、沖縄の将来に対してどのような資産になるのかを考えたい。

このように、本シンポジウムでは沖縄をメインフィールドとしながら、沖縄以外の地域との比較も意識しつつ島嶼社会の特性を明らかにし、さらに島嶼型社会ならではの持続可能性のあり方を展望することを目的とする。

#### 4. 日程

・意見交換・打ち合わせ

3月17日(土) 15:00～

・シンポジウム

3月18日(日) 13:00開場、13:30～18:00

#### 5. 講演・報告タイトル

基調講演：南洋文学と人の移動

仲程 昌徳(琉球大学元教授)

シンポジウム

セッションA「島嶼・環境」

藤田 喜久(沖縄県立芸術大学)「沖縄の自然環境と生物の成り立ち」

藤田 陽子(琉球大学)「沖縄と世界の島嶼地域を結ぶ学術連携」

三田 牧(神戸学院大学)「サンゴ礁の海がつなぐ沖縄の魚食文化とパラオ」

セッションB「島嶼・文化」

高江洲昌哉(神奈川大学)「近代沖縄を島嶼性と移動から考える」

飯高 伸五(高知県立大学)「南洋のアサドヤウンター戦時体制下パラオにおける鉱山採掘と沖縄人の記憶」

中俣 均(法政大学)「『本籍人口数』とは何か一島(嶼)を豊かにする人口の膨らませ方」

### 2-2-2 配布資料・講演要旨

**平成29年度 沖縄県立芸術大学島嶼学シンポジウム  
沖縄の人の移動と未来への展望－島嶼・環境・文化－  
資料集**

2018年3月18日(日) 於：沖縄県立芸術大学附属研究所  
主催：沖縄県立芸術大学附属研究所 後援：日本島嶼学会

【基調講演】 南洋文学と人の移動

仲程 昌徳 (琉球大学元教授)

【セクションA 島嶼・環境】

藤田 喜久 (沖縄県立芸術大学)

沖縄の自然環境と生物の成り立ち

藤田 陽子 (琉球大学)

沖縄と世界の島嶼地域を結ぶ学術連携

三田 牧 (神戸学院大学)

サンゴ礁の海がつなぐ沖縄の魚食文化とパラオ

【セクションB 島嶼・文化】

高江洲昌哉 (神奈川大学)

近代沖縄を島嶼性と移動から考える

飯高 伸五 (高知大学)

南洋のアサドヤユンター戦時体制下パラオにおける鉱山採掘と沖縄人の記憶―

中俣 均 (法政大学)

「本籍人口数」とは何か―島(嶼)を豊かにする人口の膨らませ方―

基調講演 南洋文学と人の移動 要旨 仲程 昌徳 (琉球大学元教授)

沖縄から委任統治下にあった南洋群島への「移動」が多くなったのは大正末で、南洋興発株式会社  
の移民募集に応じてのものであった。南洋興発が、沖縄に目をつけたのは暑さに強く、キビ  
作に馴れていたこと、海外に多くの移民を送り出していたことなどにあったが、沖縄側からい  
えば、人口過剰であるうえに、「ソテツ地獄」と云われるような食べるものにことかく状況が  
現出していたといったことがあつてのことである。

南洋興発による移民募集以後、沖縄の人々が、南洋のどの島にも見られるようになり、太平洋  
戦争が勃発したころには、南洋の総人口の六割から七割を占めるほどになっていたと言われ  
ている。

沖縄の人たちが「移動」して行ったのは、もちろん南洋だけではない。明治の末、二〇世紀  
の夜明けとともに、沖縄の人たちはハワイに渡航し、やはりキビ作等に従事していたし、ブラ  
ジル、ペルー、アルゼンチンといった南米諸国、そしてフィリピン、インドネシア、さらには  
ニューカレドニア、ボルネオといった島々にも渡っていた。

最初に海外に出て行った人々は、そのほとんどが金を儲けてもどつて来ると考えていたと  
言われている。しかし、思うにまかせず、そのままその地に住み着くようになってしまふ。そ  
の間、言葉をはじめ、さまざまな異文化を取り込まざるをえなくなる。取り込むだけでなく、  
こちら側からも発信していくことになる。

そのようなあり方を、異文化間接触と呼んでいいだろう。異文化間の接触は、必然的に新  
しいものを生み出してもいくことになる。南洋群島での例を挙げれば、多くの役者が出か  
けていったこともあり、沖縄の踊りに新しい要素を加えた踊りが生まれてきていた。言葉は  
そのまま、曲を代え、衣装をまったく現地ふうにして、これまでにない踊りを作り上げて  
いるのである。「南洋浜千鳥」がそうである。これは、たんに沖縄で踊られていた「浜千鳥」  
を改変したものであるとはいえないものになっていた。

その逆に、現地に伝わる伝統的な民族舞踊を伝承し、沖縄に持ち帰り、村の大切な行事で  
演じるといったことも起きていた。しかもそれは、南洋では踊られなくなっていたため、島  
の人たちが、

踊りを復活させるため、わざわざ、沖縄まで習いにきたという話があるように、異民族の伝統の復活に、沖縄の人々が大きな役割を果たしたということがあった。

南洋の踊りが沖縄で演じられているということがあるかと思えば、南洋で、沖縄の曲目が生きているということもある。

南洋のある村では、沖縄民謡の曲をとりいれ、村の女たちがそれにダンスをふりつけ、踊るといったことが行われているというのである。それは、かつてその村に沖縄の人たちが住んでいたということを如実に語るものであるばかりでなく、濃密な交流があったことを語るものであった。いわゆる「移動」してきた人たちが運んできたものを取り入れて、新しい芸能を創出するといったことがそこでは起きていたのである。

それは、移民、出稼ぎといった、やむにやまれない事情があつて起こつたことであつたわけだが、いかなるかたちであれ、人が移動することによって、そこに新しい文化が生まれるということを語るものになっていた。新しい文化の創造を考えるのであれば、移動を盛んにするべきだということを、それは図らずも語っていたといふ。

#### 【セクションA 島嶼・環境】

##### 沖縄の自然環境と生物の成り立ち 藤田 喜久(沖縄県立芸術大学)

沖縄の島々には森林、河川、湖沼、湧水(地下水域)、干潟、マングローブ林、サンゴ礁など多様な「自然環境」があり、そこに暮らす極めて多様性(種多様性)の高い生物達の営みを通じた独特の島嶼生態系を有している。沖縄の人々は、古くから自然環境や生物と強い関わりを持って生活してきており、言葉や祭りなどの独特の文化も発展してきた。

一方、沖縄の島々は、はるか昔は大陸の一部(周縁部)であり、中国大陸や日本列島とも繋がっていた。その後、幾度か陸地と切りはなされたり、接続したり、沈んだりをくり返し、現在の島々の姿となった。沖縄の生物には固有種(その地域だけに生息する生物)が多く含まれることで知られるが、これらは、もともと大陸に生息していた種が、島嶼隔離され、長い時間をかけて島々の自然環境に合わせて変化しながら生きてきた名残でもある。近年では、分子生物学の発展により、こうした沖縄の生物達(ヒトも含まれる)のDNAを分析し、生物の近縁関係や種分化の過程を考察することで、生物の視点から、沖縄の島々の成り立ちを考えることもできるようになってきた。

本講演では、沖縄の自然環境とそこに住む生物達の特徴を概観し、島々の成り立ち(地史)との関わりや、沖縄の人々の文化との関わりについて紹介する。

##### 沖縄と世界の島嶼地域を結ぶ学術連携 藤田 陽子(琉球大学国際沖縄研究所)

琉球大学国際沖縄研究所では、2009年の研究所設置以来、沖縄をはじめとする島嶼地域の諸課題について、人文・社会科学系を中心とした多分野融合的研究を推進してきた。沖縄は、島嶼としての「当事者性」という点で、島嶼地域研究の推進に最適な地である。小島嶼のみで構成される日本で唯一の県であるとともに、島としての固有性と他の島々との共通性に優れており、かつ島嶼としての地域的課題を豊富に有しているからである。当事者としての視点とは、島嶼を「周縁」「辺境」と位置づけ相対的な存在と捉えてきた従来の見方ではなく、島嶼自身の立場で主体的・経験的に島の課題について考察する姿勢である。当事者性を有しているということは、他の島嶼との間で共感をもって課題解決に取り組めることを意味し、学術研究においても他の島嶼地域の研究者との連携を図りやすいというメリットがある。

島嶼地域研究の国際的連携強化を図る取組の一つに、コルシカ大学等が中心となって立ち上げられた「島嶼大学間ネットワーク(RETI)」がある。島々のことを島自身の視点から考察するという基本的姿勢に基づき島嶼地域研究を発展させることを企図した大学間連携である。琉球大学は2011年に加盟し日本で唯一のメンバー大学となり、2017年11月には琉大にて年次国際大会を開催した。アジアでの初開催となった本大会には、海外12ヶ国・地域から45名の研究者・

学生を含む総勢100名の参加者が集結し、「島嶼地域の展望：持続性と自律性」をメインテーマとして、学術交流を目的とした研究発表と、若手研究者育成を目的としたRETIスクールを実施し、島嶼地域研究の課題と展望について活発な議論を行い、国内外の島嶼研究者との交流を深めた。

こうした学術連携を拡充することによって島嶼地域研究を発展させるための拠点となるべく、2018年度より国際沖縄研究所は「島嶼地域科学研究所」と改称する。沖縄の「島嶼」としての特性を強みとして活かしながら、世界の島々の自律的・持続的發展に寄与する研究を、RETIや日本島嶼学会をはじめとする島嶼地域研究コミュニティを舞台に展開し、沖縄から世界へとその成果を発信していく。

#### サンゴ礁の海がつなぐ沖縄の魚食文化とパラオ 三田 牧(神戸学院大学)

サンゴ礁を抱く海は沖縄の文化を語る上で欠くことのできない環境条件である。私は糸満漁民の文化人類学的研究から研究活動をはじめ、糸満漁民が第二次世界大戦前に出漁した先の一つ、パラオを第二の研究対象とした。糸満漁民の行くところ、サンゴ礁あり。サンゴ礁は沖縄と太平洋島嶼地域を結ぶ共通項である。

本発表では、サンゴ礁の海に生まれた沖縄の文化として、魚食文化をとりあげる。まず、糸満の魚市場における私の観察から、サンゴ礁の多種多様な魚を糸満の人びとがいかに価値づけてきたかを紹介し、商人としての女性の存在が魚の民俗的価値観の継承・創造・活性化に貢献してきたことを指摘する。

次に、第二次世界大戦前、「南洋群島」と呼ばれた日本統治下マイクロネシアのパラオで、沖縄漁民がどのような活動をしたかを概観する。そして彼らの活動が「漁撈(経済行為を必ずしも目的としない漁)」を行ってきたパラオ社会に、「漁業(経済行為を目的とする漁)」を導入する契機となったことを指摘する。

最後に、パラオにおいて、1945年から現在までに「漁業」をめぐるどのような展開があったかを概観する。戦後、魚の輸出を含む「漁業」がなされたものの、1980年代より資源量の低下が懸念された。パラオでは1990年代に海洋保護法を成立させ、伝統的な慣習に法的な根拠をもたせることで海の資源保護に乗り出した。水産資源で儲けるのではなく「海の豊かさ」を利用した観光業を主軸にした生存戦略に舵を切ったのだ。パラオの資源保護政策は近年も強化され続けている。

沖縄漁民は第二次世界大戦前の一時期に、県外・海外の海に進出し、経済活動「漁業」を行った。また、魚商人である女性を媒介に、豊かな魚の価値が継承・創出されてきた。一方でパラオの人々は島の限られた環境を守りながら持続的に利用する生き方をしてきた。漁業は導入されたものの積極的ではなく、むしろ豊かな海を観光に利用する道を選んだ。共にサンゴ礁の海を抱く島嶼社会の異なる在り方から、それぞれの文化や生存戦略が見える。

#### 【セクションB 島嶼・環境】

##### 近代沖縄を島嶼性と移動から考える 高江洲 昌哉(神奈川大学)

島嶼地域である琉球は、王国時代に各島々に序列的な支配を敷く「特異」性と、環境に規定される形で形成された生活の個性という「伝統」を形成させた。その後、「琉球処分」を経て日本に統合され、沖縄県として近代を歩むことになる。近代は、こうした「伝統」の喪失と再編成の過程といえる。近代史からこの喪失／再編成に注目すると、統合の強さ(個性の喪失、もしくは文明化の語りがある)を強調するか、もしくは、「にもかかわらず」ということで伝統の強さを訴えるというやり方がある。この力点の違いが、沖縄像の違いとして出てくる。つまり、市街地の写真を見せるか、御嶽や芸能の写真を見せるかで「語り」のイメージは違ってくる。ようは均一化した日常と「伝統」を混合的に理解するのか、もしくは日常の中に隠匿された「伝統」という重層的理解をとるかで、沖縄をめぐる近代経験の把握や個性の意味づけに違いが出てくる。



今回のシンポジウムも、ある意味で近代的価値観と社会空間に規定された人々が「沖縄ならではの特徴」、「沖縄の将来に対してどのような資産になるのか」を議論していくことになる。本報告は、「島嶼」と「移動」を軸に沖縄の近代経験を語るわけだが、交通の便を考慮に入れる必要はあるが、近代は人の移動が許されたという意味を抑える必要がある。また、宮古・八重山に島庁が置かれるなど一定の留保が必要だが、国民国家（日本の場合、天皇制国民国家となる）の下では、一定の原則のもと空間の均一的な支配、産業化のように生活スタイルの均一化、学校教育を通して価値観など人の見方や考え方も一定の枠が付されるようになる（もちろん、単純に画一化されないので、個性化と国民化の相克が起きたといえよう）。画一化とそれへの抗いの構図を抑えながら、島嶼に目配りすることで、沖縄という単体的理解に収斂することなく、近世に形成された「伝統」や近代で獲得した経験知をどのように継承し、未来へ手渡していくのか、歴史学の立場からシンポジウムの趣旨に沿って「将来の資産」に資する話題を提供したい。

#### 南洋のアサドヤユンター戦時体制下パラオにおける鉱山採掘と沖縄人の記憶— 飯高 伸五 (高知県立大学)

日本統治下のマイクロネシア（南洋群島）には、マリアナ諸島およびパラオ諸島を中心に、多数の沖縄県人が故郷に錦を飾ることを夢見て移住していった。かれらは、サイパン島でのサトウキビ栽培のほか、パラオのバベルダオブ島などの大きな島では農地開拓に、近海ではマグロ漁やカツオ漁などの漁業や水産加工業に従事した。また、日本人町と化したサイパンのガラパン、パラオのコロール、ポナペのコロニアなどでは商店経営にあたり、経済的に成功した者もいた。こうした人口動態は、近代以降の沖縄人の海外展開の一環として位置づけることもできるが、一方で、帝国日本のアジア・太平洋地域への展開の中で、沖縄人が前線に置かれ、様々な経済開発を担わされ、結果として戦時下にはサイパン、パラオを含む外地で甚大な被害を受けたことも事実である。

こうした沖縄人の位置付けは、日本統治期末期の戦時体制下のパラオで、軍事目的の性急な鉱山開発に、沖縄人が利用されたことによく示されている。バベルダオブ島のガラスマオ村落では、軍用用の軽金属となるボーキサイトの採掘が1940年頃から大々的に実施され、朝鮮半島やマイクロネシア離島部から徴用された人々のほか、沖縄から募集された人々が労働にあたった。多民族的な労働者の構成のなかで、沖縄人の位置付けは低く、採掘という最も過酷な労働にあたる者もいた。現在のガラスマオ村落には、アサドヤユンタのメロディーを借りて、鉱山労働の場面を歌った日本語とパラオ語混じりの歌が残されている。沖縄人と現地人との間には、緊密な接触状況があったことから、ローカル化された沖縄文化が継承されているともいえるが、皮肉なことにそれは、沖縄人が外地で前線に配置され、戦時下で甚大な被害を被ったことと表裏一体なのである。

#### 「本籍人口数」とは何か— 島（嶼）を豊かにする人口の膨らませ方— 中俣 均 (法政大学沖縄文化研究所)

島嶼における人々の空間的移動は、移民の輩出に限らない。現在の沖縄島嶼においては、小離島からの人口流出が大変深刻であり、それによる「シマ社会」の崩壊、そして最終段階としては無人島化が懸念されてきた。また小離島からの人口流出は、沖縄だけでなく全国の、そして世界中の小離島に共通する問題でもある。

筆者は数年前、沖縄本島周辺離島の一つである渡名喜島（一島一村一集落）についての小著を刊行したが、その中に、島で見つけた小さな発見のことを書きこんだ。それは、渡名喜村役場の入り口にあった、住民登録台帳に基づく人口（現住人口）及び世帯数の数値とともに、島を本籍地とする戸数と人口が書き加えられた掲示板のことである。本籍人口数は現住人口の3倍以上にも膨らむものであった。

私たちがいる地域の実情について考えるとき、その地域の人口は重要な指標である。そしてその場合、通常は現住人口を決定的な数値として採用する。本籍人口に注目することはまずない。しかし、ではなぜ、渡名喜村では本籍人口数をわざわざ掲示していたのだろうか。

現住人口とは、一人の人間を地表上のある一点（または地域）だけに、1対1で固定的に結びつける考え方である。こうした考え方は、現在では政策の硬直化など、いろいろな問題を生じさせる原因となってきた。国政選挙等で問題視されながら一向に解決策が定まらない「1票の格差」問題などが好例である。人の空間的な移動が、これだけ頻繁に見られる時代になっているのに！

人間の存在を地表上のある一点のみに結び付ける考え方に対して、最近では「二重の住民登録制度」や「関係人口」などといった新しい「人口」のとらえ方が提出されてきている。個人の自由と平等という普遍的な原理が、個人を特定の土地に限定的に結び付けられることで逆にその普遍性が脅かされていることを、今回、移民輩出の長い歴史をもつ沖縄の島々を例にとって考えてみたい。

## 2-3 シンポジウムの記録

### 2-3-1 対談 仲程昌徳 × 小西潤子

小西 それでは、対談に移ります。今日は、非常に感動しました。実は私がこの20年ぐらい研究しているのが、ご講演でも触れられていた《ウトロフィ》をはじめとする踊りと歌なのです。

仲程 おお、よかったですね。

小西 南洋群島でカリフォルニアの人たちと沖縄の人たちが接触していく中で、カリフォルニアの人たちが踊っていた踊りが沖縄に持って来られたということに私も非常に関心を持っていました。最近なんですけれども、おそらくナミィ（新城浪 1921年-2017年、石垣生まれ）が持って帰ってきた《ウトロフィ》の踊りの影響もあって、波照間のムシャーマで南洋の踊りの行進部分が踊られているというという情報も得たところです。

文学と言いますと、一般には文字中心となるのですが、南洋文学では、むしろ南洋を訪れた人たちが文字にしたものを言うということでした。南洋の人たちは、そもそも文字に残す習慣がなくて、その代わりに踊りとか歌に残す。歌の中に、自分たちの歴史を組み込んでいく。ですから私どもは歌や踊りを見ることによって、彼らの歴史を知る。それが、南洋の記憶として沖縄に戻った人々によって伝わる。そういうなかなか残っていない交流史を先生がどんどん掘り起こされてきておられます。他の地域に比べて、南洋の歴史がなかなか伝わっていないという点については、いかがお考えでしょうか。

仲程 もともと文字は無いですが、南洋に行かれた方はすぐに思い起こすかもしれませんけれども、パラオですと各集落のアバイ（バイ、集会所）の入り口に絵が彫られています。その彫られている絵をたどれば、その島の歴史が分かるのです。このように、文字とは別の形で語り伝えていく。小さい子たちはおじいさんからこういうものだったと聞いて、それを古くなったら建て替える時にまた新たに非常に特別な鉋で作り直していく。その彫刻の伝統を実に起こしたのは土方久功という、日本からパラオに渡った芸術家でした。日本人の誰も行かない島にも渡った。逆に土方が、島の人たちが忘れてしまっている伝統をこういう風な形でやると教えていって復活させた。パラオの国立博物館では土方の全ての業績が紹介されています。向こうの方々はそういう意味では、土方を非常に大切にされています。

それから、沖縄の文学あるいはそれ以外でも、南洋を書いた作品で南洋の方々が出てくるというのは、非常に少ないのです。日本人が何をした、どのようなことをしたというのはありますけれども。現地の人と交流したことが書かれているというのでは、大城貞俊さんの『パラオの青い空』があるぐらいです。視察記はありますけれども、そんな沢山はありませんね。

沖縄の方々に帰還してきたたくさんの方々の証言の中には、交流の記録はいくつも見られます。交流したどころではなくして、カリフォルニアの方に沖縄の方言ができるという方がいたぐらい、濃密な関係を持った方もいました。私がちょっと知っている限りでは、かつて日本の町があったチューク（かつてのトラック諸島）の夏島という所に、お父さんは嘉手納の人だけ

も、誰かは分からないという方がいました。私たちは随分、心を痛めました。本当かどうかは分かりませんが、とにかく嘉手納の方との間に生まれた子がそのまま残ったんだなと。テナンのほうには三郎さんという方がいて、お父さんは沖縄の方、お母さんはテナンの方で、戦後彼らは沖縄に引き上げてきます。が、お父さんが亡くなってしまって、お母さんが寂しいから島に帰りたいと言うので、テナンに帰って、ずっとテナンで暮らしていました。そういう方々も少なくなったのかもしれませんが、文字には残されていないけれども、実は島々に渡っていきまると、そういう話を聞くことができる。ですので、やはり書かれたものだけに頼るのではなく、現地に出かけて行ってやらなければ分からないことが実にたくさんあるんじゃないだろうかという気がいたします。

小西 ありがとうございます。文学の専門である仲程先生から、芸能など文字に残らない人々の心と心の交流の歴史が様々な形でまだ残っている。それらが私たちにとっても、財産になっていくというようなお話だったように思います。私たちが県立芸大を中心に、芸能の交流というようなことを考えていく上でも、とても参考になると思います。それでは短い時間ですが、このセッションを終わりたいと思います。ありがとうございました。

### 2-3-2 総合討論

小西 それでは、総合討論に参りたいと思います。フロアから、質問用紙に書かれたことについて伺いたいと思います。三田先生へのご質問なのですが、パラオの中での法律による制限というのは他国の漁民に対してどれくらいの効果を持つのかをお知りになりたいということです。いかがでしょうか。

三田 パラオの法律では、外国船がパラオの領海内で操業することに対してどれくらい効力があるか、ということですね。200海里区域をサンクチュアリにしまうとパラオ大統領が宣言して、それを法制化し今段階的に実施しているところなのですが、それはやはり領海内は許可が必要ですから、外国船が勝手に操業してはいけないはずなので、国家が認めないという事は、一定の効力があると考えていいのではないかと思います。

質問者 例えば沖縄で違法漁業の問題があったり、小笠原なんかもそうでしたね。日本はそういう時に何をするかって言えば、武力で排除するというのを考えがちですよ。要は海上保安庁、あるいは自衛隊で行こうとか。パラオの場合は大統領が武力の行使を許可して、他の国の漁船が無理矢理入ってきたときにはどのように対処するのか、またしないのか、そういうことを伺いたい。

三田 なるほど。時々外国船が入ってきて違法操業しているとか、そういった問題はちらほら出ていますが、そういう違法なことをした場合、おそらくですが、国際世論に訴えかけるという手を使う方が現実的だと思います。パラオのサンクチュアリという案はものすごく世界的な支持を集めている、環境保護のお手本みたいな国となっているわけですから。そこを荒らしに来るとするのは相当な無骨者だということで、国際世論でやっつけようというのが現実的ではないでしょうか。その辺りは政府高官に聞いてみないと本当はわかりませんが。

藤田(陽) 2年ぐらい前でしょうか、ベトナム船籍の船が違法操業していて、パラオの政府は、船員全員を降ろして逮捕して、船を焼き払いました。武力衝突ではありませんが、おそらくそれは排他的経済水域全面商業漁業禁止を決めた直後で、それが大々的にそう知らされた直後だったので、アピールの意味もあったのかもしれませんが、そのような事件もありました。ですので、三田先生がおっしゃったように、しっかりとその辺りの防御はされていると思います。ただ、国があまりにも小さくて、パトロール船そのものは自前ではなかなか持てないとか、人員が不足しているなどの悩みはあるようです。その辺りは国際援助で船を入手しているようです。

小西 パラオは、法律的にもしっかり定めているということなのですね。飯高先生に、戦後、南洋からの引き上げに関して、日本統治が無くなったことによって、日本人は強制的に退去さ



せられたのかとの質問が来ています。

飯高 はい。当初、アメリカの政策では、沖縄の方は区別するという考え方もあったようでして。一時期、テニアン島あたりに集住させるという計画もあったようです。実際に南洋のミクロネシアに渡っていた沖縄の方々は、(現地に)留まりたいと考える方も当初はいたようです。けれども、そうした集住計画という本来いた場所から引き離して一つの島に住ませるというアメリカの計画をよく思わない方が増えてきて、結局、残留希望者があまりいなくなったので帰されたということが、アメリカ軍の記録などに残っております。ですので、基本的に全ての方は帰されたということになるかと思えます。

小西 様々な研究の基盤となっている資料、特に一次資料の収集・保存・管理・公開は、個人の努力によってされている場合が多いと思いますが、今後、一次資料の収集・保存・管理は、どのような方向に進むべきか、さらにそのための体制のあり方について、ご意見を伺いたいとのことです。

飯高 私が今日お話した日本統治期末期の鉱山採掘では、あまり記録なかったり、あるいは国策として推奨された例えば飛行場建設などは、軍事化の政策のため、そもそも資料が無かったりします。ですので、なかなか集めることが難しいという問題があります。今日お話したガラスマオの鉱山採掘についてもなかなか資料が無いので、現地に渡って、そこに生活していた方にインタビューする中でお写真を提供されたり、見せていただいたりして、散逸しているものを集めなければならないです。その場合に、コピーのコピーは見ただけオリジナルにアクセスできないという現実もあります。もし、何か資料に行き当たった場合に、研究者が論文を書くために使うという勿体ないですし、倫理的にも問題だと思いますので、しるべき機関や組織が集めたり、保存・管理するという必要もあると思います。例えば、ミクロネシアに渡っていた方でも家族の写真などを個人で持たれている方もいると思いますが、そうした資料をどう管理しているかというのも大きな問題だと思います。公の物だけ集める公文書館もありますが、そこに民間の物を集める所も出来てきていると思います。特に沖縄はそうした組織は発達していると思いますが、移住者はかなり高齢化していますので、その資料を集めることも、大事な課題となってくると思います。

高江洲 一次資料のことに、歴史的な話をしますと、戦後に華族制度がなくなったときに、こうした文書の散逸を防ぐため公的機関に集めるという資料保存の運動がありました。しかし、この考え方が取奪ではないですが、あまりよろしくない、資料は現地に保存した方がよい、つまり公的機関ではなく、現地保存がよいという考え方もあります。要はどちらも一長一短あるとお考え下さい。その次に、公的機関で保管するとしても、大学がよいのか、公文書館がよいのか、博物館がよいのかなど問題もあります。例えば、公文書館で保存する際には、個人情報問題から公開が制限されるということもあります。公開してもらうために寄贈したのに見せてくれないという話も出てくるのですね。公的機関といっても、一長一短があります。また大きな問題になるのが、施設のスペースの問題があります。預けてくれと言った時に、どうしても公文書館などと名前を付けてしまうと公的記録、公文書を中心に保存してあり、個人資料や未刊資料を取蔵するのが難しいという問題も出てきます。その結果、スペースがあっても保存できない、というところもある。またはスペースに余裕があっても、分量があっても全部は無理という話も出てきます。その時に、評価選別と言って、どれだけの資料を保存するのかという話が出てきます。これも厄介ですね。評価選別するときに、客観的な基準が無くて、Aさんは、この文書は大事だと思っても、Bさんはそうでもない判断する、そういう話が出てくるのですね。一次資料は大事だ、残そうっていう思いは、みんな一緒だけれども、どこに置くのかとか何を残すのかとなってくると非常にややこしくなってくる。そういう時に、研究者の内輪ではなく、市民も資料は大事だから残していこうっていう機運がないと何となく無くなってしまいう可能性もあります。ですので、研究者ではない方も意見交換して、なぜ資料が



大事なのかということ常を認識していくことが大事ではないかなと思っております。

小西 ありがとうございます。フィールド、研究内容にもよっても、資料の扱い方が難しい。これは私たちにとって永遠の課題でもあるところかなと思います。それから、技術が発展すればするほど、また別の問題も出てくると思います。中俣先生にご質問ですけれども、世界中どこにいてもほぼタイムラグなしでコミュニケーション可能な次世代通信が始まり、昼夜逆転するような距離、時差が障害ではなくなる時代が到来しつつあるなかで、県内での産官学の認識の変化は始まっているのでしょうか。

中俣 行政の現場にいるわけではないので、現実かどうかわかりませんが、人は動く、だけど地面は動かない。要するにどちらも、それこそ今日最初に藤田喜久さんがお話になったような、多様な姿であるためには、多様性を大事にすることであり、どういう方向に進んでいったらいいのかを考えると、今日私がお話したようなことになるのではないかと私は考えています。技術の進歩はどこまで進むのかわかりませんが、技術革新もどこかで超えられても超えるべきではないという問題がそのうち見つかっていくような、そうあってほしいという願望があるのですが、私には、そういう気がします。

小西 今facebookを使ったコミュニティっていうのが非常に盛んに活動していますよね。研究ネットワークもそうですし、オセアニアに関してfacebookのグループの中で、小さな島々に関する文化の問題が議論されています。しかし実際には、ほとんどアメリカにいる人たちがディスカッションしている。そういう意味で、今日フロンティアっていう話もありましたけれども、人口を膨らませなければいけないような地域だからこそ、外のネットワークも組み込みながら島の問題を考えていく。島嶼地域だからこそできることもあるかもしれませんね。

では、藤田陽子先生に、世界のウチナーンチュネットワークの活用による未来への展望について、追加するビジョンがありましたら、お願いします。

藤田(陽) ありがとうございます。実はうちの研究所はそのところがまだできていないというのが現状です。個人的には琉球大学に限らず沖縄にいらっしゃる研究者の方々は、それぞれのご研究を国内外で展開していく中で、海外に移住されている沖縄の方々との関係を構築しながら、調査や研究をされている方がいらっしゃると思います。個人的なレベルはもちろん大事なのですが、組織的にすることによって、例えば研究者と、実際にその土地に住んでいらして色々な現実的な課題を抱えていたり、あるいはやりたいことを持っていたりという方々とのコラボレーションを組織的にすることによって、より現実に近いことはできると思っております。ただそれも、いきなり組織的に連携するのは、結構難しいのですよね。大学間は大学という確固たる組織があるので、やりやすいのですが、分野の違うネットワークを繋げていこうとすると、やはりその土台にあるのは人と人との繋がりのかなと思います。そこを構築しながら組織的な繋がりに発展させていくにはどうしたらいいのかなというのを考えていけないと思います。

小西 ありがとうございます。まだまだこれから始まったばかりの議論ですので、色々参考にしていきながら私たちも考えていけたらいいかなと思っております。

では、司会者から藤田喜久先生に質問です。16万年前から近代までという今日は幅広い話がありましたが、民族音楽学専門の分野ではエコミュージコロジーという言葉が出ています。今までは人間中心の、特に民族音楽学の場合は人間中心の発想で人間のための社会を築こうとしてきた。その結果、近代から現代にいたるまで、様々な問題が生じてきたと。だから、もう一回先住民である生物の視点に立って問題を解決していこうではないか、その時に一つモデルとなるのが島嶼社会ではないかという話題がホットになっているところです。生物学的な観点から今日色々なお話をされたと思うのですが、人文学のそのような傾向に対して何かコメントがあればよろしくをお願いします。

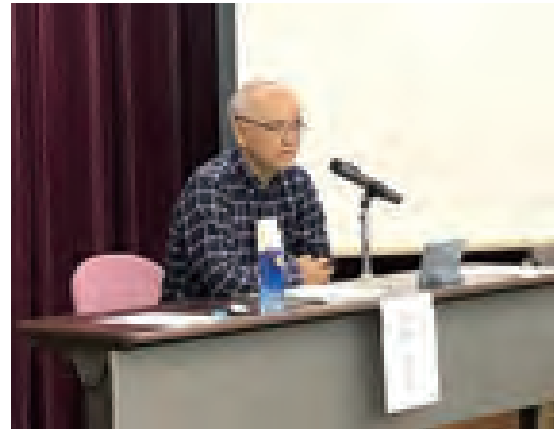
藤田(喜) 例えば生物の分野だと、元々そこにいるものを大事にして、それを人が移動させたりす

ると問題が生じる。外来生物という考え方があって、それは排除しようであるとか、入れないようにしようとか、生き物視点になるとそうなっていくと思います。しかし、今日みなさんのお話を聞いていて思ったのですが、沖縄の現状を見たらよそから持ってこられた植物とか動物とかがたくさんいて、それをいつまでもネガティブに捉えていると問題も進まないというところもあってですね。例えば首里城公園は、植物が豊富ですが、結構外来のものを植えているのですよ。ただ、そこに植物を植えるに至った歴史とか歴史的背景とか、なにか民族的な理由があれば、それはそれとして受け入れることもできるのかなとも思いました。外来生物と言えばネガティブなイメージで捉えられがちですが、違う発想を取り込めば、逆にポジティブになるのかも思いました。だから、民族音楽学の件も、もともとは狭い意味で専門的に捉えていたけど、(最近のエコミュージコロジーという流れのように)生き物や自然のことを考えていけばまた新しい発想が生まれると思えば、異分野をどんどん取り込んで新しい考え方を作っていくのも一つの策かなと思います。もちろん誤解されたら困りますが、外来生物はいない方が(生物学的には)本当はいいのです。しかし、沖縄に住み着いてしまった生物に関しては、別の捉え方もできるようになるかもしれないので、今後、今回のような機会を得て、人が関わる生物の移動に関しては新しい考え方も作っていかないといいと思います。

小西 ありがとうございます。ちょうど歩み寄っていけそうな光が見えてきたところで、仲程先生に、コメントを頂けたらと思いますがいかがでしょうか。

仲程 資料の件だけ少し。これまでずっと色んなこと調べてきて、実際に色んな所に行って思ったことですが、資料の保存について、先ほど現地主義か否かという意見が出ました。一番典型的な例はですね、沖縄の新聞です。発刊されたのは明治28年ですけど残っているのは32年から。それがずっと続いて大正7年までであるのです。大正7年以降が無い。どうして無いかがよく分かっていない。その時におそらく現地で保存しなさいというような形で何かあったのではないだろうかという気がします。現地で保存する、本来はその方がいいけれども、戦争があったために沖縄は全部なくなってしまう。国会図書館にもない。だからほんの少し残っているところから小さいものを集めて、仕事をするという形になっていますが、そういった動乱があった際は、その地域のものはみんな無くなってしまいます。中央で集めるということに関しては嫌なこともあるけれども、中央に残っているために地域のことがよく分かるというようなことも起こってくるのです。僕などは、南洋をずっと調べていて、資料を求めていたわけですが、やはり南洋の島々もみんな戦争があったために、特にサイパン島、テニアン島などには無い。それが、アメリカ軍の兵士たちが、焼け残ったものを集めて、アメリカの議会図書館や公文書館に残っています。それを僕らはいちいち調べながら、サイパン島とか、テニアン島のことがあ程度分かるわけですが、それも全部分かるわけではない。どこかに送っていけば、全部残ったのだろうけど。どのような保存方法がいいのかは一概に言えないけれども、なんとか探し歩けば、どこかには何かが残っているという風なことがあるとよい。研究者は特に一次資料は大切にしないといけないものですので、その苦労は絶えないわけですが、沖縄の公文書館も頑張ってもらいたいという気がいたします。

小西 仲程先生、どうもありがとうございました。それではまだまだ議論を深めたいところではありますが、長時間になってきたので、今日の総合討論は、以上で終わりたいと思います。皆様どうもありがとうございました。



シンポジウム前日の意見交換会およびシンポジウム当日の写真

2-3-3 チラシ、アンケート結果、当事業の新聞掲載記事

沖縄県立芸術大学附属研究所小講堂  
開場13:30

シンポジウム日程・場所

**3月18日(日) 13:30～18:00**

沖縄県立芸術大学附属研究所小講堂  
沖縄県那覇市首里金城町3-6

基調講演

講演題目 報告タイトル

仲村昌徳 「南洋文学と人の移動」

報告: セクションA「島嶼・環境」

藤田喜久 沖縄県立芸術大学全学教育センター准教授  
「沖縄の自然環境と生物の成り立ち」

藤田陽子 琉球大学国際沖縄研究所教授  
「沖縄と世界の島嶼地域を結ぶ学術連携」

三田 牧 神戸学院大学人文学部准教授  
「サンゴ礁の海がたぐ沖縄の魚食文化とパラオ」

報告: セクションB「島嶼・文化」

高江洲昌哉 神奈川大学非常勤講師等  
「近代沖縄を島嶼性と移動から考える」

飯高伸五 高知県立大学文化学部准教授  
「南洋のアサドヤドユンタ  
—戦時体制下パラオにおける飯山採掘と沖縄人の記憶—」

中俣 均 法政大学沖縄文化研究所所長  
「本籍人口数」とは何か—島(嶼)を豊かにする人口の膨らませ方—」

総合討論司会、後援

主催: 沖縄県立芸術大学附属研究所 後援: 日本島嶼学会  
問い合わせ先 泉ましまくとぅば事業事務局 ☎ 098-882-5615

〈チラシ 表面〉

**趣旨**

島嶼からなる沖縄は、自然環境の影響を受けシマゴトに独自の文化を形成してきた。一方、近代以降には、世界各地へ移民を送り出した移民先でもある。島嶼地域であり世界各地へ移民を送り出した沖縄の人びとは、沖縄であるいは移民先でのような文化を醸成してきたのだろうか。また、島嶼や移民という経験はこれからの沖縄のいかなる資源となるだろうか。

このシンポジウムでは、沖縄の人の移動をテーマとして、①島嶼社会である沖縄の文化的特徴、②沖縄の人びとが創造した文化の諸相、③人の移動から考える沖縄の未来、について考えたい。

**基調講演講師**

仲村 昌徳 (なかほだ まさのり)

琉球大学元教授、文学博士。専門は琉球・沖縄文学。著書に、「南洋紀行」中の沖縄人たち(2013年)、「宮城聡—「改造」記者から作家へ—(2014年)」「雑誌とその時代—沖縄の声 戦前・戦中開編」(2015年)「沖縄の投稿者たち—沖縄近代文学資料発掘」(2016年)、「もう一つの沖縄文学」(2017年)など多数。2018年2月にポーターブックより「沖縄文学史組編—近代・現代の作品をめぐって」を刊行。

**パネリスト**

藤田 喜久 (ふじた よしひさ)

沖縄県立芸術大学全学教育センター准教授、博士(理学)。琉球大学大学院理工学研究科博士後期課程修了。専門は海洋生物学(特に甲殻類と棘皮動物)。日本甲殻生物学学会賞(2004年、2013年)及び沖縄生物学会賞(2012年)などを受賞。

藤田 陽子 (ふじた ようこ)

琉球大学国際沖縄研究所教授。2015年より同所長。専門は環境経済学、島嶼地域研究。琉球大学大学院博士後期課程社会学研究科単位取得退学。共編著書に「島嶼地域の新たな風景—自然・文化・社会の融合ととしての島々」(九州大学出版会、2014年)、「サンゴ礁のちむやみ」(東洋大学出版会、2009年)等がある。

三田 牧 (みた まき)

神戸学院大学人文学部准教授、博士(人間・環境学)。京都大学大学院人文学部研究科博士後期課程指導認定退学。沖縄文化協会賞(金城朝水賞)受賞。著者に「海を読み、魚を語る—沖縄県糸満における海の記憶の民族誌」(コモンズ、2015年)がある。

高江洲 昌哉 (たかみさ まさや)

神奈川大学非常勤講師等。専門は日本近代史、著書に「近代日本の地方統治と「島嶼」(ゆまに書房、2009年)がある。島嶼の地方歴史を出版点にして最近は国民統合と文化の成り立ちから島嶼にアプローチをしていく。沖縄近代史関係では「南風原町議会史」、「沖縄県史」、「沖縄県議会史」に論考を載せている。

飯高 伸五 (いいたか しんご)

高知県立大学文化学部准教授、博士(社会人類学)。専門は社会人類学、オセアニア研究、日本統治下ミクロネシア(南洋群島)における社会変遷を1970年代の村社会から検討している。共著者に「文楽と共生の人間学」(ナカニシヤ出版、2017年)、「帝国日本の記憶」(鹿嶋美術大学出版会、2016年)などがある。

中俣 均 (なかまた ひとし)

法政大学沖縄文化研究所所長、日本島嶼学会会長。博士(理学)。専門は人文地理学。東京大学大学院理学系研究科修了。著書に「匿名島—島地帯と歴史の集積の歴史—」(古今書院、2014年)、「権者の国土空間と地域社会」(朝倉書店、2011年)などがある。

**総合討論司会** 小西 潤子 (こにし じゅんこ)

沖縄県立芸術大学非常勤教授、博士(文学)。専門は民族音楽学。主にミクロネシアおよび沖縄、小笠原などの島嶼における音楽文化を研究している。

※本チラシのデザインは、NPO法人「琉球文化振興会」(代表者:小西潤子)の制作を受けたものです。

〈チラシ 裏面〉



平成29年度 沖縄県立芸術大学 島嶼学シンポジウム

来場者アンケート 集計

会場：附属研究所3階 小講堂

日時：平成30年3月18日

対象：一般県民

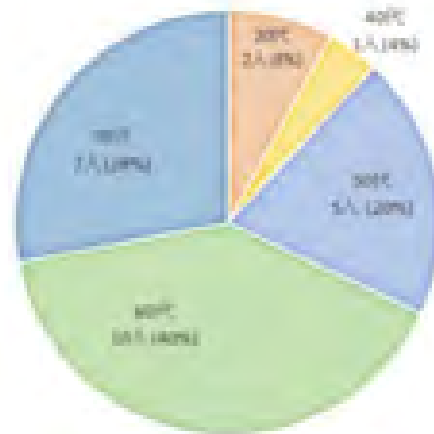
タイトル「沖縄の人の移動と未来への展望－島嶼・環境・文化－」

来場者数：34名 / アンケート回収枚数：25枚 / アンケート回収率：74%

1. あなたについて該当するところを○で囲んでください。

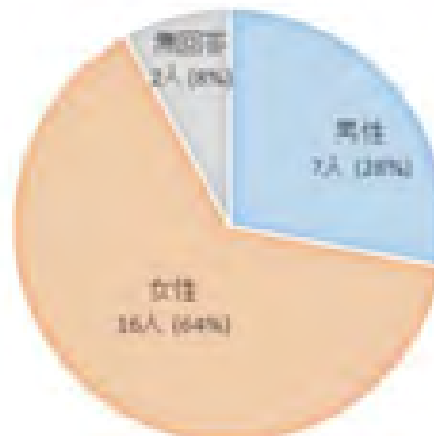
【年齢】

年代	人数	割合
10代	0	0%
20代	2	8%
30代	0	0%
40代	1	4%
50代	5	20%
60代	10	40%
70代以上	7	28%
合計	25	100%



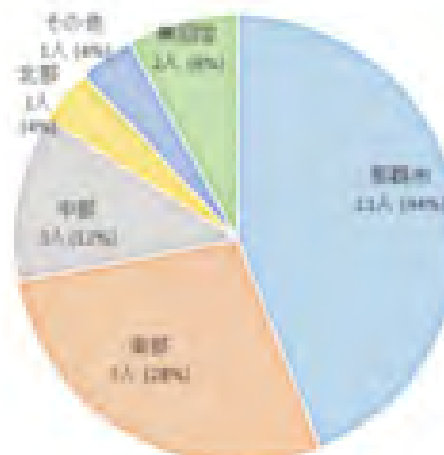
【性別】

性別	人数	割合
男	7	28%
女	16	64%
無回答	2	8%
合計	25	100%
計	24	100%



【地域】

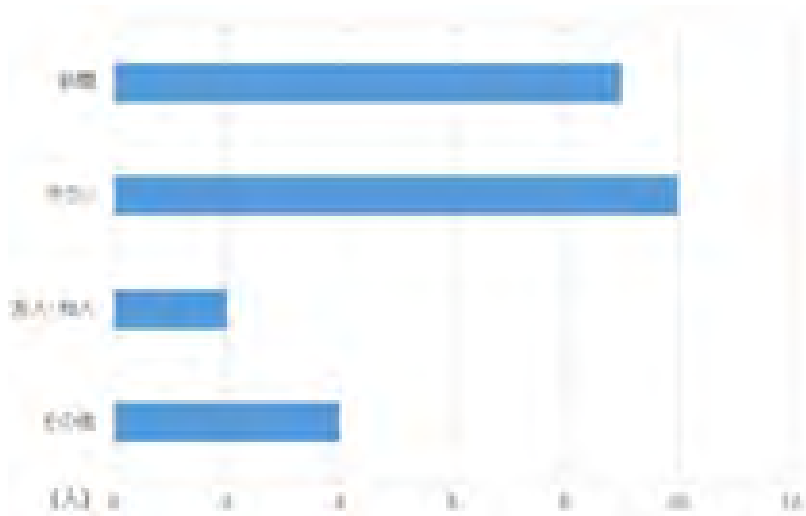
地域	人数	割合
那覇市	11	44%
南部	7	28%
中部	3	12%
北部	1	4%
その他	1	4%
無回答	2	8%
合計	25	100%



【これまでに附属研究所の講座を受けたことがありますか】

ある・・・12人／ ない・・・12人／ 無回答・・・1人

2. このシンポジウムをどのように知りましたか。



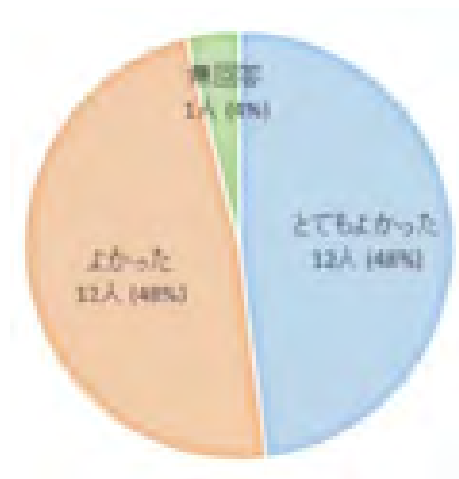
その他：アプリ (ぴらつか暦)、島嶼学会、首里城公園のポスター、沖地協メール

3. 今回の島嶼学シンポジウムはどうでしたか。

(1) 該当する番号を○で囲んでください。

- ①たいへんよかった ②よかった ③まあまあよかった  
④あまりよくなかった ⑤よくなかった

評価	人数
とてもよかった	12
よかった	12
まあまあよかった	0
あまりよくなかった	0
とてもよくなかった	0
無回答	1
合計	25
合計	25



(2) その理由をご記入ください。

- ・沖縄はより南に開かれている。
- ・門外漢なので新しい知識、情報に触れられて、興味深かった。複雑な思いも多々あったのですが…。
- ・アジアの中の沖縄：歴史が分かった。
- ・土木職なので鉱山原 興味あり。沖縄から九州の島々への移動はなかったのかなあ。
- ・基調講演で何の為の話か?とまどわせた後、パネリスト諸氏の謎解きで納得させるという構成に敬意を表するものです。
- ・充実した内容+ふくらみ+実証 人選も良
- ・島嶼の切り口が豊富なことを提示してもらった。
- ・人の移動と島嶼性ということについて、あまり深く考えることがなく、とても学ぶことが多かった。

これまでマイナス(負)の面が強調されて、現今の時流から、もっとプラス面(明るい未来性)にも注目したい。

- ・視点を変えた人の移動に伴う島嶼・環境・文化の交流。特に音楽文化(踊り等)は異文化の人々にも受け入れやすいですね。平和の時代を表すもので、大切にしたい人々の移動(交流)。
- ・1947頃より越来(現・沖縄市)で新垣松含の次女・澄子師による琉舞の指導を受けていました。1951から母親が劇場経営、奄美とのつながりが大きく、映像技師は奄美の日本復帰と共に去り、おそらく最後になったろう弁士も奄美から、ストリップショーなども興行に入っていました。後に沖縄芝居のみの興行になり、1962年頃閉鎖したという個人的歴史と相俟って興味深く拝聴しました。2011年はサイパンに行き、現地の方々との交流もありましたが、戦時の事が心に痛く残っています。そのような理由で全てが個人的にもつながっていました。
- ・人口の移動と島嶼のあり方を考える良いキカイになった。
- ・南方と沖縄について学べたこと。刺激を受けました。
- ・先生方の研究される情勢と島嶼に関するご尽力に当初の展望が明るく思えました。
- ・とても、おもしろかったです。
- ・徳之島出身で、多方面から見たいと思っているから。
- ・なじみのうすい「島嶼学」でしたが「移動、移民」と「定住」の話やウチナーンチュと現地(南洋の島々、人々)との交流の歴史など、意外と知られていない話がいくつかあり刺激的だった。
- ・土地と人の移動、というテーマは興味深かった。自身、季節ごと居住地をかえているが、住所登録のない自治体のサービスをうけるうしろめたさを実感したりしているの。
- ・島の独自性に関心があるから。
- ・新しい知見を知ることができました。
- ・多角的に話を聞く事ができて興味深かった。藤田先生の話から、たいへん長大なスパンで本籍人口のような近未来まで幅広く聞く事ができた。

(3) 今回のシンポジウムの中で、特に面白かった・興味深かった内容がありましたらご感想をお書きください。

- ・仲程先生の話と対談
- ・基調講演
- ・長崎(出身地)も、島国のため、興味湧き、きました。(沖縄に来て8ヶ月) 沖縄の南の島々にいかれた歴史。知らない事ばかりでありがたかった。
- ・「本籍人口数」
- ・芸大らしいテーマが特によかった。
- ・「本籍人口数」がよかった。テーマの幅が広すぎて、消化するのに時間がかかりすぎる。(13:30～18:00)
- ・"南洋"の話は特に面白かった。また沖縄の人々の位置づけと文化について考える方向性をもう一度探求してほしい。
- ・DNAから見た生物、島によって価値が違う魚、よいものはよいものとして受け入れられるメロディー、人はなぜ移動をするか…など。
- ・「移動」がテーマであるが、それは戦争や貧困を仲介としていることが全てにおいて感じ取れた。高江洲昌哉氏の発表は、うなずけるところが多く、中部出身の自分にとってはフィリピン人も奄美人も受け入れてきた地域に育ったことで、移動の持つ意味がプラスに泌みつく幸いを実感した。
- ・所謂行政が定めた人口統計の在り方と、生活や文化が残るための人々の営みとがかけ離れていく事。
- ・漁業と漁撈のとらえ方。南洋のアサドヤユンタが存在すること。
- ・どのテーマも興味があり本日のシンポジウム楽しく学べました。このような機会を頂きありがとうございます

ございました。

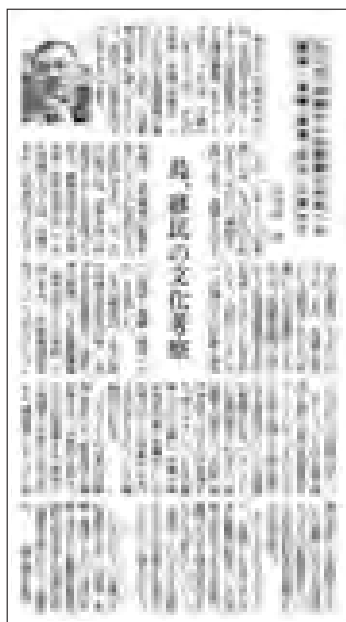
- ・奄美諸島で移動の多い町村の集落の差はどうして起こるのでしょうか。簡単に貧しいからか。与論島の三井三池などの炭鉱労働者奄美・沖縄の人々の関西へ。
- ・仲程先生 映画「執念の毒蛇」の辻の場面で「ナミィー」が映っていた。飯高先生「南洋のアサドヤユンタ」…島ダンスは知っていたが、まさかアサドヤユンタが地元で踊られているとは。驚きました。中俣先生「人は移動する物である」ことを前提に発想する。
- ・高江洲先生の話に興味を持った。「文化の誇り」「自己」の中身に関して自分がふだん考えていることが説明されており、代弁されているように感じた。
- ・ガラスマオの日本国籍576人。共通言語が日本語である。「オキナワ」とくべつされる。こうした背景からのアイデンティティやどのような見方がされていたか一端を知ることができておもしろかった。
- ・パラオの漁業と漁撈の違いが今まで知らなかったが三田先生の解説で分かった。ガラスマオでのボーキサイトの採掘業に関し、内地人、沖縄人、チャモロ、カナカの順で賃金の差があった。
- ・各先生方の更に掘り下げた研究成果を拝聴したい。
- ・飯高先生の鉱山と住民と沖縄との関わり。三田先生の漁民感（漁る人と売る人の両者の関係）。高江洲先生の視点をどこかにおいておかないと取り込まれていくテーマを意識することの重要性。

(4) 今回のシンポジウムについて、施設・環境等についてご自由にお書きください。

(施設、照明・音響、駐車場、アクセス、広報など)

- ・良
- ・特にありません
- ・良好
- ・特になし
- ・駐車場からのアクセス案内がほしかった。会場に行くのに3階に上がって、もう一度下から周辺をまわって入口を探した。企画、今後共継続して実施してほしい。
- ・3月は多くのフォーラム等が目白押しでみんな興味があっても参加しかねる場合が多いので、他の月にはできないか。

(当事業の新聞掲載)



琉球新報 2018年3月10日 25面



琉球新報 2018年3月19日 28面

※本シンポジウムの一部は、JSPS 科研費 JP26370101【基盤研究(C)「南洋群島における沖縄の人々による音楽芸能の展開と現地住民との交流の実態」(代表者：小西潤子)】の助成を受けたものです。



平成29年度ハワイ大学等交流事業  
しまくとぅば実践教育プログラム開発事業  
島嶼学学術交流事業  
事業報告書

平成30年3月31日

編集 鈴木 耕太・麻生 伸一・波照間 永吉・幸地 夏希  
発行 沖縄県立芸術大学附属研究所  
〒903-0815 沖縄県首里金城町3-6  
電話098-882-5040

